

木も今を睡端。驚かさばや。と席戸探り。跳り。入る奴隷等を。内より丁と搦肥み。撲地と投るを飛踰て。組伏んとて競ひ懸るを。内にては寄せたてじと。或は搏退。衝倒。緜うたする人礫。蝨の飛に異ならず。この勇力に辟易して。後方なるはすゝみ得ず。色めき立たる折しもあれ。蕨簾をかき揚て。ゆるぎ出たる乞兒が打扮。身には襤褸を被たれども。目に錦綉を羨す。且暮飢渴に迫れども。肚裏三略に富たりけん。實に不敵の面魂。手に一條の梶頭槍を掌て。奴隷等をにらまへ廻し。乞兒の小屋にも門戸あり。薦一枚もこの身の城廓。呼門もせず狼藉せば。高き卑き敵手はえらまず。逆縁ながら乞兒が手の中。目に物見せん。と罵りたり。時に榛澤すゝみ對ひて。まづ懷中より一枚の骨相書を取り出し。うち開きつゝ左見右見て。纏て奴隷を退かしさて乞兒にいへりけるは天暗力量聞しにたがはず。縁故を告されば。訝しく思ふは理なり。われは秩父殿の郎黨に。榛澤六郎と呼るゝもの是なり。密に主君の命を受て。こゝに来れるは。望とてころあればなり。承引や。いなやといふ。乞兒聞て冷笑ひ。こは思ひもかけぬ。在鎌倉の縉紳おほかる中に。牛打童もよくしつたる。重忠ぬしより野隊りの。乞兒に所望と宣はするは。そは問ふにも及ず。新双を試す二ツ胴。命の所望にこそあらめ。とてもこの身は野ざらしの。果は餓たる犬を肥す。惜くもあらぬ五尺の驅。一寸試は腕なりとも。二寸試は膝なりとも。天地へ返す命の入物。切柄住て用意あれ。と應も果す。礫と坐し。騒ぐ氣色はなかりけり。榛澤六郎は。この形勢を見て益々感嘆し。いな。わが主の望は。さる筋ならず。聞も及びつらん。先年江州粟津にて討死ありし。木曾義仲の嫡男。美妙水冠者義高君は。正しく右幕下の婿がねにて。大姫君に妻あはし給ふべかりしに。義仲滅亡のころ。御曹司は鎌倉を脱れ出。武藏なる入間川の上にて。石田太郎爲久が家裁たる。堀江藤二光澄に撃れ給ひき。さるによつて。大姫君の愁傷大かたならず。哀慕の涙に御身もほそり。長き病着に臥し給ひて。今ははや三年あまり。四年のはるは歸れ共。歸らぬ人と思ひつゞけて。近曾は。病いよゝ重やかに見え給ふ。原是想病の事なれば。良醫の匙にもすくひがたく。補瀉鍼灸の術もよしなし。こゝをもて母君政

子御前。いといたふ歎き給ひ。もし義高に似たるあらば。良賤を擇ず將て參れ。そを義高なりといひこしらへて。大姫を慰めなん。彼人存命給ひぬと聞かば。姫が病着の。なてふおこたり果ざらんやとて。しのびにその人を索せし給ふ。その事は。すべて重忠がうけ給はりなるに。この諸越が原なる乞兒に。年の齡はさらなり。その面影さへ。彼御曹司によくにたるあり。と告るものあるによつて。今夜その徒を驚かし。今亦汝を熟視れば。御曹司の骨相書に。露ばかりも錯はず。汝假に木曾の御曹司也と稱て。鎌倉に參らば。こよなき忠節ならん。聞わきたりや。とひそめき告れば。乞兒聞てうちわらひ。乞食の小屋にも富とはいへど。これは又あまりの事也。寝て待かひに果報はありとも。鎌倉殿の婿がねに。代る乞兒は鳶を鷹。かゝる僥倖は夢にだも見がたし。よしや面影の似たればとて。ひとつ館に住給ひし。良人をいかでか見忘れ給はん。こは實事ともおほへず。と回答果て入らんとするを。榛澤忙しく呼とどめ。世にも稀なる身の幸を。思ひ惑ふは愚なり。義高久しく鎌倉に在せしかど。終に一度も。大姫君と面をあはし給はざりし。加旃。汝が言行を見るに。すべて乞兒の模様似ず。これを木曾の御曹司也といふとも。誰か眞物と思ふべき。孤疑なせそ。とく參れ。と言語を竭していひ諭せば。乞兒はしぶく承引て。こは面ぶせなる傭人かな。かくまでいはるれば。脱がたし。しからば仰に従ふべし。誘給へとて身を起すに。榛澤ふかく歡びて。手を抗てさし招ば。準備やしたりけん。ほとり近き木蔭より。鞍置馬を牽出し。奴隷が負たる柳匣に。のしてさし出す狩衣は。路次の人目をしのぶ揚。うち被せてかき乗すれば。馬上ゆらりと諸手綱。拳短にかいくり毛。向驢蹴出す從者が。臺傘。建傘。鉾。太刀持。前駆後從の行列を揃て。七種踏ます春の駒。足掻もよしや義高を。義高にする。偽は。偽ならぬ元つ枝の。杖もて夜の露拂ひ。乗連たる挑灯も。これや燈の花婿君。榮枯反覆面あたり。かゝる例は日本にも。韓にもあらぬもろこしが原を眞直にねりゆきぬ。

第十七套

重忠大に義高を歎待す
光實進て唐糸を鞠問す

さても鎌倉には。大姫君。ふかく義高の横死を哀悼し。晝は終日夜は通宵。思ひわするゝ隙もなく。鴛鴦の衾は涙に氷て。相思枕上の塵。拂ふによしなく。けふと暮し翌と明して。既に三周の忌日も過し給ひしかば。只顧に。尼となりて。彼君の後の世を。弔まほしとて。父君にも母君にも。をりくまうさし給へども。いまだ盛にも至らざるわが女兒を。いかでか尼になすべきかとて許し給はず。さればにや。此はるは。姫の病着。いよゝ重やかに見え給へば。政子御前は。ますく心安からず。秩父二郎重忠は。機に臨みて。謀畧ある人なればとて。竊にこれを召さして。仰あはされたる事ありけり。さる程に。二月はじめの五ケの日に。重忠營中に参りてまうすやう。美妙水冠者義高君は。なほ存命で。この世に坐するなり。曩に石田が郎黨。堀江藤二が撃奉りしは。眞の義高にあらず。それは唐糸が子に。大太郎といふもの。主の身がはりに死して。爲久主従を欺きたるなるべし。さるによつて御曹司は。今なほ恙なくて。諸越が原なる。乞兒の隊に入りて在せしを。重忠が家隸。榛澤六郎。辛うじて伴ひ参りつ。と聞えあげしかば。政子御前ふかく歡び給ひて。重忠には夥の引出物を賜り。纏て縁由を大姫君に聞えしらし給ふに。姫は惟枯たる枝に春の花を見。海月の骨にあふ心持して。氣色清々しくなり給ふ程に。傳きの女房たちこれを祝し。兩三日の後。浴み沐らしまらするに。御身の瘦りこそ。はじめのごとくにはあらね。立居などは。平生に異なる事なりしかば。政子御前。ふかく歡びおぼして。鎌倉殿にかくと聞え給へば。頼朝卿うち點頭。さらば重忠に仰て。義高を饗應さすべきなり。と宣ひける。かくて重忠は。饗應使をうけ給はりて。俄頃山海の珍味をつらね。碗皿。折敷なども。よろづ新きを旨とし。夥の女房を給侍とし。件の乞兒を上座なる錦の襦に引のぼし。嫩子をもて。衣服を更給へといはすれども。乞兒はこれをうけ引かず。われは平生路傍に睡り。橋下に臥し。敵垢つきたる衣のみ被なれ

たるに。かく綺羅やかなるを被せられては。なか／＼に肅寒かるべし。錦を被ても。乞兒は乞兒なり。又饗應使を被さずも。大姫の夫なれば。誰かは侮り卑むべき。あな結氣や。と回答つ。細の上に足踏反し。敵衣の裏引かへして。虱を拾ふ傍若無人。餘念なき爲體に。嫩子は只呆れ果。ふたゝびいふよしなかりけり。浩所に女房達は。手にく碗飯珍膳をもてまゐりつ。所せきまで。乞兒のほとりに居たり。寔にこれ飯は精を厭ず。膾は細きを厭ず。相摸に名だたる。秦野の蘿蔔。鎌倉鰻は更なり。武藏なる芝浦の長辛螺。牡蠣。淡菜貝。伊豆の浦の打鮑。柄川酒。上野には刀根川の鯉。下野には稻葉の牛蒡。常陸の植魚。上總なる大瀧浦の鯛。下總の浪子。紐若。眼黒鱈。すべて關の八州の野菜。海味を調理しつ。あるは十盛の飯器に盛。或は九曲の酒地に湛え。美を盡さずといふことなし。そのとき秩父重忠は。烏帽子の掛緒結さげて。長袴の裾引垂らし。廊より繞り入り。小大刀を脱て出居の方に躊躇し。いぬる元暦のはじめ。木曾殿討れ給ひしころ。御曹司は不覺に營中を潜び出て。往方もしられずなり給ひき。されば木曾殿朝敵となりて討れ給ふとも。御曹司は鎌倉に在まして。その事に與り給はず。將増君に坐するなれば。鎌倉殿にもいと不便におほせしかど。往方定かならざれば。索出しまらせん事。總追捕使の威勢にもすべなくて。黙止給へり。よりて重忠仰を受けて。しのびく／＼に御在所を索ね奉り。かく恙なくて歸り入らせ給ふ事。こよなき僥倖なり。加之。重忠饗應使をうけ給はり。荆婦にて候嫩子は。婚姻の介添をうけたまはり。今日黄道吉日なれば。大姫君を妻あはし給ふべしとて。もつはらその用意あり。重忠夫婦が面目。これにます事やある。豫て定められたる。婚姻の時刻は。酉の刻なるに。暮るゝには程あるべし。まづおん箸をとり給へかし。といと恭しく申にぞ。乞兒聞て冷笑ひ。又義仲が武功を猜み。間者をもて行ひを亂さし。朝敵の名を負して。討滅したる頼朝がはらきたなさ。錦の囊に毒石を裏めるとき。梟雄老奸の主に仕る。重忠が賢がほは。一ツ穴なる老狐。王莽が謀師。阿滿が股肱に勝れり。うち揃ふたる主従が穢れたる饗應は。えこそ受じ。と罵もあへず。忽地礮と颯ちらせば。飯は坐中に散亂し。轉び碎る磁器の。

反かへりて重忠が。額をはつしと打破れば。あなや。と驚く嫩子と。もろともに立騒ぐ。女房たちを重忠は。尻目に
 かけておしとどめ。懐なる紙をもて。しづかに額を押し拭ひつゝいふやう。鎌倉殿。豫て重忠に宣ひつる事あり。義高
 を乞見の隊に入れて。いくその艱苦を受ましたるは。頼朝が恨なり。何にまれ。彼が意に悖らず。よく款待よ。と
 仰せしに。衣服を進らすれ共脱更給はず。碗飯を進らすれども。箸をだにとり給はず。かくまで不興を被ること。い
 とも畏し。女房達も驚べからず。わが妻もいと不覺なり。といひ懲らすにぞ。嫩子はなほ朽をしく思へども。夫の言
 語重やかなる。頭を低て黙然たり。かゝりしかば女房たちは。缺たる折敷を拾ひとり。席上を掃清め。是彼運びかへ
 して。次の間へ退出しかば。重忠かさねて嫩子にいふよう。一旦不興を被るとも。兎もかくもして慰めまゐらせず
 ば。仰を稟たるかひもなし。近來わが家に交加する。何がしが子のいと稚て。よく舞ものあり。豫ていひしした
 る事もあれば。今ははや参るべき比也といふ。その言いまだ終らず。取次の武士。慌しく。廊のかたに来て。重忠に
 對ひ。呼し給ひたるものどもの参りて候に。召さるべうもや。といふ。重忠聞て。そのもの呼び入れ給へといそが
 せば。こゝろ得果て走りさる。去程に竹川因幡介正忠は。その妻菴戸とともに。風流たる打扮し。鈴稚丸には頭巾戴
 らし。項に山猫舞す箱を掛して。廊よりねり出つゝ。廣縁に居ならびて。夫婦は拍子を取り。聲をあはし。
 女三の宮の翠簾をもち出ては。戀する人の媒やすらん。馬の命婦の膝の上にねふりては。翁丸も遠く追れけん。
 五の徳を備ては。千々の鼠の穴に躲るゝ。王氏がうらみ。濮陽が悲しみ。こゝに傳て山猫の。山めぐりするを見
 給へ。

と唄へば。舞す鈴稚の。手ぶり稚くいと興あり。乞見はこれを信と見て。あな思しき傀儡師や。とく退出よ。と焦燥
 てば。重忠莞然として正忠等に對ひ傳聞義仲朝臣は。その性。猫を諱給ひしとぞ。かゝれば今汝達の御曹司に憎るゝ
 も。故なきにあらざる。これを又重忠が。心つきなきなれば怪むべからず。とく退き候へ。といふに。正忠夫婦は。

ふかく望を失ひ。推辭奉るにはあらねど。これなる小見は。久しく病わづらひて。やうやくにおこたり果たれど。氣が
 まだとゝのはず。しかるに。鎌倉殿の婿君を。慰め進らせんとて召さるゝ事。こよなき面目なれば。稚きを憐しこし
 らへて参りつるに。舞しも果す。退出よ。と宣するは。いと本意なし。と咄ば。乞見これを聞て呵々とうち笑ひ。
 實たまゝ來つるものを。無下に歸さんは不便なり。物とらせんに。近く參れ。と呼びかけられ。望む所。と正忠夫
 婦は。鈴稚丸を扶引。義高をにらまへつめ。臆したる氣色もなく前み寄るを。乞見はなほほとり近く呼びよしつゝ。
 足を飛ばして鈴稚の。胸さか丁と蹴たふせば。あなと叫びて仰さまに。撲地と倒るゝ稚子の項に掛たる箱の中より。
 閃き落ちる兜の鉄形。乞見が足は忽地に。麻れてしばし忙然たり。正忠夫婦は。鈴稚の倒るゝを見て。且怒り且痛し
 み。連忙つゝ扶起し。菴戸これを抱あぐれば。正忠は累る恨みに堪も忍ず。乞見に打て蒐らんとするを。重忠は忙し
 く押とどめ。こは無禮なり。と叱り退れば。正忠は齒を切。腕を捺りてひらき居つ。そのとき重忠は。落たる
 兜の鉄形を把て。乞見のほとりにさし寄し。御曹司見給はずや。是なんおん父義仲朝臣。討れし給ひしその日まで。
 挿頭給へる鉄形なるが。石田爲久に射落され。久く深田に埋れて。泥の中にありけるを。近曾栗津の農夫等。不徳廻
 出し。こは疑うべうもあらぬ。木會殿の像見なりとて。聽て鎌倉へ進らせたるを。山猫の箱に藏めて。密にこれを試
 たるは。人の疑念を解んとて。重忠が寸志なり。さればこそ圖るに差ぬ御曹司。足をもて。この鉄形を蹴給へば。不
 孝を責てその足麻れ。争ひがたき矩度尊重。かく窶々しく在すとも。かゝる不思議を見つるから。今は假ものならん
 かと。疑ふものもあるべからず。さはおぼさずやといふを。乞見聞もあへず大に驚き。そはわが父の像見なりと敷。
 物體なし。と信だちて。取らんとする鉄形を。重忠はやく懐に挟め。豈此鉄形のみならんや。兜とともに鎌倉殿よ
 り。婿引出にこそ進らし給はめ。父子の親しきも禮節あり。衣服を更め拜見あれ。それゝ嫩子。はやく衣服を進ら
 せよ。といふに嫩子立よりて。衣紋揃へて更さする。襪の袖も忽地に。錦色ます下襲。薄紅梅の花の兄。弟枝はあ

らぬ木曾殿の。一子と見へて意氣揚々。衆皆ふたゝび怪みけり。そのとき重忠は。正忠夫婦を見かへりて。いはけなきが思ひもかけず。からきめを見て懼れけん。されど御曹司に衣服を更さし進らしたるは。汝達が積なり。祿給あらんに。遠待へ退り候へ。長居は畏かるべし。と心ありげにしらすれば。正忠やうやく氣色をやらげ。貴人のほとり近く召されし事。願ふに稀なる僥倖なり。よしや打懲し給ふとも。稚きは罪ゆるし給ふべし。見參の本意とげて候へば。歡びありて恨なし。と口にはいへどやるかたなき。遺恨の涙見せじとて。葎戸に注目し。鈴稚を劬はりて。夫婦杉戸を引開て。墨晝の松に木がくれたり。さる程に重忠が。婿君を慰めかね。思ひくしたるおもゝちに。嫩子にいへりけるは。御曹司はとにかくに。樂からず見へ給ふに。興をそへんとして興をさます。山猫まはしが。悞の高名。衣服は更さし進らせたれど。碗飯もめされず。かゝる事には得も馴ぬ。夫婦がいたづらに心を盡さんより。大姫君の琴の調に。年來の心操をしらし給はじ。猛き御曹司の御こゝろも。いかでか和ぎ給はざらん。婚姻の席に臨み給ふまで。對面は許されずとも。翠簾を隔て玉琴を。撲埒らし給はずや。とまうしすゝめ候へよ。われ又用意の俳優あり。とくくといそがせば。嫩子聞て訝しみ。夫のこゝろ得がたけれど。問はまほしさも問かねて。懸て奥へぞまゐりける。且ありて垂こめたる。几帳の内につわひしつ。はや撲埒す琴の音に。重忠は。つと身を起し。端近う立出て。ものどもおそし。と呼びかけつゝ。舊の所にかへり居れば。庭の樹蔭に人ありて。うけ給はりぬと回答けり。さる程に猫間光實は。榛澤六郎とともに。鐵の鎌もて。唐糸をいたく縛め。諸折戸のかたより引立來て。紅梅ふかき高縁の。あなたへ撲地とおし居たり。この胖響に驚かされ。爪音に心をすませし。乞兒は閉たる眼を開けば。無残なり唐糸は。土の牢より引出され。去年見しまゝの日の影も。われより暮るゝ黒髪の亂れて顔へふりかゝる。眼おちいり頬骨出。手足はさながら麻敷の。あさましきまで瘦弱ひ。命つれなき囚徒の。けふを限りと思ふにぞ。わろびれもせず。つゝいゝたるを大姫遙に願給ひて。あな痛し。唐糸が。身より出せる鎌なれば。鎌も今に解やらず。見しには變る面

影の。いとodorしとして。調も亂れうち曇る。唱歌を聞て唐糸は。耳なれたり。と頭を傾。此の爪音はわが手づから。教へまゐらしたる彼姫ならん。心にくし。とうち仰ぎ。乞兒と面をあはしつゝ。こは若君歟。とばかりに。送に驚き。驚れ。よらまくすれど。縛の。鎌に引れて挫と坐す。重忠はこれを見て。恩義もおのが身の鉗や。と口順て乞兒に對ひ。御曹司は彼老女を。よく認てぞおはするならん。彼は木曾殿の御内にて。四天王と呼ばれたる。兼平が妹。光盛が妻なりとぞ。しかるに彼もの。石田爲久を誑りて。營中に給事し。鎌倉殿を撃奉らん。と謀りたるが。忽地に事發覺て。去年の秋より。釋迦堂谷なる。土の牢に籠おかる。もし反逆の犯人ならずば。今宵婚姻の祝儀申に宥て。命ばかりは助得さすべし。和親とゝのひては。御曹司もまた舅君の爲に。這奴を責伏せて。謀反の淵源を問極め。うしろやすくし給はずは。何をもてか播揚の好みを締給へりと申さん。しかればいよゝ放しがたき癖者なり。こゝをもて。重忠豫て家隸等に命じ。這奴を眼前に引すゑたり。光實。榛澤は。琴の一曲終るまで。唐糸を拷問せよ。と言語猛にあらたまる。主の指揮に光實は。怨も春の庭もせに。咲匂ふ梅も時を得がほなる。枝へし折てさし翳す。舞樂にあらぬ呵責の管。榛澤も立ならび。枝ふりあげて丁と打ば。花紅にちりかゝる。軒の松風吹かよふ。琴の調も玉の緒も。絶よとて右左より。又丁々打ほどに。苦痛さこそと思ひやり。乞兒が唱ふる呪文とともに。光實も榛澤も。引留らるゝやうにおぼへて。ふり揚たるまゝ腕動かず。こは怪しや。と面をあはし。われにもあらで持たる枝を。双方一度にとり落せば。唐糸しづかに見かへりて。殿たちなどて打給はぬ。婿君の款待に。うたずや撃。と身を寄すれど。幻術に遮留られ。光實はさらなり。榛澤もいと朽をし。と焦燥つ。遂にせんすべなかりけり。乞兒これをみてうち笑ひ。いひがひなきものどもかな。いで義高が首伏さするをみよやとて臂ちかなる。刀を拿て前みよる。後方に聞ゆる漏刻の。數かぞふれば暮六ツなり。七ツをまして十あまり。三すぢの糸も音を絶れど。乞兒はなほ刀を抜かけて。椽頬に歩みよるを。重忠急に押とどめ。こは佻々しく見へ給ふ。はや婚姻の時刻になりぬ。鎌倉殿へ

心やりに。自親手をくださんとし給ふは。よしあるに似たれど。鶏を撃に。牛の刀を用ふべからず。努思ひとま
り給へかし。とこれを諫め。さて光實榛澤にいふやう。汝等は唐糸を老樹の梅の榦に繋ぎ。すべり出て休足せよ。と
くゆきね。といふに光實は。仇に氣色を曉得られじと。勇む意の駒をさへ。繋ぎ留る樹の下に。唐糸を残りおき。榛
澤六郎もろともに。外面へ退出しかば。重忠は縁由を。鎌倉殿へまうさんとて。やをら蒸襖の内に入りぬ。

第十八套

假を弄して大姫初て眞を認る
明を失して義高更に空に歸す

さても美妙水冠者義高は。頼朝卿を狙撃ん爲に。諸越が原に到りて。乞見の隊に入り。かくては重忠も。われをし
らじ。と思ひたるに。はからずも榛澤六郎に誘引て。鎌倉に立歸り。唐糸に環會て。こゝろの中密に歡び。やゝ傍に
人なきをみて。ふたゝび呪文を唱れば。奇なるかな。夥の鼠忽然とあらはれ出。唐糸を縛めたる。鐵の鎌を齧断しか
ば。唐糸は。久しく居縮みたる手足さへ。舊のごとくなりつ。こはあやしやと思へども。わが身をかへりみる邊なく
て。忙はしく椽類に這登り。言語はなくて。まづ不覺に目を押拭ひ。しばらくしていふやう。頼朝が命運高ければ。
計策ながら撃もらし。いひがひなくも生拘れて。土の牢に推籠られ。とても活べくは思はねど。御曹司の事のみにか
く心にかゝりつるに。今宵恙なきおん顔。を拜し奉る歡ばしさを察し給へ。君今鎌倉に歸入らせ給ふ事。何共思ひ
わきまへがたし。その故をしらし給へかし。と密やかにいふも。なほ人や聞んとて。義高は首をめぐらし。彼此をみ
かへりつゝいふやう。曩に汝に別れし後。千苦萬苦を厭はず。一味の兵士を招き集んとするに。勢ひ微にして事なら
ず。あるときは粟津が原に旅寢して。猫間の族に怪れられ。又あるときは。鎌倉を徘徊して。重忠に認らるゝといへど
も。頼朝阿闍梨の神靈に。妖鼠の術を授られ。出沒自在なれば。彼等が爲に謀られず。爲久等をば去年の秋。箱根山
にて首を刎。近曾乞兒となりて。頼朝が潜行せんときに。狙撃んと計較たるに。重忠昨夕。その家諺に命じて。わ

れを管中に誘引し。却てしらすかほなるも。そのこゝろに物ありとおぼし。道。頼朝が首を撃たんと。今宵に
り歡び候へ。と密語折しも。寔然として人の來る音するにぞ。義高は目をもてこれをしらすれば。唐糸は。うち點頭
杉戸の蔭へ躲れけり。浩所に。女房たち五六人。手にく。獨を乗り。或は銚子土器を捧もちて前にたち。嫩子は
姫の手を引て。おのく義高のほとり近く参りつ。さて嫩子がまうすやう。産靈は今もおはして。姫君今宵御曹司
にまみえ給ふといへども。未だ暗れるおんはからひには侍らず。おん命の程もおぼつかなきまでに。いといたうお
もひほそり給ふが痛ましければ。竊やかに。妹夫の盃をとり結ばしまらせ。かさねて在鎌倉の武士に令しらし給
はんとなり。よりて嫩子仰をうけて。姫君を誘引奉りぬ。と述べしかば。女房たちおのく。千秋萬歳と唱て。土器を勸三
三九獻の式も果たり。大姫は名のみにて。今宵初めて良人の貌を。見もし見らるゝ恥かはしさに。いふべきことはな
かなかに。眉の間に月出で。夜を争ふかと疑はれ。頬の上に花開て。春を含むに似たりけり。蟬の羽のごとき髪。
黒くて匂やかなること。錦の袿。綾の帯。留寄南の薰衣をもちて。沈魚落雁の容止。羞花閉月の粧飾。かゝる美人は。
いと稀なるべく見ゆるに。義高又將帥の氣象あらはれて。面色白く鬚鬚青く。眼秀て。身丈高し。寔にこれ花の山
に月を瞻め。金の盤に玉を盛が如く。劣らず勝らずおはするとて。みな愛敬づきて。興ずるも風情あり。春の夜なれ
ば短くて。寝よとの鐘聞ゆる程に。嫩子は耳を側てつゝ。莞やかにうち笑み。あな心なし。いつまでかかくてあら
ん。誘女房たち。洞房の用意し侍りなん。姫君はなほしばし坐して。年來の心盡しを。語り慰め給ひぬ。と信だち
て。みなもろともに奥へ退りぬ。大姫は姨捨山に。照る月をみるこゝちしつ。さし對ひてはうひくしくて。いひ慰
るよすがもなく。面ぼてりしてうち掩ふ。長き袂も綾錦。たゞまくをしき風情にて。やうやくに膝をすゝめ。君はあ
へなくも武藏なる。入間川とやらんにて。撃れ給ひぬ。と聞えしかば。その悲みの數まして。存命べくも思はねど。
おん容止をも認り侍らず。被も果ぬ涙の磯に。弘誓の船を待ながら。なからん後も冥土にて。何をたつきに名告あは

ん。と思へば。いよ、形なき身を。うち歎くにもあまりあり。しかるにけふしも不意。ふたゝび締ぶ頼夫の縁しは。神と親との恵にて。ありけるものを四年が程。恨み奉りぬるこそ恐れ。昔の頼さ今の歡しさ。思ひやり給ひなば。玉椿の八千代までも。言の葉すゑに露ばかりも。聞へしらし給ひかし。とかき口説ばうち點頭。寔に御身が心操をいかでか化に思ふべき。その誠心に愛て。憑み聞ゆる密事あり。うけ引給はんや。と問ば。大姫は聞もあへず。こは問給ふまでも侍らず。百年の苦樂をともにする君の爲めには。火にも入り。水に没るとも。八百萬の神をかけて。仰に侍らじ。と聞果て莫然とし。さは誓ひ給ふから。偽はあらじ。案内して撃し給へ。とは又誰を。おん身が父頼朝を。今宵臥房へ案内して。撃し給へ。と密語にぞ。胸うち騒ぐ當惑に。そは何ゆゑかとも問かねて。さし俯きて坐せしかば。義高いよ、聲を低し。驚き給ふは理なり。縁由は委細に告ずとも。御身が父はわが爲に。父の讐なる事はよくしりてぞおはすらめ。亦曩に頼朝の需に應じて。鎌倉に來り。次の年の五月。入間川のほとりにて討れたるは。眞の義高ならず。唐糸が孫兒に。大太郎と呼ぶもの。われに代て命を隕せり。絆長やかなれば今全く聞へしらするに及ばず。義高年來。灰を呑。身に漆するの志を移さず。只願頼朝を狙撃んとはかれども。彼入るときは城廓あり。出るときは從兵多し。孤獨の身にしてはそのほとりへも近づきがたく。いたづらに年月を過したり。しかるに御身に哀歎せられ。こゝに來りて優曇花の。新郎と呼ぶ事。方是時あり命あり。父の讐には共に天を戴ず。況て彼とひとつにをりて。この夜を他に過さんや。こゝろ夫にあるならば。案内してわが宿志を。果さし給へ。とうちあけて。いはるゝ程なほ淺ましく。はふり落る涙を拭ひ。仰はさることなるべけれど。子として父を撃しては。こゝろ獸に劣り侍り。この事のみは許し給へ。といはせも果す眼を瞪らし。しからば只今誓給ひし。言の葉は何とか聞ん。かくいひがひなき心ざまならんとはしらず。大事を聞えしらしたる悔しさよ。夫婦の縁しは是までなり。とくゆきて父に告よ。といひかけて。つと身を起す良人の裳を。那とめつゝ目を拭ひ。親子の恩義重ければ。一トたびは推し

侍りしが。婦のうへには天に譬し。夫に思ひかゆるものなし。今宵案内し侍らんが。わが身を輔るものなくば。いと危かりなん。といはせも果す杉戸の蔭より。その事は心安かれ。わらは附副侍るべし。と應するに大姫は。うち驚きつゝ。そは。誰や。と見かへり給ふに思ひがけなき。これ唐糸なりしかば。あな何の程より其處にはありし。假そめならぬ縛めの輒く解たる訝し。と宣ふ間に唐糸は。そのほとりに参りつ。鐵の鎌だに。輒く解し給ひぬる。御曹司の奇術もて。鎌倉殿を撃給はん。孰か當るもの侍るべき。しかるを姫君。絆を兩端によして脱んとし給ふとも。唐糸かくて侍るから。案内はよくしつたり。いざ給へといそがすにぞ。大姫は。遂に脱るゝに言葉なく。やうやくに立給へば。義高欣然として唐糸にいふやう。汝その形容にて竊入らば。直寐の武士に。怪らるゝ事もあらん。人目の關を踰んには。姫が袿衣にしくものなし。大姫。それ脱てとらし給へ。とくゝといそがされ。涙まだ乾ぬ袖かいとりて。唐糸に被給へば。差高呪文を唱つゝ。燈燭一度に弗と打滅し。主従三人密語あひ。身をかすまして潜ひゆく。その夜も既に更闌て。櫓。廊。室。助鋪。間毎々々の寂として。宿直の近臣熟睡せり。大姫遙に指して。彼處なる几帳の内こそ。わが父の臥房なれ。と潜めきて告給へば。義高聞て莫爾とし。しからば唐糸は。大姫と共に。臥房の後方にたち廻り。もし脱れ出る事もあらば。撃とめよ。と密語ば。唐糸は。こゝろ得侍り。と應つゝ。姫を誘引雄手なる。廊をうち繞り。房の彼方へ潜ひ入る。大姫は今さらに。是をかぎりで見かへり給へど。晴さへ胸さへうち曇り。涙にしかと見えわかぬ。鐵行燈の下に立。良人のうへもわがうへも。風の前なる燈花なり。孰か先へ滅なん。とこゝろ一ツにおきかねて。すゝまぬ足をやうゝに。裳結り蒸襖を。そと引開て入給へば。義高しばし目送りて。今は心安し。とひとりごち。やをら走り前みて。几帳の内へ。打入んとする折から。朦朧として立在ものあり。義高是に猶豫して。熟視れば行氏夫婦なり。そのとき行氏は。棧橋とともに義高の左右に躡蹠し。御曹司いまだ曉得給はずや。鎌倉殿の時運高大にして。宿志を遂給ひがたし。只速に志を轉して。先君のおん菩提を弔ひ給へかし。

と諫れば。義高勃然として大に怒り。汝等生る日は。われと志を同じ。わが會稽の怨を雪るを。草の原より見つべし。と。誓ひつるには似げなく。しばし敵の時運を稱して。諫るはいかにぞや。われ今仇を報ん事。瞬の中にあり。其處退すや。と焦燥ば。行氏かきかねてまうすやう。君が言悞り。曩には平家。なほ西海にあり。宇内擾亂の時にして。仇を撃によろし。今や四海靖治に及んで。人の心鎌倉に歸降す。彼は徳を布て民を安拊し。君は邪法をもて。人を眩惑す。彼には智勇の士卒多く。君は一臂の援なし。加之。大姫君に逼て。本意を遂んとし給ふは。いとこころ得ぬ。父の仇を撃ものは。孝なりや將不幸なりや。もし果して孝ならば。その事道理に稱はず。大姫君。今夜復讐の案内し給ふときは。君その妻を諱て。父を殺すの大罪を犯さし給ふならずや。かくては神も衛給はず。佛も感み給はず。神明佛陀にみはなされても。本意を遂給ふよしありや。と憚るところもなく。理を述るに。義高頭をうち掉て。謂なき諫言かな。爲義保元に敗走して。義朝は父を殺すの罪あり。安徳帝西海に没給ひて。頼朝又君を弑するの罪あり。今順をもて逆を討。何の妨あるべき。といきまきて。裾踏かへしゆかんとするを。行氏棧橋は。なほ縁りて引留れば。この嗚呼なり。と焦燥つ。刀を抜て切はらふに。形は消てなかりけり。義高はさもこそ。と冷笑ひ。抜たる刀を掌なほして。几帳のほとりに走り寄り。起よ頼朝。父の仇を報ん爲に。義高來たつて枕方にあり。起よ。と呼び覺し。几帳をさらりと切落せば。内には臥たる人もなく。薰籠に掛し麻衣に。一首の歌を書きたりける。義高はこの影跡に。忽地望を失ひ。原來敵にも防禦の術あり。やうこそあらめと立よりて。彼麻衣の歌をみれば。

夏來れば伏屋が下にやすらひて清水の里にすみつきぬべし

と讀もをはず大に驚き。われ重忠に謀られて。漫に深入しつるかな。遮莫。何程の事かあらん。ものくしや。と罵りて。薰籠の真中敵と砍れば。顯れ出る金の猫。赫突と光を發ち。餘光散徹して。義高を射るとみえし。奇なるかな義高は。さながら酒に酔たる如く。眼々として尻居に坐し。一道の白氣その懐よりたち沖り。忽地影の鼠と化

し。西を斥て飛去ぬ。されば義高は。妖鼠の術破れていまだ驚す。時に猫鼠の武士十人あまき。ばらばらとつとつと。巻。やと聲かけて組んとせしかば。義高是に驚き覺。太刀閃して丁と砍ば。間ちかゝりし兵士兩三人。首遙に轉び墮。軀倒れて血に塗る。残る兵士等はこれにも怕れず。屍を跳こえて。打て懸るを義高は。縦横に飛繞り。前後に當り。或は眞甲を砍割。或は腕を打落し。猛勢榮然として。その勇敢に當るものなく。血は流れて潺々と。屍は横はりて累々たり。さる程に義高は。柱る兵士を塵にして。なほ奥ふかく前み入れば。西面なる緞障子の内に。人のけはひするあり。是なん頼朝なるべしとて。しばしも擬議せず。血刀引提て走り蒐れば。忽地内に聲高く。

昔見し野中の清水かはらねとわが影をもや思ひ出らん

とうち吟じ。障子をさと開くもの。亦これ斥す仇にはあらで。ひとりの行僧。栲の行囊を背負ひ。手に一條の杖を突立。悠然として立在たるが。義高をさし招き。御曹司。われを忘れ給へりや。曩に近江なる。粟津が原に菴を締び。しばし住けるころ。御身。猫間光實ぬしと。猫鼠を論じたる夜。端なく面をあはしたる。憲清入道西行なり。貧僧奥州よりのかへさ。はからずもこゝに來りて。ふたゝび見ゆる事を得たり。御身復讐の志はさることながら。木曾殿朝敵となりて討れ給へば。仇を報ふによしなし。努々思ひとまり給ひぬ。といはせも果す。慈悲忍辱を旨とする出家人は。勇士の志を知るべきにあらず。汝成敗に就て。是非を論ずる。その心さま俗子に劣れり。いでその願切はなちて。息の根止んと。誓つ。双をうち振て砍らんとすれば。光實正忠これにあり。と名告かけて。左右より走り出。西行を推隔れば。葎戸も一刀を腰にして。鈴稚丸を。かき抱き。夫の後方に引そふたり。そのとき光實は。刀の柄を握もちて。義高にたち對ひ。汝往に粟津野にて。妖術をもて形を隠し。その後。由井濱にて。わが刀尖を脱るゝといへども。家臣竹川正忠が孩兒。千江松が忠死によつて。家の重寶たる。金の猫の目に。千江松が鮮血を塗る。こゝに斬く妖鼠の術を破りぬ。抑。わが兄光隆は。義仲が爲に罪を得て。憤に世を逝。家命遂に凋落せり。

義仲既に誅伏すといへども。わが怨なほ竭ず。汝を撃て復讐の志を果さんとす。恨の双うけよ。と呼はり。刀を閃りと引拔ば。義仲呵々と冷笑ひ。こはものゝしき光實が廣言。いぬる年由井濱にて反撃にすべかりしに。その志の切なるに放おきつ。敵手は嫌ず。とく來れ。と太刀さし挿頭て立たりける。憎さも憎し。と光實主従。挟みて撃んとす。浩處に東面なる正應のうちより。双方ともに健り給ふな。鎌倉殿の御座近し。重忠仰を受けて。まうすべきことあり。と呼びかけつ。翠簾さらりと巻揚れば。影の燈燭。晃きわたたりて白晝のごとく。上坐には前右大將頼朝卿。裝束して立給へば。政子。嫩子。左右に侍り。重忠その傍にあり。光實主従は。この光景に怒を壓へ。少し引退て縁由を問んとするに。義高は。すは頼朝。ごさんなれ。と會釋もせず跳かゝるを。重忠はやく身を起して。遮り留め。御曹司。既に石田を撃て。復讐の本意遂給へるに。今又鎌倉殿を撃んとはかり給ふこと。更に道理に稱はず。又光實ぬしは。木曾殿滅亡の後。その子なりとも。討て怨を雪んとし給ふこと。大なる惑ひあり。これ併無名の鬪戦。私の宿意によつて。父母の遺體を傷ふべき事かは。しかりといへども。無下に志を折しがたし。こゝをもて義高ぬしには。鎌倉殿の狩衣を進らせ。光實ぬしには木曾殿の兜を進らせ。是彼豫讓が故事に倣ひて。夙志を果さし給ふにこそ。みなこれ幕府の寛仁大度。勇士を惜み給ふにあんなれ。おのゝこれに刺て。心やりともし給へかし。と述をはり。携たる狩衣を義高のほとりにさしをき。兜を光實に遞與けり。義高これをみて。怒れる聲をふり立。卑怯なり頼朝。みづから撫恤に倣つて脱れんとするとも。われ決して放さず。この狩衣何かはせん。と罵もあへず。投かへすと引あぐれば。裏より轉び出るもの。これ大姫の首なり。光實も。この爲體にこゝろ怪しみ。伏たる兜をとり起せば。又これ裡に唐糸が首級あり。爰に至て光實はさらなり。義高も。こゝろありげなる。贈ものに。默然として。猛勢はじめには似ず。重忠莞爾として。件の二人に對ひ。大姫君は。孝と貞とに身ををきかね。自害して失給ひしかば。唐糸も事の成ざるを見て。自刃に伏たり。さるによつて。大姫君のおん首級は。義高ぬしに進らし。唐

糸が首は。光實ぬしへ贈り。その子をもて父に代らし。その仇をもて君に報ふ。かゝれば復讐が。空衣を頼たるに勝れり。今は迭ひに復讐の志しを絶給へかし。と説諭にぞ。頼朝卿宜ふやう。われ往に。範頼。義經をもて。義仲を討したるは。勅諭によつて都下の總劇を鎮んとするにあり。豈その己に勝れるを諱みて。親族を殺すべき。しかるに義仲は。却頼朝を疑ひ。唐糸が子大太郎とやらんを。義高なり。と偽りこしらへ。鎌倉へ來せし事。われ之を猜したり。こゝをもて石田爲久が請に任し。義高を撃したるは。眞の義高ならざればなり。義高頻に頼朝を仇として撃んとすれども。われは是禁廷の御衛。天下の武將なり。いかで私の怨に當ん。又光實の愁訴。寔によしあり。今度義高が妖鼠の術を破たる功をもて奏問し。鈴稚丸に猫間の家を繼し。官祿舊のごとく安堵せらるべし。鈴稚成長まては。光實これが後見をいたし。正忠夫婦。いよ忠節を勵べし。といと信やかに宣ふにぞ。政子御前は忍ぶに餘る。涙を袖に裏かね。大姫が命を隕して。命をせし心操を憐み給は。義高はやく志を轉して。一家の親みを竭し給へ。光實も又唐糸が忠死に愛で。怨を散し給へかし。といひかけて又泣泣み給へば。嫩子も目をしばたき。大姫君をはりに臨て。只恥しきは。四年が程。實の良人をしらずして戀慕ひぬるは。唐糸が子に。大太郎といふもの也。と今將聞ては年來の節操も仇になりけるよ。と宣はせし御こゝろさへ。推量られて痛し。とかき口説ば。西行も。又言語を竭して。是彼を諫けり。義高は。つくぐとうち聞て。嘆息し我心石にあらず。絶て轉すべからずと雖。仁義に敵する双はなし。光實の意如何にぞや。と問に。光實も又嗟嘆し。げにいはるゝところ。理あり。いざもるともに。と應つ。刀を抜て兜の鏝を。ばらりずんと切はなち。鉢を刀尖につらぬきて。高くさしあげ。敵の首をかくぞ得し。今は恨も散たりとて。正忠夫婦を見かへれば。正忠葎戸聲をあはして。三たび凱歌を揚たりける。そのとき義高も。刀をもて狩衣を。數回刺徹し。刀尖をとりなほして。兩の目をくり出し。流るゝ血を狩衣にて押拭ひつ。聲を勵ましていふやう。始ありて終なきは大丈夫にあらず。わが眼あればこそ。頼朝を見るなり。耳目は煩惱の奴。今脱離して

象教しやうけうに歸す。われ入間川いりまがわの上うへにありしころ。唐糸からいとが子こ。大太郎おほたろうと呼れ。假目暗にせやくらとなりたるを。おもへば緯このこゝに及ぶ。前象まへしやうにてありけんかし。されば今より。無絃法師むげんほふしと名なを更あらため。唐糸からいとに習ならひ得たる。琵琶びわ和琴わこんを寢覺ねざめの友ともとし。琵琶湖びわこの上うへに住果すまはつべし。棄恩おんじふ入無爲むゐ報恩ほうおん者しや。行氏ゆきうぢ夫婦ふうふが死後しごの諫いさめも。こゝに迷まよひの門かどを開ひらく。善知識ぜんちしきにてありける也。南無阿彌陀佛なむあみだぶつと唱となれば。西行法師さいぎやうほふし前まへみ對むかひて。義高ぎたかぬしの發心はつしんに。導師だうしといはんも嗚呼なむいなれど。大姫おほひめはいふもさならなり。唐糸からいと。行氏ゆきうぢ夫婦ふうふが爲ために。ながく回向まがうし進まらすべしとて。掛かたる袈裟けさを脱ぬぎ。二ツの首級くびを裏うらみ。終つひに義高ぎたかを扶たす引ひて。近江おんみなる粟津原あよづはらに赴おもむき。義仲ぎちゆうの墳つみのほとりに兩ふたの首かぶを埋まい葬まうし。舊住ふるすまける草菴くさあんを。義高ぎたか入道にゅうだうに與あたしかば。義高ぎたかはこゝに行いひすまして。絶たえて人に交まじらず。光實みつねは鈴稚丸ねこまるとともに。正忠ただただ夫婦ふうふを將もつて。洛みやこに歸かへりのぼりしが。頼朝よりとも卿けい縁ゆかり由よしを奏聞そうもんありければすなはち勅免ちよくめんあつて。鈴稚丸ねこまるを猫間ねまの家督かとくと定まられ。光實みつねは無位むゐより。四位よんゐの少將せうしやうに昇進しやうしんして。その家永けいえいく繁昌はんじやうせり。かくて頼朝よりとも卿けいは。頼豪阿闍梨よりたかあせりの靈れいを。伊豆國下田いずのくにしもたの近郷きんきやう。中なの瀬村せむらといふ處ところに祝いはひ祀まつり。一社いつしやの祠ほこら倉くらを建て。子聖ねのひじり權現けんげんと稱なづふ。北條時政ほつじゆうときまさに仰おほせ。春秋しゆんしゆうの祭禮まつり懈おぼることなく。執行とりにぎひ給たまひければ。彼惡靈かのあくりやう遂つひに祟たたりをなさず。却かへて源家げんけの守護神しゆごじんとならんとて。祝はが夢ゆめに見みえたりとぞ。今現いまげんに豆州まめしゅう中なの瀬せの鎮守ちんしゆたる子聖ねのひじりの神かみこれなり。この神餅かみもちを忌嫌いけんひ給たまふとて。中なの瀬せ一郷いつきやうは。年としのをはりに餅もちを搗つかず。元日げんにちには燒飯やきめしに青菘あおなをとりあはし。羹あつちとして。雜ま煮まに代かゆいまだその縁由ゆかりをしらず。

評ひやうに云いふ。世よに傳つたふ惡七兵衛あくしちべゐ景清かげきよ。頼朝よりとも卿けいを狙撃せりんとするに事ことならず。頼朝よりとも卿けい。その精忠せいしゆうを憐あはれ。これに狩衣かりぎぬを給たまはりて。晉しんの豫讓よじやうが故事こじに擬なす。景清かげきよ空衣くういを刺さす。目玉めたまをくり出し。日向國ひやうこくに退ひて住すむ。世よにこゝを日向ひやう勾當こうたうと號なづするよしへり。しかれどもその事何ことの書かきにも見みえず。按おずるに東鑑とうかんに。建久三年正月廿一日けんきゆうさんしげつにじゅういちにち。平家へいけの侍さむらい。上うへ總すべ五郎兵衛ごろうべゐ忠光ちゆかう。魚うしの鱗うろこを眼まなこ上うへに覆おほひ。左ひだりの眼まなこ。盲めくらたるごとくにして。前幕府まへまくふ。頼朝よりとも卿けいを狙せひ打うんとす。事ことあらはれて。これを六連むつれんの海邊うみべに梟首せうすいす。といふ事見みへたり。景清かげきよが事はこれに因より作り設たたる根ねなし言ことなり。義高ぎたかの

事も亦たれに准まて見るべからん。亦またいふ。この書かきすべて雜劇ざげきの赴おもむきを寫かして。方かたに遊戯ゆうぎ三昧さんまいの筆力ふでぢからを振おり。設たすの有無あひなしを問とふ。不經ふけいを笑わらふ人は。史傳しでんを讀よみに過すす。何ぞ小こ説せつとするに足たらんや。

【鼠腹】(莊子逍遙篇)鵠巢於深林。不_レ過_二一_レ枝。偃鼠飲河。不_レ過_二滿_レ腹。

【鼠膽】(酉陽雜俎)鼠膽在_レ肝活取則有。

【聚鼠】(五雜俎)安息香能聚_レ鼠。其烟白_レ色如_レ縷。直上_レ不散。又狼糞烟。亦直上。故烽_一墩_一用_レ之。

【投鼠】(賈誼策)諺曰欲_レ投_レ鼠而忌_レ器。鼠近_レ於器。尙_レ憚_レ不_レ投。恐_レ傷_二其器_一。況貴臣之近_レ主乎。

【鼯鼠】(荀子)鼯鼠五技而窮。舊注技才能也。五技謂能飛不_レ能_レ上_レ屋。能緣不_レ能_レ窮_レ樹。能遊不_レ能_レ渡_レ谷。能穴不_レ能_レ掩_レ身。能走不_レ能_レ先_レ人。

【鼠祠】(太平記)白川ノ御宇ニ。江ノ帥匡房ノ兄ニ。三井寺ノ賴豪僧都トテ。貴キ人有ケルヲ被_レ召_レ。皇子御誕生ノ御禱ヲ被_レ仰付ケル。賴豪。勅ヲ奉_レテ。肝膽ヲ碎テ祈請シケルニ。承保元年十二月十六日。皇子御誕生有テケリ。帝叡感ノ餘ニ。御祈ノ勸賞。宜_レ依_レ請ト被_レ宣_レ下。賴豪年來ノ所望ナリケレハ。他ノ官祿一向ニ是ヲ閣_レテ。園城寺ノ三摩耶戒壇造立ノ勅許ヲ申シ賜リケルニ。山門又是ヲ聽_レテ。欸狀ヲ捧_レテ禁庭ヘ訴_レヘ。先例ヲ引_レテ。停廢セラレ_レント奏シケレバ。無_レ力三摩耶戒壇造立ノ勅裁ヲ被_レ召返_レケル。賴豪是_レヲ怒_レテ。百日ノ間_レ髪ヲモ不_レ剃_レ。爪ヲモ不_レ切。爐壇ノ煙ニフスボリ。嘔_レ患ノ炎ニ骨ヲ焦シテ。我願クハ。即身ニ大魔縁ト成_レテ。玉體ヲ惱シ奉_レリ。山門ノ佛法ヲ滅サント云フ惡念ヲ發シテ。遂ニ三七日ガ中ニ。壇上ニシテ死ニケリ。其怨靈。果シテ邪毒ヲナシケレバ。賴豪ガ祈出シ奉_レリシ皇子。未御母后ノ御膝ノ上ヲ離_レサセ給_レハデ。忽ニ御隱_レ有ケリ。其後賴豪ガ亡靈。忽ニ鐵ノ牙。石ノ身ナル。八萬四千ノ鼠ト成_レテ。比叡山ニ登_レリ。佛像經卷ヲ嚙破リケル間。コレヲ防_レニ無_レ術シテ。賴豪ヲ一社ノ神ニ崇_レメテ。其怨念ヲ鎮_レム。鼠ノ禿倉是也イヨク_レクハシ

【一竹塚】(盛衰記)清盛左衛門佐タリシ時。大内ニテ鶴ノ聲ヲナス化鳥ヲトル。是毛シユウト云モノ也。毛シユウハ鼠ノ唐名也博士ノ占ニ。清盛取止ルムコト吉祥也トイフ。南臺ノ竹ヲ召シテ。中ニ籠_レテ清水寺ノ岡ニ埋_レラレタリ。

御備ノ時。勅使立_レテ。宣命ヲ舍_レル時。毛シユウ一竹ガ塚ト云フ是也。鼠賦去來ガ鼠ノ賦に。どこの乙子を七郎とは申す。新左衛門とつけたるは。さかやきすりての後なるべし。大ねら小ねら。云々。前編の巻端に。この鼠の賦を出せり。しかるに佛書誤_レて。新左衛門云々の一條を脱落す。

○又【月令】に。田鴛化爲_レ鴛。前編鴛を鷹に作ものは誤也。鼠の種類最多_レ【鼯鼠】又【田鼠】【鼯鼠】【隱鼠】並同。【偃鼠】又【鼠母】【鼯】並同。此餘有_二鼯鼠【竹鼠】【土撥鼠】【黃鼠】【貂鼠】【鼯鼠】【食蛇鼠】【蟹鼠】【今不_レ能_レ悉_レ注_レ焉。書肆豪奪之綉梓太急也。

文化五年戊辰正月

著作堂主人再錄

松染情史秋七草

秋史簡 松

七月七日何がし殿より女房のせうそをにほひといふはしたものにたせて某のつぼねにつけてたてまつらるこの
 はしたもの雨ふらぬにも傘をささせ高きけいしをはきてまいりぬ姿のめづらしきを東の人のもとめによりて繪にう
 つしたれがことわりを記せよとせるものありその起る所を尋れどもかの殿のうちだにたしかたるいはれをしるものな
 しいくもよとせをふりぬるまゝの今にいみじきためしになりて花あふぎの使といふばかりを聞まゝにかひつけてせ
 めをふさぐもかたはらいたきわざなりかし花のツ、ミヤウ島ス、キ女郎花桔梗ムラサキシロ
 仙翁花蓮小車黄菊以上七種上ヨリコレラ歌フ

こはやんごとなき君のしるさせ給ふになん好事のもの寫しとりて世に翫ぶこと久しこの草紙の名を秋七草といへ
 ば因にこゝには載つ

此書竊に。細々要記。櫻雲記。吉野拾遺。南朝記傳。圓太曆。鎌倉大草紙。足利治亂記等の諸説を据として。は
 じめに楠氏の事蹟を述るといへども。亦彼三楠實錄。楠戰功實錄。南家全書。楠軍物語記。楠物語等の趣と
 同からず。その事多くは寓言にして。只阿梁久松が奇耦をいはんとて。姑く楠氏の名を借るのみ。夫艶曲演戲の諷淫
 猥褻なる。小説者流は取らず。更に松染の節操を録して。穂七草と命るものは。華説の花のみにして。事實の實なけ
 ればなり。こゝに一首を證として。一部の要を摘ものならし。

色かえぬ松の操も蔦かつらしばしは染るしぐれく

序

積雨初銷。新月臨軒。忽見客至。秉燭出迎。即書肆文刻堂主人也。自陳曩者浪華書林森本生。有竊請于先生。使僕致意焉。爾後二更。裘葛。書未告成。敢請。余曰。曩者森本氏請。蓋在編輯院本所。記阿染久松情死之事也。余熟思之。夫久松以一豎兒。好于主家女。妨其婚期。遂至情急勢迫。相俱枉死于庫中。則是不義不孝之大者。宜以爲世戒。豈可更筆之册子。以宜淫風哉。此余之所不願。以握管。未應其請也。文刻堂笑曰。先生之言固是矣。但書賈相謀。不在義而在利。森本生以此事煩先生。亦是趨時好已。加之千里之請。不可峻拒。冀再思之。於是余乃感其言有理。翻案數日。主其事而不拘其迹。換骨奪胎。別自編綴。一個小說。以塞其責。其間勸善戒惡。叙人情。託風教。咄是微意所存。實作者一片老婆心也。嗚乎。余雖以著作自號。比年撰述幾二百部。書賈請索相踵于門。不暇運思。以故往往不免疎漏誤事之謂也。況此書僅出乎數日新案。唯恐文詞鄙陋。其不足動從善之良心矣。閱者幸恕之可也。文化戊辰年孟穉中浣。著作堂主人書于江戶飯台隱居。

あき七くさもくろく

第一 しかな草

證歌

都にもさき句へとも鹿のなく名におふ草は秋の山さくはなさけはつれなき人もこそめ草色にめてつかけふやとはまし

第三 しきなみ草

證歌

水はなし風こそはたて渡はた、敷浪草に寄そこほる、物おもふかた野の原をわけゆけば袖ふり草にき、す鳴なり

第五 まつな草

證歌

秋見れば花むらさきの松無草かゝる處さへ玉とこそ見れ又たくひ世にあら、きの色に香に袖ふりはえよ風ふかすとも

第七 しのゝめ草

證歌

山さとのしのゝあさ戸のしのゝめにあくるもうれし朝鏡の花たれかをるさかのゝ原のおもひくさ銭なきならば花はさくとも

第九 かたみ草

證歌

来て見ればなき世の人のかたみ草いくたひわれは袖ぬらすらんふる郷とこれにそ思ふなつことになつかし草の袖のくれなる

第二 こそめ草

第四 そてふり草

第六 あらゝき

第八 おもひ草

第十 なつかし草

もくろくをはり

秋野爾咲有花乎指折可伎數者七種花 芽之

花乎花葛花瞿麥之花姫部志又藤袴朝貌之花

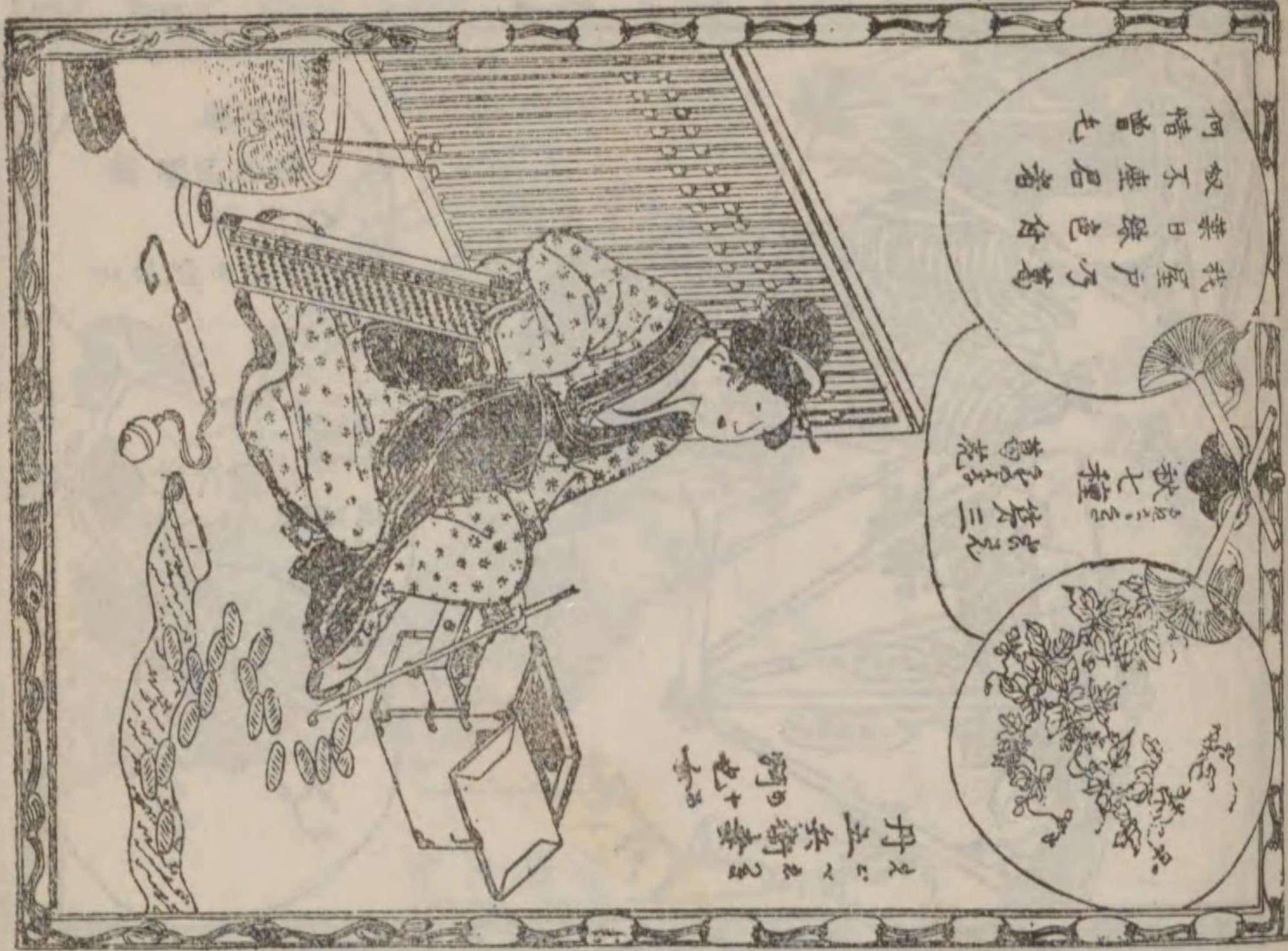
右二首山上憶良詠秋七種詞



音屋戸乃一村
 莠子乎念兒
 余不令見殆
 散都頰香聞

秋七種

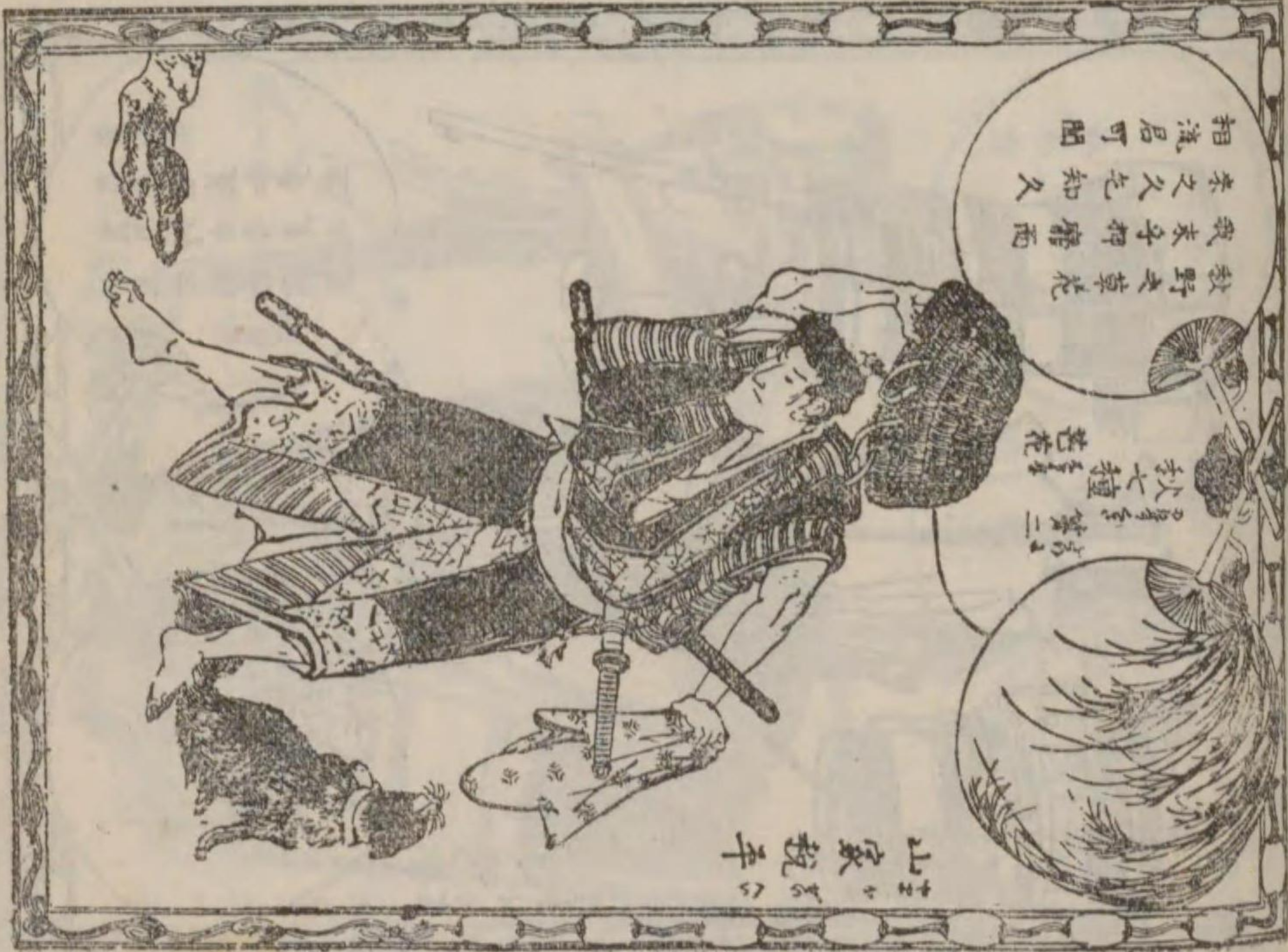
第一芳萱
 河内二郎正元



我屋戸乃葛
 禁日殊色竹
 奴不塵尾者
 何暗曾七

秋七種
 第二
 葛屋三

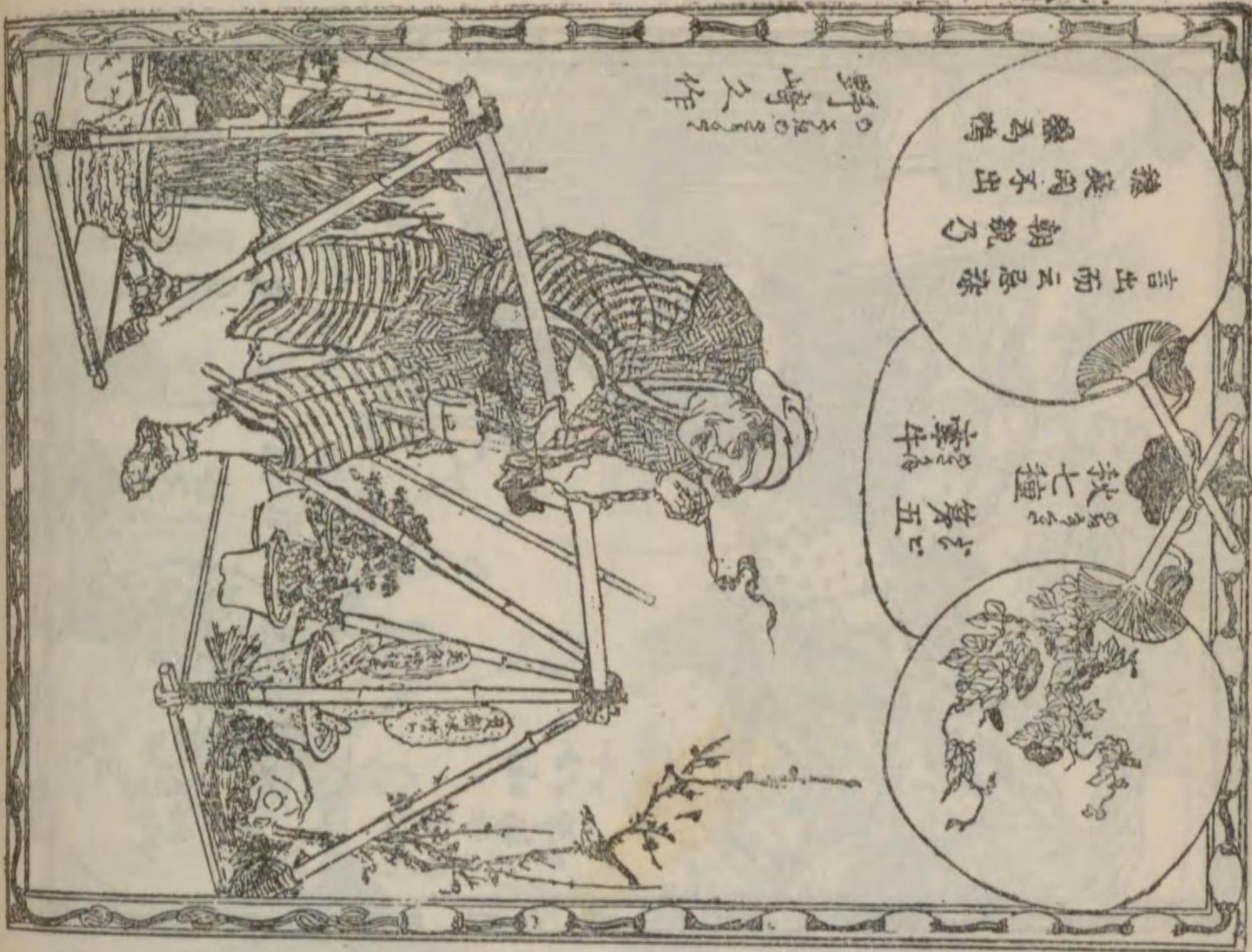
丹五兵衛
 河内



秋野之草花
 我天字柳藤而
 來之久之知久
 相流居可聞

秋七種
 第三
 芭花

山家親平

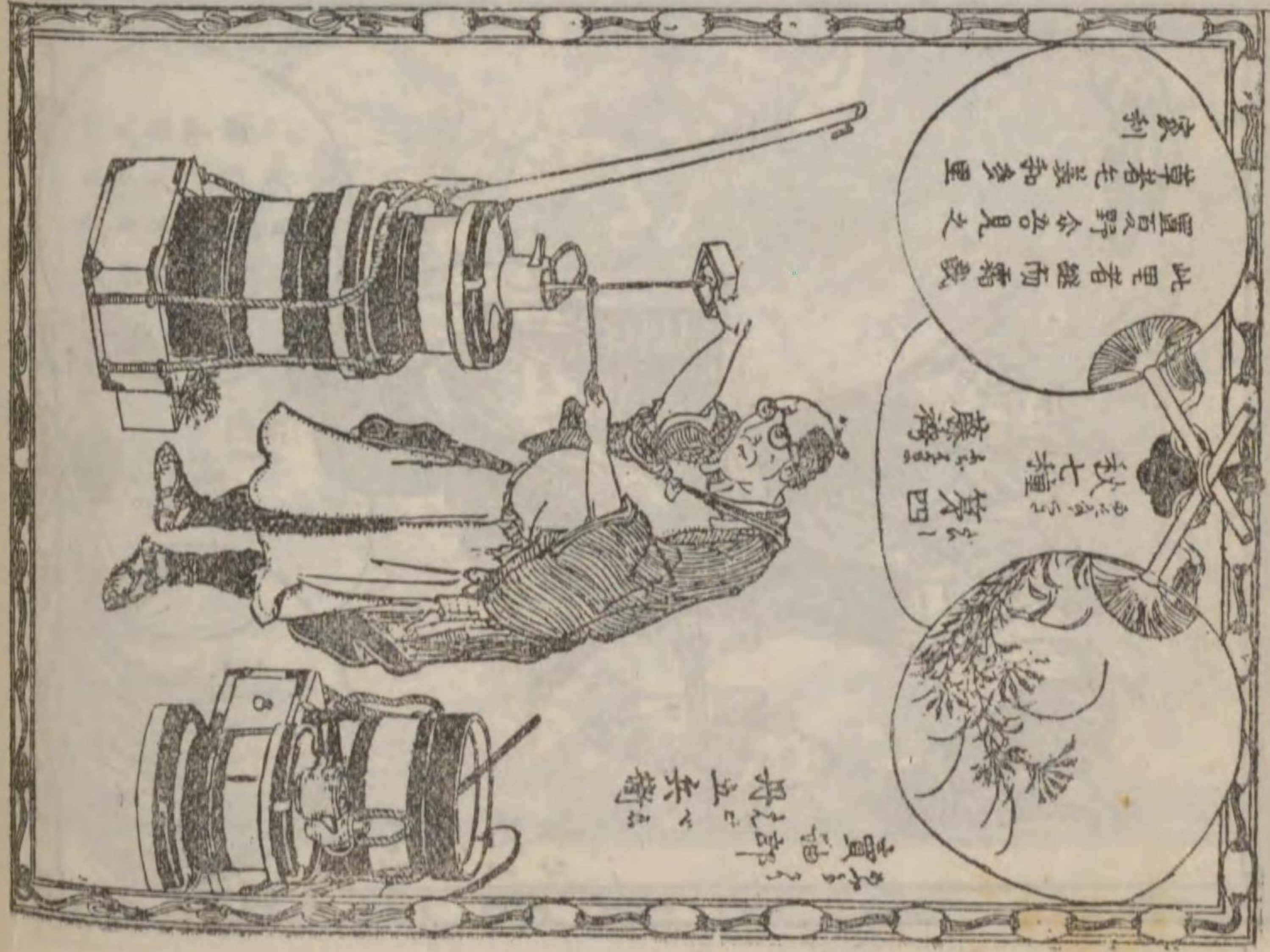


言出而云忌亦
德突聞不出
朝鏡乃
巖為鳴

秋七種 第五
寧牛



野崎久作



此里者繼而需哉
運云野公召見之
尊者先美和久里
家利

秋七種 第四
藤袴



實油部
丹立兵衛



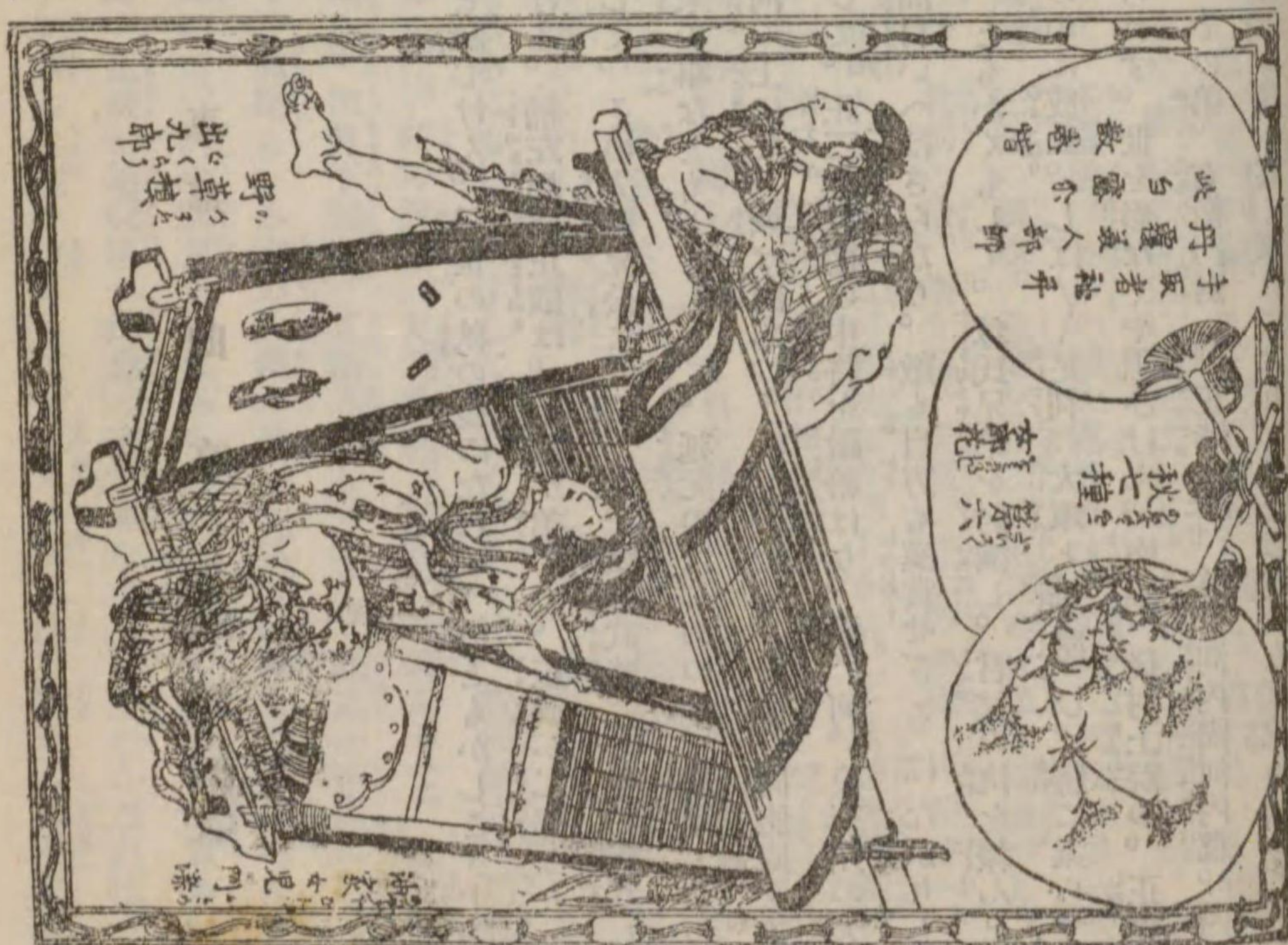
每朝吉見屋戶
乃置袋之花念
名居波有許世
奴香聞

秋七種 第七
置袋



土音是非八

小野之松



手取者秘平
丹覆取人部師
此白露介
敬感惜

秋七種 第六
露花



野草樓
出九郎

松本見門

松染情史秋七草卷之一

東都 曲亭馬琴編次

第一 芳宜に名る 鹿鳴草

都にも咲匂へども鹿の鳴く。名におふ草は秋の山里。と詠じけん。浮世の秋の憂になれて。いともかしこき十善の君だに。吉野の山居し給ひたる頃。南朝股肱の武臣なりける。楠左馬頭正儀は。正行が弟にて。正成が二郎なり。抑。河内判官橋正成は。楠正澄が嫡男にして。その先諸兄公より出たり。誠忠武略。古今に拔萃し。世に許されたる良將なれど。命運終に時を得ず。ゆく末の事などもよくしりて。延元のはじめの年。五月すゑの五かの日。弟正季等とともに。寇を防ぎ戦ひつゝ。攝州湊河の上にて。或は討ちつうたかたの。あはれ同胞處を去らず。腹かき切て死にければ。後醍醐の帝。いと惜ませ給ひて。正三位近衛の中將を贈給はり。攝。河。泉三州の太守たるべきよし。仰下されしかば。生残りたる親族等が。面目いへばさらなり。敵も自方も嘆賞せざるはなかりしとぞ。さる程に。正成が嫡子正行は。その志親に劣らず。ともかくもして。尊氏兄弟を討滅し。君父の仇を報んと。童ころより思ひたちたる。忠孝空しからずして。憂苦の中に成長。しばし足利の大軍と挑戦ひ。勝に乗らずといふことなし。しかれども。長汀船橋はりて。謀略用ひられず。世を形なくや思ひけん。南帝後村上院の。正平四年と聞えし。正月五日。左衛門尉兼河内守橋正行。その弟。右衛門尉橋正時。等。河内國河内郡。四條細手に師向ひ。京家の大敵と血戦して。敵影撃とりつ。自方も残り寡く撃れにけれど。なほ脱れなば脱るべかりしに。かへらじと。兼て思へば梓弓。なき數に在る。谷をぞとむむる。と詠たりし言の葉をいたづらにせじとてや。同胞終に討死す。實に北朝の貞和五年なり。かゝりし後は。二郎左衛門正儀のみ。正成が波なれば。君にもいと惜みのものに思食て。四位の左馬頭になされけり。この正儀は。その志父にも及ばねど。さすがは正成が子。正行が弟なれば。武略も凡常にはあらず。日本過半を敵にうけて。千劍破。赤坂の城を落されず。河内にはなほさるものありけり。と畿内の強敵も舌を振る程に。和田。恩地。湯淺。三輪の親族。正儀を佐て。足利の大軍を攻陣かし。文和のころは。新將軍義詮。京都を没落して。近江路に逃れ。北朝の帝。崇光院。光嚴。光明の兩上皇さへ。南軍に捕はれて。吉野へ遷り給ひし事。これ併ながら。楠正儀と。和田正武が勳功なり。しかれども後光嚴院。世を御して。足利の武威衰へず。蝸牛の角の争ひに。影の年を経て。南朝の正平廿四年。三月のころ。後村上院。崩御ましくけり。聖算四十三と聞えし。熙成皇子。吉野の宮に受禪ありて。これを後龜山院とぞまうしける。さて楠正儀は。この年來。種々の謀略をまうし行んとするに。動もすれば殿上人。生上達部の長僉議に阻へられ。遺恨やるかたなきに。今玆主上はみよし野の花の梢の雲かくれして。忽地崩給ひしかば。世ははやかう。と淺ましくて。南方衛護の志を變じ。老黨の諫も聽ず。子どもらにもしらせずして。しのびに。管領頼之に消息して。足利家へ降参すべきよし。誓書をもてまうし入れしかば。時の將軍。足利義滿。速かに許容ありて。右馬頭頼之。赤松判官等を。楠が赤阪の城へ遣さる。かくて。同年四月下旬に。正儀入洛し。まづ頼之が宿所に到て。歡を述べ。勸益了て。彼人に誘引れ。義滿將軍に見参して。龍尾といふ太刀を進らせしかば。義滿も殊に頼之に睦み聞えて。件の太刀を秘藏せらる。さてこの條は物語の發端にて。例の寓言のみにあらねど。正儀のこと。虚實おぼつかなし。しかれども。細々要記。櫻雲記。足利治亂記等に。正儀が足利家へ降参の事を載たり。嗚呼いかなれば。この人南朝棟梁の武臣にして。父と兄との遺訓を忘れ。二十年來の忠義を仇にして。仇人の前に腰を折め。親族これが

爲に。齒を切るをも影護とせず。世の人この故にあざみ笑ふをも。恥辱とせず。馳て赤坂の城に立歸り。絶て南朝の勅命に。應ぜざるこそ淺猿けれ。このとき正儀に子ども二人ありけり。嫡男は左衛門尉正勝と呼れ。二郎は河内守正元といへり。この同胞。父が足利家へ降参したるよしを聞いて。いたく恨み憤り。兄弟もろともに。父に引わかれて。千劍破の城に桶籠り。いよ、南朝へ忠を竭す程に。父子忽地に不和となりぬ。亦楠が一族たる。和田和泉介正武は。いぬる正平四年の春。正行とともに四條繩手にて討死したる。右衛門尉高家の弟にて。和田和泉守正遠が二男なり。件の正武は。武略の達者にて。双なき忠臣なりしかば。正儀が擧動。いと朽をしと怒り罵り。正勝。正元が。父とともに志を移して。足利家へ従はざるは。こよなき忠節にこそ。さすがは正成ぬしの孫なりけれ。と稱嘖し。緯の趣きを。吉野殿に聞えあげて。南帝の勅命を稟。正勝等とともに。影の軍兵を將て。赤坂の城へ推寄せ。息をも吻せず。攻る程に。正儀堪難て。京都へ援兵を乞しかば。山魚。葉竹山等。數千の兵をもて。赤坂の城に後詰し。合戦しばくなりけるに。正武。正勝が銚。銳して。正儀頭を出し得ず。和田は龍泉の城にあり。正勝。正元は千劍破の城にあり。正儀はその間に挟まれて。赤坂の城にあれば。常に左右に敵を受て。しだいしたることなく。只歩戦に光陰を過しつ。十三年をぞ經たりける。時に北朝の永徳元年夏の首より。正儀長き病着にうち臥し。秋に迄てもおこたらず。ひとり病の床に。來しかたゆく末のことを思ひやるにも。親同胞は南朝の忠臣にて。邦家の爲に命を傾し。名のみは朽ぬ。楠の家を續どもわが身かく。不肖にして緯みな及ばず。しかはあれ。弱官の昔より。身に鎧てみづから耕し。銚を植てみづから耘り。士を養ひ。兵を煉り。足利の大敵と戦ふ毎に。絶て一トたびも。不覺の敗を取らず。百戰百勝の計略を献るに。用ひられざるはわれのみかは。聖運の傾く所から及ばず。臣たるもの、道は竭しつ。今はこれまでなり。いてや足利將軍に伏従して。子孫に富貴を傳へんとて。君は三世。われ二代。共に天を戴ざる。讐敵に媚て。阿容々々と足利家へ降参せしは。わが生涯の誤なり。とばかりならて子ども

らは。親にまさりて義に勇み。孤忠を戴す賢さよ。家の濁を洗へとて。辨官どの証の神靈が。正勝。正元が身にそひてしかはからはし給ふにやあらんずらん。君に叛き。親に悖き。親族に恚らし。子ども等にあしく思はれて。われひとり僥倖を得たりとも。そのかひやはある。人誤あらざることなし。これを改むるに難からず。かく思へばとて。今さらに吉野殿へ参らんは面ぶせなり。せめては老の皺肚破て。少しは差をしりたり。と君にも思はれ奉り。子どもが面をおこさんには。と頻に思ひ定めてしが。父正成より正行へ相傳せし。軍學の秘書。櫻井の一軸は。年來受納めてこゝにあり。是を正勝。正元等に授與せずば。終に他人の物となりなん。さていかにして。子どもらに聞えしらし。家傳の兵書を遞與べきとて。とさまかうさま。尋思するに。正儀が舊の家藏に。雑居兵衛言直といふものありけり。往に正儀を諫かねて。和田正武に隨從し。年來龍泉の城にあれば。密にこれを招きよして。今般の一言を遺さんとして。心利たる兵士に。謀を説しらし。密書をもたして。雑居の宿所へぞ遣しける。件の兵衛言直は。楠譜代の郎黨にて。志信々しきものなるに。なぞて托庇の主を去て。和田正武に従ひたる。と審に縁故を尋れば。いぬる應安二年。南朝の正平二十四年。正儀志を轉へして。足利家へ降参せしころ。雑居兵衛これを歎き。面を犯して諫ることしばくなるに。正儀は露ばかりも用ひず。兵衛はいとゞいひがひなくおぼえて。終に身の暇をまうし給はり。妻子を將て。赤坂の城を出るとき。その僚友にいへりけるは。われ大殿の不義を諫め難て。千劍破の城に参る。郎君。正勝。に從ひ奉らば。その父を否して。その子に臣附す。これ義に于て。こゝろに快らず。龍泉石川郡。和田正武ぬしは。當家の一族にて在するなれば。直に彼殿へ参りて。緯の趣きを愁訴し。奉公すべう思ふなり。といふに。みな理にこそ。と回答つ。別を惜ざるはなかりける。かくて雑居兵衛は。龍泉の城に趣きて。城主正武に一五一十を訴しかば。正武聞て。正儀が不義を怒り。且兵衛が志を憐みて。叮嚀にこれを留め。俸祿舊の如く宛行ひしかば。兵衛は庇托の恩を感じ。忠勤を勵みつ。十年あまりを過しぬ。兵衛が妻を豊浦といひ。兒子染松は。父母が正武に参り仕へて

後に出来し子なれば。なほ幼稚に。その心さま親に似ず。奸智は年長たるかたにもたちまさりて。竊疾あり。奴僕等も生平に傍痛く思ひながら。主の愛子なれば。そのあしきをいふものなし。かよりし程に。南朝の天授六年。染松九歳なりける夏の季に。父兵衛は。おのが預たる軍要金に刻印し。錆たる錢の緋を更んとて。奥まりたる一室に。金錢夥を引散して。みづからこれを成り。用なきものゝ入ることを許さず。染松は彼金を見て。いく遍か。蘆籬のこなたよりさし覗けば。母豊浦。その袖を引て。あな鈍や染松。李の下に冠を正すなといふ。常言もあるものを。稚くともこゝろして。黄金あるほとりへは。たちも寄らざるものなり。といひ諭すに。面赧うして。物の蔭に躲れつ。且くありて。なほこりずまに。父がほとりへ歩みよるを。いたく叱られて走り出。その後は影も見せず。さても日も傾て。庭の樹だちに鳴く。寒蟬の聲あはたゞしげなるに。心いそしく。兵衛は金を數果て。箱へ納んとするに。圓金二枚足らず。こは不審。けふは終日。われみづから戌居て。染松が外に来つるものもなし。這奴が所爲にはあらぬ歟。と思ふから。豊浦染松はさらなり。閨宅の男女を呼び集合て。ひとり／＼にこれを問ども。元來しらざる事なれば。是かと思ふすがもあらず。とかく染松こそ疑しけれとて。さまざまに賺せども。頭をうち掉て。しらずといふを。わりなく引よして赤裸にしつ。帯も衣もうち振ふに。縫あげたる襟の端に。堅やかなるものありけり。やがて綻はして見るに。失たる金なり。こはいかに。とばかりに。父も母も呆れ惑ひ。奴婢等は面をあはしつ。傍痛きこと云限りなし。當下兵衛は。ものをもいはで。我子の頭髻を引擗て。膝のほとりに捻挫ぎ。瞪れる眼中に涙を含て。高やかに聲をふり立。汝いかにして。この金を盗みたる。明白に首状せよ。とくいはずや。といきまきて。扇の骨も摧よ。と背三ツ四ツ打懲らす。父の怒の理なれば。母親も禁得ず。奴婢等も暗話かねて。みな手に握る汗よりも。出てかへらぬ金ゆゑに。打懲されても染松は。二聲とは泣も叫ばず。爹々よ。さのみはいきまき給ふな。この金慾くは候ひしが。明白にまうすとも賜らじ。と思ひしかば。足の裏に飯粘を塗。引ちらしたる金を踏著て。只一枚を

盗しなり。ゆるし給へ。と勸解にければ。父はます／＼呆果。わが子を撲地と突退て。豊浦を見かへりつ。太やかなる息を吹き。日來染松が言行のあしきを見て。久後心もとなく思ひたるに。彼が邪智の長たること。かくまでならんとはしらざりし。召使ふものどもがおもはん程もいと面なし。楓の毒は。菌にあり。三年茄子は花に毒あり。世にあしき子をもつこと。親の業因なるべけれど。悪鳥は卵のうちなりとも養べからず。悪木は嫩なりとも植がたし。彼は年も月も日も。庚申にあたりし。五月五日に生れたり。いにしへより五月五日に生るゝ子は。父母を食ふといへり。又庚申の夜に有身れば。その子盗賊となるといふ俗説あれど。端午の節に生れたる子の善人なりし例多し。それにもよるべからざめれど。かゝる癖者を養はゞ。かならず大なる禍を惹出して。親さへ處せき事ありなし。覺期せよ。といひも果す。閃りと抜てふり揚る。双の下に母親は。吐嗟とばかり推隔。二つの袖を二子の楯となる身は惜からねど。聴いるべくもあらざりし。爹々に理ありながら。愛に引れて片羽なる。子を捨かぬるは世間の。なべての親の常ならずや。出来ごころといふことも侍れば。免しがたきを一とたびは。免すも親の慈悲ぞかし。浪速の浦を漕船の。あとなき童ごころより。嗜慾におのが身をつくし。およつても改めず。あしかる道に踏迷はば。そのたびは親の手づから。殺し給ふとも恨み侍らじ。五歳の春に痘瘡して。九歳の今茲まで。蚊氣もあらず風だにひかで。すくよかなれば又一ツ。缺ることある夜半の月。人に見られぬ越度なれば。助んとても助じとも。御心に侍るべし。猛きを生平の武士も。恩愛はしり給はめ。善惡につけてこの年來。良人の仰に悖らざりし。操も仇となればなれ。七去の一ツなりといふ。言舌多きも子ゆゑにこそ。聞わき給へ。とかき口説ば。奴婢等も。もろともに。さまざま諫こしらへけり。かくは兵衛も泣啣れて。勢ひ猛くふり揚たる。双は鞆におさめても。おさまりしらぬわが子のうへに。豊浦はとにも國府川を。歩渉するこゝちして。赤裸なる染松に。着よとてふはと投被る。愛にうらなき單衣。二重の帯を断齧が。引結ぶ間に父兵衛は。豊浦して四五兩の金と。系圖の横巻をとり來たらし。さて染松

をほとり近く呼びよしつゝ。袴の間に手をさし入れ。肘を張て。肩を高くし。にらまへたる眼に涙を浮め。寔に。人の親の。こゝろは烏夜にあらねども。子を思ふ道に迷はこそ。汝が母は深くも歎げけ。われも又子の可愛を。しらざるにはあらねど。教へがたきをいかにせん。身の中の腐れは。はやく剷除されば。餘毒骨髓に及ぶべし。されば今日より。親にあらず子にあらず。足の向たらん方へ赴けかし。助がたき命を助得さするは。親の私にして免がたき罪を逼て。追放は公の道なり。汝が盗たる金は。僅に二枚なれど。殿の軍要金なれば。その罪私には免しがたし。かくは汝。一旦念をかけたれば。わが私の金をもて一倍し。離別の裏にとらすなり。又此錦の囊に納たるは。家の系圖なり。わが年もくれ竹の。よそぢにあまれど杖とし頼む。子を捐てはありてかひなき。誰にか系圖を傳へ。孰にかこの家を繼せん。雑居の家名の絶んこと。歎くにもなほあまりあり。よりにこの一軸を。目今汝に授るなり。もし露ばかりも。人たるかひに。親の心をしることあらば。志ざしを更めて。情ある人に便り。身を立。家を興せかし。といひ諭して。件の金と巻軸を。わが子のほとりにさし着れば。聞にも絶ず母親の。拭ふ涙と押す痞に。手の舞しらぬ愁傷を。染松は見かへりながら。羞たる氣色もなくて。金と巻軸を懐に挟め。つと立あがりて外面へ。出んとするを母豊浦は。忙はしく引留め。やよやまで染松。自の誤をしるならば。なぞて爹をへ勸解ざりける。惡に剛きは善にも剛し。と世の常言にいふものを。張ある心を露ばかりも。善道に用ひなば。かゝる歎を親にはさせじ。けふより何處を宿として。何人が艱を受んと思ふ。心づよきもことによる。あしき所爲には才闕ても。疼し難しもまだしらぬ。仮子にてありけるなり。勸解せよかし。と引居れば。兵衛はこれを見て冷笑ひ。彼世俗の常言に。惡に剛きもの。又善に剛しといへど。こはこゝろえがたき語にこそ。夫善人は惡をなさず。惡人いかて善を植ん。されば且に惡事を計較て。夕に善心を發すものあらば。善も善ならず。惡も惡ならず。かく理にそむける語を口説て。子を教ふるは教へざるにしかじ。こはわが妻には似げなからん。幾舜の子も聖人にあらず。盜跖が父。豈賊ならんや。

その性のおもむく所。一寸の戯すら五分の魂あり。彼が目今の舉動を見て。いよゝ恩愛の霧は織たり。もしこれをしも忍ぶべくば。孰をか忍ばざる。ものども這奴を追出せ。といきまきあらくいそがすにぞ。豊浦はとどむるよしなきて。よゝと泣つゝ伏沈めば。染松は母の顔を。つくづくとさし覗き。母御いたくな泣給ひそ。叱らるゝがうるさくば。とく出てこなたへ坐せ。金銀珠玉いへばさらなり。よき衣どもを盗みとりて。おん身一人は染松が。いと安らかに養ふべし。どほこりがにいふ子より。いはるゝ母は淺猿く。父も呆れて口を鉗み。奴婢どもは舌を巻て。頻に驚き恐れしかば。染松うち腹たちて。噫汝等は物食ふ木偶なりけり。この家を出はなるゝまでは。われも又主ならずや。いはれずともこゝろ利して。わが弄物などは残りなく袱に包み入れ。夕餐の割籠準備して。跡より追着き。今宵の宿までは送れかし。夏の入り日は堪がたきものぞ。菅笠をとくもて來よ。板金剛の端緒を見よ。と是彼を罵りつゝ。袖うち拂て出ゆきぬ。寔なるかな。樹を枯らす蟲は樹より生じ。身を亡す劍は。こゝろより劍ふ。夫孝は親を慕ふに成り。忠は恩を知るに成る。世の童子等。善を見てはこれに及ばん事を願ひ。惡を見てはこれに似ざらんことを思ひ。才學を後にして。親切に習ひ務め。忠孝の道にわけ入り。信義の林に遊ぶべし。五刑の罪犯。不孝より大なるはなし。一世の暴惡。盜賊より甚しきはなし。只懼ても恐るべきは。人慾の私なり。かくて雑居染松は。膽太くも親の家を追出されて憂とせず。龍泉の城より。遙に東のかたなる。本見ぬ山内なるの麓に到りて。ふりたる山神の廟を寢坐とし。晝は終日。路ゆく人の袖に携て。錢を乞。あるときは里に出て求食る程に。人みな彼が稚きに欺かれ。是を憐て物うしなふも多かり。さる程に兵衛が妻豊浦は。その年の八月より。月水常ならず。またく懐胎しつらん。とわれも思ひ。人もしかいふほどになりぬ。一子なれど。竊疾あるに見かぎり果て。染松を追出しつ。この七八年は。絶て有身氣色なかりしに。又めづらかにも。子を産すること。天いまだ雑居の家を滅し給はずとて。夫の歡び大かたならねど。豊浦はやるかたなき物おもひに。身さへおもくなりては。生死のほどもいと憑み寡くて。

心ほそさも彌ましぬ。

第二 芳宜に稱る 濃染草

花咲ば。つれなき人もこそめ草。色に愛つゝ。けふやとはまし。この古歌は。雜居兵衛が。故主正儀の消息を得て。今の主なる正武に疑はれ。身のおき所なくなりぬるに。こゝろ詞もよく稱へり。康曆天授もはや暮て。次の年北朝には。永徳と改元あり。南朝にても年號を。弘和となん改め給ふ。今茲五月の下旬に。兵衛が妻豊浦は。産の氣つきて。やゝ生れたるは女子なれど。七夜をも經ずして死にければ。母の悲み。父の本意なさ。比へんにものなかるべし。されど豊浦は。血暈もなく。すくよかに肥立ほどに。ありてかひなき乳房のみ。いとあやにくに張るも悔しく。思ひ出ては乾もあへぬ。袖もろともに絞り捨る。嗽口茶碗の唇手も。降八專に五墓十死。死出の旅だちよしと啼く。古巢空しき鳥の聲。子には縁なき歎なり。かゝる折から主君正武の夫人。俄頃(に)に身まかり給ひて。今茲三歳になり給ふ。姫君ひとかた。みまそかりける。しかるに乳母さへ勞ることありて。乳房細やかになりつ。この姫君は。秋野と呼れて。千劍破の城主楠正勝の弟。河内守正元の一子。操丸に妻せんとて。襦袢の中より結髪ありしかば。正武ふかく愛慈しみ。幼少きものに。瘦たる乳頭を舐らしおかば。忽地飢も渴もさして。病わづらふを俟に似たり。とく乳母を養よとて。彼此に索るに。戰國の時なれば。さる給事のものも。頼にはあらず。雜居兵衛が妻。近曾子を産て。子はなくなりたれど。乳汁は凡常より太し。これ召さるべうもや。とまうすものゝあるによりて。正武やがて兵衛を招きよして。叮嚀に辭の趣を聞えしらし。しばし汝が妻をもて。秋野姫が餓を救へかし。と宣するに。兵衛はこれをつけ給はり。家に退りて。豊浦に主君の仰を告しらし。俄頃(に)に給事の準備などするに。豊浦はこゝろすゝまねど。火急の召に辭後(に)は。參るともそのかひなし。といそがされ。よろづその用意して。物やうやく整ぬ。

當下兵衛は。豊浦に對ひて。われとおん身と家(に)ありては。夫婦なれど。君に仕るに及びては。おのゝ管(の)所(の)あり。去年の夏追出せし。染松が事はさらにもいはず。わがうへをもて念とせず。夙に夜に。こゝろを用ひて。秋野姫の養育を。忽(に)になし給ひそ。彼姫君は。母御前おはしまさず。成長給ふ後は。楠どのへ參り給ふなるに。あしう孚みまゐらせなば。大なる不忠なり。さきんゝの人のうへにも。女はあはしくしきに心して。他をも猶まず猶まれず。われを笑し給ふな。といひ諭せしかば。豊浦は參り仕ふるその日より。言行に慎みふかく。器は十二分の水をもちて。これを溢さじともたるが如く。他事なく孚み進らす程に。秋野姫も。はや馴したしみて。豊浦がほとりに片時をらても。いといたうむつかり給ふ。面影の何となく。襦袢の中に死たりし。わが女兒に似たまひたるも。過世あやしく思ふから。信々(と)さも彌ましつ。正武はこの形勢を見て。深く歡び。稚兒と病人は。介抱に手のとどくと。とどかざるとにて。よくもあしくもなるものなり。寔にわが女兒は。よき乳母を得たりとて。只管賞美せらるゝ程に。雜居兵衛は。いと面目におぼえつゝ。頃しも八月朔日。田實の慶賀をまうし果て退きしかば。廐を預る奴隷が。出居のかたに參りてまうすやう。只今いと怪しげなる男。この書函めきたるもの懐にし。僕が秣を乾たるほとりに來て。これ主人に進らし候へ。といひかけて。さし出すを。何心なく把とやがて。件の男は。かき消やうに失たり。これ鬪せ。とまうしつゝ。縁頼におきぬ。兵衛聞て眉根をよせ。いく重ともなく上裏したる。澁帯を切ときて。やう／＼に蓋を開け。内に一封の手書ありて。雜居兵衛どのへ。正儀と寫したれば。こはいかに。と心驚き。忙はしく蓋を舊の如くにして。便室に走り入り。障子立こめて。封皮をおし剪。しのびやかにこれを讀に。われ才淺く。慮足らずして。君をうらみ奉り。父の遺命に悖りて。足利家へ降參したる。年來の誤を省れば。いと面なし。天の責脱れがたくて。長き病着にうち臥し。日に／＼身の衰をおほゆるに。痛て死なんことの本意ならねば。今一たび汝に對面して。後の事なども頼み聞え。家傳の兵書櫻井の巻軸を。正勝。正元等に贈遺はして。自殺せばやと思

ふなり。伍員死して吳王滅び。范蠡去て閩越荒む。悔らくは汝が諫を用ひず。深く心に羞る事あり。もし舊恩空からずして。生前に見臨ことを得ば。幸甚しからん。とぞ書たりける。兵衛はこれを讀かへしつゝ。坐に落涙し。さては左典廐。正儀 十三年の非を悔て。今般の一言を遺さんとて招き給ふに。いかでかはゆかざらん。しかれども。この事館へ。下みなこれに倣へ。明白に聞え奉りては。許し給はじ。さればとて。潜てゆかんは影護し。とせんかくせんと。と心ひとつに思ひかねて。胸苦しくぞ日を過しぬ。この時赤坂の城には。楠左馬頭正儀。病苦日にましてこゝち死ぬ可く覺えしが。頃日雜居兵衛消息して。彼を招きよし。家傳の兵書を附屬して。正勝。正元に。今般の志をしらせまほしく。人にしのびてこれを待ほどに。八月もはや半たてども。兵衛は音耗だにせざりしかば。今はとて思ひたえ。有一日。百濟右衛門太郎義包といふ近臣。只ひとり侍を。枕元近く招きつゝ。岸破と起て。たのみすくなき息を吹き。扱ふやう。汝は童だちより召使て。心さまよくしりたれば。われ頻に先非を悔て。自殺せんと思ひ定めたる。事の趣は。曩に聞え知せしかば。今亦審にはいはず。拙き筆にも誠を告て。雜居兵衛を呼ぶといへども。けふまで來ざるは。われを疎むことの深ければにや。もししからずば。正武に洩聞えんか。と咄むならめ。この曉の寢覺に聞きし。初雁が音も他に過て。只一枚の回報だにせぬ。強顔人をそらだのめして。待もわびたるかひぞなき。わが命旦夕に迫りぬ。よりに目今。腹を切らんずるぞ。汝はものゝまぎれに逐電し。縁を求めて。千劍破なる。正勝に奉公し。折をうかゞひて。わが遺言を告知らし。櫻井の兵書を受誦せよかし。汝はわが南朝に叛き奉りて。後に參り仕しものなれば。正勝兄弟も。和田主従も。認らじと思ふなり。家諱多かる中に。年こそなほ弱けれ。かゝる大事を托ねんもの。汝が外にはなし。よく意を得よかし。と叮嚀に聞えつゝ。枕の邊りに秘おきし。軍術奥妙。櫻井の巻軸を。錦の囊に納たるまゝ遞與せしかば。右衛門太郎はこれを全手に受捧て。頻に感涙を拭ひあへず。御遺言の趣は。うけ給はり候ひつ。しかりとも自殺し給ひて。世に益あるにも候はず。願くは自愛して。いよ、醫藥を加へ。ふたゝび吉野殿へ參り給はゞ。その御存念は果さるべし。今さら死をいそぎ給ふことかは。と諫むれば。正儀頭をうち擲て。いな／＼しからず。われ今足利家に叛きて。又南朝に仕へなば。忠にもあらず。義にもあらで。いよ世の胡慮となりなん。さればとて。身の誤を悔ながら。此まゝに病死なば。誰かは最期の志をせるべき。この城中には。山魚氏清が兵士もあり。われ死なば。氏清みづから來て守らん歟。汝はいちちはやく走り去りて。山魚が徒に怪しめられな。といひも果す。枕上なる刀を抜て。病歟みたる。脚へ。刀尖二寸ばかり突立て。右手のかたへ引繞らし。とく／＼首を刎よといふに。右衛門太郎は立もあがらず。保元のむかし。朝敵にて討れ給へども。正儀延景は。六條の判官を介錯せず。いかに宣はするとも。このみはゆるし給へかし。と推辭つゝ。落る涙の玉の緒を。繋ぎとめ得ぬ哀傷に。繋ぎき氣色なかりしかば。正儀いよ焦燥て。あらむづかし。と取りなほす。双を襟に推かつぎ。諸手をかけてわれとわが。頸かき落して臥たりける。勇士の最期ぞめざましき。右衛門太郎義包は。主の遺命を仇にせじとて。はふり落る涙を押し拭ひ。慌たるおもゝちして外面へ走出。近從の徒に斯と告しかば。衆皆大にうち駭き。是彼その所により集合。呆果てゝせんすべをしらず。正儀の夫人は世を早くし。嫡子正勝。二郎正元は。父と不和にて。十三箇年來。胡越の如くなれば。家諱は。互に疑ひて。罵りあひ。以の外に騒動す。緯の紛れに義包は。後門より走り出。小深といふ里に。些の由縁あれば。彼處に隱家を索め。千劍破の城へ參り仕ふる。よすがもがなとて。頻に肺肝を推きける。ともしらずして雜居兵衛は。故主正儀の消息を得てしより。はや十日あまりを過せしかば。心のみ焦燥て。終に後難を省ず。遠乗すといひこしらへ。朝とく城を出て。只一騎。赤坂に程近き。菩提寺といふ古寺に遊山し。割籠を開くに湯を乞んとて。厨裏のかたをさし覗き。生道心等兩三人。落栗の虫を擇わきて。地坑の灰へ埋めつゝ。うち晤ふを聞くに。一人がいふやう。赤坂の城主楠正儀ぬし。久しく病臥して坐せしが。病苦にや堪ざりけん。俄頃物くるはしくなりて。きのふ自殺し給ひぬ。よりに葉竹山の老臣。譽高何がしが。

へ。ふたゝび吉野殿へ參り給はゞ。その御存念は果さるべし。今さら死をいそぎ給ふことかは。と諫むれば。正儀頭をうち擲て。いな／＼しからず。われ今足利家に叛きて。又南朝に仕へなば。忠にもあらず。義にもあらで。いよ世の胡慮となりなん。さればとて。身の誤を悔ながら。此まゝに病死なば。誰かは最期の志をせるべき。この城中には。山魚氏清が兵士もあり。われ死なば。氏清みづから來て守らん歟。汝はいちちはやく走り去りて。山魚が徒に怪しめられな。といひも果す。枕上なる刀を抜て。病歟みたる。脚へ。刀尖二寸ばかり突立て。右手のかたへ引繞らし。とく／＼首を刎よといふに。右衛門太郎は立もあがらず。保元のむかし。朝敵にて討れ給へども。正儀延景は。六條の判官を介錯せず。いかに宣はするとも。このみはゆるし給へかし。と推辭つゝ。落る涙の玉の緒を。繋ぎとめ得ぬ哀傷に。繋ぎき氣色なかりしかば。正儀いよ焦燥て。あらむづかし。と取りなほす。双を襟に推かつぎ。諸手をかけてわれとわが。頸かき落して臥たりける。勇士の最期ぞめざましき。右衛門太郎義包は。主の遺命を仇にせじとて。はふり落る涙を押し拭ひ。慌たるおもゝちして外面へ走出。近從の徒に斯と告しかば。衆皆大にうち駭き。是彼その所により集合。呆果てゝせんすべをしらず。正儀の夫人は世を早くし。嫡子正勝。二郎正元は。父と不和にて。十三箇年來。胡越の如くなれば。家諱は。互に疑ひて。罵りあひ。以の外に騒動す。緯の紛れに義包は。後門より走り出。小深といふ里に。些の由縁あれば。彼處に隱家を索め。千劍破の城へ參り仕ふる。よすがもがなとて。頻に肺肝を推きける。ともしらずして雜居兵衛は。故主正儀の消息を得てしより。はや十日あまりを過せしかば。心のみ焦燥て。終に後難を省ず。遠乗すといひこしらへ。朝とく城を出て。只一騎。赤坂に程近き。菩提寺といふ古寺に遊山し。割籠を開くに湯を乞んとて。厨裏のかたをさし覗き。生道心等兩三人。落栗の虫を擇わきて。地坑の灰へ埋めつゝ。うち晤ふを聞くに。一人がいふやう。赤坂の城主楠正儀ぬし。久しく病臥して坐せしが。病苦にや堪ざりけん。俄頃物くるはしくなりて。きのふ自殺し給ひぬ。よりに葉竹山の老臣。譽高何がしが。

交野の城より来て。赤坂を守るとなん。いまだ世に披露せざるは。彼人をまてはなるべし。といふに。又一人がいふ。それは虚説なり。交野は道も遙けし。年來古市に在陣し給ふ。山魚氏清。夥の軍兵を將て。翌は入城し給ふとぞ。豊高などが分際にて。千劍破。龍泉兩城の剛敵を押んことは。心もとなし。氏清の來給ふよしは。理に稱へり。といふを。雜居兵衛は計らずも竊聞て。こゝろ驚き。さればこそ。辞後れて。わが志は仇となりたれ。詐謀て。その虚實をしらばやとて。咳して裡に入り。近村の郷士が。追鳥狩に出たる體にもてなし。湯を乞。割籠を開きつ。件の事を問に。法師ばらは。和田。楠が間諜者なるべし。と猜して。みなしらず。といふにせんすべなく。なほうちとけて。四表八表の物がたりなどするに。再て問んよすがもなければ。辭し別れて。門前に走り出。つくくんと尋思するに。所詮今夜。赤坂の城に赴き。白地にこれを開べし。しかれども。彼城には故僚友も夥あり。とやいはん。かくや問ん。としばし躊躇て。忽地にひとり點頭。閃りと馬にうち跨つ。赤坂の城を投て走らすに。秋の日なれば短くて。はや途にて日は暮たり。月は出ながら天結陰て。人に潜ぶには便よし。と鞭を鳴らし風に追し。三歳駒の尾花毛に。戦ぐ草葉の露を拂はし。酉の比及に。城の溝際へ跨着て。前面を信と見れば。門扇を固く鎖したり。當下兵衛は聲をふり立。城中に物まうさん。誰そ出給へ。と呼ばれば。遠見の兵士櫓より。何處の使者なりや。と問に。兵衛答て。是は古市の氏清ぬしより。まうしこざるゝ事ありて來れり。如法夜のことなれば。門を開き給ふに及ばず。こゝより聞え候ひなん。老だちたる黨。一兩人出給へといふ。且くして右邊なる物見の窓を押開かし。老兵二人。たち出てさし招けば。雜居兵衛は。やがて馬を近く寄て。老兵等に對ひ。左典廐自殺のこと。驚き思ふ所なり。この人年來秘藏し給ふ。正成。正行相傳の兵書。櫻井の一軸は。足利殿もよくしり給ひつ。かゝる時。もし紛失せば。いと惜むべき事ならずや。まづ櫻井の巻軸を。こなたへ返與給へ。氏清翌はかならず。入城すべしとなり。主命かくの如しとぞ欺きける。老兵等はこれを開て。頬に頭を掻き。寔にその事なり。件の兵書は。正儀病臥ても身

をはなさざりけるに。死後に見ればさるものなし。しかるに百濟右衛門太郎義包といふもの。きのふ逐電してその往方定かならず。おもふに彼の盗とりて。逃失たるにこそ。といふに。兵衛はいよゝ望を失ひ。なほ是彼に間に。偽るとも聞えず。いとぞせんすべなかりしかば。又いふやう。氏清かくあるべしとおもひ給ひしかば。今夜俄頃に某を遣して。その事をいはし給ふに。既に兵書紛失したり。とまうさば。いと本意なくぞおぼすべき。おのゝよく守り給へ。といひ果て。轡つらを引かへし。ふたゝび馬の足搔をはやめつ。夜すがら馳て龍泉の城近くなる隨に。天はほのゝと明にけり。浩處に前面より。物あまた馬に負し。みづからも脊負などして。五七人の男出來れり。間ちかくなりて。つら／＼これを見るに。みな兵衛が奴僕どもなりければ。互にこはいかに。と驚き惑ひ。兵衛まづその緣故を問へば。衆皆馬を牽居。負たるものを扛おろしつ。まうすやう。殿にはいまだしろしめさざるべし。昨夕しのびて赤坂の城へ赴き給ひたる事を。館にはよくしり給ひて。おん憤り甚だしく。雜居は原來正儀が家隸なるに。彼今潜びて赤坂に交加する事。いと怪し。こは敵に内應せんとてなるべし。しかれば親族妻子一人も残さず首をきりかけて。敵の膽を拉しくべけれど。兵衛が妻豊浦は。心さま夫に似ず。よろづ信やかなるものにして。秋野姫が乳母たり。彼なくては。わが女兒を孕みがたし。これを面に親て。兵衛が奴僕どもを追遣らひ。主従が調度は。悉くとらせよ。と仰せしよしにて。吾儕はからき命を助られ。驍方に城を追ひ出されて。只今こゝへ來れるなり。館には。常に上下の赤坂へ間諜者を遣して。城中の爲體を窺はし給ふとぞ。かゝれば昨夕の景迹を。間諜者が窺て。殿より先へ走り歸り。審に訴へまうせしなるべし。もし虚々と歸り給はゞ。忽地醜にせられ給ひなん。とく脱去り給ひね。と信だちて告にければ。兵衛はこれを聞もあへず。只管に呆果て。しばしが程は回答も得せず。心の中に思ふやう。縦故主に招かるゝとも。館へ告奉らて。後くらき舉動したれば。疑るゝも理なり。かくは左典廐自殺し給ひて。その臨終にあはず。櫻井の兵書さへ失たりといへば。立歸りていひとくとも。實事とし給ふべから

ず。されど。正武智勇の良將にて在せば。一時の怒に乘して。わが妻子を殺し給はず。奴僕どもを追放て。主従が調度に至るまで。とらし給へる情ふかさよ。豊浦は身の幸ありて。幼少き姫君の乳母に参りたれば。彼のみ城に留りぬるこそ。わが恨を勸解奉るよすがともなるべけれ。一旦主の怒を避て。何地へなりとも身を躲し。時を待んには。と深念し。さて奴僕等にいふやう。わが赤坂の城へ赴きたるには故ある事にて。あしきすぢにはあらねど。釋明白には云解がたし。よしやいひ解得て。聽さるゝとも。主に疑れては。よろづに影護て。傍難を脱れ得じ。とおもへば汝等が諫に隨ひて。身の住處を索めなん。わが懐に些の金あれば。その調度なんどは。おのゝわかちとり。それを路費として故郷へ歸れかし。と叮嚀に説示せば。みな頻に歎息し。世に厄難といふことなくば。善人の思ひ屈むことは候はじ。殿の誠忠を誰かはしらざらん。日來は人に稱讚られ給ひたるに。かくも俄頃。世間の狭くなりもてゆき給ふ。縁故はしり候はねど。こは厄難にこそ坐すらめ。流浪し給ひては。よろづ便なかるべし。せめて衣服のみなりとも。齎し給へ。といふに。兵衛は頻に賞歎し。主の凋落に物をとりて。自の僥倖を求るは。なへての人の私しなるに。汝等はさもなく。かゝる時にも主を思ふ。志は歎ばしけれど。われ今その調度どもを。悉く身に著るとも。一生坐して食ふにもあらず。とくもてゆけかし。といひ諭せば。奴僕どもは。いよゝ感涙を拭ひつゝ。主従遂に東西に立わかれ。おのがさまなくになりけり。次の日。千劍破。龍泉の兩城へ。正儀自殺の事聞えしかば。正勝。正元は。忠義に仗てこの年來。父と不和にはなりけれど。その凶音を聞て。今さらに驚ろき歎き。しのびく僧を招きて讀經さし。追善形の如くとり行ひぬ。當下。和田正武は。千劍破の城に來到て。正勝等に雑居が事を告しらし。正儀件の兵衛に。内應さしたる奸計を。われに曉得られ。物狂しさに自殺したる歎。只惜むべきは。櫻井の兵書なりといふに。正勝。正元も。父祖相傳の秘書なるに。これを敵にとらせんは。いと朽をし。速に赤坂の城を攻落して。櫻井の一軸をとり復すべし。といきまきながら。氏清多勢にて。彼城へ籠りたれば。それも意に任せず。物お

もふ身はこゝのみならず。豊浦は子を棄。夫に捨られ。悲歎やるかたなけれども。思ふ程には得も泣かず。給事を化にはせじ。傍の人に笑はれじと。志を勵しつゝ。憂ともいはて憂に堪ぬ。忠信節義は婦女子に。稀なる日本だましひなり。

第三 芒花に喚なす 敷浪草

水はなし風こそはたて。波はたゞ。敷浪草に露ぞこぼるゝ。げにや波風しくめる世間。人のこゝろ定かならで。きのふの自分も。けふは忽地に仇となるから。もし赤坂の城兵等が。心變りして。南朝へ参ることもや。と危みて。山魚氏清は。俄頃古市を進發して。赤坂の城を守り。城兵等を慰問して。正儀の亡骸を葬らしなどするに。老兵等は。おそるゝ。氏清にまうすやう。昨夜使者をもて。楠氏相傳の兵書。櫻井の一軸を。進らせよ。と宣はせしが。件の兵書は。正儀自殺のとき。既に紛失せり。思ふに。近臣百濟右衛門太郎が盗とつて。逐電したるなるべし。緯の趣は。審に聞食てぞ在すべき。とみな信だちて聞えあぐれば。氏清聞て。眉を顰め。あら意も得ぬ。われ昨夜家録して。件の兵書を求めたることなし。そのものいかなる打扮して來つる。年の齡はいくつばかりにてありし。と問ふに。老兵もまた疑ひ惑ひ。彼人内へ入らざりしかば。楚とは見とめ候はねど。尾花毛の馬に乗りて。主は狩倉の打扮しつ。從者をも俱せず。只一騎。手には濕藤の弓を握太なるを挟み。背には獵箭を負て。腰には麋鹿の行際をせり。その聲音を聞くに。年の齡。四十あまりにやあらんずらん。物のいひざま。耳熟たる人の如くなりし。といふに。氏清いよ。怪みて。しばし沈吟し。そは千劍破の城の間者ならずば。かならず和田正武が家録ならん。彼が城中へ入らざりしは。認れるものゝあらんかとてなり。しからば右衛門太郎とやらんが。櫻井の一軸を盗み去たるも。豫て正勝兄弟。和田正武に。志をよしたるにこそあんなれ。おのゝ油断すべからず。と説諭して。頻に驚嘆し。やがて諸方の手配

して。みづから城中をうち巡り。交野の城を守るなる。譽高へ謀しあはし。防禦等閑ならざりけり。話分兩頭。ここに百濟右衛門太郎義包は。主君正儀の遺命によつて。櫻井の巻軸を懐にし。赤坂の城中を脱出。小深の山里に宿を投め。笠を深くして。をりゝ千劍破の城下に赴き。正勝へ奉公すべき。縁を求るの外他事なし。かくて十月某日。正儀の放光忌には。正勝。正元しのびやかに。城外なる香花院に詣て。忘父の追薦。叮嚀に修行す。と聞えしかば。右衛門太郎は竊に歡び。この日いかにもして正勝に咫尺し。馬の尾筒に携りても。君臣の義を締び。亡君の遺命を告奉らてやは。と只管に思ひ定め。太刀衣裳なども。この日を晴と打扮つゝ。朝まだきに旅宿をたち出。件の寺に來到。大門の邊りを徘徊し。今かゝとまつ程に。はや未下剋になりけれど。正勝も正元も詣來給はず。親ながら正儀は。南朝のおん敵となり給ひしかば。後聞を憚りて。參詣し給はぬにや。とおもふに。いとど本意なし。とかくする程に。冬の日の短く。歸れとて撞にあらねど。山寺の鐘の音も。われには心なきに似たり。いざ退るらん子なくらん。その子の母に待るゝ身ならで。只ひとりなる僞居も。おなじ臥座の夕鳥。もの思ふにぞつくゝと。天うち仰て立在ぬ。さてもあるべきにあらねば。右衛門太郎は。編笠ふかくして小深へとて立歸るに。本見ぬ山の麓まで來にけり。頃しも冬の初なれば。しぐれがちなる雨もよひに。翠微より雲を吐て。風さへ俄頃吹變り。まだ暮ねどもいと闇くなりて。さと降そゝぐ驟雨に。憑む木の下も落葉して。笠やどりせんかたもあらねば。兩の袖を巻揚つ。袴の稜高くとりて。直走にはしる程に。風雨ますゝ烈しくて。笠は戴たるまゝに。臺輪のみを残して。往方もしらず吹斷離られ。水田を渉る鼠の如く。尾を引頭を抱へ。苛うじて山ふところなる。禿倉の内へ走り入り。一息吐とつきて。雨水したゝる。鬘の毛を搔揚げ。項に被たる櫻井の巻軸を濡ざじとて。やをら襟をかきわきて。まづ鰐口の緒に著たる。布もて濡手を拭拭ひ。しづかに巻軸の紐をとり外しつゝ見るに。錦の囊は濕りたれば。内までは徹らじ。とおぼしきに。安堵て。そのまゝ傍なる繪馬の釘に掛おき。裙も袂も枯み揚て。水の垂る程は。いく度となく絞り

第三 芒花に喚なす 敷浪草

水はなし風こそはたて。波はたゞ。敷浪草に露ぞこぼる。げにや波風しくめる世間。人のこゝろ定かならで。きのふの自方も。けふは忽地に仇となるから。もし赤坂の城兵等が。心變りして。南朝へ参ることもや。と危みて。山魚氏清は。俄頃に古市を進發して。赤坂の城を守り。城兵等を慰問して。正儀の亡骸を葬らしなどするに。老兵等は。おそる。氏清にまうすやう。昨夜使者をもて。楠氏相傳の兵書。櫻井の一軸を。進らせよ。と宣はせしが。件の兵書は。正儀自殺のとき。既に紛失せり。思ふに。近臣百濟右衛門太郎が盗つて。逐電したるなるべし。緯の趣は。審に聞食てぞ在すべき。とみな信だちて聞えあぐれば。氏清聞て。眉を擡め。あら意も得ぬ。われ前夜家諱して。件の兵書を求めたることなし。そのものいかなる打扮して來つる。年の齡はいくつばかりにてありし。と問ふに。老兵もまた疑ひ惑ひ。彼人内へ入らざりしかば。楚とは見とめ候はねど。尾花毛の馬に乗りて。主は狩倉の打扮しつ。從者をも俱せず。只一騎。手には濕藤の弓を握太なるを挟み。背には獵箭を負て。腰には麋鹿の行藤をせり。その聲音を聞くに。年の齡。四十あまりにやあらんずらん。物のいひざま。耳熟たる人の如くなりし。といふに。氏清いよ。怪みて。しばし沈吟し。そは千劍破の城の間者ならずば。かならず和田正武が家諱ならん。彼が城中へ入らざりしは。認れるものゝあらんかとなり。しからば右衛門太郎とやらんが。櫻井の一軸を盗み去たるも。豫て正勝兄弟。和田正武に。志をよしたるにこそあんなれ。おのゝ油斷すべからず。と説諭して。頻に驚嘆し。やがて諸方の手配

して。みづから城中をうち巡り。交野の城を守るなる。譽高へ謀しあはし。防禦等閑ならざりけり。話分、兩頭。ここに百濟右衛門太郎義包は。主君正儀の遺命によつて。櫻井の巻軸を懐にし。赤坂の城中を脱出。小深の山里に宿を投め。笠を深くして。をりく千劍破の城下へ赴き。正勝へ奉公すべき。縁を求るの外他事なし。かくて十月某日。正儀の放光忌には。正勝。正元しのびやかに。城外なる香花院に詣て。忘父の追薦。叮嚀に修行す。と聞えしかば。右衛門太郎は竊に歡び。この日いかにもして正勝に咫尺し。馬の尾筒に携りても。君臣の義を締び。亡君の遺命を告奉らでやは。と只管に思ひ定め。太刀衣裳なども。この日を晴と打扮つ。朝まだきに旅宿をたち出。件の寺に來到。大門の邊りを徘徊し。今かくとまつ程に。はや未下剋になりけれど。正勝も正元も詣來給はず。親ながら正儀は。南朝のおん敵となり給ひしかば。後聞を憚りて。參詣し給はぬにや。とおもふに。いと本意なし。とかくする程に。冬の日の短く。歸れとて撞にあらねど。山寺の鐘の音も。われには心なきに似たり。いざ退るらん子なくらん。その子の母に待るゝ身ならで。只ひとりなる僑居も。おなじ臥座の夕鳥。もの思ふにぞつくくと。天うち仰て立在ぬ。さてもあるべきにあらねば。右衛門太郎は。編笠ふかくして小深へとて立歸るに。本見ぬ山の麓まで來にけり。頃しも冬の初なれば。しぐれがちなる雨もよひに。翠微より雲を吐て。風さへ俄頃に吹變り。まだ暮ねどもいと闇くなりて。さと降そぐ驟雨に。憑む木の下も落葉して。笠やどりせんかたもあらねば。兩の袖を巻揚つ。袴の稜高くとりて。直走にはしる程に。風雨ますく烈しくて。笠は戴たるまゝに。臺輪のみを残して。往方もしらず吹斷離られ。水田を渉る鼠の如く。尾を引頭を抱へ。背うじて山ふところなる。禿倉の内へ走り入り。一息吐とつきて。雨水したる。鬘の毛を掻揚げ。項に被たる櫻井の巻軸を濡さじとて。やをら襟をかきわきて。まづ鱧口の緒に著たる。布もて濡手を拭拭ひ。しづかに巻軸の紐をとり外しつゝ見るに。錦の囊は濡りたれば。内までは徹らじ。とおぼしきに。安堵て。そのまゝ傍なる繪馬の釘に掛おき。裙も袂も枯み揚て。水の垂る程は。いく度となく絞り

捨るに。寒さは年の終よりも堪がたけれど。人けなき深山邊の古祠には。神燈たてまつるものもなく。日はいたづらに暮果て。雨の脚もやゝ細やかになりぬ。誰かしらん。この禿倉は染松が寢坐にて。已前より社壇の背にて。絆のやうを張ひつゝ竊に歡び。われ去年の夏。父兵衛に勘當せられ。こゝに夥の月日を送り。里に求食。野に遊び。些の物を獲て。おのがまゝに生育ども。友垣むすばねば人もしらず。しかるに彼武士が。項より外して壁に掛たるは。金ならずしてそもなぞや。もしこれを奪ひとらば。四五十日の擗了にますべし。果報は寢てまてといふ常言も。かゝる事こそ。とひとり點頭。右衛門太郎が濡たる衣を絞る間に。背より手を長く伸て。錦の囊を。そと掻とらんとせしが。忽地に臂を縮め。しばしうち案じて。さうなくはとらず。おのが懐なりける糸圖の巻軸を。囊に納たるまゝにとり出し。終に是彼籠換て。數回押戴き。社壇の下へ躲れけり。とはしらずして右衛門太郎は。やゝ衣服の雨水を絞去て。外面をうち瞻げば。雲は五日の月を婉て。山川の音いと高くなりぬ。この雨間に。と心いそしく。壁にかけたるひ。端近く歩み出て。月を燭に。すりかえたる囊物の口を押開て内を見れば。金にはあらで巻軸なり。あらわれながら鈍ましや。外目に見ても重やかなれば。疑ふべうもあらぬ。金なり。と思ひたるに。巻軸に。巻軸を換ては。彼に損なく。われに得なし。しばし娛しと思はして。可惜骨を折らしぬる。這奴が面の憎さよ。と咬て。忽地破と投捨しが。さりともと思ひかへして。又巻軸を拾ひとまり。再び月影に見かう見て。かやゝとちわらひ。重やかなるも。理なり。軸は赤銅を盈て。茶靡流水を金貝に磨たるに。囊の錦もわが物には勝れり。何事を書たるにか。とひとりごちて。さやゝと押開くに。首尾よくも讀めねど。八歳の春より手習して。消息數多暗じたれば。この條。彼條。とび／＼に會解に。またく軍術の秘書にして。その中間謀の術を載たり。やがてその奥書を見るに。
猶。此巻布。從君拜領。具足。從祖我等昔候得共。長代之送。形見候以上(流布の巻本に本文の間へ書入れたり又)

此度隼人差越事。非三別義。我等是期近覺候。貴殿成長之器量。見届度候得共。義重候。更難邁。勤學無怠。成長之後。我等心中可被令察候。謹言。

建武三年正月廿日

楠庄五郎殿(吉野拾遺によれば。庄五郎は。正行か幼名と聞ゆ。)

兵衛正成

増補越後名寄。卷四。菅名庄。瀧谷山慈光寺の條下に。正成の遺書をのせたり。傳に云。桀堂は。楠判官正成の子。幼年の出家なり。よりてその遺書と。鎧。巻布を。この寺にとむ。鎧。巻物は。回祿して。今はたゞ尺牘のみ存す。これ眞蹟なりといへり。又吉野拾遺にのするところ。これにおなじ。但兩三字づつの錯誤あり。
并せて傍に附す。また河内の觀心寺。吉野の如意輪堂にも。正成の遺書あるにや。同文の尺牘。世に夥残れること。ますます奇なり。流布の墨本も。大かたは違はず。集めてこゝに標出する事。左の如し。

尚々。此巻編一正。公より拜受。ぐそくは。祖より我等迄。着古候。長かたみと送候以上。

此度隼人差下候事。非三別事。我等最後近々被覺候。願貴殿成長之器量。見届度候得共。義重候所難邁候。彌勤學無怠。成長之後。我等心中可被令察候。謹言。

建武三年正月廿日

同兵衛正成(ハナキ)

楠庄五郎どのへ

と。讀もをはず。大に驚き。昔時。先君。攝州湊河にて。討死の前つ日。櫻井の驛より。嫡子正行を故郷へかへし。なほ心もとなくやありけん。再ねて老黨隼人をもて。遺書に紀念の二種を。とり添て贈られたり。と父の物語に聞けるは是なり。しかれば。この巻軸は。櫻井の兵書にして。件んの武士は。頭の殿(正儀を)の近臣ならずば。左衛門

どの正勝の家謀ならん。われ不意も。この秘書を得たり。よく暗じて。間諜の術に熟せんには。出沒自在にして。小殿の平六。槇島十郎にも勝るべし。よき物得つ。とふかく歡び。やをら兵書を巻おさめつ。又思ふやう彼武士家に歸りて。おのが巻軸ならざるをしらば。ふたゝび走り來て。この禿倉を狩索めなん。加旃。すりかへたるは。父が手づからとらしたる。わが家系圖の巻軸なれば。終にわが所爲なる事をしられて。穿鑿この身に係らん歟。虚々としてをる處にあらず。と深念して。日來掠奪したる五器。調度などは。山川へ投入れて。物ひとつも残しとどめず。金錢のみを懐にして。忙はしく草鞋穿締。あくもまた玉櫛篋。ふたとせになる隠家を。神前に鈴とふりすて。咎めぬ神は名のみにて。千劍破嶺を東へと。北山村の藥薄。穂にあらはれねど心から。闇き山路を迷ひ出で。往方もしらずなりにけり。さる程に百濟右衛門太郎義包は。その夜子二ツの比及に。小深の旅宿に立歸り。まづ濡たる衣を脱更て。燈袋をかい探り。蒼紫折燒て。夕餐たうべなどするに。けふの本意なさやるかたなけれど。友なき宿は殊さらに。更闌る隨寂寥く。霜に鳴蟋蟀。紙窓うつ竊蟲の。聲あやにくに耳につきて。いもねられねどせんすべなれば。衾をとり出し。枕おし直しつ。項にかけたる櫻井の巻軸をとり外し。枕上におかんとして。孤燈の光にこれを見れば。囊の裂も夫にはあらず。こはいかにと周章。紐引斷離て。内なる巻軸をとり出すに。雜居家譜と標題せり。怪事限りなくて。押開きつ。熟視れば。雜居兵衛言直が家系にてぞありける。かくて疑の解るべきにあらざれば。とさまかうさま尋思するに。嚮に本見ぬ山の麓にて。ふりたる禿倉のうちへ走り入り。しばし笠やどりしたりしとき。彼巻軸を濡さじとて。繪馬の釘に掛たる外に。身をはなせしことはあらず。原來雜居兵衛も。われより先に彼禿倉に雨を避。事の爲體を張ひしりて。闇かたより籠換し歟。件の兵衛は。亡君最期にその身の過ちを悔歎きて。密に招き給へども來らず。この故に頭の殿儀は。待わびて自殺し給ひ。われその遺命を稟て。家傳の兵書を千劍破なる。郎君正勝に進らせんとて。かくまで心を竭すものを。這奴に奪ひとられては。何をもて亡君のおん志を果すべき。

故主の不義に瓜彈して。その招きに應ぜざりし言直が。却てかくは後らき舉動しつる奸佞邪智。思ひやるだに腹たし。彼兵書を取り復さては。生て百年の壽を保とも。千劍破どの同腹正勝。に見參のよすがなく。死して泉下のわが君にまうしとく言の葉なし。こは安からぬ事かなといきまきつ。衝と身を起して。帯引結び。忙はしく雜居が巻軸を懐に押入れ。刀を引提て走り出すが。如法闇夜のことなれば。咫尺の間も見えわかず。身を翻して内に入り。簷服に挿たりける。準備の松明を引おろして。地炕の埋火をうつさんとするに。心のみいそがれて。頼にもつかず。あらもどかしや。と焦燥て。颯細く吹入る。門の戸礮と引たつれば。やうやく燃る焦火を。高く抗て門を鎖し。本見ぬ山へとゆく程に。天は明て。日もはや山の嶺に昇りぬ。かくて右衛門太郎は。笠やどりせし禿倉に入て。残る隈なく索れども。櫻井の巻軸の。こゝにあるべきにあらざれば。いよ、雜居兵衛が所爲なり。と思ひ定めて。憤に堪ねども。彼は久しく和田正武に仕て。龍泉の城中に有れば。籠換られたる巻軸を。とり復さんこと容易からず。ふかく謀らてはと深念して。その日はいたづらに旅宿に立歸り。雜居兵衛に近づくべき方便もがなとて。起てはおもひ。臥しては慮ひ。頻に首を病するに。名のみは聞けど兵衛を認らず。とかく龍泉の城外に起臥して。その出居を張は。彼を認る捷徑なるべし。とやうやくに計略を定め。俄頃旅宿をあげわたり。面には漆を塗て。いたく身を覆し。身には拷の蔽衣を被て。野隊の乞食に打扮。龍泉の城下に到りて。並木の松蔭に起臥し。さてその年も空しく暮しつ。春も三月のころになりて。凡百日あまりを経たりしかば。果して城中の奴隷ども。あさな夕な。出入りする毎にこれを憐み。食の餽せる。魚の餵れるあれば。かならずも出て。右衛門太郎に食せけり。右衛門太郎は。この便宜を得て。有一日多辯なる奴隷に對ひ。おのれかくの如く殿ばらの庇を稟て。露の命を繋ぐこそ。こよなき僥倖なれ。和田どの、御内にて。雜居兵衛とか呼れ給ふは。よろず情ふかきよしを。豫て聞つ。おん身は彼兵衛ぬしに。使れ給ふ人には在さずや。と問に。奴隷答て。わがつかふるはさるる人にあらず。汝がいふ如く。當家の老臣多かる中に。雜居

ぬしは。わきて主を敬ひ。下を憐み給ふから。城主に寵られ。僚友にも譽られ給ひしが。いかなる故にやありし。去年の秋。潜びて赤坂の城へ交加給へること。忽地に發覺れ。罪科脱れがたくおもひ給ひけん。その夜さり逐電して。今に在處をしらせず。されど内室は。城主の息女の幼くて在するが乳母なれば。許されて残りともまりたれど。その餘のものどもは。養猫さへ立地に追放されたるを。惜まざるものはなかりき。さればこそ汝等まで。かの人の名を傳聞て。しかいふにやあらんとて。鞞審に回答果。一の城戸の方へ走り去にければ。右衛門太郎はこれを聞て。かつ呆れ且疑ひ。大に望を失ひて。つくづくと思ふやう。難居兵衛が赤坂の城へ交加たる事はなきに。その故に罪を得たり。といふはこゝろを得がたし。そはとまれかくもあれ。去年の秋より。こゝにはをらざる。兵衛にあはんとて。浅ましき打扮して。可惜月日を過せしこそ悔しけれ。渠楠公の兵書を得たれば。軍學をもて生活とせん敷。しからば京。難波の間を索んに。環會ざる事はあらずとて。みづから志を勵し。その夜。龍泉の城下を立去。人なみな行装して。直に花洛へ赴き。類をもてすれば。その人を識に幾しとて。劍法の師範して活業としつ。是首に一年。彼首に二年。長明が移居車の迹追ふて。おなじ處には住居せず。京。難波。堺など。すべて五畿内なる熱鬧場へは。かならず移住むほどに。そのたび毎に。弟子も離れて。武藝は人に勝れたれども。身單を潤すに足らず。去年に今茲はいやまして。いと貧しくなりけり。案下某生再説。楠左衛門尉正勝の弟。河内二郎正元時に河内守。故には。父正儀が。赤坂の城中にて自殺のよしを傳聞て。哀感に堪ず。ふかくたれこめて。つくづくと世のたゞずまひをおもひやるに。往時鳥羽院の御時春二月には。源爲義。いまだ童形にして。叔父義綱を誅伐し。保元の擾亂には。爲義また。その子義朝に誅せらる。みな是勅命なれば已ことを得ずといへども。後の議論を脱れず。悲しいかな。わが胞兄弟は。祖父正成の遺訓を守りて。只顧に忠義を存し。父に引わかれて。夥の年月を過し。今その枉死を聞くといへども。棺を送ることも得せず。只いたづらにおもひくらしたる。吾儕のうへは。歎て及ばず。かくいはんは畏けれど。先帝

後村の御時に。兄に叛たる直義の弟。父に叛きたる直冬。藤原の首として。清氏。直常が類。主に叛きて身のおき處なきものどもなりとも。參り従はんとだにまうせば。忽地に勅免あつて。これを一方の大將とし。尊氏を討し給ひたるぞ。かへすくも君のおん悞ちなるべき。さるからに。わが父類に南方を疎果。足利家へ降參しつること。是併ながら。不忠不義を教給ひし。愾慮より起りて。絆みな道に稱ねばなり。うべ南朝の創業。ふたゝび振ひ給はざる事。後の議論おぼつかなし。しかはあれ。君々たらずとも。臣もて臣たらずばあらず。いかなればわが父は。庭訓を忘却し。魔風に靡き。邪路に入。死しての後もかくまで。子どもに物をおもはし給ふ。忠を竭くせば孝ならず。孝ならんとすれば。不忠なり。かゝるときにぞ人はたゞ。死ぬべかりし。と身をはかなみ。坐ろに落涙したりける。浩處に外面に。鳥の鳴聲衆多しく聞こえて。いと羸しかりしかば。正元障子をさと開て。これを見るに奇なるかな。鳥と鷺と。夥群飛て啄あふにぞありける。その形勢。鷺は南より翔來つて。北に向ひ。鳥は北より翔來りて。南に向ひ。相戦ふこと稍久し。譬ば。鷺は白き羽を飛して。雪の花の風に飄が如く。鳥は黒背を鳴らして。樅の炭の枝伐に似たり。一往一來。先手後手。切つ夾みつ。縛る。綴五に飛鳥の争ひ。棋石を投るに異ならず。迭に挑み争ふ程に。鷺は終にうち負て。紛々として地上に落。死するもの十二枚に暨べり。かくて鳥は。三遍喜鳴をして。隊伍を亂さず。西北を投て翔去にぞ。正元これを目送りて。大に怪しみ。心の中いよゝ安からず。誰かあると。と叫つれば。有義これにさふらふ。と應つ。今茲僅に四歳なりける。正元の嫡男。操丸をかき抱きて。ほとり近く參りぬ。この有義は。楠譜代の老黨にて。姓は津積氏。宇窪六と呼ばれて。すなはち操丸の乳母夫なり。年の齡は。四十のミへを。六ツ七ツにやならんずらん。妻は近曾身まかりて。子もなければ。わがうへをもて愁ひとせず。君を思ふこと自をおもふより篤く。その忠やかなること。絶て肩を比ぶるものなし。當下正元は。津積有義を見かへりて。いかに窪六。汝も今の怪異をや見つる。と問に窪六答て。御説の如く。鳥の鳴聲いと羸しきを。郎君の見せよとてむづかり給ひ

しかば。抱き進らせ。彼處の縁頼に立出て。初より見て候ひし。さても奇しきことなり。と應まうせば。正元しばしば嗟嘆して。死したる鷲を熟うち目逆。白きは物の本色なるに。黒きに壓れて本を失ふ。これこの吉凶おそらくは。南朝衰廢の祥ならん。夫鳥は。その色黒し。これを四方に配すれば。北朝に當れり。又鷲はその色白し。これを四方に配すれば。西なるべけれど。見よ。この鷲ことくく艸を銜たるに。死してなほこれを放さず。西に艸を冠らすれば茜となる。茜は一名染緋草。物を染て深紅なり。赤きは南方これ南朝。乃至。南北兩朝。多年のおん争ひ。その勝敗を示すに似たり。且鳥は日中の鳥なり。これを天子に象るべし。嘗聞。人の代の首神日本磐余彦天皇。武皇軍して中洲に赴かんとし給ふに。山中嶮絶して。復ゆくべき路なく。乃棲遑て。その歧涉んところをしらず。時に天照大神。夢に天皇に訓給はく。朕今頭八咫鳥を遣さん。宜郷道者とし給へ。とのたまはせしが。果して頭八咫鳥。空より翔降りて。皇軍の郷道せしとかや。かれば鳥は。天照大神の使令なり。嗚呼いかにせん。宗廟祖神も。南朝を輔け給はず。天武の例もあるものを。吉野の宮のよしや世を。足利に扱められ。鄙を都の八重櫻。春にもあはし給はざる。神慮寔にすべなし。と未然を察する良將の。言の葉。さてはと窪六も。こゝろに曉得て慰かね。且くしてまうすやう。御談には候へども。妖は徳に勝ずといへり。勝と負るは天運に係りて。禽獸のよくしる所にあらず。吉野を皇居とし給へ共。南朝の御領。今なほ二十餘箇國候はずや。その間に。志を寄し。忠義を存する武士。また少しとせず。なでうかばかりの妖孽を見て。英氣を落し給ふことかは。と諫れば。正元再て。いなわがいふところは。けふ翌の事にはあらず。命を隕したる鷲の數をもて。未來を推量るときは。今より十二年の後。南朝終に絶給はん歟。しかれば。楠氏の子孫。生て殘るものはあるべからず。われおもふ旨あれば。汝は密に。操丸をかき抱き。はやく當國を立去て。迹を埋め。國々を徧歴して。世の景迹を見よかし。陸奥には新田前左少將義宗の嫡男。左少將貞方。脇屋式部大輔義治の長男。右少將義隆。の時に奥州父子あり。又鎮西には。菊地武光が子。肥後守武政。征西將軍。宮野原を

守護して。九州に武威を振ふ。と聞ゆれば。彼處はみな。世を潜ぶに便宜の地なり。かゝれども。われその子をもて。他郷に潜ばする。と人しらば。忽地に疑れて。讒者の舌頭にかけるべし。汝箇様々々にして。まづ操丸を殺せ。われその期におよびて。謀ありとて。梓審に耳語ば。窪六はこゝろ得果て。次の日より。しのびくく旅行の用意をいたし。河内國。讚良郡。野崎の觀音堂を守る生法師は。豫て相識れるものなれば。これを賺て。わが方人とし。梓既にとゝのひぬ。さる程に。八月も盡て。九月の上間。有一日正元は。津積窪六を呼びていふやう。われ頃日は父の喪にこもりをれば。稚きものゝいと徒然に堪ざるべし。汝操丸を具して遊山させよ。小松山の茸狩など。いと興あらん歟。と仰すれば。窪六うけ給はりて。童扈從三四人とともに。操丸に冊きて。本見ぬ山のこなたなる。小松岡に赴き。終日茸狩して。幼き主を慰むるに。操丸はいとたのしげに。樹間立潜き。右よ左よ。と漫行し給ふ程に。稚きは却て足速く。動もすれば窪六等も。遙に後つゝ。忽地に見失ひぬ。さればこそと窪六は。われにもあらで慌忙。童扈從もるとともに。樹の蔭。叢の中まで。喚つ叫びつ。尋ね索るに。影もなし。日もはや向暮とするに。さてもあるべきにあらず。事を議せんにも。いひがひなき童扈從のみなれば。是非なく城中へ走り歸りて。梓の趣を訴へまうせしかば。正元大きに驚き思。操丸が失たりとて。生死もしらで。たゞやは已ん。部して索ねよ。といきまきあらく下知するにぞ。もの熟たる老黨。おのく影兵を得て。前後の城戸より走り出。通宵これを索るに。絶て往方はしれざりける。

第四 芒花にいふ 袖振草

物おもふ交野の原を。わけゆけば。袖ふり草に雉子啼なり。いと果敢なきかぎろひの世に。凡いきとし活るもの。恩愛の羈に繋れ。いくその思ひを焦すらん。燒野の雉子。夜の鶴。峯の猿の腸を斷。その悲みぞやるかたなき。

楠正元の夫人は。和田正武の従弟女にて交野前とまうすにや。いぬる日。最愛のひとり子操丸。茸狩して。往方しれずなりける。その日より。招くかひなき尾花かすゑの。袖だに乾く間なくて。神に祈り。佛を念じ。存命てだにあるならば。今一トたび。わが子にあはし給へとて。歎き給ふぞ理なる。正元は豫て謀りし事なれば。人めばかりは頼きおもふちして。兄正勝にかたらし。龍泉の城へもかくと告しかば。和田正武大きに驚き。操丸はわが女婿なり。彼僅に四歳なれど。眼ざしの凡常ならぬを見ても。ゆくすゑ憑しくおもひつるに。失たるこそ安からね。こは山魚氏滯が所爲にして。竊に奪ひとらし。人質にするにやあらん。まづ間者を入れて。赤坂の爲體を張はし。わが推量に違はずば。ともかくもして。とり復すべし。と回答して。さま／＼に方便をめぐらし。赤坂のやうを探問に。操丸の在處絶て知ざりける。されば。正勝の爲には。たゞひとりの怪なれば。遺憾に堪ずして。童扈從を責罵り。汝等はいひがひなくとも。津積窪六が冊てありながら。幼なき主を失ひ。阿容々々と歸り來たるはいかにぞや。いよ、操丸が往方しれずば。かの窪六が首を刎て。その罪を正さずば。何をもちて不忠の士卒を懲すべき。といきまくを。正元諫めて。その憤りは。某に于て異なることなし。窪六が罪輕からずといへども。彼が首を刎たりとて。失たるわが子の歸るにもさふらはず。死刑を宥て追放たんこそ。穩便の沙汰なるべけれとて。總て窪六を追放す。皆是正元の謀略にて。曩に窪六に。心中の機密を説しらし。操丸の事を托せしかば。窪六は毎月主の代參して。野崎の觀音に詣。堂守の生道心が愚直なるをよくしりてければ。竊に野崎に至りて件の法師を賺し。わが再世の疵を稟たる。主家の老臣。何がしが子に僅四歳なるを。繼母いたく憎みて。人しれず殺ん。と計較こと既に急なり。われ恩人の子なるをもて。救はんとおもひながら。身ひとつにてはそれもすべなし。願ふは。老師。わが爲に彼稚兒を奪去て。しばし躲してたべ。五七日を経ば。われまた來つて他所へ忍ばすべし。といふに。元來愚直の桑門なれば。これを實事にして。深く憐み。慈悲は佛の本願なり。人を助るに於て。出家の推辭べきにあらねど。その兒を奪ひ去らん事。容易からじ。毛を吹疵

を求めんには。罪得がましき所爲なり。と回答つ。速には承明ず。窪六かされて。その事は心安かれ。九月某の日には。われ四五人の童とともに。件の稚兒を將て。本見ぬ山の西の岡に遊ぶべし。老僧そのとき。茅葺の中にかくろひ居て。竊にかき抱きて走り給へ。侶なる童にだにしられずば。絶て妨なし。もし程經て發顯るゝとも。老師を連係さすべからず。只兩三日の日を費し給は。その功德莫大ならんとて。さまざまにいひこしらへしかば。法師は遂に謙されて。窪六とともに。はる／＼と千劍破に來りて。本日暗號を定め。朝まだきに小松が岡に到りて。叢の中に身を躲し。彼主従が茸狩に出るを張ひて。輒く操丸をかえ抱き。通霄徑より走りて。野崎、將て歸り。もつばら窪六が音耗を待程に。窪六ははかりし如く。罪ならぬ罪を得て。千劍破の城を追放せられ。直に野崎に赴きて。件の法師によるこび聞えて。物數多布施し。郎君の久後を觀世音に祈願して。操丸を脊負ひつ。身を襲し。笠をふかくし。藥もて裏む兩刀も。さして往方ぞ定めなき。旅路に迷ひ出にけり。この下に話なく。かくて。春たち春歸りて。又十二年の光陰を経るほどに。いぬる應安七年。南朝。元。十月には。菊地武政。義滿將軍に攻なやまされ。且く和睦して。その英氣を避。なほ處々の城を守りて。ふたゝび九州を討從ん。とはかれども。武政が武威このときに衰へて。終に志を得果さず。明德二年。南朝。元。には。龍泉の城主和田正武身まかりぬ。享年五十四歳なり。かゝりし程に。河内の國人。悉とく叛きて。足利家へ屬せしかば。今は千劍破の城のみ残りつ。正勝。正元。こゝろばかりは勇しといへども。赤松。葉竹山の太軍に火攻せられ。兄弟。從兵。思ふまゝに戰ふて。自方の兵士悉とく討れしかば。楠兄弟は。不思議に必死を脱かれ。正勝は紀路を投て没落し。十津川に漂泊して。彼處にて身まかりぬ。擬正元は。只一騎。二の城戸に立塞りて。さし詰。禰詰。すゝむ敵を射て落し。その身も薄瘡數箇所負にければ。今は是迄なり。とひとりごち。猛火の下を。つと潜り抜て。烟に噓て立迷ふ。夫方交野前と。和田正武の息女秋野姫を救ひ出して。後門より走り去るに。秋野姫の乳母豊浦のみ。只ひとりなん従ひける。しかるに。秋野姫は。去年正武世を逝て。孤となり

ければ。正元ふかく憐み。乳母もろとも千劍破の城へ迎とり。夫婦これを慈む事。實の女兒に異ならず。この姫今
 茲ははや十四歳にて。容止の嬋娟なる。いへばさらなり。もし操丸に異なる事もなくば。婚姻の期も程ちかかるべき
 に。わが子はゆくへなくなりて。既に數多の年を経れども。世にありともなしとも聞えず。片時も忘れがたき。親の
 歎きに思ひくらぶるに。幸なきものは姫なりけり。稚きときに母御を喪ひ。去歳は參々に死別れ。四歳のときより許
 嫁て。今茲は十五になるべかりし。夫の顔はえもしらず。たつきなくこそおぼさめとて。交野前は殊さらに。愛慈
 み給ひしが。かくは千劍破の城さへ攻落されて。主従只四人。大和路へわけ入り。吉野の皇居へ參らんとて。晝は樹
 の蔭。岩の挾に身を潜め。夜は通容路を走り。辛じて六田の山里まで來つる日。正元の矢痕。思ひの外に移出て。苦
 惱いふべうもあらざりしかば。かくては吉野へ參りがたしとて。杣木挽もの。只獨住む家に宿投て。且く保養した
 りける。差夫。榮枯得喪の理。誰かは脱れん。今にはじめぬ世なれども。楠公正の誠忠。死して且つ朽ず。子孫その
 遺訓を守り。父子三代。五十餘年が間。河内半國をもて。足利の大軍を防ぎ戦ふといへども。水涸て船行ず。城敗れ
 て人守りがたし。されば正勝兄弟。千劍破を没落して。南朝には股肱の武臣を失ひ。君臣忽地蝦に離れし水母の如く。
 進退究て。とさまかうさま思ひこし給ふ。折しもあれ。京都將軍義滿より。大内義弘。六角滿高をもて。さまん
 に疎し奉りしかば。後小松院を御養君の義にて。南北朝御和睦とひ。是年北朝明德三年 南朝元中九年 閏十月二日。南帝入
 洛あつて。嵯峨の大覺寺に著御ましました。同月の五日に。三種の神器を渡されしかば。やがて太上天皇の尊號をたて
 まつり。後龜山院とぞまうしける。延元二年に。後醍醐天皇吉野へ遷幸有しより。五十五年足利治亂記ににして。南北
 兩朝。御合體ありしかば。大日靈貴の神慮にも稱せ給ふなるべし。さる程に。楠河内二郎正元は。箭瘡やうやくに癒
 なければ。まづ吉野の皇居へや參らん。擊殘されたる兵士を招き集めて。千劍破の城をやとり復さん。と思ふ折から。
 南北兩朝御合體あつて。南帝入洛し給ふと風聲するに。忽地胸塞りて。緯のやうを聞定むれば。實事なり。こはそ

もいかにと仰天し。思ひしことも化となりて。死より外にすべもなく。ある日。正元は。あるじの男が薪樵に出て。
 傍に人はなけれど。なほ聞ものやあるとて。豊浦に出居のかたを守らし。交野前と秋野姫に對ひ。聲を低し。さても
 主上は。天運のしかるところを知食てや。御ころよはくも入洛ましゝたるは。是非をまうすにかひなし。しかり
 とも足利家は。千鈞の響なり。密に花洛に赴きて。義滿を狙撃ん。汝達は婦人の事なれば。よしや楠が妻子なりと
 しらるゝとも。命をとらるゝ事はあらじ。ともかくもして一生を過し給へ。といひも果す。怒れる眼にたもちかねし。
 只一滴の涙の玉も。落て碎な胸くるしさを。おもひやりつゝ主従が。應かねて面をあはし。いなともいはず稻舟の。
 ながらふる身を啣のみ。交野前にはふり落る。涙をしぼく押拭ひ。君の仇。自の仇を。狙撃んと宣はするを。誰か
 は禁めはべるべし。しかれども。彼義滿が威勢は。傳へ聞すらいかめしく。六十餘州を掌握して。假初の出居にも。
 前をうたし。後に隨ふ從者は。洛の小路にも。あまる仇人を撃んとし給ふ。御身ひとつに。六の臂。兩の翼は生出る
 とも。こゝろもとなき所爲ながら。武士の子と生れ。武士の妻となりては。さきんくの人のうへに。羞てまうさんこ
 ともまうさず。愁に存命て。いくその物をおもはんより。虞氏とやらんが心操に。やは劣るとて譬近なる。夫の刀を
 引抜て。胸さかつらぬき。俯給へば。是はとばかり秋野姫。豊浦もろとも左右より。抱き起せば。漬る。鮮血にいと
 どとめあへぬ。新婦と乳母が涙の雨。憂みの蟲となく音さへ。よるべの枝はなかりけり。交野前は息の下に。秋野
 姫を見かへりて。たつきなき身の殊さらに。落人となり給へば。ちからともなりならるゝから。嫁姑は睦ましく。
 下賤の常言に。もれし送の薄命。憎れて世に憚るより。惜まれて死ぬ人は花。ちり際もろき玉棒の。八千代まで
 もとおもひ子に。耦するよしなき嫁御前の。歎もいと痛ましけれど。わが身夫に先だちて。後やすく義滿を。撃し
 進らせんと思ふのみ。やよ豊浦。乳母は母にひとしいへば。杖ともなり。楯ともなりて。秋野姫を守り冊き。浦の
 管屋に起臥し。山の幸雄に身はよすると。參々の名をも阿翁の。名をな名告そ。青丹よしならの廣葉に世を扱み。

火打。水汲み。薪樵り。人の奴と身をなしても。こゝろ誠にかなひ給はゞ。神も守り。佛も憐み。發跡給ふ時もあらん。仇なる縁しに締ばれて。三歳のときより寡婦の名を。おひつ負せし因果どちが。などでかくまで集合けん。脱れがたきは過世の業報。苦しきものは今生の。契りにこそ。とかき口説。聲も細りて霜夜の蟲の。憑みすけなく見えしかば。いと露けき秋野姫は。わが身ひとつの秋ならて。夢野の鹿の夢の世と。おもひ絶ても得も絶ぬ。峯の落葉のかさねく。斯る歎きぞやるせなき。寔の親と見まらする。その二柱に捨られて。わらは。何となりはべらん。形なき世に残らんより。もろともに伴ひ給へ。死出の山路の轎とも。三途の川の筏とも。なりて渡さば孝行のはしにやあらん。と忙はしく。綾の囊に玉の緒の。魂鎖双も名には似ぬ。護身刀を拔出せば。豊浦は吐嗟と携留。憂に逼りて御こゝろまで。亂れ給ふ歎草環の。くるしきまゝに死んとは。いと理なくぞ侍るなる。結髪まし。たる。殿はおん往方こそしれぬ。世になき人とも聞えぬものを。存命て坐まさば。孰の命もて彼君に。環會んとはおぼすやらん。花も操も十かへりの。合をわれから散せとて。姑の自害し給はんや。堪がたきを忍び給はねば。孝にも侍らず。貞にも侍らず。いひがひなし。と諫ても。われも無常の名に響く。豊浦の寺の鐘ならで。ともに涙にくれの聲。外へ漏さじ聞せじとて。やうやく刀を引放せば。交野前は嬉しげに。點頭のみにて物いはぬ。苦痛さこそとおもひやりて。正元頻に嘆息し。扇笏にとつて小膝をすゝめ。死を潔くして夫を勵す。交野が心烈。もろともに死んと願ふ。秋野が孝行。かくてこそ。正元が妻ともいはめ。嫁ともいはめ。この十二年の間。兄正勝にも告ずして。深く秘したるわが子の往方。目今審にも語らん。それを冥土の餞別に。うけ得て清果に赴き給へ。抑いぬる天授三年。わが父正儀。赤坂にて自殺し給ひたるころ。千劍破の城の前裁にて。鳥と鷲と挑み争ひ。死したる鷲はすべて十二枚。十二箇年の今茲に當て。南朝傾廢の祥を示す。と豫しても曉得ながら。人にいふべきよしもなく。楠氏の子孫。こゝに斷絶せん事の歎かはしさに。老黨津積窪六有義に。謀を授て。まづ操丸を失ひつるといはせ。それを越度に窪六を追放せしは。

人しれず子を遠離。彼窪六に久後を托し事のあればなり。ともしらざれば兄正勝と。和田正武の心づくし。交野が悲歎も痛しけれど。兵は詭道なりといへり。謀は密なるをよしとす。緯は洩易きを憚りて。けふまてはいはざりける。この恩愛に感溺して。その子の榮達を思ふにあらず。秋野姫もあしく聞給ひぞ。わが兄弟は時を得ずして。元を敵に授るとも。操丸だに世にあらば。年を経て義兵を起し。父が志を續て。仇を滅すこともやあらん。と忠孝によるところ。止がたくて。親族妻子にこの年來。いくその歎を被たるなり。斯は思慮りしに違はず。兄は紀路へ没落し。われは花洛に死にゆく。千枝の常葉も枯々に。一樹残りし操丸が。在處を索て環會。夫婦全聚るよしの。なきにしもあらざめれば。秋野姫は大和。攝津の間に世を潜び。時の到るを等待給へ。産靈に偽なくば。分鏡の契も空しからじ。送に面を認らずとも。操丸が護身囊には。野崎の觀世音を擬したる像あり。今また秋野姫には。志紀の毘沙門天の小像を得さすべし。是はこれ。祖父正成。幼稚よりふかく信じて。應驗しば。なるよしは。世の人のしる所なり。夫婦再會の割符には。これにますものやはある。されば。法華經普門品の要文に。禮拜供養觀世音菩薩。便生福德。智惠男。設欲求女。便生端正。正有相女。宿植德本。衆人愛敬。と。説給ひ。又賢愚經には。有優婆夷誦經。毘沙門天從空而遇。乃曰姊妹。我與汝寶物。可請舍利弗齊當得勝福。と説給へり。わが智の及ばざるところは。人の才を借べし。人力の及ばざるところは。神佛の冥助を仰ぐべし。豊浦は雄々しき心操のものなり。秋の姫を扶掖て。主従いたく身を養ひ。法隆寺のかたへ落よ。彼寺は。楠氏に舊好あり。密に住持に憑み聞えなば。しばしの隱家ともなりぬべし。われは逆の峯入せし。山伏に打扮て。直に華洛へおもむきなん。こころ得たりや。と是彼に。説示しつ。項に被たる護身囊をとり外し。秋野姫にこれを授け。また軍要に貯祿たる金二包をとり出で。これをば豊浦に遞與しけり。秋野姫主従は。はじめ縁由を聞きて。ありがたきまで忝く。世に憑もしき心持はすれど。互に認め操丸に。あふ日をいつと定めなき。人の命は槿花の。夕をまたぬ姑御前。せめて存

命給ひなば。名告あふよすがもあらん。今となりてはいとどなほ。本意なき別にはべるなる。御ころ實にもち給へ。と呼活られて交野前は。やうやくに眼を開き。絳のやうは聞はべりぬ。今般にされるわが子の存亡。その物語は千僧の讀經にまして罪ふかき。迷ひの雲を吹はらふ。鷺の高峯へ歸り花。吉野といへば紙雛の。夫婦が手から末期の水を。得受ぬ事のみ遺憾。といふも半は唇を。動すと見えて絳斷たり。覺期はしても堪かねて。聲に泣嫁。眼に泣舅。あるじが歸らば便なし。と勵す乳母も袖しぐれ。千劍破を出て神無月。六田の山川水落て。石に名を書亡魂を。導き給へ救世圓通。煩惱菩提種種門天。數の寶も眼前。舅の情をおし戴く。路費に物は缺わども。世を潜ぶ旅と死出の旅。道し異なる首途は。經帷子に禪衣に。笈と兜巾の假山伏。女道者のもろ回向。旅のころもは襍被の。襪にはあらぬ亡體を。笠に隠して冬枯に。芒花が末の野葬。哀れをこゝに。とどめたりけり。

松染情史秋七草卷之二終

松染情史秋七草卷之三

第五 葛に名つくる まつな草

秋見れば花むらさきの松無草。かゝる露さへ玉とこそ。なれも靈呼ぶ尾花が袖に。吉野の葛もうら枯て。衣手寒き神無月に。名のみなりけり秋の姫は。乳母豊浦に扶掖れて。六田の旅宿を出しより。しばし人めを隠笠に。涙の雨ぞ降そゝく。胸のしぐれはさしてゆく。道こそなけれおもひ入る。山迹路を彼此と。野を過ぎ里を平群郡。法隆寺に程遠からぬ。西安の里までたどり着給ふに。ならはぬ旅はいとどしく。やるかたもなき哀傷に。身さへこゝろも疲勞つ。歩の運びも定かならず。豊浦はさまざまに勦り進らせ。或は激し或は慰め。とかくして西安の川を渡しにけれど。あまりに痛ましく見へ給へば。行轡を備ひて姫君を扶乗し。その身は轡に引そふて。後れじと走りけり。この日。秋野姫を扛乗したる轡夫は。白毛皂の太郎犬。赤斑の二郎犬。と呼らる。野臥の悪棍なるが。件の主従が形容。いとらうたけて。庸常なる旅客とも見えざるに。郎黨只一人だも俱せず。こは南朝の零落人ならずや。と思ふに。豊浦が懐の重やかなるもこゝろ憎く。明白にこそいはね。互にこゝろに計較て。四表八表の物がたりなどしつゝ。慰め興じて昇もて走りぬ。こゝにまた法隆寺の門前に。年來住る賣油郎。丹五兵衛といふ者ありけり。年の齡は五十可なるに。妻もなく子もなくて。世にわびたる男なり。元來その性老實にて。たえて高利を貪らず。油を篩に手煉して。舂に汲受たる油を。錢の目より油筒へうつし入るゝに。一厘も違はず。糸を引とほす如くなれば。人みな興ある事におもひて。油縞の丹五兵衛と渾名し。その油を買ふもの多かり。加。旃。法隆寺の法師ばらも。いと不便なるも

のなりとて。堂塔佛前の御燈には。かならず丹五兵衛が油ならでは。用ふることなかりき。かゝりし程に丹五兵衛は。はや十年餘を経営くらしつ。有一夜の夢に誰とはしらず。枕上に聲ありて。

由水喪レ水 點頭得レ王

と。高やかに口順ぬ。覺て後その事をおもふに。いかなる故とも曉得ず。ふかくこゝろに訝りながら。さてもあるべきにあらねば。次の日もまた經營のために。二桶の油を扛擔ひて。彼此を糶りあるくに。冬の晷はわれより速く。夕陽斜にして。塙へとて急ぐ鳥とともに。白石の森の蔭に。没なんとするに心いそしく。喘々走りつ。法隆寺のほとりなる。石橋を半うち渡るに。昨の雨のいまだ乾かて。今牙初る薄氷に。忽地足を踏ハらし。小膝を衝て礮と投られ。初は飛て向の岸に閃き落。二ツの油桶は。滾々と轉びつ。橋の左右へ走り下るに。油は流れて足の踏どころもあらず。こはいかに。と忙慌て身を起せども。うち覆したる油は術なし。やうやくに桶のみを追ひ留て。法隆寺のかたへもてゆき。つくづくとしておもふやう。けふの本錢を失ひたるは。わが身ひとつの損なれど。數升の油は日用の寶なるに。空しくうち覆して。この橋に塗らせしこそ。惜みてもいと惜けれ。故あるかな昨夕の夢に。水に由て水を喪ふとはこの事なりし。夫水に由ものは橋なり。又水と由と。二字合すれば油となる。是の橋にして。一擔の油を。失ふべき祥なりき。さてこの對句なる。點頭して王を得たりとは。いかなる事にやあらんずらん。とおもふに今さらこゝろもなく。ひとり頭を病しめて。只忙然として立在ば。鐘さへおもひ入相過ぎて。油戀しき野狐の。火ともしごろになりけり。浩處に。秋野姫を扛乗したる太郎犬。二郎犬等は。石橋のほとりに轎をおろしすゑて。豊浦を見かへり。川の向ひなる大門は。即ち法隆寺なり。こゝにて暇を給はるべし。といひも果ず。轎の後方に著たりける。草履を取てさし寄すれば。二郎犬は笠と杖をとつて豊浦に遞與し。やをら筵簾を反揚たり。當下豊浦は。轎の戸口に立よりて。秋野姫を扶出し進らすに。二人の悪棍は。右より左より。その顔をうち覗りつ。太郎犬がい

ふやう。二郎は何とか思ふ。はじめよりこの女ばらを。平人ならじと大かたは猜したれど。日を暮さん爲に。こゝまでは肩を貸たり。もしこれを放遣らば。寶の山に入りながら。手を空しくするのみならず。夥計の奴原によき事せられなん。さはあらずや。といふに。二郎犬聞てうち點頭。われもさこそは思ふなれ。多枯れても櫻は櫻なり。吉野の内裡を迷ひ出で。しばしが程は呻吟とも。長閑き春にあふよしもなき。乳母どの懐には。二包敷。三包か。環堤の山吹さへ持りとおぼし。その金だにとらし去かば。眼閉て見ずも脱さめ。とくく出せ。といかめしく。黒やかなる手首を。豊浦が懐に挟れんとする處を。よせも附ず。丁と突退。こは奇怪なり。女主従と思ひ悔りて。よしなき事をいひかくる。そも汝等は賊なるよ。南朝の零落人なりとは。誰に聞てかかくはいふ。従者も夥あれど。老たるものは先へ走らし。膂力人に勝れたる若黨は。笠目の郷まで歸したるが。今ははや追ひ着べし。さても命に缺代やある。二ツなき首を失はんとてか。嗚呼なる白徒なりけり。と猛くは罵れど翼なき。化し枯野の姫小松。引くも得引かて馳を。禦ぎ難たる風情なり。悪棍等は聞もあへず。呵々と冷笑ひ。健氣にもほざいたり。目盲法師にかい拊さしても。南朝の零落人とはしるべきものを。従者夥ありなんどとは。童もいかでか實事とすべき。とかくいはんは詮なき所行なれ。渠打仆せ。と鬪きつ。息杖をうち振りて。左手右手より競ひ蒐るを。豊浦は閃りとかい潜り。足をすくふて太郎犬に。筋斗うたして撲地と投。續て蒐る二郎犬が。踏を丁と衝く。女の拳も卻合を打れて。叫苦と一聲仰さまに。倭僂臥て起も得ず。誘給へ。この隙に。と豊浦はいよゝかひんしく秋野姫の手を披て。橋を向ひへ渡り去。程もあらせず悪棍等は。忙しく身を起し。驀直に追蒐る。橋の半にうち覆したる。油に足を踏らして。是彼尻居に輾轉。起んとしては又迂り。鶺に尾を曳濡鼠。或は亦瘦犬の。轎に引れて齧く如く。罵りあふのみせんすべなく。直と呆れて眼を睜り。鈍や。とわれを怪みけり。折しもあれ。向ひの岸に立在たる。賣油郎丹五兵衛は。この分野を信と見て。得たりと初を引提て。走りかゝりて打ほどに。太郎犬も二郎犬も。肩を折かし背を腫し。ゆるせ。とばか

昭和十七年九月九日 我不遇コレイ此處 来る後取功ナリレ

りに高吠してぞ逃去りける。後に是をや傳へ聞けん。世の總角が小唄にも。油屋の損て。氷の橋に。油一斗覆しつ。その油いかにせし。太郎の犬と。二郎の犬と。みな塗れをはんぬ。と今の世までも唄ふめり。かくて丹五兵衛は。悪棍等を追ひ捨て。舊の處へ立かへり。秋野姫の立住給ふ。樹の下に蹲踞して。いひ出る事もなく。涙を潸然と落すにぞ。姫君はいと訝しげに。渠は誰。と問給へば。豊浦は月光に見かう見て。こはくいかに。彼は乳母が夫なる難居兵衛に侍りけり。と回答まうせば。秋野姫は黄泉にて。佛に逢るこゝちして。歡ひ給ふこと大かたならず。原來兵衛なりける歟。げにはからざる對面せり。憑む蔭なき身にもかく。捐る神あれば又祐る。神なし月とはおもほえず。そも汝はいつの頃より。此わたりに隠れ住たる。縁故を知らせよかし。といと叮嚀に問給ふに。豊浦は目を押しひつゝ。夫に對ひ。御身が龍泉寺の城を脱去り給ひしより此來。十年あまりをいたづらに。過せど思ひ忘れぬ妹夫の中に。子の染松が往方さへ。此世にしてはあふよしの。あらじと思ふおもひや。夫婦こゝにて逢んとは。神ならずして誰かはしらん。恩義の爲に形なき。身を捨てやらで給事。守册たる姫君は。人となり給へども。過世あしくて草にも木にも。心をぞおく山迹路の。六田の里にも住かねて。狩場の雉子音に鳴のみ。かひなき主も家裁も。世とて時とて淺ましき。菅の小笠に旅疲勞。身の汗絞る賣油郎。人のゆくゑと行水の。河内に名だる弓とりの。楠殿の新婦君と。正武ぬしの老臣が。なれる果敷。とかき口説。外にはしらぬ袖の雨。笠やどりせんかたもなし。兵衛はやうやく頭を擡て。秋野姫に稟すやう。幼少く在せしときに。身退きて候へば。姫君の面影を。認り奉るべうはあらねど。千劍破の城の没落。吉野の帝入浴ましましたし事。世にかくれも候はず。故主の往方いかにぞや。と心にかゝる折もこそあれ。豊浦を將て來ませしかば。問ずしてはやしりつ。彼悪棍等を追ひ退け。恙なきおん容止を見奉る事。歡びこれにますものやは候べき。抑兵衛が殿正武の御不審を被りて。迹を暗くせし首尾は。一朝に述も竭しがたけれど。そは緩やかにまうし譯べし。かゝりし後はとにかく。世を厭ふ心發りて。この法隆寺へ参りつゝ。頻に頭剃こぼちて。

墨染の衣被まほしと。希ふに。上人一切許し給はず。汝が宿業いまだ盡す。今より後。十年を待て。かならず忠義を全うする時あるべし。と諭し給ふ程に。遂にその志を果さず。さればとてなすことなくてけ。身ひとつの口だも働ふよしなれば。油を賣りて活業とし。丹五兵衛と名を更めて。やうやくその日を送れども。形は商人。心は出家。反りし初を弓箭にかえて。清くもすめる水油。闇き迷ひを照し給ふ。佛の慈悲を願ふの外に。他事なく候ひき。しかるに今はからずも。姫君の危窮を救奉り。別れて久しき妻にさへ環會。是彼思ひ合すれば。昨夜の夢こそたゞならね。水に由て水を喪ふと見て。嚮に彼處なる橋の半へ二桶の油を覆し。その油に迂らして。輒く悪棍等を追ひ退け。點頭して王を得たりと見て。故主に逢ひ奉る。王の頭に油を加れば。主の字となれり。方には姫君の危きに参りあふ。前つ象にて候ひし。こは疑ふべうもあらぬ。三位中將の正成を。神靈が。枕に立て告給へるならん。かゝる事さへ候。といと信やかに應へしかば。豊浦はさらなり。秋野姫も。世に憑しき心持しつ。正武病死の事はさらなり。操丸の往方しれずなりて。夥の年を経たること。交野前の自害の事。正勝。正元没落の事を。物がりつゝ。うち泣き給ふに。兵衛は聞毎と嗟嘆して。又まうすやう。こゝは絆を議するに便なし。法隆寺は。楠氏累代の所縁の蘭若なり。まづ上人に見参し給へかし。といそがして。馳て寺内へ誘引進らし。知客の老僧して。絆の趣をまうせしかば。住持の上人出迎て。秋野姫に對面し。旅路の疲勞を問慰めて。實父正武の物故。姑交野前。自双の事を悼み聞え。追福の好事は心安かれ。叮嚀に讀經すべし。曇時の隱家ともならば。假の宿りを厭ふにあらねど。いと艶美たる女主従を。僧坊に舍藏んは難儀なり。さればとて。丹五兵衛が草舎はあまりにあらはならん。わが山の菜園は。世に去なれたる處なり。今宵は彼處にて睡り給へとて。いと一切に款待給ふ程に。行童たち。夕膳を主従が前に安排たり。秋野姫は。いと憑しく思ひ給ふに。丹五兵衛夫婦も。はじめ安堵て。淺からざる上人の庇覆を歡び聞え。非時も果て上人は。後堂に入り給ひしかば。主従は蒸襖引閉て。ゆくすゑの事をうち相語に。丹五兵衛は。正儀の消息を得て。

赤坂の城へ赴きたりし。絳の趣を物がたり。櫻井の兵書紛失して。往方しれざるを打嘆くに。豊浦はこれを見て嘆息し。故主の枉死も見果ぬ夢。散て迹なき櫻井の。兵書の事もいと惜けれど。そは悔てかへるにしも侍らず。只願はしきは姫君に。異なる事も在まさて。結髪の殿。操丸に環會はし進らし。交野前の遺言を。化にせざらんこそ。夫婦がうへに忠義ならめ。大利は寂やかにして。世を潜ぶに便宜なるべけれど。女子の宿かる處ならねば。却て人に疑はれなん。六田の旅宿を出るとき。舅君のとらし給ひし。路費も夥侍るか。これをもて。とにもかくにも。おん隠家を修理給へ。と信やかに密語にぞ。兵衛はしばし沈吟して。聲を低うし。足利の追捕忽ならじと思ふに。大和に坐さん。いとく危し。浪速は繁華の地なれども。彼處にはなほ楠氏の舊恩を思ふ者もあるべし。主従彼地に身を潜まし。放やかに操丸のおん往方を索ばや。といふに。姫君も豊浦も。しかるべしとぞ諾ひぬ。かくて主従は。老僧に償きせられて。菜園なる草堂に赴き。なほ來しかた。往末の事をうち相譚ほどに。冬の夜もいと短く覺えしが。丹五兵衛は。件の路費二百金を給はりて。詰且浪速へ起行。瓦橋の上に油店を開きて。家號を山迹家と稱へ。是非八などいふ主管。兩三人を養えて。驛の事を主らし。ふたたび法隆寺へ來到て。上人に絳の趣をさゝやきまうし。故郷なる妻と女兒を將て來れり。と偽りて豊浦が名を阿也女と呼び更へ。秋野姫をば。何とか呼びまうさんとて。夫婦竊に商議するに。豊浦がいふやう。曩に生れていく程もなく。墓なくなりし女兒が面影。彼姫君に肖たりしも。今更思へば主従が。親子と名告る因果なりけん。追ひ遣らひたる染松が。妹といはんは恐れけれど。せめてわが子の名に象て。阿染と呼びかへ奉らめ。といひつゝ涙さしぐめば。丹五兵衛は聞もあへず。いかてさることやあらん。然ども。秋の野もせの葛紅葉。染ては松に係るといふ。霜の後なる操丸に。再會あらせまほし。と思へば。お染と名け奉らんもあしからずとて。夫婦通路うち相語つゝ。秋野姫にもかくとまうせば。姫もよくそのころを得て。浪速に赴くその日より。丹五兵衛を父とよび。豊浦の阿也女を母と慕ひ。假初ならぬ孝行に。夫婦はこゝろ苦しけれど。お染くんと呼たつる。名こそあらぬ人の關。越かねて只おのが眼に。もるてふものは涙なり。

第六 蘭にいふ あらゝぎ

又たぐひ。世にあらゝぎの色に香に。袖ふりはえし伶人の。舞樂のしらべ。未いく條にわかれたる。ながれての世は田樂といふもの出來て。もはらこれを弄びつ。閩里よりはじめて槐門に及び。その舞曲に。高足。一足。腰鼓。振鼓。銅鉞子。編木。殖女。養女等の數種あり。こは猿樂の一變したるものなりとぞ。いまだその起る處を知らず。むかし郁芳門院。白河院の皇女なり。賀茂の齋院にて坐せし。皇后な。殊にこの能藝を好ませ給ひしかば。姑射仙宮の内にさへ。召し催されて。田樂御覽の事。しばしなりき。この後五十五代の帝。後醍醐院の元弘年中。また洛中に。堪能の者。多く來り聚ひしかば。鎌倉の高時入道。本座新座の田樂を呼び下し。日夜にこれを舞踏らし。みづからもこの戲をなして。遂にその鹿を走らし。天下南北朝とわかれつ。北朝の九十七代。光明院の御時。貞和五年のころ。元弘より後な。田樂また盛に洛中に行はれ。將軍尊氏これを好み給ひき。抑田樂とは。田家の樂といふ義にや。その舞曲に。殖女。養女といふ名目あり。殖女とは。田を殖る女の事なるべし。養女とは蠶養する女の事にや。田を殖。蠶を養ふ。みな田家常の業にして。それらに打扮して舞なれば。田樂とは名けけん。しれるものに尋ぬべし。以上排儀 亦一説に。今の世に。豆腐を短冊形に切て。竹の串に貫き。ねり味噌を塗て焼を。田樂と稱るも。彼が舞踏るとき。長き竿に携る形容を思ひよして。この名を負はしたりといへり。愚按するに。放下刀玉は。田樂の所作なり。田樂廢れて。放下僧といふもの出來。そのち放下僧も。又廢れて。今は上竿伎のみあり。刀玉。今これを品玉といふ。法苑珠林に。西域の女戲に。五人三刀を傳弄して。加て十に至るといふ。これ刀玉なり。と駒谷山人いへり。匡房卿の洛陽田樂記を按ずるに。高足一足。腰鼓。振鼓。編木。殖女。養女等。みなこのころの曲目なり。その打扮。或は九尺の高扇を捧

或は平藺笠を戴き。或は藁の尻切を穿。或は裸形にして。腰に紅衣を巻き。或は髻を放ちて。田笠を戴く。と見えたり。みなこれ院中上皇の侍臣。仰によつて。この戯をなしたるなり。文安田樂能記（是年三月十七日。後花園院の皇子。伏見殿。田樂御覽。同十八日には。將軍義尚の連枝。今出川義視。田樂を見そなはせし事を記したり。文安は。後花園院の年號にて。明德四年より。五十六年後なれど。こゝにはたゞ田樂の事をならべいふのみ）の番附には。

勢田の春敵門の能

女沙汰の能

北野物狂ひの能

尺八の能

なるこの能

書寫の能

法然上人の能

小野小町の能

屏風の能

實方の能 以上十番

三月十七日。伏見殿これを觀給へり。次の日の番組は。八番なり。悉くかい寫さんは。くだくしかるべし。この後は。猿樂のみを催されて。田樂はいつとなく廢れたり。田樂の事は。粗説果つ。さても明德三年の十月に。南北兩朝の天子。おん和睦ましめて。天下やうやく一統し。萬民安堵の思ひをなす程に。同四年三月のころ。將軍足利義滿公。四條河原に棧敷を打たして。本座新座の田樂を興行し。竹園柳營の貴族より。洛中の士庶に至るまで。放しこれを觀せて。年來の軍役を勞ひ。且泰平の時を祝さすべしとて。只管この事を仰出されしかば。管領四職の老臣。肩を擡め。みなもろともに諫まうすやう。曩祖尊氏公のおん時。貞和五年明德四年に至りて。六月十一日。祇園の執行。行直といふもの。太平記には。四條の橋を渡さん料に。本座。新座の勸進田樂を興行せしかば。攝祿の大樹。座主。良賤の僧俗に至るまで。四條河原に棧敷を打てこれを觀たり。一の籠は。本座の阿古。亂拍子。新座の彦夜叉。刀玉は道一など。おのゝ堪能を盡す程に。やゝその曲も果て後。新座の樂屋より。猿樂を出して。その猿いと微妙舞踏の折から。忽地に事ありて。不慮に命を隕せしもの數百人に暨べり。かゝれば先蹤不吉なり。もし前車の覆るをもて。後車の戒となし給はずば。此度も災害あるべうも量りたし。努思ひとまり給へか

し。とおそるゝ稟せしかば。義滿聞もあへず冷笑ひ。汝達は只その一をしつて。その二をしらず。貞和の昔は。足利の武威いまだ全く振はず。こゝをもて夜叉天狗など。動もすればその隙を窺ひて。さる禍を起せしなり。今義滿が時に至りて。南帝を入洛なし進らせ。東西の強敵を討成て。四海はじめ無異に歸し。萬民今より天日を見る。獨樂して樂むと。衆と樂して樂むと。孰が樂き。衆と樂して樂しむにしかずとぞ。いにしへの人もいふなる。しかるを汝達。棟梁の武臣として。われに對して。かくまでに。女々しきことをいふは。意を得ず。と氣色あしくいひ懲らし給へば。衆皆再て諫るに言語なく。背に汗を流して退出しが。とかく心もとなしとて。件の老臣うち聚ひて商議し。貞和五年の田樂には。天狗山伏の爲に。夥の人を殺されたり。と世にはいふめり。かゝれば此度の田樂に。修驗の山伏を禁じて。棧敷の中へ入るべからず。且非常の衛護肝要なりとて。供奉の近臣に。よくそのこゝろを得さし。番卒等にも。この旨を下知したり。時に明德四年三月廿五日を。田樂興行の本日と定められて。將軍義滿公。午の比及に。室町花の御所を出給ひて。斯波。葉竹山の兩管領。四職頭人。昵近の武士。殿上人。上達部など。夥將て。河原の棧敷に入り給へば。洛中の貴賤。みな後れじと。こみ入りて。二百八十九間の棧敷に。爪立べうもあらざりけり。去程に楠河内二郎正元は。去年の冬。六田の旅宿にて。妻を喪ひ嫁に別れ。ひとり洛に潜ひ上りて。君父の仇人。將軍義滿を狙撃んとて。筈に寝。戟を枕とし。竊に便宜をかぐへども。足利の武威烈しくて。夏の日に異ならず。草木も靡けば隙をなみ。いたづらに年も暮。春も三月になりけれど。さく花を見ても。心を慰むるよすがにあらず。霞ならねどほだしとなる。操丸の事。秋野姫の往方。いかにあるらん。と思ひやれば。越路へ歸る天津雁。獵箭脱れて恙なく。世をししのぶ。と水莖に事問ふよしもあらし山。晝もくら馬の奥に隠れて。をりく洛中を徘徊し。ある時は鳥部野の乞兒に打扮。また或ときは。修驗の山伏に打扮て。室町の御所を窺ふ程に。三月すゑの五日には。將軍義滿。四條河原にて田樂を觀するよし。豫て風聲ありしかば。時至りぬ。と深く歡び。本日は早且よ

り。篠掛に兜巾して。長やかなる太刀を佩。網代の笈を背負つ。金剛杖を衝鳴らし。假山伏となりて。河原に赴き。群集の老弱にうち難り。しばし時刻をまつ程に。亭午の比に。大樹棧敷に入り給ひぬ。と響動たちて。衆皆走り騒ぐ。後方に跟て正元も。東の木門より入らんとするに。番卒等。桿棒を。左右より投かけて。遮留め。汝しらずや。けふの田樂には。山伏を禁制せらる。とくく退き候へ。といいかめしく制しけり。正元はこれを見て。あしくも打扮けりと思ひながら。騒たる氣色もなく。これは越路より。順の峯入りする修験者なり。道の次に。洛中。洛外の神社。佛閣。靈寶。靈跡にをがみ奉らんとて。杖を洛に引折から。かゝる壯觀に參りあふこそ。生涯の幸なれ。と歡び思ひつるに。われのみ入れたまはざるは本意なし。まげて只一曲を見せ給へ。といひも果す。うち合したる棒の上を跨ぎ踰んとしたりしかば。番卒等大きに怒り。こは狼藉なり。傳聞すや貞和のむかし。將軍尊氏公。この河原にて。田樂を禁せしに。天狗山伏の怪異ありて。夥の人を殺したり。この故に管領家の下知によつて。けふは山伏を禁制す。汝いかにいへばとて。許して内へやは入るべき。無益の辱を動して。縛められな。と罵るを。正元は聞ずがほして。柱る棒を拂らひ退。木戸より内へ衝と入れば。癖者ぞ。と騒ぎ立て。背より。面より。組留んとて鬨くを物ともせず。金剛杖をとりなほして。當る隨に打倒し。棧敷を倍と見渡せば。西面に高欄して。紫の幔幕に。引兩の紋著たるを引わたし。將軍義滿上上に光御ありて。公卿武士等。これを圍繞し。その爲體。風流の綺羅を盡さずといふ事なし。正元はこれを見て。盲龜の浮木。優曇華の。春にあふ心持して。些しも擬議せず。笈揺捨。幾萬人が群集せし。頭の上を飛越て。下なる棧敷の柱に手をかけ。仰上るばかりの高欄へ。閃々と攀登る。その疾こと。樹傳ふ猿に異ならず。登りも果す。聲をふり立。いかに義滿。故攝河泉三州の守。贈正三位近衛中將正成には孫。河内國千劍破の城主。廷尉正勝が弟。河内介正元を認めりや。果代君父の怨敵。やは逃さじ。と名告つ。太刀を抜懸して打て蒐れば。近臣吐塵。と推關。われ組伏んと防ぎ戦ひ。矢庭に撃るもの。八九人に及べり。その際に。義滿公は。

斯波義將。葉竹山基國等を將て。隣棚へ移り給ひしが。やがて室町の御所へ歸り給ひつ。穽の景迹。いと遠しくぞ見えし。されば今まで踊狂へる田樂法師等は。魂消て東西に走り躲れ。或は堵を失ひて。鼓を抱。笛を握もちながら。腰うちぬかして立も得ず。顔色は素袍の袖に等しく。花田に黄黒に。或は青く。或は土の如くなりし。伶人も多かり。まいて見物の老弱男女は。人崩打て。慌忙。いひがひなき婦幼。尼法師ばらは踏仆されて泣叫び。半死半生なるもの。いくそばくそといふ事をしらず。樂竭て。悲を生ず。人間の苦樂。只一瞬の中にあり。目もあてられぬ分野なり。かゝりける程に。補正元は。將軍義滿公を撃漏らして。遺恨限りなく。太刀の刃の續く程は。と敵手を擇まず。挑み戦ふに。非常の衛護として。召おかれたる。夥兵百人。鎗襖を作りて。正元をとり圍み。奮撃突戦。數刻に及べども。正元は。南蠻鐵の鏢帷子を被たりしかば。淺瘡だも負はず。元來双なき勇士なるに。必死と思ひ定めたれば。たゞこれ猛虎の羊を驅る如く。その鋒に當たるものなく。血は流れて豚鹿の野を浸し。屍は積て累々たり。かくは正元。只一人に撃惱されて。手負死人。數十人に及びしかば。長き春の日も暮たり。かゝる強敵をとり逃さば。忌々しきおん大事なるべしとて。葉竹山基國。討手の大將をうけ給はり。かさねて兵士を倍加へられ。稻麻竹葦にとり巻たる。焦火。挑灯は。晝星に異ならず。されど正元は。なほ一足も退かで。こゝろばかりは猛しといへども。その身鐵石にあらざれば。今はかうと思ひ絶。屋の棟を突破りて。櫓の上にうち登りつ。天を仰て長嘆し。後主降て。姜維が謀計成らず。嗚呼天われを喪せり。天われを喪せり。夫善惡正邪。因果應報の係る所。一旦の利運によつて遲速あり。久しく曲れる足利が。武き威に誇るとも。衰る時なからんや。こゝに寄せたる討手の大將を。葉竹山と見るは僻目敷。正元が死首取て。功名話説せんとならば。腹きるやうもよく見おきて。後迄も語り續ぎ。汝等が運竭なんときの。手本にせよ。と呼びかけつ。肚甲の上帯切て捨。血刀をとりなほして。左の肚へぐさと突立。きり／＼と引繞らして。みづから。脇を掴み出し。寄手のかたへ投著て。立たる儘に死したりける。この勇敢に恐怖

れて。しばしが程は近づくものもなく。なほいたづらに。うち瞻りて居たりしが。兵士四五人。屋棟に登りて。まづ鎗の鋒頭をもて。突動して見るに倒れず。とかくして。やゝその死たるを見究めしかば。遂に首をぞ取たりける。かくて次の日。正元の首級を日岡の山蔭へ梟られしかば。是を見るもの堵の如く。わが朝の豫讓にして。田横が義を兼たりとて。その忠孝勇猛を。唱嘆せざるはなかりける。この事はや。近國にかくれなかりしかば。浪速なる山迹家丹五兵衛。その妻阿也女は。お染とともに驚き悲み。しのび／＼にうち歎きしが。丹五兵衛がいふやう。足利どの、武運高大にして。正元遂に復讐の本意を得遂給はず。御最期の形容を思ひやるにも。遺恨さこそと推量られて。とかういふべうもあらねど。そは歎くともかひなき事なり。さればとて。おん首級を。馬の蹄にかけさせんは。いと朽をし。われは直に浴へ走せ上り。夜に紛れて盗みとり。しかるべき寺院へ。葬り奉るべしとて。忙はしく行装し。従者をば俱せず。只一人。十三里の道程を。直走りに走りつゝ。その日の曠昏に。京へぞ著ぬ。甲夜の間は。往來も途絶せず。守る人も油断すべからず。と深念して。小夜の深るをまつに。春の夜なれば短くて。はや人定も過たり。頃しも廿六日の。善悪もしらぬ闇き夜を。たどる／＼潜びよれば。番卒等は。焼捨たる筋火のほとりに睡臥たり。丹五兵衛はこれを見て。時分はよしと足を蹠。からうじて正元の首級を盗みとり。袖に楚とかき抱き。走り去らんとする。足音にや驚き覺めけん。十人あまりの野伏の番卒。もろともに頭を擡。癖者あり。と罵りつゝ。岸破と起て慌しく。手に／＼器械を引提て。群だち來たつて丹五兵衛を。うち挫がんと闘くにぞ。丹五兵衛は。逃とも脱さじ。と思ひしかば。まづ正元の首級を叢の中に投入れ。競ひてかゝる番卒等を。右に柱へ。左に隣け。縦横無碍に防ぎ戦ふ程に。うちかくる刺殺に。袈の袂を巻とめられ。隻袖さらりと斷離たり。丹五兵衛は。既に識の袖をとられて。後難脱れがたし。と思へば。命を惜まず突戦し。頻に袖をとり復さんとて。心ばかりは焦燥ども。六の臂もあらざれば。いと術なき折から。編笠深くしたる武士。忽然と走り來て。刀の柄に手をかくると見えし。件の袖をまき取たる番卒を。ばらりんずんと砍たふし。やがて袖を奪ひとり。叢の中なりける。正元の首級をさへとらんとするを。番卒等五六人引わかれて。面もふらず撃てかゝれば。彼武士は。已ことを得ず受柱へて。いと烈しくぞ戦ひける。浩所に。石の地蔵の背より。年齡六十に近き順禮の修行者。緋のやうを闕窺たりけん。つと出て。正元の首級をかき抱き。後方も見ずして走去れば。一人の番卒これを追ひうち。やと呼びかけて組留る。襟上擱てねぢ返し。後さまに撞と投退け。足に信して脱失たり。番卒等は。敵に加勢ありて。首級を奪ひ去ぬ。と思ひしかば。頻に法螺を吹鳴らし。事の急を告るにぞ。丹五兵衛は遂に志を果さず。こゝにて擲捕られなば。われのみ杖とも憑み給ふ。姫君いかになり給はん。と思ひやりつゝしかすがに。惜からぬ身もいと惜く。やゝ一條の道をもとめて。且戦ひ且走れば。件の武士も勇を奮ひて。一方を破開き。烏夜に紛れていちはやく。往方もしらすなりにけり。かくて丹五兵衛は。辛うじて日岡の危難破脱。通宵走りつゝ。次の日。浪花へ立歸るに。事既に勞して功なく。正元の首級は。何ものともしらす奪ひ去つ。わが隻袖を取たるは。敵か身方か。ととさまかうさま尋思するに。つや／＼思ひ合するよしもなく。心ますます安からねば。途にて日を暮らし。瓦橋なる。己が肆に歸り着にければ阿也女。お染は待わびて。忙はしく出迎。長途の疲勞を問慰めなどするに。主管是非八も。小厮等も。只活業の事によりて。堺わたりへ行たるならん。と思ふ氣色なれば。丹五兵衛は。些しおちみて。さて夕餐たうべけり。その間に。阿也女は。夫が脱捨たる衣を疊むに。きのふ上に被たりしを。下に襲てあり。やがて引き放ちつゝ見るに。左の袖は斷離てなし。こは不審。と思ふから。その夜是非八と小厮等を臥さして後に。親子三人。蒸襖たて籠て。浴のやうを問ふに。丹五兵衛は仔細なる物がたりをせず。只守る人のいとまなくて。本意を得遂ず。といふに。阿也女再て。さは宣へど。こゝろ得がたきは左の袖なり。こはいかにし給ひたる。と問へば。丹五兵衛答て。彼隻袖は。今朝しも淀の河船に乗りて歸るに。岸の茨に引とめられて。斷離たるを。得もとらざりし。と欺くにぞ。阿也女はなほこゝろもとなけれど。今宵夫がいたづらに。歸

れて。しばしが程は近づくものもなく。なほいたづらに。うち瞻りて居たりしが。兵士四五人。屋棟に登りて。まづ鎗の鋒頭をもて。突動して見るに倒れず。とかくして。やゝその死たるを見究めしかば。遂に首をぞ取たりける。かくて次の日。正元の首級を日岡の山蔭へ梟られしかば。是を見るもの堵の如く。わが朝の豫讓にして。田横が義を兼たりとて。その忠孝勇猛を。唱嘆せざるはなかりける。この事はや。近國にかくれなかりしかば。浪速なる山迹家丹五兵衛。その妻阿也女は。お染とともに驚き悲み。しのび／＼にうち歎きしが。丹五兵衛がいふやう。足利どの、武運高大にして。正元遂に復讐の本意を得遂給はず。御最期の形容を思ひやるにも。遺恨さこそと推量られて。とかういふべうもあらねど。そは歎くともかひなき事なり。さればとて。おん首級を。馬の蹄にかけさせんは。いと朽をし。われは直に浴へ走せ上り。夜に紛れて盗みとり。しかるべき寺院へ。葬り奉るべしとて。忙はしく行装し。従者をば俱せず。只一人。十三里の道程を。直走りに走りつゝ。その日の曠昏に。京へぞ著ぬ。甲夜の間は。往來も途絶せず。守る人も油断すべからず。と深念して。小夜の深るをまつに。春の夜なれば短くて。はや人定も過たり。頃しも廿六日の。善悪もしらぬ闇き夜を。たどる／＼潜びよれば。番卒等は。焼捨たる筋火のほとりに睡臥たり。丹五兵衛はこれを見て。時分はよしと足を蹠。からうじて正元の首級を盗みとり。袖に楚とかき抱き。走り去らんとする。足音にや驚き覺めけん。十人あまりの野伏の番卒。もろともに頭を擡。癖者あり。と罵りつゝ。岸破と起て慌しく。手に／＼器械を引提て。群だち來たつて丹五兵衛を。うち挫がんと闘くにぞ。丹五兵衛は。逃とも脱さじ。と思ひしかば。まづ正元の首級を叢の中に投入れ。競ひてかゝる番卒等を。右に柱へ。左に隣け。縦横無碍に防ぎ戦ふ程に。うちかくる刺殺に。袈の袂を巻とめられ。隻袖さらりと斷離たり。丹五兵衛は。既に識の袖をとられて。後難脱れがたし。と思へば。命を惜まず突戦し。頻に袖をとり復さんとて。心ばかりは焦燥ども。六の臂もあらざれば。いと術なき折から。編笠深くしたる武士。忽然と走り來て。刀の柄に手をかくると見えし。件の袖をまき取たる番卒を。ばらりんずんと砍たふし。やがて袖を奪ひとり。叢の中なりける。正元の首級をさへとらんとするを。番卒等五六人引わかれて。面もふらず撃てかゝれば。彼武士は。已ことを得ず受柱へて。いと烈しくぞ戦ひける。浩所に。石の地蔵の背より。年齡六十に近き順禮の修行者。緋のやうを闕窺たりけん。つと出て。正元の首級をかき抱き。後方も見ずして走去れば。一人の番卒これを追ひうち。やと呼びかけて組留る。襟上擱てねぢ返し。後さまに撞と投退け。足に信して脱失たり。番卒等は。敵に加勢ありて。首級を奪ひ去ぬ。と思ひしかば。頻に法螺を吹鳴らし。事の急を告るにぞ。丹五兵衛は遂に志を果さず。こゝにて擲捕られなば。われのみ杖とも憑み給ふ。姫君いかになり給はん。と思ひやりつゝしかすがに。惜からぬ身もいと惜く。やゝ一條の道をもとめて。且戦ひ且走れば。件の武士も勇を奮ひて。一方を破開き。烏夜に紛れていちはやく。往方もしらすなりにけり。かくて丹五兵衛は。辛うじて日岡の危難破脱。通宵走りつゝ。次の日。浪花へ立歸るに。事既に勞して功なく。正元の首級は。何ものともしらす奪ひ去つ。わが隻袖を取たるは。敵か身方か。ととさまかうさま尋思するに。つや／＼思ひ合するよしもなく。心ますます安からねば。途にて日を暮らし。瓦橋なる。己が肆に歸り着にければ阿也女。お染は待わびて。忙はしく出迎。長途の疲勞を問慰めなどするに。主管是非八も。小厮等も。只活業の事によりて。堺わたりへ行たるならん。と思ふ氣色なれば。丹五兵衛は。些しおちみて。さて夕餐たうべけり。その間に。阿也女は。夫が脱捨たる衣を疊むに。きのふ上に被たりしを。下に襲てあり。やがて引き放ちつゝ見るに。左の袖は斷離てなし。こは不審。と思ふから。その夜是非八と小厮等を臥さして後に。親子三人。蒸襖たて籠て。浴のやうを問ふに。丹五兵衛は仔細なる物がたりをせず。只守る人のいとまなくて。本意を得遂ず。といふに。阿也女再て。さは宣へど。こゝろ得がたきは左の袖なり。こはいかにし給ひたる。と問へば。丹五兵衛答て。彼隻袖は。今朝しも淀の河船に乗りて歸るに。岸の茨に引とめられて。斷離たるを。得もとらざりし。と欺くにぞ。阿也女はなほこゝろもとなけれど。今宵夫がいたづらに。歸

れるに望み失ひて。うちひそめく折なれば。かさねてはいひも出でず。次の日より。囉齋に物とらして。晝も家廟に御燈を進らし。香もりそえて。お染もろとも。密に正元の菩提を弔ひぬ。かくて三月も盡て。四月もはや。三日四日といふころ。年紀三十あまりなる。武士の浪人とおぼしきが。鳥羽二重の小袖は。申の時になん／＼として。尻のあたり。わきて赤やかなるを。只一ツ被て。月代五分ばかりに伸し。よれたる帯を結び。朱室の兩刀を跨たへ。煤染たる編笠を脱捨つ。呼門して。山迹家が店前より。上坐に無手と推なほりて。主人に逢んといふ。その形容。面色白く。眉黒く。髯は青みて唇赤く。黄みたる扇笏に取たる。居丈いと高し。寔に一癖ありぬべき面魂なれば。小厮等は。まづこゝろに五分の怕害を生て。遠しく主人に絆の趣を告るに。丹五兵衛は。聽て立出て對面し。慇懃にその姓名を問へば。彼武士答て。われは山家税平と呼ばれて。年來京。浪速の間に僑居し。劍法の師範するものなり。しかるにわれ。足下の令愛お染とやらんを娶るべき宿縁あり。故に詣來て來歴を説のみ。とく／＼お染を出して逢し給へといふ。丹五兵衛は。これを聞てしぼし呆れつ。顔うち靨り。こは狂人なり。と思ひしかば。いよ／＼言語を卑くし。あらおもひかけぬ。さるかたざまより賤しき商人の女兒を娶らん。と宣はすること。こよなき僥倖なれど。只ひとりの女兒なれば。こなたへこそ婿を招るべけれ。加之。彼にははや結髪ゆひぢげの夫あり。こは縁なきにこそ。といはせも果ず。税平は呵々とうち笑ひ。その招女婿。元來所望なり。われには既に媒妁ありて。姻縁を締るに。外に結髪ゆひぢげの夫。あるべうも覺えず。お染が夫といふは何ものぞ。名告しらし候へ。といきまくその聲の。や／＼高くなるまに。阿也女もお染も。こは何事やらん。とおぼつかなくて。出居のかたなる暖簾の陰に立在。且闕窺。且竊聞するに。丹五兵衛は。騒きたる氣色もなく。税平に對ひ。某おん身に。女兒を妻せんとて。假にも約諾せし事はあらず。何人が媒妁せし。まづそのものより名告しらし給へ。といふに。税平はさもこそと冷笑ひ。いてや媒妁をしらすべし。これ見給へ。と應つ。懐中より丹五兵衛が隻袖をとり出して。左手に高くさし翳し。泰山どの。これを認れり

や。と間に。丹五兵衛は大きに驚き。睜しくとらんとする手首。丁と拂ひ退。いぬる三月廿六日。大津にあらで丑三ごろ。路いと闇き日岡の山蔭に梟られたる。楠正元が首級を盗みとらんとて。潜びよりたる癖者あり。そを脱さじとて番卒等が。打かくる刺扱に。袷の袖をかきとられ。必死と戦ふ折しもあれ。われ行かゝりて見るに忍ひず。とり復したる隻袖は。色も花田にお染が媒妁。かくても固辭や。變改するや否といへば。この袖をもて。葉竹山どの、宿所に赴き。審に訴なん。正元が首級にこゝろをかくる。油の問丸丹五兵衛。こは問ずとも楠が。殘黨なりとはしらるべし。縁しを締るべこの袖の。片腕とたのみ憑る。婿翁は親子に等し。推辭ときはこの袖の。片腕失ふ妻子も同罪。こゝろを定めて回答せよ。とよわみに跟入る傍若無人も。時にとつては理の當然。とられし胸も隻袖も。すゑはもつれし麻糸の。有無の二ツに丹五兵衛は。苦しき隨に思ふやう。世を潜び給ふから。物體なくも女兒と呼ぶ。主君の息女を素姓もしらぬ。瘦浪人の妻にせんや。これのみならで姫君には。操丸とまうす夫あり。わが身を捨るは數ならねど。楠氏の餘類としられては。姫君のうへも危し。とせん。かくせんに。今さら脱れかた袖の。うらみてもかひなかりけり。お染は聞くに堪かねて。走り出つ。紙剪の小刀をかいとりて。吭へ突立んとしたりしかば。阿也女は吐嗟と走り出。丹五兵衛もろともに。右より左より抱き留。こは物にや狂ふらん。自双せんとは何事ぞ。と禁る顔をうち觀り。涙は袖にふりかゝる。親の難義もわらはゆる。幼少て別れても。結髪ゆひぢげの殿在すに。操を破り身を汚し。他し夫に伴はれ。百年千年存命るとも。世にあるかひの侍らんや。今面あたり墓なくならば。娶らんといふ人の。望も絶て袖もかへり。是彼無異にとり結ぶ。柳の糸を墳標。無常の風は誘ふとも。思はぬかたへは得も離かぬ。女子の操を遂げさし給へ。とかき口説つ。よ／＼と泣。理なれば丹五兵衛も。阿也女も共にはふり落る。涙を拭ふ袖は仇。物體なしともいひかねて。さまざまに諫めこしらへ。やうやく双をとりかくせば。お染はいよ／＼泣沈み。放ちて殺し給ひね。と父に啣。母にかこち。思ひとゞまる氣色なし。當下主管是非八は。油桶の銅具。かい磨きて居た

りしが。うち薬をもて十の指をひとつづつに。引も抜くばかりに拭ひつゝ。店の櫃に這ひ登り。まづ税平に對ひて頭を低。僕は丹五兵衛が主管に。是非八と呼ぶものなり。目今聞くがはじめなれば。縁由はよくもしらねど。さし詰たる主の難儀は。その蔭にたつ。小厮等までが難儀なり。ともかくもして。お染どのを説諭し。この婚姻を整へ進らすべし。さはいへ。見給ふ如く。死んとまでに思ひ究たる。小女兒の片意地も。いはゞ三五の生ごころ。それがそれにて立果すにもあらじ。今且く待たまへ。威勢もて逼りなば。釋迦に鮮鮓も食すべけれど。彼より離き従はざれば。趣なし。かばかりの事はまうさずとも。猜し給ふにやあらんずらん。といと信やかに勸解にぞ。税平聞てうち點頭。げに汝がいふ所さもありなん。しかりとも。後の證據なくては。一ち日も放べがたし。汝いよ、お染を諭し。目今證を見するや。と問へば。是非八うち微笑み。そは宜ふまでもあらず。おのれ計ふやうあり。と應つゝ。主の丹五兵衛がかたに小膝をおし向。今聞き給ふ如くなれば。只一筆。今茲年極の晦日を限りに。お染と婚姻さすべし。と書しるして遞與給へ。しかればその證文と。隻袖と引かへて。異なくをさまる今夜の悶著。滅えなんとする燈火も。忽地に擡活す。油杜事が一世の忠義。もつべきものは主管なり。とわれから響るも。傍痛く。丹五兵衛はつくづく。と思へど思ひ定め得ず。かれより先へ自双せん。と只管。思ひ定め給ひし。姫君の心操に。身を羞ては。假初にも。阿容阿容として婚縁の。證の書をやは寫ん。さらては絆の破れとなる。後の難儀とさし當る。難儀にいとゞ苦しき胸を。推量つゝ、芝折たる。阿也女は夫の袂を引。躊躇給ふことやある。一寸延れば尋延ると。世の常言にいふ如く。悔てもそのせんき袖は。ふり拂はれぬ今宵の厄難。頃は四月のはじめなれば。夏秋冬と全九箇月。その間には彼君のおん往方を尋索めて。ともかくもなるべき事なり。亦お染も聞わき給へ。おん身が命を隕せばとて。爹々に恙なきにも待らず。よしやわらはふたりがうへに。幸を重るとも。主君の息女。といはんとするを。丹五兵衛は咳して。これを禁め。扱税平に對ひつゝ嘆息し。げに思ひ誤らぬ。今證文と引かへに。その袖返して給はらば。これを親子が厄

おとし。大晦日を限りの婚姻。春までまたぬ室の梅。咲するも又散するも。女兒お染がこゝろ一ツ。二ツの弓を舞も商人。うき世の義理も命には。かゆる物かは。と應して。やうやくに手をかけ硯の。蓋反かへし摺る墨も曲らぬ性を枉て書。夏毛秋毛の筆の迹。冬の終を主従が。一世の浮沈。事稱すば。身をや捨なん只憑む。彌陀の御國の西のうち。かみも守らせ給へとて。神を誓ひに偽の。證書をさし出せば。税平是を取て讀くだち。卷かへして懐に挟め。かゝる證據あれば年極までは待べし。この隻袖に締びし婚姻。わが爲には舅姑。親の威光はかゝる時なり。お染に教訓し給へ。といひつゝ。袖をさし復せば。丹五兵衛取て押戴き。婿とはいへど命の親。たゞこの事はこゝ限りに。そは宜ふな泰山どの。刀に残るその夜の鮮血。いひあらはせばわれも脱れず。是非八はこゝろ得たらんが。小厮よ。かならず忘れても主の陰事人にないひそ。とはじめにかはる笑の眉。ひらくといふも祝儀の言の葉。花婿がほに立歸る。税平どのを送り給へ。とわりなくお染を引たつる。母の阿也女も袖ぬらす。安積の沼の花かつみ。葺や阜月の丹五兵衛が。深き思ひは得ぞしらぬ。是非八が信だちて。なほす草履も客ぶりに。善悪いまだしら紋り。油屋お染が浮名を流せし。これその張本なり。

松染情史秋七草卷之四

第七 葬に呼ぶ しのめ草

山里の。しのめ草のしのめに。あくもうれし朝顔の。花よりもなほ果敢なきは。只人の世の榮枯なり。さても楠譜代の忠臣。津積雀六有義は。いぬる永徳元年秋のころ。主君正元の密詔を稟て。罪なき罪に追放され。僅に四歳なりける。正元の嫡男操丸に俱して。肥後國へ赴き。名を久作と更めて。菊地武政が采地に身を潜め。農業漁獵を業活として。十二箇年を過す程に。河内國には。南朝の元中八年に。和田正武病死せしよし聞えしかば。西海の宮方。いよ、英氣を失ひて。武政が武威遂に振はず。加之。今茲北朝の明徳三年。南朝は元中九年。千劍破の城没滅して。正勝。正元の存亡定かならず。閏十月に。南北兩帝。御和睦整ひて。南帝。後龜山。入洛まし。嵯峨の大覺寺を仙居とし給ふよし。西の果へも聞えしかば。久作は頻に驚嘆し。とるものもとありあへず。やがて河内へくだらんとす。しかるに操丸は。やゝ十五歳になり給ひて。鄙に生育給へども。容止の艶なる。いへばさらなり。學ばずして文武の道に伶俐。名家の苜。おのづから。その氣にあらはれて。未憑しく見え給へば。久作は敵に疑れん事を怕害て。幼少より楠氏の嫡男なるよしを告す。久松と呼びかへて。おのが子として孚みつ。われ見ても久しくなりぬ住吉の。松の操と久後を。心に祝くともしらず。久松は久作を。實父とのみ思ひしが。十二といふ春の頃。久作にいへりけるは。扱もわが父は。よろづの動靜。士民の子とも見え給はず。先祖はいかなる人にかありけん。名告しらし給へかし。と間に。久作は坐に涙を落し。おん身が問ところ究てよし。われは壯年を過るまで。河内の國司に仕たりしが。妻な

るものは世を早くし。剩へ恨ありて。彼地を追放せられしかば。世間を形なく覺えて。かく鎮西に漂泊せり。又おん身は。わが實の子にはあらず。三歳歎。四歳歎。とおぼしき頃。河内なる小松山の麓にて拾ひしが。闕子なれば。父母を。誰ならん共えしらず。但護身囊の裏に。野崎の觀世音をうつしたる小像ありき。こはおん身が親の形見なれば。日來秘藏し給へ。といひつるなり。この事とくにもしらせまほしく思ひつ。言の叙なくて黙止たり。なほ告るよしあれど。今は時なほ早し。廿歳にもなりなば。わが思ふよしをいふべけれ。と誠しやかに回答しかば。久松聞て。原來わが身は闕子なりしを。父親の手一ツにて。かくまでに孚給はりしは。生産の恩よりいや高し。さりともしらず年月を。いたづらに過せしこそ。かへすくも悔しけれ。と信だちて。いよ、孝行に事しかば。久作はいと心苦しく思へども。主従なるよしはふかく匿つ。そのころ。操丸なほ稚ければ。人に漏らし給ふ事もあらんかとてなり。時に明徳三年十一月の上旬に。大和河内の凶音。ふたゝび九州へ聞えしかば。久作は十二分の憂苦をかさね。正勝。正元のうへ。心もとなければ。有一日久松にいふやう。河内はわが故郷なれど。彼處の親族朋友も。死果たれば。音耗するよしもなく。十餘年を過せしが。この地も年來の兵亂に。土瘦。民勞れて。生活の便著いと薄し。河内は憚る國なれど。今は夥の年を経て。認れる人もあらじと思へば。故郷へ歸りなん。行装せよ。といそがしつ。寒家は。もの整る事もやすく。一盞の笠。一條の杖。草鞋の紐を結ぶ外に。旅の準備すべうもなく。やがて西海を起程し。久松もろとも夜に宿り。日に歩み。十一月下旬に。河内國。讚良郡。野崎の郷に著て。まづ觀世音の堂守たる老僧を訪に。彼は五年已前に身まかりて。今の堂守は默善と呼れ。先の堂守が弟子なり。その性の愚直なる事。師父にもましたればとて。近郷の農夫ばら。これを正直坊と渾名しつ。さて久作は。默善にわが身肥後より來れることを告。舊の老法師とは親しかりしよし物をたるに。正直坊は。楠の殘黨なりとはしらねど。親子が便着なき趣を聞て。ふかく憐み。いと親切にもてなして。兩三日堂内に寄宿し給へ。といふに。久作も久松も。いと憑しく覺え

て。次の日村長に相諱。野崎の郷稍盡處に。ふりたる空房あるを購ひ得て。久松とともに膝を容れ。親子二人。ともかくもして。口を餓ふに。一畝の田園も所持せざれば。久松は。日毎に野山に出て秣を刈。久作は薪を樵。或は人に傭はれて馬を牽。辛じてあらたまの春を迎たり。かゝりし程に。久作は。潜に世の風聞を聞くに。千劍破の城没落のとき。正勝は十津川へ漂流せしが。箭傷愈ずして。去年の師走身まかり給ひつ。又正元は。六田の山里に躲れ居りて。瘼の癒るをまちわび。吉野の皇居へ參らんと。思ひたまひしが。南帝入洛ましませしかば。憤に堪ずして。洛のかたへ赴き給ひぬ。といふ。なほ覺つかなければ。彼此にて聞に。大かたは違はず。當下久作はつくづくと思ふやう。廷尉正勝を。墓なくなり給ひしこと。いと悼しけれど。そは歎くともかひなし。河州正元を。は。勇敢武畧。兄に勝れ給へば。かならず洛へ潜び上りて。室町將軍を狙撃たんと。思ひたち給へるなるべし。さらばわれも京へ赴き。いかにもして環會たてまつりて。操丸の恙なく成長し給へるよしを告奉り。その先途を見進らせばや。と尋思して。久松には。只宿願ありて。長谷。清水の兩處の觀世音へ參詣し。道の次に。洛中の靈場ををがみ奉らんと。思ふに。五七日の間。よく留守し給へ。と聞えおき。藥苞を背負ひ。匙箭の柄杓携へて。通路乞食しつ。洛を投て起行けり。頃は三月の下旬旅おもしろき春の日も。身に憂雲のかゝる世に。われのみ秋のこゝちして。遂に洛へ着たるその日に。今朝日岡に梟られたる。楠正元の首級を見んとて。人影奔走す。久作はこの形勢に。こはいかに。と驚き思ひ。路の傍なる茶店に立ち。緯の趣を問へば。主人答て。きのふ室町將軍。四條河原に棧敷を打たして。田樂を擲せしを。楠正元窺ひよつて。撃奉らんとするに。近臣これを防ぎ戦ふ程に。室町どのの脱給ひつ。正元は比類なき勇士なれば。思ふ隨に車戦し。遂に自殺したりしかば。その首級を。日岡なる山蔭へ梟られたり。さればこれを見んとて。衆人の罵り走るなれ。と物語りするに。久作はますく。嗟嘆し。僅に後れて。正元の最期に參りあはざりしを。ふかく意中に歎けども。後悔そこに立ざれば。せめておん首級なりとも盗とりて。故郷の土となし奉らめ。と思ひかへしつ。

やがて日岡に赴き。群集の老弱にうち雜りて。梟木を仰上れば。生るが如き勇士の首は。照る日岡に梟られて夥の人に見られ給ふ。こは淺まし。と世をはかなみ。いと口惜くも悲しく。遺恨に涙禁めあへず。たゞ憤を忍びつ。人に疑れじとて。やがて樹の蔭に走り入り。この夜を化に過ぎじ。と思ひ定めしかば。甲夜より日岡なる。石の地蔵の背に身を潜まし。野伏の兵。等が隙を窺ふ程に。更闕て。誰とはしらず。われに等しく。正元の首級を奪ひとりんとて。竊びよるもの二人ありけり。かくは件人の徒。は。や番卒に遮留られ。命を限りに戦ふにぞ。久作はこの騒ぎに紛れて。輒首級をかき抱き。足に信して逃去りけり。この段詳に三の。方に是。兩虎食を争ふときに。狐その虚に乗といふ類なるべし。さる程に。久作は。通宵走りて。攝州より河内路へと歸り去くに。世に憚れば卒忽に。正元の首級を奪得ず。次の日も。ますく走りつ。思ふやう。志紀の毘沙門天と。野崎の觀世音は。正元年來信仰淺からざりしに。大悲大慈の境内に葬進らせなば。井の引接によりて。冥土の苦艱を脱れ給ふらめ。と深念して。その夜亥中の比及に。わが郷近く歸り來つ。笹を躓て。觀音堂のほとりに潜び入り。藪蔭の土を掘起して。首級を壘んとするに。一挺の鋤だに準備せざりしかば。腰なる柄杓の頭を拔去。その柄をもていとふかく掘るほどに。思ひの外に夜は深たり。こゝに又野崎の村長に。鈍平といふ老人ありけり。これが兒子。鋤九郎といふもの。今茲三十を一期として。三月のすゑに世を去にければ。父の哀悼いふばかりなかりし。かくてあるべきにあらねば。親族。隣人に諫られ。この日は。中の垣内と。日下の里の間なる。善根寺へ送葬せんとて。棺を擡出せしに。川上や雨ふりけん。龍間川の水俄頃にまして。渉るべうもあらず。この川常は。膝の節を浸ばかりなる淺瀬なれど。水ますときは。急流矢の如くにて。船も筏も棹をたつるによしなし。しかれども。水の落ること。又速にして。四五日を過ぎず。さて鈍平が親族は。棺を川の上に扛おろして。いかにせん。と議するに。一人が。いふやう。とてもかくても。この川を渉さずして。善根寺へ到りがたし。さればとて。棺を扛もどさんも難儀なり。所詮正直坊をこしらへて。棺を觀音堂に入れお

き二三日が間。水の落るまで。彼坊主に守らすべし。といふに。衆皆。しかせん。しかせん。と應つゝ。聽て棺を野崎の觀音堂へ。と扛もてかへし。正直坊に。緋の趣を告げて憑み聞ゆるに。出家人の事なれば。固辭によしなく。默善はしぶりながら。漸やく領諾したりしかば。皆歡びて。棺を堂内の隅に扛居。屏風もて来て立繞らし。おのゝ宿所へ歸りけり。かくて正直坊は。思ひもかけず新亡者を領りて。その夜さり只ひとりうち膽りをるに。生道心の事なれば。何となく物のおそろしくおぼえて。誰そ來よかしと思ふ折から。所に名たる破落戸に。野草槇の出九郎といふものありけり。定めたる宿も生計もなく。只賭博をもて酒食に給。あしき友とのみ交參に。打ちつゞきて命凶く。兄と稱。弟と呼ぶ友だちにも疎れて。せんすべなきに。野崎の觀音堂へ籠りて。一夜あかさばやとて來にけり。正直坊これを見て。間人ほしき折なれば。日來には似げなく。いと信やかに管待して。山茶煮て喫せ。村長が子の棺を領りたるよしを物がたりするに。出九郎は。默善が臆病なるをよくしりてければ。今昔の事をとり雜て。狐の人に憑たる。或は妬女の死して。夫をとり殺したるなんど。いとおどろくしき物がたりのみする程に。正直坊は。忽地に面色土のごとくなりて。其處にたまり得ず。われは今夜。何がしが庚申待に來よ。といひしを。直とうち忘れたり。野草槇のぬし。しばし留守してたべ。といひかけて。忙はしく法衣引被。蕉火ふりてらして走り去りにければ。出九郎はひとりをかしくて。默善が袂と取り出てうち被ぎ。思ひの外に。暖なる。この夜をあかさかな。とひとりごちて。枕引よし睡らんとするに。怪しむべし。前面なる藪のほとり。ざはくとするを。犬か狐か。と枕を敲つゝ聞くに。人なり。こは不審。と思ふにぞ。端ちかく起出て。竊に緋のやうを窺へば。また藪の蔭を掘がごとし。何するにかと心憎くて。つと燈火をさし向けつゝ。癖者。と呼びかくる。聲もろともに藪の中より。はつし。と打銑鏡に。出九郎は袂を縫て。その身に着なけれども。よく認め。と思ひしかば。叫苦と叫びて。仰さまに倒れけり。當下久作は。正元の首級を埋果て。徐に堂の縁づらに。歩みよりつゝ見るに。わが打仆せしは。郷の壯俊出九郎なり。這奴突て惡

棍なれど。われに于て恨もなきに。あた罪造りにけり。と今更に痛ましく思ひながら。大事のまへの小事にこそ。とわれから心を鬼にして。藪を潜りて脱去ぬ。出九郎は死たるおもちして。久作を楚と認にければ。やをら身を起して。まづ打かけたる銑鏡を引拔。灯光にさし寄つゝ。と見かう見れば。双物にはあらで。柄杓の柄に。河内國讃良郡野崎久作。と寫したれば。ふかく歡び。やがて指燭して。藪蔭にいゆきて。目今物を埋めたらん。と思ふ處を掘起せば土中五尺可にして。人の首ありけり。さすがの悪棍なれど。大きに驚き。引も出さで。藪の如く土を覆ん。としたりしが。忽地に。奸計を生て。件の首級をもて歸りて。觀音堂の縁の下へ投入れ。魔除のためにやあらんずらん。棺の上へ載たりける。刀をとりて。遽しく。蓋をうち開らき。死人の首をかき。落して。刃を鞘に納め。首を藪蔭に埋めて。柄杓の柄をもておのが股を突傷り。又仰さまに倒れて。正直坊が歸るをまつ程に。默善は瀕に出九郎に壓冷され。隣き里人が家に到て。壯俊等呼び起し。如此々々の事あるに。今宵は御堂に通夜したべ。と憑み聞えて。兩三人を誘引て歸り來つ。と見れば。出九郎は血に塗れて。縁類に倒れ。棺さへうち開きたるが。鋤九郎が屍に首はなし。こはそもいかに。とばかりに。衆皆大きに驚き呆れ。まづ出九郎が面へ水を吹かけ。藥劑を口に含まして。聲高やかに呼び活れば。出九郎はやうやくに。われにかへりたるおもちして。頭を擡。正直坊等を見かへりて。太やかなる息を吐き。阿。遅かりし。世に盜賊も夥あれど。死たる人の首を盜めるは。いかなる物數寄にかありけん。われその盜賊を生拘んとして。却て一拳に打たふされ。剩太股をしたゝかに突かれて。敵すべうもあらず。件の賊はやがて棺をうち開き。屍の首を刎て。藪のほとりへ埋めつゝ。忽地に脱去りたるを。夢のやうにおぼえたり。世には怪有なる奴もありけり。と虚言實言うち雜て物がたれば。正直坊等はますゝ呆れ。その盜賊はいかなる打扮なりし。認れるものにはあらずや。と問に。出九郎答へて。楚とは認めど。わが郷なる久作に似たり。打かけたる竹篋は。證據となるべきものなりや。よく見給へといひつゞし出すを。正直坊は。里人とともに。つらく見て。ふた

たび驚き。こは筈にあらず。柄杓の柄なり。野崎の久作と寫したれば。これにます證據はあらじ。まづ施主に緯の趣を告給へ。といそがし立て。一人の壯俊を。村長鉦平許走らするに。鉦平はこれを聞て。且驚き。且怪しみ。その人とともに。喘々走り來つ。是彼の長僉議に。春の短夜はかなく明たり。扱鉦平は。出九郎がいふ隨に。藪蔭をば堀らして見るに。果して。土中より鋤九郎が首を掘出しぬ。當下鉦平は。衆人に對ひていふやう。世に武者修行といふことをする猛者は。人の首を。國々の靈場へ埋めて。首塚を築といふなる。彼久作は。近曾わが郷へ流來たるものにて。本國も定かならず。思ふに武者修行の類なるべし。事私には計がたし。出九郎は證人なり。われと共に來よ。と誘引たて。やがて山名が老臣。縣守何がしが宿所へ參りて。一五一十を訴しかば。さらば久作を擲捕るべし。と下知せられ。俄頃に捕兵を向られたり。ともしらずして久松は。父久作が昨夜深て歸りければ。詰且は放やかに睡らし。その身は朝まだきに起て。火を打。水を汲み。炊ぎ果て後に。父を呼び覺して。朝飯をすゝめ。けふはなほ長途の疲勞もあるべければ。休足し給へ。といひ慰め。草籠を背負ひ。利鎌を携へ。秣刈にとて出たるが。道十町ばかりゆきも果す。忽地に胸うち騒ぐにぞ。家に老たる親のある身は。何となく心もとなくて。其處よりとつてかへし。わが宿ちかくなるまゝに。前回を倍と見れば。縣守の夥兵五六人。村長鉦平と。野草槇出九郎を後方に立たし。久作をいたく縛て來にけり。久松は。この形勢に驚き悲しみ。路の傍に躊躇して。縣守が夥兵等に對つていへりけるは。是は久作が一子に。久松と呼ぶるものに侍り。抑わが父は。いかなる罪犯によりて。かく縛め給ふやらん。緣由をしらし給へかし。といひもあへず。はふるゝ涙泉のごとく。かき拭へどもなほ竭ぬ。歎はおなじ久作が。物いひたげに立。在めば。兵士等も木石ならねば。いと哀に覺えて。久松を見かへり。汝が愁傷理なれど。久作は。昨夜野崎の觀音堂に潜び入り。村長鉦平が兒子。鋤九郎が死首をかき欲て。首塚を築き。剩へ出九郎に淺瘻負したるにより。わが們。縣守の命を稟。擲捕て將てゆくなり。願はしき事あらば。まづ鉦平と。出九郎に勸解て。もろともに命乞せよ。

と説諭し。久作をいそがして。走り去んとしたりしかば。久松はいよゝうち泣つ。慌忙で縲綖に携着き。仰せることなるべけれど。わが父は年老たれば。人ともあらがひをせず。こゝろを象教によして。をさく物のあはれをしるに。よからぬ所行はすべうも覺えず。こは恨あるもの、讒言に侍るべし。よしやその事證據ありとも。聊法をこゆるぎの。五十にあまる老が身を。獄舎に繋れ。笞に打れ。苛き呵責に勞れなば。果は朝の露の玉。碎てものを思ふ子が。一生泣とも。叫ぶ共。いかでそのかひ侍るべき。さても脱れぬ罪ならば。久松を縛て。父を許さし給ひね。とかき口説こそ理なれ。久作もはふり落る。千行の涙を拭んにも。苦しき胸を拊んにも。索は背へかゝる手の。とどかぬ思ひに悶えつ。やよ久松。親として子を慈むは。禽獸だも異なることなし。況て義理あるおん身なれば。只玉椿の八千代までも。と神に祈らぬ日もなきに。われに代りて縛られ。命もたえて惜からず。と冀ふ孝行は喜しとも思はぬかし。今茲は十五になりぬれば。年來父が思ふ程を。告もしらせんとばかりに。いはて悔しき麻糸の。長き別れとなりもせば。死しての後も彼君へ。いひとくによしなかるべし。護身囊の觀世音。親の像見を忘れなよ。ながらふる世に水鳥の。志紀に名高き多門天。野崎の郷なる觀世音。朝な夕なに禱なば。終に實の二親を。名告もしらし給はめ。と河内に勇き楠の。稚枝なりとは告かねて。心ならずもいひ遺す。言の葉ぞなき罪人の。名をし老樹の根にかへる。春の餘波の花曇。晴やらぬ身を啣つとは。しらてそいと啜咽。久松いよゝ嘆哭。義理ある子とは情なし。養の恩高き。ひとりの親を見つゝ殺して。しらぬ父母索よとは。老ての愚癡歎。疑ひてか。わが身を代らし給ひね。と勸解つ。口説つ。責縁子さへ。煩惱の羈。愛惜の。絆に狂ふ意の駒に。いはぬもつらしむさし鏡。かゝる時にぞ死を究めたる。久作は聲を激し。かひなき事をかき口説て。親に罪をまさするは。いと愚なり。と叱りも果す。兵士等を見かへりて。誘給へ。と會釋する。健氣なる親。孝行なる。子にし泣れていと猛き。兵士等も袖濡す。涙の河内しばし委む。春の野崎の村雨に。四鳥の別れ五六町。後に跟子にうしろ髪。引れてぞゆく親ごころ。思ひやらね。

て哀れなり。

第八 女郎花に稱る 思ひ草

誰が折る。嵯峨野の原の思ひ草。われなきならば花はさくとも。舊の根をしもしらぬ子の。久後をおもひやる。親の歎きは故ありとも。晴らねば久松は。只その罪に代らんと。願言も絶て稱はず。哀慕の涙やるせなく。兵士等が教にまかして。村長鈍平が家に到来て。父の誤を勸解。或は出九郎を寛むるに。人の性はおのゝ善ならざることなし。鈍平は勿論。悪棍の野草槓も。久松が孝行に自を羞けん。彼が請隨に。三人齊しく縣守の宿所に赴き。久作が命乞をするに此度洛には。日岡に梟られたる。楠正元が首級を奪ひ去たる癖者あり。倘久作も。これらの支黨にやあらんとて。許されず。久松は。忽地に望みを失ひて。只このうへは。神佛の利益を願ふの外あらじ。と深念し。朝に夕に。野崎の觀世音へ參詣し。夜は通宵御堂へ籠りて。父が縲紲を釋し給へ。と祈ぬ。さる程に龍間川の水もおちにければ。鈍平は。兒子鋤九郎が首もろともに。軀を善根寺へ送葬し。さて今般の棒事に。もし出九郎なかりせば。わが子は肢體不具の鬼となりぬべきとて。只管に賞嘆し。やがて出九郎に。錢五貫と。新しき布子一ツをとらせしかば。野草槓は。はかり課せつ。と密に歡び。思ひの外に。襟に垢なき布子を被て。飽までに酒を喫み。残れる錢を鬪はして。猶十貫にもせばやと計較しが。人を窺ておのれを利する錢なれば。亦立地に人に取られて。はじめにも似ずなりにければ。大に後悔し。更に一層の惡念を發しつ。つくつくと尋思するに。彼久松は。洛にも。稀なるべき美少年なり。時勢粧は。男色さかりにして。浪速津。堺わたりまで。男色を銜て生活とするものあり。さればにや。大和遊歴すとて。寺川に兩三日逗留す。と聞えし。浪華の旅客は。彼街艶郎の親方なり。いかにもして久松を誑き。彼親方に商議せば。あまたの金を得つべし。しかれども久松は。年にはまして恰判に。庸常にては謀がたし。とせんか

くせん。と吐裏にて問答し。借と思ひつくことありて。その日の黄昏に。觀音堂のほとりを徘徊し。堂守默善が剛へ登たるを窺ひ。奥ふかく潜び入りて。本尊の厨子の背に身を屈め。小夜の深るを待にけり。このとき久松は。觀音堂に通夜する事。既に七日に及びしかば。正直坊も。孝子の苦心を憐みて。をりく。物食べずや。湯はほしからずや。と問慰るに。久松は。火食を斷て侍れば。と固辭て。水ならでは飲ず。親を思ふこと。かくの如くなれば。正直坊はふかく嘆賞し。彼少年が通夜する程は。心を放して睡りけり。かくてその夜も深ゆくまゝに。久松は思ひ勞れて。寢るともしらず。しばし目睡たるに。夢にやありけん。現にやありけん。戸帳の内に妙なる聲して。久松。久松。と呼覺し。汝等親子。われを信する事いと深し。もし久作が禁獄を救ひ出さんとならば。出九郎に相譚かし。身を捨てこそ浮む瀨もあれ。と示現し給ふ。と思ふに驚き覺たり。靈驗あまりに掲焉ければ。久松は坐に感涙を拭ひあへず。つくつくと示現の趣を案ずるに。彼野草槓出九郎は。行状よからぬ破落戸ものなるに。これと事を議せよと示し給ふこと。一切こゝろ得がたしと思ひながら。凡慮をもて疑ひ奉らんは。いとまかしこしと。なほ叮嚀に冥助を祈念し。天の明るを待びて。佛前を退り。出九郎に逢んとて。彼此を索るに。やうやく未下刻。野崎の郷稍盡處なる。茶店のほとりにてゆきあひぬ。當下久松は。遙にこなたより。こやうく喃。と呼かけて。喘々走り着。やがて樹の蔭へ誘引て。觀世音の示現蒙りたるよしを告。只管救ひを求るにぞ。出九郎は呆れたるおもゝちして。われは智もなく才もなし。いかでか久作を救ふ謀あるべき。そは戯るゝならんとて。うけ引べうもあらざれば。久松は。なほ叮嚀に憑み聞えて放さず。出九郎しばし沈吟して。やうやくにいふやう。つらくく絆を案ずるに。千金の子は市に死なず。といふ事あり。久作が罪いと輕からずといへども。原是人を殺せしにもあらず。只屍の首をかき砍たるのみなれば。なほ救ふよすがもあるべし。そなたもしれるごとく。龍間川は。をりく。水出て。郷氏。旅客。只このゆゑに苦しむ事久し。もしその水の倍すときに。船橋をかけて人をわたさば。自他の幸なるべけれど。年來の軍務に勞れて。

企及しがたきのみ。そなたこの施主となりて。船橋の料を寄進せば。その功によりて。父の罪を購べし。この外には。わが施すべき謀なし。といふ。これを聞て。いはるゝ所。道理に稱へり。しかりとも。貧しきわが身の分際にて。夥の金を調へがたし。なほ別に術はあらずや。と問を。出九郎は聞もあへず。さればとよ。今そなたが物がたりせし。觀世音の示現にも。身を捨てこそ浮せもあれ。と諭し給へるにあらずや。折こそよけれ。浪速の旅客に。術艶郎の親方。鶏家美四郎とかいふ人。寺井なる親族の家に留められ。けふは野崎の觀世音へ詣て。直に故郷へ歸るとて。彼處の茶店に懇給へり。親の爲にその身を售らんとらば。媒妁して得さすべし。といと信々しく誘ふを。久松はつくづくとうち聞て。世に幸なき婦女子が。親の爲。同胞の爲。或は身の淫奔によりて。憂河竹の瀬にたつだに淺ましきに。男子と生れて色を衒り。酒に侍り。枕をすゝめ。夥の客と。かはるゝ睡らんは。いと朽をし。と思へども。觀世音の示現もあれば。わが志をたてんやうなし。一旦父を救ひて後に死するとも生るとも。術あるべし。と深念して。心ならずもうち點頭。男色に身を售らん事は。絶事は絶て願はしからねども。世俗の常言に。時の要には。鼻も鼻。といふなれば。わが身の如きものなりとも。金にだに代べくは。媒妁して給はれかし。と應ずるに。出九郎は爲課たり。と密に歡び。やがて久松を。茶店に將てゆきて。美四郎に汲引し。おのが従弟なり。といひこしらへ。彼が孝行の一五十一を告て。身賣の事をうち相譚に。美四郎は。久松を一トたび見て。搖錢樹を得たるこゝちし。且その至孝を感激して。一議にも及ばず。年季三年を限りに。身價三十金と定め。腰なる墨斗の筆を抜き出して。一枚の證文をかい寫め。これに出九郎と。久松が印信を打さして。さて身價を遞與けり。この日。浪華なる山迹家丹五兵衛が妻。阿也女は。操丸の在家をしらん爲に。大和。河内の靈場を巡禮し。野崎の觀世音へ參詣したる。賽に従者が。草鞋買んといふ程に。おなじ茶店に尻をかけて。久松が親の爲に身を賣るよしを聞きかば。坐に感涙を拭ひあへず。かゝる孝子に恵まんには。三十金も惜からず。と深くこゝろに憐みながら。餘ある路費も。夫に告ずして。男子たら

んものには。施しがたし。と黙止つゝ。年來索る操丸を。この久松なるべしとは。しらでぞ外に立別れ。日ならず浪花へ歸り着て。夫丹五兵衛と。お染等に。件の孝子の物がたりするに。衆皆聞て感歎し。さる少年を將て歸らば。物の要にたつべきものをとて。丹五兵衛は。殊更に。いと惜みけるとなん。案下某生再説久松が。身價三十金を受とつて。美四郎にいふやう。聞し召るゝ如く。この金は父を救ふべき料なれば。兩三日が程。身の暇を給はるべし。その事よく圖り得て。父に別れを告てこそ。といはせも果す。美四郎頭をうち掉て。なてうさる事やあらん。既に身價を遞與しては。半晌も放べがたし。直に浪速へ將てゆかめ。誘給へ。といそがせば。出九郎はいと便なし。と呟きて。久松にいふやう。親方の宣ふ所理なれば。その金をわれに預けよ。そなたに代りて。久松を救ひ出し。やがて音耗聞すべきに。さのみ思ひな費しぞ。と懇切ふりにいひ謙せども。久松これをうけ引ず。身を售は何の爲ぞ。恙なき親の顔を見ずして去かんは心にず。といはは。緯は整じ。左せん右せん。と今さら。思ひたゆたひ瞻むる空に。孟夏の日影こゝろなく。翠微低き傾くにぞ。美四郎はますゝ焦燥て。わりなくも久松が手を引立る。折しもあれ。茶店のほとりを過るものあり。これ別人にあらず。正直坊默善なり。久松はこれを見て。忙はしく呼び入れつゝ。忽卒に緯の顛末をものがたり。老師は緯號を正直と呼れ給ふに。いと憑しく思ひ奉りて。その件の事を托み進らすなり。ともかくもして。父久作を購ひとりて給ひね。と涙とともに頼み聞え。茶店のあるじに硯を借りて。身價三十金を包める紙へ。わがゆく處と。親方の家號を寫して。その金を正直坊に遞與せしかば。默善は。頻に涕うちかみて。件の身價を懷へ楚と挾め。遂に久松を。郷稍盡處まで送りければ。久松はなほ叮嚀に父の事を憑み聞え。美四郎に件はれて。絞りもあへぬ袂を分ちぬ。かゝりしかば。出九郎は。昨夜久松が御堂籠りの夢心に。觀世音の示現と聞かして。緯八九分は忻得たるに。身價一段に至りて。三十金を默善が懷にせられしかば。緯終に勞して功なく。直と呆れて茶店のほとりに。忙然として立在しが。遮莫。彼瘦坊主を。觀音堂へは歸さじとて。遽はしく裳を引折。鳥も時へいそ

ぐなる。雀色時。時しもよし。と並樹の蔭に身を潜まし。正直坊が歸り来るを。今か／＼とまつ程に。默善は久松を郷稍盡處まで目送て。暮果る日の心いそしく。觀音堂を投て走り歸るを。埋伏したる野草檜は。樹の蔭より跳り出。聲だにかけず。默善が法師天窓を礎と撲。打れて叫苦と俊俊ながら。こは出九郎。といはせも果ず。手拭咽喉に纏著て。忽地に縊殺し。仆る屍に騎かゝりて。懐かい探り。矢庭に金を奪ひとりつ。押戴きて莞爾とし。命吉といふ口を。わが手に押て慌しく。手拭とつてうち被り。何地ともなく脱去けり。さる程に。知打果て立歸る。農夫二三人。夕月夜の隈なきに。正直坊が仆れたるを見て。大きに駭き。抱き起して。さま／＼に勸れば。やうやくに甦生たり。原來死ざりけり。と散動たちて。聽て觀音堂へ昇もて入れ。醫師を招き。近隣に告て。湯薬をすゝめなどするに。詰且に到りては。いよゝ恙なき事を得たり。當下默善は。里人等の淺からざる介抱を歡び聞え。さて久松が身を售たる孝行。出九郎が暴悪。是彼おちもなく物かたり。われ久松が身價三十金を野草檜に奪ひとりられたれば。彼親子の面を觀がたし。各位愚僧が爲に。絆の趣を訴へてたべ。といふ。里人等はこれを聞て。ふかく久松が至孝を稱嘖し。且出九郎が兇惡を憎み。まづ村長に告て。もろともに縣守に訴へしかば。縣守も久松が純孝を嘆賞し。遂に久作が死刑を宥て。野崎の郷を追放。直に出九郎を禁獄せよとて。俄頃捕兵を向られしが。野草檜はいちはやく逃去けん。絶て所在はしれざりけり。かくて野崎の久作は。思ひの外に放されて。檻の獸の山に入り。笈の鳥の野に歸る。心地はしても。久松が。身を賣たる孝行を。聞くに悲しく淺ましく。親と呼ばし子と呼ぶは。世に憚るゆゑなるに。あまりに深く慮りて。幼少ませし頃より。桶殿の孺君にて。わが爲には主なるよしを。告奉らざりしかば。養父のみおもひ給ひて。金枝を悞て。糞土の牆の傍とし。銜艶郎となり給ふ。こはみなおのが罪なりと。くひの八千遍慚愧しつ。終に野崎に追れけり。時に正直坊默善は。里人等とともに。これを郷の出門に目送り。出九郎に久松が。身價を奪ひとりられて。面なきよしを賸語て。件の孝子がいひつることを告にければ。久作聞ていたくうち泣。三十金

は惜むに足らねど。身價を親方へ贖はざれば。久松は井に墮たる釣瓶にひとしく。引揚ることはいと難し。さても彼が親方は何地の人にて。名は何とかいふやらん。しらし給へかし。と問ば。默善は頭をかき撫。彼親方の家號など。いと仔細。金を包たる紙の上へ。かい寫して遞與されしが。よくも見ずして懷にせしを。出九郎に奪ひとりられしかば。われもしらず。と回答するに。久作は頻に焦燥て。なほ諸人に問ふに。しるものなかりしかば。いよゝます／＼嗟嘆し。およそ男色を衒ものは。京浪華に限れり。さらば彼地を索んとて。默善等に別を告。おもひ沈めばわれながら。足の運びも定かならで。やうやく杖に扶られ。洛を投ていそぎつ。路すがら思ふやう。觀音堂の藪蔭に。わが埋めたる首を。正元の御首なり。と人しらば。孺君のうへも危がるべかりしに。出九郎が悪計にて。それとはしらず。鋤九郎が屍の首を埋かえて。物怪の幸となりにけれど。吾君の御首級は。這奴何處へか捨たりけん。鶉の背のはしなくも。絆みな既に齟齬ふ。さてもうたてき命運かな。と只管に嘆息し。形なき身の形なき旅寝懶く日を過しぬ。さる程に夏も果て。七月十六日になりぬ。京。浪速の風俗にて。干蘭盆の靈祭せし。くさ／＼の供物。或は土器。公卿膳。燈籠などに至るまで。この夕。河原へもて出て焼なり。これを精靈の送燎と稱ふ。その所爲。正月の爆竹に等し。俗説に。初春。初秋の十六日は。閻主の齊日にて。地獄の釜の蓋もあけばとて。商家の小厮等は。みな許されて。親里へ赴くを。藪入といふ。これ五難姐に。所謂。走百病におなじ。わが俗。これを藪入といふ事は。縣より草ふかき田舎へゆく故なり。されば。七月の十六日は。今は十四日遊女。治郎なんども。客を引ず。おのが隨意遊ぶなるべし。不題山迹家丹五兵衛は。古主正武の三回忌なるに。正元。交野前には。今茲新盆なりければ。十三日より靈棚となみ祭りつ。十六日の暁昏に。親子三人河原へ出て。歸らぬ君を送り火も。涙に濕る麻殼の。煙はほそき夕の雲に。かくれてはまた出る。月も流る。漣浪に。ふく風さへも涼やかなれば。廻向し果て彼此と。河原にそふて漫行する程に。一隈くらき柳の下に。女子かと思ふばかりなる美少年。石を拾ひて袂に裹み。掌をうち合して。念佛十遍

許り唱つゝ。身を投んとしたりしかば。阿也女。お染等この形勢に。吐嗟と叫ぶに丹五兵衛は。走り懸りて抱き留。矢庭に水際を退かして。まづその故を問に。少年答て。わが身は。河内の野崎なる。久作といふ土民の子に。久松と呼ぶものなり。思ひもかけぬ罪犯ありとて。屠處の羊となる親を。救ん爲に浅ましき。世を渡りつゝ渡りかねて。長柄の橋のながらふる。憂身をひとり啣のみ。されど一旦身を賣ては。遂に父の安否をもしらず。身價も遺せし書翰も。思ひとどかてや四月より。けふまで絶て音耗なき。父はいかにかなりにけん。心もとなく思へども。籠中の鳥の悲しさは。事とふよしもなき人の。數に入なばかくまでに。竭せし孝も化事なり。金に任せし身にはあれど。男子と生れて宿遊君に。異ならぬ生活の。苦しきまゝにはじめより。病痾ありとて客にあはず。それを憎しとて親方の。呵責の苔に打懲さるゝは。元來覺期の上なれど。打も殺さて懲に。懲されてもなほこりずまの。須磨の浦曲に潮を汲み。浪速わたりに芦を刈。火打。水汲み。磯菜つむ。業ならなくこれをしも。忍ばゝ何か忍ばざらん。金に換たる身をわがまゝに。捨るは扱も罪ふかき。この川水を死ところ。禁めず殺して給ひね。といひつゝ涙を拭ひもあへず。又跳り入らんとするを。丹五兵衛は背より。抱きとめたる手を放さず。阿也女は。目今少年が物がたりを聞て。顔うち親り。原來そなたは。いぬる四月。野崎の郷の茶店にて。親の爲に身を賣りたる。孝子にてありける歟。と問れて。ふかく訝み。そはいかにしてしり給ふ。と問かへせば。阿也女。再てそのころ。わが身は心願ありて。大和。河内の靈場を。をがみて巡る旅疲勞れ。憩ふ茶店に身を賣る少年。見るに併。聞くに副。いと痛しく思ひしが。再びこゝに環會。過世怪しき縁しなれ。と詳審に物がたれば。久松は今さらに。顔うち赧めてものいはず。女兒お染も豫て聞く。その人を見ればなほ。こゝにあはれはいやまして。長き袂を濡らすにぞ。丹五兵衛もふかく憐て。久松にいふやう。汝その生活の卑しきに身を羞て。命を隕さんと思ひ究めたる心緒。いと慟もし。人は只羞をしるをもて。潔とす。さればとて。死すべからず。汝がことは。曩に妻が物がたりにて。をさく借みあへりしに。今不意その枉死

を。禁めしは囚なり縁なり。われも又望みある身なるに。女兒お染が婿がねは。幼少より住方しれず。既に夥の年を経たれば。その面影いかなるらん。見もしらねど。わが婿も。汝に等しく。十五六なる美少年になりけめ。と思ひやるは愚痴なれども。外の事とおもほえず。われ其至孝清潔を感じるのあまり。一臂の力を竭して。汝を購ひ出し。野崎へも信さして。父久作とやらんにも逢すべければ。かならず思ひはやりなせそ。稚枝も枯ては花は咲す。又あふ春のなからずやは。と阿也女もろともに信やかに。説諭すにぞ。久松は手を合しつゝ伏拜み。さは再生の高恩なり。活地獄の艱苦だに救ひとりて給はらば。死をもて恩に答侍らん。これも年來信じ奉る。救世菩薩の利益にこそ。と應つゝ感涙禁めあへざりけり。かくて丹五兵衛は。阿也女。お染もろともに。久松を將て。瓦橋へ立かへり。その夜みづから鶏家美四郎許いゆきて。久松が身購の事を相譚に。彼はたえて一夕も。客を迎る事をうけ引ざる少年なり。美四郎も玉に瑕ある心持して。もてあましたる折なれば。更に利慾を思はず。舊の身價三十金を給はらば。久松を進らすべし。といふに。丹五兵衛歡びて。即坐に金を遞與して。證文をとり復し。やがて家に歸りて。緋の趣を久松に説しらすれば。久松はその鴻恩を謝するに。言語なほ足らず。涙坐に袖を洗ひつ。この大人の爲としならは。死をもて仕んものを。と思ひ定めて。よろづ信やかに舉動ほどに。丹五兵衛夫婦は。いよゝ憐み。彼久松は。主官是非入にも立まされり。と密にこれを賞美ながら。年僅に十六にて。新參の事なれば。小断にてめし使ひ。河内の野崎へは。別に人を遣して。久作が安否を問はするに。その人たち歸りていふやう。件の久作は。その子の至孝によつて命を助けられ。彼地を追放せられしが。愛子の往方を索ねんとて。泣つゝ浴のかたへ赴きつ。その後の事はしるものなしとぞ。また野草横出九郎とやらんいふ悪棍。その曠昏に埋伏して。正直坊を打仆し。久松が身價を奪取て逐電せり。さるによつて。久松が遺書も。父の久作には得見せず。子を失ひたる親の歎き。何國を心あてに索ね惑ふにやあらん。かくは里人が物がたりしたりとて。おちもなく告にければ。久松は忽地望を失ひて。只漕々とうち泣けり。あるじ夫婦もこ

れを聞て。いと本意なく覺えしが。存命でだにあるならば。いかてか親にあはざらん。あまりに思ひ屈りて。病みな頼ひそ。といひ諭す程に。是非八は。主の丹五兵衛夫婦が。久松をわが子の如く愛慈むだに妬きに。お染さへ動もすれば。久松とのみ呼びたつるに腹ふくれて。彼を見ること。讐敵に等く。さもなき事も仇なく罵りつゝ責使へば。丹五兵衛も。阿也女も。傍痛思ひながら。是非八は。經營の事をうち任する老僕なれば。只憤を忍びて咎す。とかくする程に。年も暮て。十二月廿日あまりになりつ。煤掃音もいと苦しき。胸たゞき。うばらななどが。節季さむらふ。と呼門たつも。物思ふ宿はうるさかるべし。かくて山家税平は。約束の日も近づきぬとて。毎日に山迹家が店に來て。婚姻をいそがすにぞ。一日々々といひ延ばせしが。大晦日を限りなれば。借錢の淵ならて。色情の山路を脱れかねし。お染が茂き思ひ草。且の霜と消もせて。うちぞ曇りし玉櫛筒。ふた親ながら懶くて。あけても春にあふよしなし。と丹五兵衛は。しのびくく阿也女と額をつきあはして。さまざまに商議すれども。脱るべき術もあらず。所詮姫君を扶掖進らせて。わが夫婦密にこゝを走り去る歟。又税平を狂引よして撃て捨る歟。この二つのうち。孰かよからん。批判して見給へ。といふに阿也女しばし沈吟して。三十六の計も。走るをよし。とするとかいへど。室町殿の威徳もて追はし給はゞ。脱れ果べうも覺え侍らず。さればとて。彼税平を殺し給はゞ。毛を吹疵を求るなり。けふは末の八日にて。大晦日までは中二日侍り。よく思ひ運らし給へ。と聲ひそやかに諫れば。丹五兵衛はうち點頭つゝ。數回嘆息し。その日もいたづらに暮しけり。しかるに是非八は。主夫婦がうち相譚をよくしりて。豫しも思ひを焦すお染を。妻にするよすがにこそ。と深念して。この件の事ははじめより信やかにものせしが。そのゆふべ。阿也女がひとり物おもはしげなるを見て。ほとりに居よりつゝいふやう。世の人は煤を掃き。餅を搗し。席薦の表絨かえて。障子の切張する松下の尼もあるに。家公親子三人はさらなり。久松さへ物思ひがほなるは。税平が事の心にかゝり給ふなるべし。僕。黙おもふに。這奴を詭きて。大晦日の婚姻をいひ延す術なきにしもあらず。野夫にも功者ありと

いふに。などで是非八には商議し給はざるやらん。と怨ずれば。阿也女はこれを聞て。やうやくに見かへり。そはいかなる謀ぞ。思ふよしあらば告もしらせよ。といふに。是非八は。手に持たる庫の鍵を膝杖にして。莞爾とうち笑み。問給はゞ申べし。大晦日に。彼瘦浪人。壻と稱して來たらんときに。お染は密夫ありて。既に有身ぬ。わが女兒なればとて。かゝる淫婦は。疎ましからん。しかれども。おん身は壻がねなり。この家は進らすべし。女兒には離縁の狀を給はれ。といひ給へ。これ理の當然なれば。縦税平。富婁邦の辯舌をもて論破すとも。その夜の婚姻はさて已べし。とかくいふ間に。夜もあけなば。又いひ延す術こそあらめ。といと信々しく説示せば。阿也女はこれを聞て。眉根をよせ。この謀よしといへども。心ざま正しき女兒に。なき名を立たせんも難儀なり。されど一旦の謀ならば。堪も忍ばんが。お染に密夫ありといふとも。證據なくば。彼いかて實事とせん。しからば女兒にぬれ衣被せて。そのかひもなく。世間の胡慮に。なりもやせん。と咄めば。是非八は。髯かい撫てうち笑み。かばかりの覺期なからんや。近會門に立ち。巷に停止。太平記讀み。草紙商人。これらを相譚て。翌の夜より。お染さまの浮名を唄はし。この事をまづ世の人にしらしなば。彼税平も實事とすべし。これらの事は是非八に。うち任し給へかし。主の爲なれば。お染さまの。不義の敵手といはるゝとも。浮名は厭ひ候はず。とおのが田へ引く水かゞみ。鏡は見ずや醜郎の。顔に似げなき色好み。いと嗚呼なりと思ひながら。阿也女はやうやくうち點頭。お染が密夫といはんものゝ。心あてはなけれど。まづ丹五兵衛どのにまうして見ん。固にそなたは。わが家の孔明なり。と賞美られて。是非八は喜しげに。眉尻さげてうち笑みつゝ。なほ叮嚀に諫しあはして。やがて店前へ退出けり。かゝりしかば是非八は。謀得たり。と心たのしく。次の日物をとり出さんとて。土蔵の門口までゆくに。裏には忽地阿也女が聲して。何事やらん密語あふ。今一人は久松なり。こは不審と。こゝろ疑ひ。網戸に耳をさしよして。一五二十を竊聞せり。

松染情史秋七草 卷之五上

第九 撫子にいふ かたみ草

来て見れば。なき世の人のかたみ草。いくたびわれは袖ぬらす。袖より事の起りてぞ。主の像見の姫君に。うき名
 たつるも推て来る。婿の山家がいふせきまゝに。晝もこゝろは庫の中。久松と何事やらん。阿也女が聲して密語けば。
 是非八は。聞漏らさじ。と耳を側て竊聞するに。且くして阿也女がいふやう。縁故は目今いひつる如し。むじんな
 り。とおもはんが。お染が不義の敵手と名告て。大晦日の婚姻を。妨てだに給はらば。跡は野となれ山迹家の。家は汚
 せど身は汚さで。女兒お染が幼少とき。別れて後は往行しれぬ。結髪むすなげの夫の爲に。たつる苦節も久松が。心一ツにあるな
 るべし。その性の信ある。そなたならてはこの事を。憑み聞えんものはなし。家の小厮こゝろに色情ならぬ。色情の汲引を
 する母が。胸苦しさを猜してたべ。お染はさらなり。丹五兵衛どのも。久松だに納得せば。それにます。幸はあらず。
 と應をまちて坐するかし。彼是非八がいとなめげに。忠義めかして主の婿にならんと計較けりあ奸曲邪智。それしらぬわら
 はならねど。彼に疎ましては便なさに。木にも附ず草にもつかず。けふまでも氣色に見せず。かならず彼に曉得られ
 な。と理なき言語に久松は。呆て應もせざりしが。やうやくに頭を擡たか。自の羞を雪めよとて。夥の金もて救ひ給ひし。
 再世の恩ある御主人。脱れぬ難義を脱れん爲に。數にもあらぬ小厮にすら。掌を合さぬばかりに宣ふを。いかてか固辭侍
 るべき。覺期のうへなる濡衣は。乾あへずして婿君の。双の錆さびになればとて。この秋捨たる命と思へば。いと惜とは思ひ
 侍らず。しかれどもわが身には。三人の親あり。いはけなきとき棄られし。實の父母は世にありや。なしやその名もしら

ぬ火の。筑紫のかたに人となり。故郷なれば。と去年の冬。養父に。伴れ。河内の野崎へ歸らずば。親に異なる事も
 なく。かゝる敷きせてやあらん。別れて後は音耗なき。父久作が先途を見ず。不思議の縁しに家公の。恩を稟て恩を報
 い。十六年を一期の夢。春にもあはて埋木の。埋れぬ名のみ止おく。ともしらずして索迷はん。父久作が世の風聲の。
 葉にこゝへ参りなば。年の尾に讚岐なる。金毗羅へ代参に。旅だてたりとも。ともかくも。いひこしらへて正月を過し。
 しばしが程の春の日の。長き別れは告ずもあれ。老てはこゝろもよわるといへば。手向の水も逆さまに。跡弔ふ親の
 悲傷を。思ひやられて胸苦し。と應もあへずさし俯く。膝に涙の露の命を。恩に答て惜氣なき。言の信にいくそたび。
 阿也女も臉おし拭ひ。その應を聞けば。われのみならて。親子三人が。幸なり。よしや山家税平が。心さま猛くと
 も。婚姻せし妻にはあらぬ。お染が密夫なればとて。敬も殺しもやはすべき。心よわき事ないひぞ。そなた一人を税
 平に。殺さして可愛き女兒の。命助かるべうもあらず。苦しきものは筆の跡。一旦誓ひし婚姻を。いひ延するまでの
 詐術に。お染なりそなたなり。世の弱輩には絶て似ず。生ごころもて淫れたる。かたへ引れぬ忠臣貞女。と人に賞美さ
 し羨する。女兒と小厮を。冤て。淫奔ものといひいはする。親の因果が子に報い。かゝる縁しに繋れて。主従とな
 りし薄命。みな前世の仇人どちが。聚ひぬ。と思ひ諦めよ。嗚呼面なし。とわびしらに。猿啼ねど申の時。多の横日
 の短くも。庫の窓へぞさし入る。こは思ひの外に長居せし。人にしられな。疑れな。といひ諭しつゝ立あがる。阿
 也女が後に久松も。出る門口に鳴る鈴の。おと聞かけて是非八は。慌忙走り退き。中庭なる小くらき縁に。手を叉
 きてもの思ひ。主が主なれば女房さへ。われに飽まで化骨折らして。久松によきことさするは腹たゝし。君。臣を見
 るときに。塵芥の如くすれば。臣。君を視ること。讐敵の如し。とやらん。いふは是なり。坊主を憎めば婆娑ぼさまで憎
 き。久松が賢がほは。白き眼にあだも見るに堪ず。この返報をせてやはある。謀によつて謀を行んには。い
 よゝ二なき志を示せて。その心を放さし。彼生女兒と生少年が浮名を唄はして。税平に向火を燃つけ。まつ久松

を殺さして。その騒ぎに紛れ。思ふ君をかい去らひて走るべし。しかせんく。と肘裏にて術を究め。ひとり怒りつ。歡びつ。その夜密に人をかたらふて。お染。久松がなき名を立て。歌祭文を作らし。また天満のほとりなる。二人の悪棍に。金をとらして。交を結び。その夜お染を奪ひ去るときの翼とす。件の悪棍等は。曩に法隆寺の門前にて。丹五兵衛に打仆されたる太郎犬。二郎犬なり。このものどもは。近會浪華へ流れ来て。半俵半賊を事とするに。是非八が主なりといふ。山迹家丹五兵衛を。怨ある人なるべしと思ひもかけねど。錢を見ては首の落るを忘る。癖者なれば。輒く憑まれて。既に暗號を定めたり。さる程に。丹五兵衛は。山家税平を阻むべき。謀なかりしに。是非八が奸智の長たる。久松が老實なる。是彼二ツながらあはして用ひて。まづ阿也女に久松を相譚はして。お染にもよくその意を得さし。なほ近隣にも。その氣色をしらせん爲に。お染をいと花やかに装はして。久松を冊て。きのふは生玉へ詣よとて遣しつ。はや大歳になりしかば。今宵は壻の來るなるべし。お染は日鬪ざる間に。久松を將て。御靈の神社へ參詣し給へとて。いそがし立て出しけり。お染は今茲十五にて。含める花の露濃かに。春の旭に向ふが如く。久松はその年も。只一ツまして。十六なり。いざよふ月の雲を出て。秋の夕を照らすに似たり。女子は長き袂と裙に。いろくの摺箔して。練の帽子の匂やかなる。帯の色なども花手ならねど。往來の人も見かへるなるべし。をのこは流石に。商家に任てよき衣は被ねど。雪恥しき容止は。いと臆闕て賤しからず。彼東路にさすらひ給ひし。在五中將といはんも憎からぬ。縷縷に絞染の。帛紗包を引携たる。腕の撓げなるは。紙鳶を引掛たる。梅の梢に異ならず。震初にし年の内に。春は立名の淺まし。と歎二人が思案橋。可惜黄金を瓦町へ。かゝればかくは字して瓦橋とも呼ぶならん。晷ははまだ傾かねど。西へくと鍋町に。なべての人が指して。あれや名だたる淫奔女兒お染なり。山家とやらんいふ新郎を。嫌ふといふも理ならず。廣き浪速に儻なき。久松といふ小斯は彼なり。さても愛たき少年かな。としるもしらぬも立在て。聲聞らず呼びたつる。戀せぬわれにいかなれば。かくは浮名の立けん。と見かへるお染と

久松は。面をあはして嘆息し。梅陰望る東町。春の色とて梅柳も。注連の内なる御靈の社頭に。參詣の老弱を立せんとて。訛たる聲の草紙よみ。頰杖衝て嗚呼がましく。

聞き召せく。これぞ今茲の室の梅。さきも揃はず散もせず。包むその香のいつしかに。發と世にたつ名に高き。所は浪華東堀。聞くや鬼門の角尾舗。瓦町にて油賣る。戀の山迹屋愛女。おそめ見そめて薦もみぢ。秋のころより物思ひ。こひし雛娘の久松と。しのびくねあぶらを。夢にも親はしらしぼり。よからぬ縁のえのあぶら。魚の油に水さして。壻には絶てあはろうそくの。しんきくが糞の種。菜種のおぶら蝶々の。翹かさねてもるともに。死なんと思ひ思はる。迷ぞいと哀なる。

と。くり返しつゝ唄ひけり。久松聞くに堪難て。お染が袖をそと引て。見あはす面の赧うなり。是も彼是非八が。作りてや唄はすらん。腹きたなしと恨ても。恨んよしはなかくに。影護さの油の垢。脊に汗の冷灰汗の。その悪名を濯得ぬ。色情ならなくに主従が。色情に浮名を唄はる。これも過世の業報ならん。歎給ふな。歎かじ。と互に諫め諫られ。清き心は神ぞしる。寶前にしばし額著て。やがて家路へたち歸る。忠と貞とはかはれども。誠はいづれかはら橋。世々にその名をとどめたり。

○人足繁き大歳の。一夜を千代と祝へども。身の憂事は越かねし。さても山迹屋丹五兵衛は。壻税平が來る比なれど。婚姻の儲も得せず。ひとり炬燵に假寢の夢おどろかす鐘の聲。黄昏は殊さらに。油買人迹絶なく。大つごもりか。つもごりか。上を下へとかへしたり。席薦の表新玉の春を迎ふる年徳の。棚に晃く燈火も。花としいへど梅棒。水仙も候ぞ。福壽草も候ぞ。めされずや。めされよ。と呼聲高き鉢樹賣が。初似げなき鬘の霜。二重の腰に入重梅と。乙ひく雪の根あがり松。歳暮。年頭。一荷に擔ふ冬木と春の花曆。吉例壽き給へとて。店前近く呼びつゝ來ぬ。阿也女は。栽樹商人が呼聲聞て。いそしげに走り出て。久松にいふやう。心すまぬ壻入なるに。年の尾の經營に紛れて島臺一

ツ準備もせず。蓬萊もまだ飾らねば。鉢の樹にて物をあはせん。所ふたげに店前は便なし。背門口より呼び入れ給へ。とく／＼といそがすにぞ。久松は聞もあへず。こや喃々。と招きよせて。脚門を押開き。誘こなたへ。といふ間に。商人は擔るまゝに。夥の鉢の樹を扛入れて。縁の下にうちおろしつゝ。松と梅と左右に引提。例年の吉祥は。子孫繁昌の花の兒。冬簡する浪速津も。今宵一夜に明そめて。子の日の姫松。陰陽和合。松としいへばなつかしき。孰をかめさるゝ。といふ聲似たり。と久松は。指燭を縁よりさし抗れば。老眠なれども。見も違へず。孩兒ならずや。家尊の大人。恙なく坐せし敷。べこは／＼無事にて在りけり。といひつゝ撲地ととり落す。梅はものは久松も走りよりつゝ手を取りて。涙さきだつ親と子が。問ふべき事も泣ばかり。喜しさ袖にあまりけり。阿也女はこの形勢に。さては。と猜して障子引開。端近く出て。久作をうち瞻り。久松を孩兒と呼ぶは。豫しもその名を聞く。野崎の久作どのならん。いぬる秋河内へ信さしたるが。おん身が往方も絶てしれず。親を慕ふ孝子の歎き。見るだにも痛ましく。環會せまほしう思ふ折から。はからざる對面は。誠とどきて丹五兵衛どのも。さこそ歡び給ふらめ。不思議なる縁にて。久松をめし使ふ。その物がたりはいと長きに。まづ裳を引おろし。火桶のほとりへ居より給へ。と心くまなく聞ゆれば。久作は澁染の頭巾を脱て。腰を弓め。こは漫なりし。内室も其處にや坐せし。しられ候へば名告まうすに及ばず。四月の頃より久松が。往方を只管索巡り。京。堺。さては亦浪速わたりの艶冶郎を見ても。宵たる少年にはえもあはず。神に佛に願事を。かけつくしつゝ。とにかくに。この地が心がかかりなれば。秋の季より旅宿を定めて。毎日に里巷へ出商。この五七日は。雞家のあるじ美四郎どのとやらんが。生垣結なほすに備れていゆきたるに。不圖せし事より。久松が。はじめ彼人に買れて。浪速へ赴き。こゝの家公に必死を救はれ。身の羞をさへ雪め給はりし縁由を。聞てはものも手に附ず。垣も半結ひかけて。身の暇を給はり。老の足も飛ぶが如く。瓦町を投て來る親を。呼び入れさし給へるは。いひあはさねど恩と義の。重擔をおろす身の健伴。孩兒久松が稟たる恩恵は。高うして

武庫山の如く。深きこと浪速の浦に似たり。命の親なる主に仕て。その恩澤のこよなきを。露ばかりも思ふかはしらねど。いと覺つかなくこそ候へ。この鉢植の梅と松は。心ばかりなる久作が贈もの。久松彼處へ進らせよ。といひつゝやをら竹縁へ。にじりあがれば久松は。父が顔をうち觀り。喃々。鶏家にてわがうへを聞給はゞ。人らしくもおほすべきに。命を救ひ給はりし。主の恩をしるやしらずや。覺つかなし。と宣はするは。心を得ず。といはせもあへず。久作は。わが兒の襟上。かい掴みて膝のほとりへ。楚と引著つゝ。聲をふり立。やをれ久松。齡六十にちかくとも。久作は老耄せず。いまだしらじと思ふ。主の令弱。おそめどのとやらんと密會。歌祭文に作られて。油屋の店暖簾へ。泥を塗る。不忠不義。今夜婿どのゝ來ますといふ。世の風聲に思ひあはすれば。是も彼もわが兒の噂。索あてずばかくまでに。面目は失はじ。と思へどいと淺ましく。悲しく。戀しく。朽をしく。泣つゝ索て來る父は。こころ子故の闇の梅。しる人ぞしる姓氏素姓を。いひしらさねは汝が可愛さ。結髪之妻もあれど。時なほ早しと黙止せしも。今ではその身の仇となりぬ。松の操の名によせて。久後思ふ。としらざるや。譬ていへばこの鉢樹。開くもあり含むもあり。早咲あればおそ梅の。お染どのの含の花。盗人なるよばひ松。主の女兒を瑕瑾にせし。密夫なれば首は續れず。身を賣てもひとりの親を。救へとは親は思はず。楊貴妃。小町にませばとて。色に迷ひて身を亡さば。久作はとまれかくまれ。しらぬ實の二親と。高恩受たる主へ對して。孝ならんや。忠ならんや。いひがひなし。と齒を切り。握り固めし拳の上に。霞たばしる血の涙。誠こもれる教訓に。久松は身を伏て。胸苦しさに應せず。阿也女は見るに痛ましく。實の不義にあらずとは。得もいはれねば寛かねて。いとせせんすべなかりけり。緋のやぶを竊聞けん。お染はやがて走り出。やよ久松が爹々。久作どのとやらん。凡庸の色情と思はゞ。腹たしき理なれど。こには深き理由ありて。と後いひかねて泣洗めば。久作は恨むげに。つく／＼と見かへりて。嫖致はよけれど。少女に似げなき。心ざまは遊行女にまして。生こゝろもつき果ぬ。孩子に早晚淫奔を。教て老たる親までに。面なき歎き

をさし給ひぬ。まだ婚姻は結ずとも。結髪ゆひなうけの夫を嫌ひて。化なるかたに名をたつるは。親の油断といひながら。女も女。男も男。うち揃ひたる義理しらず。今の世の小女兒こむすめと。元生の夕顔ゆがはは。ちひさう見えても熟うまである。その夕顔の宿やどならで。惟光これみつがほに色情こひの汲引とりもち。したる奴もなくてやは。それをとらへて恨うらみても。責せめても及ばぬ主しゆうなり。今引放ひなはなせば互かたみの僥倖さいさい。久松が事は思ひ絶ことごとて。今宵こよひの婚姻こんいんとり締ひぢび。親御おやぢの心を休やすめ給へ。かゝる事もあしう聞きけば。思ひ迫おぼりて千日せんじつ寺でらへ。足のむくは死神しんがみに。誘さそひるゝと深念しんねんして。誠まことの道みちへ赴おもむくが孝行かうかう。彼霸王かきばてん樹みたまはを鬱ふさせ。その形かたちの似たればとて。俗ぞくに位牌いはひ木ぎと緯號ゑいごうせり。いと惜おしと思ふも可愛かあいと思ふも。鼻はなから息いきのかよふ内うちのみ。位牌いはひとなつて戒名かいみを。信士しんじ。信女しんじよと書かならべては。年に一度いちどの牛女たははにや。雖ひなには劣おとる本ほん來らい空くう。泡沫はうまつ無常むじやうの朝あさ茶ちや湯たう。親の手おやのてづかち手たて向むかるまてに。残りしものゝ悲傷かなしみは。情郎おんむすめを思ひ絶ことごとゆる。おん身みが歎なげきにいやまして。いかならん。と思ひ給ふ。はじめて逢あふてはじめていふ。教訓けいくんも恩高おんたかき。家公いけきみへまうし譯わけ。何國いづくの浦うらも甘あまきは母親ははおや。もろとも泣なて在おしては緯果こゝろず。久松が身の暇いとまを。只今ただいまとらし給へかし。といひ果はて。わが兒この手てを引ひ立て折をしもあれ。蒸むし襖すそをさと開ひらき。やよ久作くわくまち給へ。と呼び留とどめるものは。これ別人べつじんにあらず。すなはちあるじ丹五兵衛にほんごべゑなり。棧留布せんりゆうふの袴はかまの稜せうを押おひらかして。上坐かみまに無素むそと坐まし。われはすなはちお染が父ちち。久松が爲ためには主しゆうなり。と恩おんに被おせて名告なをるにはあらねど。件くだんの小断このふぎが不義淫ふぎ奔ふを憎にくみ。主家しゆうかを思おもて將まさて歸かへらん。といはるゝは心こころを得えず。親おやにもますは主しゆうの威光ゐくわう。よしや今宵こよひ事發ことばた顯あれて。壻むすめが爲ために二人ふたりながら。忽たち地首ぢくづを喪なはるゝとも。なせし過あやならばいかにせん。三十金さんじゆきんの身價みんげと。引ひかえならては久松くわくを。鬪たたかより外面とがたへ。一步いっ歩も出いしがたし。その金かねをもて來きりや。准備じゆんびやある。と物ものをしく詰つ問とれて。久作くわくは。いな。とばかりに。當然さあ。理ことわりに迫おられて。勢いきほひ脱ぬけて撲たた地ぢと坐まし。頻しきりにに嘆息たんそくしたりける。浩かほ處とに颯さのかたより。はや新あらた郎らうの來き給たまひぬ。と告つる焚も婢め。小断このふぎが聲こゑに。丹五兵衛にほんごべゑは豫あてより。思おもひし事ことよとひとりごち。驚おどろて立たんとする。妻つまの裳もを引ひめて。騒さわぐ氣色きしきなくまつ程ほどに。山家やまが税平ぜいへいは。是非しぜい八はに案内あんないさして。縁えん頼たより鏡かがみより鏡かがみより來きつ。粘ねの脱ぬたる麻あ上下じやうげも。袖そでかき

垂たし古小袖ふるこさそで。淺黄せんわうの裏うらも垢染あかぢで。鼠ねずみと見ゆるよめのこの。壻むすめといはんはいと似にげなく。席せき薦せんの縁えんに足踏あしふかけ。あらやかに歩あみ入いりて。東面とうめんに坐ましたり。しかれども。お染おぢはさらなり。久松くわくも伏ふ沈しんたるまゝ頭あたまを擡たげず。阿也女あやめは眉まゆをうち鬚ひげめ。丹五兵衛にほんごべゑは。手てを又またきつゝ。見みかへりたるのみ。物ものいふべうもあらぬに。是非しぜい八はひとり信あたちて。小断このふぎして燭臺しゆくたいに灯あかりを點ともさして。是首こゝろ彼首かゝにおきならべしかば。なか／＼に晴はれがましくて。久作くわくはいと苦く々くしげに。是非しぜい八はが後方あとがたに退まりつ。當下そのとき税平ぜいへいは。扇あふぎ笏しやくにとつて。丹五兵衛にほんごべゑに對むかひ。放ゆるべがたき婚姻こんいんを。けふまで待まちたるは。おのが志こゝろにあらねど。壻むすめ翁おきなの好このみを破やぶらじとて。枉まがて佛ほとけ顔がほするに。啓つ上ありてか。盃さかづきの准備じゆんびもなく。打濕うちしりて見ゆるはこゝろを得えず。などてお染おぢは。衣服いふくを更あらて持もたぎりける。凡おほ遺と嫁め。招まね壻むすめには。くさ／＼の作法さくぱあれど。よろづ忙いそはしき大歳おほとなれば。それらは略りやくとも。これはあまりに興きようなし。とく／＼盃さかづきさし給へ。といとなめげにいふ。丹五兵衛にほんごべゑこれを聞きて。一旦いつたん詰つひたる女むすめ兒こが婚姻こんいんなるに。よしや推辭おしげとも。今宵こよひ脱ぬるゝに言語げんごなし。但ただ胸むね苦くしきは。一條いっぢゆうの物ものがたりあり。親おやが口くちづからかくいはんは。羞はぢをしらざるに似にたれども。いかにせん。お染おぢには密ひそ夫おとこありて。既すでに有あ身みぬ。この事こと。近ちか曾そ外がわより聞きえて。驚おどろし思おもふところなり。破やぶ鏡かがみは面おもてを照てすによしなし。心こころ汚けれたる女子むすめは。疎うとしかるべし。舅おやぢ姑めかけの面おもてに觀みて。彼かには身の暇いとまを給たまはせ。お染おぢはとまれかくもあれ。われに于おて誓ちかる言ことは食くず。數かずならねどもこの。肆しを進すすらすべければ。活業なげを相續さつぞくし給へ。といはせも果はず。税平ぜいへいは顔かほ赤あかやかに筋すぢたてゝ。眉まゆ尻しりをさらさまに。聲こゑを激げまし。こは朽くをしき事ことを聞きくものかな。この。肆しを所望しよぼうす。といふ證しるし書しよはあらざりし。きのふより。彼か此この。巷ちまたに唄うたふ歌うた祭まつり文ぶんにて。久松くわくが事はよくしりつ。いまだ臥房ふしむらを俱ともにせずとも。結髮むすみげせし女子むすめを。小断このふぎなどに奪うばれては。わが刀やもありてかひなし。件くだんの久松くわくとは。這奴やが事こと敷し。こゝへ出いで。淫いん婦め奸かん夫おとこを押おしならべ。首かみうち落おして。熱腸ねつじやうを冷ひやん。とく出いでずや。といきまきて。刀やの柄つかに手てをかくれば。是非しぜい八はは。こゝろ得えがほに飛とかゝつて久松くわくが。頭あたま髻むすを無む手てとかい掴つかみ。引ひよせんとする處ところを。引ひしもよせず久作くわくが。つと出いで。推おし隔へれば。妨まじすなと罵ののりて。裳もを蹴かして殿だんと蹴ける。足首あしむす捉とて

捻挫げば。筋斗をうつて輾轉。是非八を跳こえて。税平が抜かくる刃の下に久作は。推なほりて項を伸べ。名告まう
 すも嗚呼ならんが。お染どの、不義の敵手は。久松が親。野崎の久作。わが兒の代に白頭を。撃おとしてたべ。壻の殿。
 こゝ一刀に撃給へ。とわが手に撫るおくれ毛に。臆れはせじと久松は。慌忙きて父を引退。親を殺さして。阿容々々
 と命を助けられん。と思はゞ。かく恥しき所行をせんや。代らんと宣ふは。世を形なくおぼすに敷。死たる後に
 久松が。身のよしあしは曉得給はめ。先だつ不孝は許し給へ。といひつゝ涙押拭ひ。親の心はしら刃の下へ。なほる
 わが子を引退て。こは不覺なりわれ死ん。いな久松が。と親と子が恩義の爲に。死を辭せず。最期を争ふ形勢に。税平
 は抜かけたる刃ををさめて。呵々と冷笑ひ。さて謀けり。こしらへたり。憎しと思ふ小斯が身がはりに。白頭とりて
 何かはせん。是非八とやらん。油断して久松を。とりな逃しぞ。といひ諭せば。是非八ふたたび力を得て。久松が胸
 さか捉て。圓なる眼を睜り。こやつが色の生白げなる見ればとにかく腹たゞしくて。いふべき事は夥なれど。折もが
 なとていはざりしが。この秋よりの新参り。前髪だちの年に似げなく。老管に口を開かせず。われは主の氣にあふな
 れば。といはぬばかりに驕慢り。盗むものに事を缺て。内外の人の睛を盗み。結髪の壻どのを愚蠢にして。親方の
 女兒を盗むが。傍痛けれど。主の面に靦て。しらずがほはすれ。皇天は許給はず。人をもていはし給ふ。辻讀の歌祭
 文。縦石佛に等しき夫なりとも。妻敵を撃たずしては。墨丸もてるかひはなし。いざ壻の殿。まづこやつから今生
 の暇をとらし給ひね。とおのが詐術の疎かけて。虎の威を借る老狐。ひとつ穴とは見えざりぬ。税平は。是非八に。
 向火を焼つけられ。燃る薪に油を沃ぐ。烈しき怒りに些も擬議せず。肩衣の前反除て。袴の稜を拮み揚。いて二人な
 がら押累て。四段になさん。といひもあへず。走りかゝつて泣沈む。お染が黒髪引摺めば。吐嗟と。おどろく母阿也
 女が。善悪もわかず携留を。突退かい遣る壯夫に。力およばば輾轉ぶ。妻を見かねて丹五兵衛は。税平を押退て女兒
 をやをら後方に坐らし。さていふよう。お染と小斯が不義發覺ては。その罪絶て脱るべからず。然れども。國に王法

あり。家に家則あり。山家どのは。原武士なりとも。今商人の壻になり。商人の家を繼げば。是非商人なり。商人にして
 私に妻敵は撃がたけん。穢の趣を公へ訟まうし。室町殿の仰を裏て。ともかくもなせばなすべし。時はは
 や亥の比及ならん敷。今宵一夜は。土藏へお染久松を閉籠て。鍵を壻どのへ預るときは。親もかよはぬ籠中の鳥。駕
 の劍羽おしすゑて。撃するにます舅が截斷。彼等に年を越するとも。國の法度は越がたからん。久作も親がひに。久
 松を縛候へ。阿也女は庫の鍵をもて來よ。とくくといそがし立。豫て準備したりけん。袂のうちより二條の麻
 索をとり出して。その一條を久作に投與へ。やがてお染を縛むれば。久作は阿。と應へつゝ。忙はしくとる麻索の。
 あらからぬあるじが賜もの。戴きながら久松を。括りあげたる左右の手も。痛まぬやうに。と結びめの。まはり合せ
 があし手書。繪にも文にも書端されぬ。親と親とが心の内庫。一夜の獄舎と引すゆれば。税平はその理に。横には得
 ひかぬ車坐なる。彼首は首へ頭を回らし。室町殿の嚴命を。受ての後。と穢を延すとも。僅三時か四時が間。一番鳥
 は冥土の前驅。春告わたる曉の鐘は。命を縮る生滅々己。そのとき泣ても啣ても。いふにや及ぶ。と心づよき。夫が
 應に激され。阿也女はややく身を起し。納戸へゆきて庫の鍵と。をりもて來れば丹五兵衛は。税平にうち對ひ。愛
 に溺れて不義ものを。奔らすこともや。と疑れん敷と影護し。因てこの鍵は壻引出。前室五間の油鬮。世帯を遞
 與せば二代の山迹家。祝ふて相續し給へ。といひつゝ鍵をさし出せば。税平これを受とりて。竭るに易き庫中の。財
 より先に竭る。お染久松が命數を。しばし封する土藏は。なき玉の鍵。玉手箱。あくるを待ん。と立あがれば。是非八
 はほいなげに。計較違ふこゝろの底の。庭なし柄杓に水祝ひ。かひなく脱る油手に。米糴三合もつならば。招壻にな
 なりそといふ。世の常言もいと宜なり。思ひの外に浪人の。太刃の鈍さよ。と呟くを丹五兵衛は。税平に聞せじとて
 高やかに。咳して紛らかし。是非八は。客房へ壻どのを案内して。天の明るまで饗應せよ。誘給へ山家主。とい
 ひつゝお染を引たつる。その麻索は長き根の。五尺のあやめ水を上げ。險拭へば久作も。わが兒をやをら引起し。物

體なし。といへばえに。いはぬが誠の道のべに。冥土の旅の一里塚。死出の門松久松に。かゝる縹緲の飾。うゐのおく庫銀鏡さして。ところかはらず死神の。憑とは寓言かほんだはら。うら白かへす鐵網窓の。めもあてられず母親は。數の子ならで亡君の。子を捨かぬる藪柑子。だい／＼榮し。楠の。血統はこゝに絶る歟。と歎く忠臣。義士。節婦。互にしらて舊名を。匿む福豆。藥盒子。福は名のみにくれ竹の。この禍に大歳の。二更の太鼓とみなもろ共に。中庭投て引かれ去。あはれ果敢なき世なりけり。

松染情史秋七草 卷之五上 終

松染情史秋七草 卷之五下

第十 瞿麥にいふ なつかし草

故郷と。これにぞ思ふ夏ならで。なつかし草の袖の露。今も涙はくれなるの。園生にあらぬ庫の中。痛まじや久松が。これも人の子撫し子の。火桶もあらず身も冷て。さぞな堪がたかりぬべし。聞けばそなたは園子にて。實の父母をしらずとや。一トかたならぬ憂身かな。養親の禁獄を。救ん爲に身を賣て。死なんと思ひ定めしを。慈にわが父に。助けられたる悪因縁。恩義を思ふて濡衣を。年の内よりきそはじめ。綴あはせし染色の。染子にかゝる縛は。みな是わが身ゆゑなり。と久作どのに恨みられても。幼少き時に結髪せし。夫へ盡す節操とおもへば。露ばかりも厭はねど。よしなき人を寛る。その悪報にて税平に。いひ立られて此隨に。命とらるゝ事もあらば。面影みしらぬわが良人へ。いひ解よしもなき迹にて。聞も傳もし給はゞ。さこそ憎しとおぼすらめ。思はぬ人に思はれて。思ふ君にはえもあはず。思はぬ其方と化し名を。立たてさする面なさよ。と唧つお染が聲ほそり。又哽咽て伏沈めば。久松頻に嘆息し。その悲傷は。わが身も絶て異なることなし。形なき世間に。存命ふべくは思はねど。けふまでもしらざりし。結髪の妻あること。嚮に父が物がたりにて。聞ば今更影護し。老たる親を迹に残して。外にも歎く妻あらば。と思ひやるはかひなかるべし。いぬる日母御の竊やかに。女兒が嫌ふ婿税平。婚姻を整ふるとも。久後遂ぬ妹と夫ならん。さればとて故ありて。一端締びし縁なれば。こなたよりは變改しがたし。何事も主の爲なれば。羞を忍びてしげしが程。お染が密夫になりてたべ。只婚姻をいひ延す。謀ぞ。とうちあけて。憑み聞え給ひしかば。いな。とい

はれぬ恩返し。とてもかくても禍の。神の資縁る久松が。命は豫てなきものと。覺期のうへは是非に及ばず。只痛まじきは。父久作。杖とし憑む一子が。年の初を亡日と爲すを。見つゝ忍ばゝいとゞしく。朽折れて便着なき。世をいかにして過し給はん。それだに憂を名もしらぬ。實の父母は世にありや。なしや像見の護身囊。年來項にかけ奉る。河内國。讚良郡。野崎の郷なる觀世音。われ世のなかにあらん限りは。と誓ひに漏らさず。親子が。後の世助け給へ。と涙と共にかき口説けば。お染はこれを聞もあへず。原來おん身が實の父母の。像見は河内の野崎なる。觀世音に在す歟。しからばその囊の裂は。山吹流しの金欄ならずや。問るゝ如く護身囊は。堰堤の山吹を織出したれど。上覆して人には見せず。そはいかにしてしり給へる。いと不審。と疑ひ迷へば。お染は慌忙で。走りよらんとすれば縛の。索に引れて仰さまに。輾轉びつゝ身を起し。などてしるとは情なし。その觀世音の小像を。秘藏し給へば紛ふかたなき。わらはが爲には結髪ゆいづつの郎らう。楠河内の介けい正元せいげんぬしの嫡男てつなん。操丸そうまるにて坐するなれ。お染と呼ばれて油斷あぶらぎの。女兒むすめといふは世を僭せきぶ假かりの名にて。楠氏の親族しんぞく。龍泉りゆうせんなる。和田正武わだしんぶが女兒むすめ秋野姫あきのひめが。なれる果とはしり給へ。わが身も護神ごじんは膚はだを放はなさず。舅君しゅうきみの像見かたみにとて。とらし給ひし志紀しきの毘沙門びしゃもん。この神佛しんぶつの利益りやくにて。はからず今宵こんや名告なつこあふ。妹夫いせうの縁えんは竭つねども。おん傍かたへには得もよらず。ひとつ縲なまのにくらき身の。闇くらきに迷ふ庫くらの中。こはいかにせん。とばかりに悶もたつ唧せうつを。久松はつくつくと聞けども。未意いまだを得ず。いはるゝ所何とやらん。思ひあはする事もあれど。僅わずかに觀世音くわんせいおんの小像せうざうをもて。楠の子孫こくすんなり。とは思ひ定めがたし。但たゞそれか。と疑はしきは。養親やしん久作きうさくが。故郷河内こきやうわにて。おなじ國なる小松山の麓ふもとに于て。わが身を拾ひろひしといへる事。且賤かたしきものゝ子を孚ほくむには似げなく。物のいひざや禮義らいぎ正しく。肩癖かたがせ一ツ打せざりしは。もし久松を正元の。嫡男てつなんとしりながら。世を憚りて告げざりし歟。それか。あらぬか。われながら。いと訝いぶか。と只管ひたすらに思ひ惑へば。秋野姫は。なほ堪へかねて。よゝと泣。わが郎は氏も系圖けいづも。なほしらずや坐すらん。舅君しゅうきみの物がたり。思ひ合して推量おしあるに。彼久作は。楠氏なんしの家縁いへん津積つみ窪くぼ六有義りくありぎ。と

呼れしものにてあらんずらん。緣故えんこは箇様かたやう々々。如此々々なりとて。正元が末前すえまへを察さつして。稚兒わらわを遠離とほざし一五いちご一十じゅう。千劍破せんけんぱの城没落じやうぼつらくの事。六田むつたの旅宿りよどにて。交野前かうのまへ自殺じそくし給ひたる爲體ためいを告しらし。丹五兵衛にほんごべゐは楠普代なんふだいの郎黨らうたう。雜居兵衛ざくきべゐ言直ごんちくといふものなれど。操丸そうまるの祖父そふ正儀せいぎの非義ひぎを疎そみて。秋野姫あきのひめの父。和田正武わだしんぶに仕へし事。兵衛べゐこの春。正元せいげんの首級くびぎを奪うばひとられんとて。密ひそに洛らくに赴おもむき。野伏のぶしの番卒ばんそつとたゝかひて。斷離つたられたる隻袖せきそでを。山家やまが税平ぜいへいにとられ。その袖をとり返さん爲に。枉まがて彼が望のぞみに任して。婿むこにせんと諾うなひしかば。絳じやうの今宵こんやに及べる首尾くびびを。或はうち泣。或は喩うたて。おちもなく告つげにければ。操丸そうまるはうち驚おどきて。太やかなる息を吐つき。思おもひざりし。われは楠氏なんしの嫡流てつりゆうにて。正元せいげんの子ならんとは。但朽たをしきは。津積窪つみくぼ六。足利あしきに世を狭せまめられ。ふかくは潜ひそする爲なりとも。などて父母を告つざりける。南朝なんてう無二むにの忠臣ちゆうしん。河内判官わのんはんくわん贈三位おんさんみ正成せいせいには。四代よんだいの後胤ごういん。楠操丸なんそうまるといふわが名を。今宵こんや聞きずばいたづらに。土民どみんの子なりと思ひ悞あやち。一生化いっしやうに過すべかりし。痛いたましきは母のこといと。惜あしき父の討死うちじ。君父くんふ千鈞せんきんの讐敵せうてき。義滿ぎまんを撃うてや有べき。これぞ信しんずる野崎のさきの觀音くわんおん。志紀しきの毘沙門びしゃもん天てんの加護かごと思へば。久後くごもいと憑たのし。歎なげき給ふな秋野姫あきのひめ。と激はげます言語ごんごも忽たち地に。はじめに異なる意氣揚々いきやうやう。流石りうせきに勇ゆうむ雅駒みやこまに。絆はなりけり縛いの。索はに妹夫いせうを繫つれて。思ふには似ぬ身を憤いきり。淺あましきかな。かくはわれ。匹夫ひつぷの爲に苦くるめられ。縲なまのの羞はを土藏どざうに。閉籠とじこられて出るによしなし。いひがひなきは平衛言直ひやうゑんちく。見る影かげもなき税平ぜいへいを。などてやふかく怕おそれたる。わが腕うでは折るゝとも。この縛いを立地たちぢに。とかでやは。と焦燥しやうそうで。柱はしらへ身をよせ摺すり著けて。秋野姫あきのひめももろともに。怒いかりの涙はらゝと。降ふるや年極ねんごくの夜の雪ゆき。消きるが如ごとき物思ものひ。烏夜やみはあやなし黒髮くろかみの。亂みだれてもやるかたぞなき。浩處かうこに誰たれとはしらず。渠うの上に人ありて。いたくな歎なげきそ。その索解さくげん。といひつゝ閃ひらりと飛下とるれば。秋野姫あきのひめはさらなり。操丸そうまるはこれを怪あやしみ。吾儕わが二人ふたりが外ほかに。籠こもるものあるべうも覺おぼえぬ土藏どざうに。潜ひそびてをるは何ものぞ。と問はせもあへず冷笑れいさうひ。小夜深せよふかてこゝにあるから。名告なつこらず共ともしれ。われは盜賊たうさく。大晦日おほいそひとて物忙ものいそしく。上を下へとかへす際に紛まれ入りて。そなた二人ふたりが

身のうへ話説を。聞ては鬼の目にも涙。その縛を解んとて。われを忘れて面目なし。其處か。是處か。とかい探り。操丸と秋野姫の。索を忽地解捨て。亦いふやう。外面には。この豊の主管とおぼしき癖物と。太郎犬。二郎犬と呼ぶる悪棍等が。お染を奪ひ去らんとて。謀しあはするを。甲夜に聞つ。かゝればこゝにあらんは危し。これはわが寸志なり。路費にして大和路へとく落給へ。と町囃に説諭しつゝ。懐なる財布を出して進らすれば。操丸はこれを受けてます。怪み。梁上にも君子あり。こゝろある汝が餓別。汚れたるものと思へば。心に快よからねど。大功は細道を顧ず。是も又神佛の擁護と思へば。且らくその意に隨はんが。戸口を固く鎖されたれば。今更出るかたもなし。何處より脱れ去らん。と問給へば。盜賊答て。禍も三年経て。後にその益なきにしもあらず。牆を踰。壁を穿つは。わが得たる所なり。いざ案内して出さん。と信だちて庫の窓なる鐵網を。只一拳に打破り。索を繞て階子とし。窓へ閃りと投かけて。こゝへくと手をとりて。おのが背へ踏のぼし。軽くいだす外面は。雪白妙に降積て。吹く風寒き如法夜は。見かへれどもその面を見ず。操丸は。盜賊が誠心を感じ嘆し。劫掠を事とする老賊も。わがためには信あり。義あり。もし志を得て。世に出る日もあらば。索ね來よ。報せん。と聞え果て秋野姫を。扶掖つゝ。外面へ撲地とをりたち。雪吹に袖をさし翳して。もろともに走り去給ふ。既に夜は丑三頃の鐘の聲。丹五兵衛はとにかくに。心もとなき庫の中。天あけぬ間に姫君を。法隆寺まで落さん。とかねて思へば税平に。遞與せし外に合鍵を。準備して妻阿也女に。乗する灯光を漏さじ。と夫婦が袖にうち掩ひ。庫の戸口に潜びよる。忠義はおなじ久作も。久松が事おぼつかなく。酔臥たる税平が。枕方なる庫の鍵を辛じて奪ひとり。ひとつ處へ探りより。三人面を突あはし。互にいたく驚きて。走り退しが丹五兵衛は。久作をさし招きつゝ。聲を低くし。わが女兒のみを子と思ふ歟。と恨みてぞあるべき。これ見給へ。おのが誠はこの鍵なり。かくあるべしと思ふが故に。別に合鍵を造りおき。目今お染と久松を助け出さんとて來れり。と説しらすれば久作も。懐より庫の鍵をとり出し。おのれもまた久松と令弱を落さん爲に。

客房に税平が熟睡せしを張ひて。庫の鍵を奪ひ來れり。原來互にいひしらせねど。衛は同じ胸の合鍵。後方にこゝろつけ給へ。とひそめきて。丹五兵衛が引開る。庫の戸口に久作も。阿也女も齊しく走り入り。まづ燭を抗てと見かう見れば。お染。久松は居らずして。いと怪しげなる大男が。うつ俯に仆れたり。こはそもいかに。とみなうち駭き。久作が忙はしく。襟かい掴みて引起せば。鮮血と瀆り。自殺と見えて左の肚へ。是く双を突立たり。これはとばかり三人が。ますゝ呆れて故を知らず。久作は大男が。顔うち親りて。ふたゝび訝り。汝は野呂槌出九郎ならずや。いかにしてこゝへ來たりし。曩に久松を忻りて身を售らし。身價を奪ひつたる天罰こそ。と罵れば。出九郎苦しげに。頭を擡げ息を吻。面目なし津積どの。爹々。母御前。染松を。見もや忘れて坐する。といふに夫婦は驚嘆し。つらく見れば幼顔の。残る額の黒子まで。紛ふかたなきわが子なり。さる癖者は子と思はず。憎し。といへど可愛さの殊にいやます母親は。携著てぞ。よゝと泣。丹五兵衛はさすがに羞て。わが子をふたゝび見もかへらず。久作に對ひていふやう。心得がたきは染松が。足下を津積と呼かけたり。しかれば昔日正元の密意を稟。操丸に俱して。河内を逐電せしと聞えし。津積塗六有義なりや。と詰り問れて。久作も又これを訝しむ。わが舊名をしるあるじは。原何人ぞ。と問かへせば丹五兵衛莞爾とうち笑み。今はわがうへ匿むによしなし。楠正儀には譜代の郎黨。赤坂を退きて。和田正武に仕たる。雜居兵衛言直が。浮世を潜ぶ油商人。自殺せし癖者は。九歳の時に勘當せし。孩兒染松といふものなり。足下も彼主君の嫡男。足下も彼姫君を守册き奉る。忠臣義士にありけるよ。しからば小斯久松は。楠氏の稚君操丸。お染といひしは和田の息女。秋野姫にて坐せし歟。ともしらずして税平を。忻る爲に。浮名を負せし。お染久松が淫奔も。不義にはあらで。誠の道に。稱ふも不思議の良縁奇遇。これは。とばかりに。三人が呆れて忙然たり。かくて兵衛。窪六等は。染松が左右に居よりて。聲をふり立。稚君姫君在さぬは。汝が所爲に疑ひなし。悪棍どもに頼れたる歟。おん往方をとく告よ。首伏せよ。といきまきつゝ。隅掴みて揺動し。赤たつ父と有義を。

見かへりて落涙し。九歳のむかしより。三悪道へ踏迷ひ。不孝非義は世にも稀なる。染松の出九郎が。自の罪貫ふ時
 至り。親の家とはしらずして。忍び入りたる大歳の。庫は主君の厄をとし。聞して面には見えねど。互に名告あひ給
 ふ。操丸と秋野姫の。心操にふかく羞。故主へかへす一世の忠。野崎にて悪計せし。出九郎なりと認められては。快よ
 くは受給はじと。深念して。假聲して。懐なる金を路費に獻り。加之稚きとき父に追れて。宿もなく。且くは
 驟れ住し。本見ぬ山の古廟にて。笠やどりせし武士の所持せしものを金ならん。と思ひ迷ひ。わが父の給はりし。糸
 圖の巻軸と籠かへて。披きて見れば金にはあらで。豫てきく主家の重寶櫻井の兵書なり。かくてかの書を語て。習
 覺し間諜の術を。わが身の仇とら波に。身をばなしつゝ野呂槓と。渾名呼れて河内なる野崎の郷に年を経て。人に
 忌るゝ殘忍無頼。操君とはしられども。孝子を忤りて身を售らし。その身價を奪ひとる。これより先にも彼郷にて。
 久作どのを虐て。非道の利を射る箭竹の藪に。鋤九郎が首を埋かへ。舊の首級は觀音堂の。簀子の下へ投入れし
 が。今さら思へば彼首級は。正元ぬしの御首にて。ありけんものをいと恐し。とわれからわが身が疎ましく。稚君。
 姫君のおん物語にて。久作どのゝ舊名を聞。忠義を感じ。且羞て。不孝非義の萬分一。今宵ぞかへす櫻井の。兵書と
 金を財布へ納れ。操丸へ進らせて。秋野姫もろともに。彼處の窓より落まらせしが。おん眼前にて。雑居兵衛が
 孩兒なり。とまうさんとは思ひにけれど。親の恥なり。とたゆたひて。名告らて別れ奉りし。これのみ本意なくさむ
 らふなり。わが乳名の染松を。二ツにわれればお染。久松。大歳の最夜中に。庫の中にて情死したりと。世に披露し。
 仇家の心を放さず。術ともなるならば。この身一ツを二かたの。おん身かはりにたてゝたべ。と勸解もいとたえ
 だえに。息の下なる物がたりを。阿也女は聞くに忍びかね。先非を悔て主を思ひ。親を思はゞ罪犯も。忽地消んあは
 雪の。あはれ墓なくならずとも。又せんすべもあらんものを。わかれて以來十三年。思も出さぬ日とてはなし。
 志は直りしか。參々の往方なくなりし。縁由はしらざるべし。母には物のいひ易きに。勸解てや來ると去年まで

も。こゝろに待てど信なく。今宵はからず大晦日に。主君の危窮を救ひまゐらせ。親には面を見すれども。春や鏡の
 うらの梅。ちり際もろき無常の風。西へと吹かば節分に。わが子のこゝろの鬼やらひ。熬豆にさく花も實も。ありて
 かひなきはゝそのもみぢ。朱の鮮血に染松が。今般の功績。只一言。賞て勳當許したべ。こゝろつよきは父親の。
 常とはいへどかゝる時。心つよきも事によれ。心つよし。とかき口説。聲を惜まず泣にけり。雑居兵衛も。思ひの外
 なる。染松が心操に面をおこすこゝちして。數回嘆息し。鳥の將に死んとする時に。その鳴くこと悲し。人の將に死
 んとするときに。そのいふことよしといへり。櫻井の兵書によつて。孩兒が悪をましたるは。彼宋人が不龜手の藥。
 あしく用ひて身を滅す。自業自得といひつべし。ざるにても彼兵書を。所持せし武士は何ものなりけん。そはとまれ
 かくもあれ。孩兒が罪は。今宵一條の功をもて。許しがたしといへども。親子は一世の契りと歎いへば。母の歎きも
 不便なり。しかれば汝が請にまかして。その名に象り。女兒お染と。小斯久松が情死せし。と世に披露して。法隆寺
 へ葬得させん。かゝれば舊の親子なり。これを冥土へ裏にして。佛果を得よといひ諭し。涙落さぬ胸くるしさは。泣
 く母よりぞいやましたる。夫婦が誠を窪六は。只管に唱歎し。我れ野草槓に謀られて。操丸さへ街艶郎の。隊に一ト
 たび入り給ひし。その禍も忽地に。福となる。稚君と姫君の。奇耦。人間萬事塞翁が馬。よきも歹も何か啣たん。
 只面なきは窪六のみ。あまりに遠く慮りて。楠氏の嫡男に在すよしを。露ばかりも操丸に告奉らざりしこそ。かへ
 すがへすも悔しけれ。と頻に嗟嘆したりしかば。染松聞て莞爾とち笑み。津積生悔給ふな。母御前も泣給ふな。善惡
 吉凶時あり時なし。十三年のわが罪障も。一夜に滅する今般の歡び。思ひ遺す事もなし。南無阿彌陀佛。と唱へつゝ。
 右手のかたへ引く双に。はふれて出る腸を。見る二親はもろともに。五臟も斷離るゝ思ひにて。臨終すゝむる彌陀
 名號。奇妙頂禮觀世音。補陀落山にいや高き。慈雲慈航に。救世圓通の。佛智佛力引接し。主君に代る染松が。冥土
 の苦難を救ひ給へ。と異口同音に唱ふる折から。外面に竊聞したる山家税平。呵々と冷笑ひ。穉のやうは審に聞つ。

楠が餘類殘黨。室町殿に寇せんとは、傍痛し。お染。久松を搦捕て、浴へひかば一世の僥倖。一郡の主ともなるべきはこの時なり。遠くは走らじ。いて追ひ著ん。といひも果す。慕直に走去れば。兵衛。窪六。大きに驚き。引留んとて跳り出る。裙に蹴かへす梢息子の。燈火も染松が。露の命も忽然と。滅つゝ礮と仆けり。

○物思へば。心つくしの神も在す。天神橋に天満橋。川條黒き夜の雪。ふる郷寒き旅の天に。惑ひ出たる久松と。お染を走り脱さじとて。是非八は河原なる。枯柳の掛藁に。雪吹を禦がし。伴ひ來たりし。太郎犬。二郎犬を見かへりつゝいふやう。甲夜に久松を。税平に殺さして。その騒ぎに紛れ。お染をかい去らはんと思ひの外。二人ながら。庫の中へ閉籠られたれば。遂に詐術の疎へ入らず。とせんかくせんと。尋思に小夜を深す程に。這奴等翼を得て。鐵網窓を破りて脱れ出るを。見つゝ暗號をたがへしこそ。われながら鈍ましかれ。しかりとも。この深雪に女子を携ては。思ふまゝに走るべうもあらず。この道條へ。と見究て。その前へ走り抜。こゝにて待てば袋の鼠。生拘らんはいと易し。件の久松は。楠が餘類なること。路費さへ準備せしよしを竊聞したれば。わが意趣を遂るのみならず。捕擄て室町殿へ進らすれば。過分の賞錢を給はるべし。いひがひなき働して。とりな脱しぞ。と説せば。太郎犬。二郎犬聞もあへず。そはいはるゝまでもなし。嚮に親方。是非八。の物がたりにて。はじめして。丹五兵衛には去年の冬。法隆寺の門前にて。打れたる怨もあり。こゝへ來るとき今橋なる。酒肆にて立ながら。喫たる酒の醒ぬ間に。彼小斯とく來よかし。と待わびて。敗手拭を頬かぶり。吹入るゝ襟の六出を。五ツの指もてかき拂ひ。三人密語點頭て。待ともしらず操丸は。秋野姫を扶掖き。河原にそふて走り給ふに。心ばかりは急げども。とる手も氷え。身も冷て。袖うち拂ふ蔭もなき。雪の中道なかくに。歩みかねてぞ立給ふ。背後に閃く桿棒を打たしも果す身を沈みて。右と左へ打ちちがはし。こは狼藉。といはせもあへず。二人の惡棍冷笑ひ。主の女兒を誘ひ出して。逐電する横道もの。それはそれにて見も許さんが。實は楠が餘類にて。懐に物さへあるを。よくしるから。是非八どのに憑れて。闇の雪

たち雪こかし。轉して索をかくまでに。降積む雪は犬の叔母。七里賑はす銀世界。年極の銀は殊さらなる。賞錢にせんと響動て。又打かくる太郎犬が。棒のたゞ中とり給へば。二郎犬が右手のかたより。さし入るゝ。手に。懐なる財布をやらじ。と引あひ給ふ。透を得たりと太郎犬が。とられし棒を引きしき。裳を拂へば跳り越。打ちつ打たれつ雪を蹴たて。二人を敵手に防ぎ戦ひ。いと危くぞ見え給ふ。秋野姫は雪風の。肌膚を徹す寒さより。胸を冷して心の中に。志紀の毘沙門天を祈請して。良人の勝利を念じ給へば。多門天の加護にやありけん。操丸は辛じて。太郎犬が棒を奪ひとり。怯ところを飛かゝつて。頭を礮と打裂給へば。呵と叫びつゝ忽地に。腦髓出て仆れけり。二郎犬これに心駭き。項を縮めて逃んとするを。脱しもやらす棒をとりのべ。打倒して鳩尾骨を。突折ぢき給ふにぞ。一聲吼て息絶つ。秋野姫はこの形勢に。やうやくわれにかへりて。忙はしく走りより。夫の恙なきを祝して。衣服の雪を打拂ひ。さまざまに勦り給ふに。操丸は二人の惡棍等と苦戦して。いたく疲勞給ひにけれど。みづから志を激して。秋野姫を慰め。彼盜賊が。絆の趣を告しらせなば。兵衛。窪六等も迹より來つべし。既にわがうへを。楠氏の餘類としられたれば。天の明ざる間に。一步も遠く走ることよけれとて。持たる棒を投捨。二郎犬が奪はんとして。雪中に落したる。財布をかひ探りつゝ。とらんとし給ふ處を。是非八は後方より棒を引そばめて。窺よし。聲だにかけず操丸の。頂を丁と打。灸所なれば膜肢で。うつ俯に倒れ給ひしが。忽地に小膝を突て。身を起さんと。し給へば。起しもたてず向脛拂て。川へ次とうち落すに。秋野姫は吐嗟と叫びて。夫の袂を引留つゝ。氷れる雪に足を這らし。共に水中へ轉び入り。やがてぞ沈み給ひける。是非八はこれに驚き慌て。秋野姫を引揚んとて。岸より棒をさしおろすに。水深くしてすとどかず。ますゝ呆れて。彼方此方と走り繞れども。遂にせんすべなかりしかば。忙然として。川の上に立在。久松こそ殺しもすれ。思ひもかけぬ聞諍の傍杖に。お染さへ水中へ滾ばし落せしは。角を切て牛を殺し。枝を繋て花を散すの悞ぢなり。遮莫。天の明るをまちて。二人が屍を引揚。その首級を浴に上せなば。こ

れも又無益の殺生にはあらず。まづこのものより賞翫すべし。とひとりごち。件の財布を拾ひとるに。雪吹面を打て堪がたければ。柳の蔭へ退きつゝ。財布の紐を解んとするに。掛薬の脊に人ありて。是非八が頭髻を無手とかい臆めば。叫苦。とばかりに駭きて。走り退んとすれどもかなはず。叫ばんとするに聲出ず。たゞいたづらに足を踏鳴らす程に。仰さまに引入れられて。藁の中へぞ躲れける。浩處に津積窪六。雜居兵衛夫婦は。稚君。姫君のおん往方おぼつかなしとて。河内路を心あてに。喘々。天満と天神橋の間まで走り來るに。三人等しく太郎犬。二郎犬が屍に跪き。その死たるを見かへりて。大に驚き。なほ雪あかりに透し観るに。數十根の長き髪毛散落て。雪に印たる足跡の小さきあり。こは疑ふべうもあらぬ。操丸と秋野姫は。こゝにて撃れ給へるならん。嗚呼後れたり朽をし。と衆皆遺恨の涙を禁めあへず。勢竭て撲地と坐し。雪を颯て面をあはし。物いふべうもあらざりしが。兵衛は臉を押拭ひ。去る四月。山家税平を撃て捨てかりしに。絆を穩便にをさめんとのみ思ふ程に。この禍を醸したり。稚君。姫君幸にして。こゝにて撃れ給はずとも。既に擒となり給はゞ。おん命助り給ふべうもあらず。みなこれ巨等が罪なり。已なんぐ。と慚愧後悔して。腰の刀を抜とりつゝ。やがて腹を切らんとすれば。窪六。豊浦。阿也女。も後れじとて。おのゝ雪中に坐を占め。自殺せんとする折から。やよ待給へ。と呼びとどめて。掛薬の背より走り出るものありけり。是山家税平なり。右の小脇に是非八を抱きしめて。ほとり近く歩み來れば。兵衛。窪六。これを見て奮然と身を起し。わが君臣運竭て。この處にていたづらに死んことの本意なかりしに。かく冥土の伴侶を得たり。主君の仇人山家税平。脱さじ。といきまきて。もつたる刃をとり直し。矢庭に撃んと競ひかゝるを。税平は騒ぎたる氣色なく。はやり給ふないふことあり。と推禁め。擲に土藏の外面にて。染松が懺悔物がたりを竊開し。操丸。秋野姫のうへはさらなり。雜居津積の誠忠。感ずるにあまりあり。われも名告れば。楠左典正儀ぬしの近臣に。百濟右衛門太郎義包と呼れしものなり。いぬる永徳元年八月のころ。主君正儀の遺命を稟。櫻井の兵書を正勝。正元に進らせん爲。正儀自殺の日に。

赤坂の城を脱れ去り。本見ぬ山の古廟にて。誰とはしらず。件の兵書を。雜居の系譜と籠かへられたり。こは兵衛言直の所爲ならん。と思ひしかば。乞兒となりて龍泉の城外に野臥し。をさゞこれを張ふに。雜居は故ありて近曾逐電して。往方しれず。と聞えしかば。いよ望を失ひ。しのびぐにその所在を索つ。十年あまりの光陰を過す程に。南帝。北帝。御合體まし。千劍破の城没落して。正勝は十津川に病死し給ひ。正元は。洛東四條河原に于て。討死し給ひしかば。遺憾やるかたもなく。せめて正元のおん首級を奪ひとらんと思ひて。有一夕。日岡へ潜びよるに。われに等しく。彼おん首級を奪んとし。野伏の番卒にとり圍まれ。突戰奮撃するものあり。義包本意を遂すといへども。不意彼人の斷離られたる隻袖を得て。これを疑ひ。その後方に跟て浪花へ赴き。油商人。丹五兵衛といふものなるよしをしりつ。かくてさまぐに術を運らして。その爲人を張ふに。正元のおん首級を奪ひとらんとせし。その夜の勇敢。且女兒お染が擧。止。併しながら。市井の少女におなじからず。こは疑ふべうもあらぬ。丹五兵衛は。雜居兵衛にて。女兒お染と呼ぶ未通女は。正武の息女。秋野姫なるべし。と猜し。やがて件の隻袖をもて。招塔にせよ。と責たりしは。兵衛もし。榮利を謀りて羞を忘れ。秋野姫をもて。富る商人などに妻す事もや。と心もたなく思へばなり。さるによりて。義包招塔と稱して。彼家に留り。密に秋野姫に。愚臣が舊名を聞えあげ。正儀の遺命を述べて。雜居が胸中をさぐり。時宜によらば。兵衛を撃て櫻井の兵書とり復し。秋野姫のおんともして。浪花を立退。幼少きとき往方なくなり給ひぬ。と聞えし正元の嫡男。操丸のおん所在を索奉り。祖父左典正儀の遺命を告て。兵書を傳へ奉り。稚君。姫君。御夫婦を再會なし進らせて。楠氏舊恩の武士をかたらひ義兵を起さし奉らん。と思ひ定めしが。今宵はからずも染松が物がたりにて。はじめて雜居。津積の忠義を感悟し。且正元の御首級は。津積生これを奪ひ得たるよしを聞くに。いひもあはさて三人が。志の異ならざるを發明し。本見ぬ山の麓にて。櫻井の兵書を籠かへたるは。染松が所爲なるよしをしるから。忽地にその疑ひ解。兩忠臣を激さん爲に。なほわが舊の名を

告げずして。稚君。姫君のおん迹を慕ひ奉つりしに。緋遂に合期せずして。操丸。秋野姫は。この是非八が爲に命を
 限し給ひ。おん亡骸は。水中に滾落させ給へり。と此辭者が首伏せり。名家良將の御子孫も。運竭て匹夫の爲に。擊
 れ給ひぬるこそ悲しけれ。今は歎くともそのかひなし。只速に是非八が首を刎て。腹かき切らんには。といふ。兵衛。
 夫婦。窪六等は。大に驚嘆し。思ひきや。山家生も。又楠家の忠臣。百濟右衛門大郎義包。と命ばれし壯俊ならんと
 は。今は何をかいはん。只憎むべきものは。是非八なり。吾黨生ながら。その肉を啖はん事。百濟生の賜にこ
 そ。と散動たち。おの／＼双を閃かして。まづその手足を斫落して苦しまし。義包やがて。是非八が首を刎て。屍を
 川へ蹴落せば。奇なるかな。水氣激して。逆まきのぼること一丈あまり。さながら鯨鮪の潮を吐くに異ならず。忽地
 光明赫燦として。觀音菩薩。毘沙門天の尊像。水に沂りてあらはれ給へば。衆皆奇異の思ひをし。双を捨て禮拜
 せり。時に掛薬の彼首より。操丸。秋野姫。忙しく走り出。緋のやうは那裏にて聞きつ。かならずしも歎くべから
 ず。わが夫婦。元來恙なし。と宣へば。水勢忽然とをさまりて。毘沙門天の尊像は。秋野姫の掌に止り。觀世音の
 尊像は。操丸の掌にぞ宿らせ給ひける。兵衛夫婦。窪六。右衛門太郎等は。この形勢に雀躍し。原來。彼神佛が身
 がはりにたち給ひにけり。こはいとも恐し。と渴仰隨喜の涙拭ひあへず。兵衛は。稚君。姫君に。染松が自殺の事を
 聞えあげ。右衛門太郎は。是非八が奪ひとりし。財布の中なる。櫻井の兵書と。金とを獻りぬ。當下操丸は。秋野
 姫とともに四人の忠義を賞嘆して。且染松が自殺を惜み。兵衛はひとたび瓦橋へ立歸り。染松が後の事をとり営みて。
 迹より來べし。しからずば。近隣の爲に疑れん歟。と宣ふに黙止がたく。雜居兵衛は豊浦を將て。瓦橋へ立かへり。
 窪六。右衛門太郎は。主君のおん供して。河内路へ赴きつ。次の日。兵衛夫婦は。染松が亡骸を煙となし。白骨を項
 につけ。大和へ赴きて。これを法隆寺へ葬りぬ。近世の稗説。浪華見聞録(寫本)といふものに。お染。久松が墓は。
 法隆寺にあり。と記せしは。これならん歟。かくて操丸は。野崎なる觀音堂の寶子の下より。父正元の體骨を索出し

て。厚くこれを葬り。正直坊。默善に夥の金を布施して。正元の亡日毎に經を誦まし。觀世音の佛恩を拜謝し給ふに。
 兵衛。豊浦も參りあひつ。さて主従は。志紀の毘沙門堂に參詣し。遂に吉野の奥に引籠りて。時の到るをまつ程に。
 秋野姫の腹に。一男。一女。出生し。嫡子は楠七郎と名告らし。息女は成長の後。大和の越智へ嫁り給へり。かくて
 夥の年を経て。南帝高麗院。ふたゝび吉野に起り給ひしとき。楠七郎大將をうけ給はりて。武略誠忠。先祖に劣らず。
 しば／＼足利の大軍と戦ひぬ。楠七郎の事は櫻雲記録。後醍醐天皇。南山に遷幸ありしより。五十五年にして。南北兩帝
 御合體まし。その後。五十年を経て。南帝ふたゝび吉野に起給ひ。その後。十五年にして南帝討れ給ひつ。南朝
 は。前後長慶院。高麗院等なり。百廿年にして亡び給ひけり。
 ○今茲。予が著述の稗史五部。所謂松染情史五册。俊寛。島物語八册。頼豪怪鼠傳後編四册。句殿實々記十册。椿
 説弓張月續編六册。亦合巻と稱ふる繪草紙三部。釣鐘彌左傳十册。小女郎蜘蛛十二册。山中鹿之介雜物語十册。
 統計。八部六十五卷なり。正月下旬に草を起して。十一月中旬筆を絶てり。この書。第一卷。第二卷は。七月六
 日より。同月廿七日に到りて稿了。秋後病痾によつて。筆硯に親まず。然れども。書肆の爲に責られて。まづ怪
 鼠傳。弓張月。句殿實々記。俊寛。島物語等の稿を脱し。遂に十一月四日に至りて。ふたゝび第三卷より稿を起
 して。第四卷。第五卷。共に九十餘張。同月十八日に書畫の草稿全了。僕れば僅に十五日なり。こゝをもて。
 思ひを運らすに遑あらず。只夜をもて日に續。或は草し。或は校じその成ことの速なるを是とす。夫編者は。
 毫を忽卒の際に把り。看管精細にこれを閱するときは。余が倉漏にして。且事を悞るの譏を脱れがたし。文辭の
 拙きは。元來才の短き所。いかにともすべからず。倘この數種の稿本年申にして刻成をはやしとせば。その拙き
 は許し給ひね。

松染情史秋七草大尾

墨田川梅柳新書

墨田川梅柳新書を刊する例

吉田少將の事。極て詳ならず。但謳秘鈔といふものに。野上の花子がうたへる歌につきて。彼少將の事を載たり。亦松雅梅雅の事。世にはさまざまにいふあり。梅花無盡藏の説は且くおく。或は梅雅は。

人皇六十五代 花山院の寛和二年丙戌三月十五日に没するといひ。或は八十四代 順徳帝の承久二年庚辰三月十五日。野人の爲に横死すといふ。よしやその事おぼろかなりとも。白楊青苔いく春秋を経て。古墳當時を見るに堪たり。夫前に詳ならざるも。後に細しうなりもてゆくは。草紙物語のつねなり。この書も又その類にして。婦はらはべ

の爲にとてすなれば。只善を勸悪を懲し。正を擧邪を退る事のみ違はず。しかはあれ。墨田河原に筆をそまぎて。木母寺の柳のいと。ながくとどめんとにもあらず。牛島に角組むよしあしにつきても。見ぬ世の面影を鏡が池にうつせ

るぞ。亦是畫師のわざくれなりける。渡守の烏帽子着たるいにしへは。郷の名も今には異なるべし。平井。牛島。關屋。須田村。柳島などは。ふるくも呼び來れるとおぼし。葛飾は和名鈔國郡の部下總の條下に。加止志加とあり。さ

ればこそ伊勢物語に。むさしの國としもふさの國との中に。いと大なる河あり。それをすみだ川といふとは書たれ。今は利根川を兩國の封疆と定られて。葛飾は武藏に屬とぞ。亦夫木集を見れば。中ごろすみだ川に橋をかけたる事も

あり。彼集に。康元元年 後深神帝年號 將軍宗尊親王 鹿島の社に詣けるに。すみだ川のわたりを見れば。彼わたり今はうきはしあればとありて。俊光朝臣

すみだ川むかしは聞かず今こそ身をうきはしのある世なりけり。亦古本更科日記に。下ふさの國とむさしのさかひにてあ

墨田川梅柳新書

る。あすた川とぞいふ在五中將のいざこととはんと詠けるわたりなり。中將の集にはすみだ川とあり。かどみがせ。まつさとのわたりのつにとまりて。夜ひとよかづくものなどわたす。云とあり。こはすみだ川を東にてはあすた川と稱たる一證とすべし。今も彼渡の村に。須田といふ。處あり。これも元は阿須田なるを。上略して須田とも呼び。又須田をすんだなど。訛つらんを。都人はすみだ川と書にやあらん。こは友人蟻術齋の説にい。なほ考おける事もあれど。名所記めければこゝには漏しつ。今この草紙は東鑑。盛衰記。承久記にも見えざる。根なき言の葉さへしげらし。つまを戀ひ子を慕へる。狂女が昔物がたりを。關屋の里の雉子。受地村の雲雀にも思ひよせて。梅柳新書と名づくるものは。梅稚の事を宗として作ればなり。

文化丙寅のとし三月十五日

著作堂識

墨田川梅柳新書 總目錄 全本六卷

- | | | | |
|----|---------------|----|---------------|
| 一 | ト部惟通嵯峨野に狐を訪ふ | 二 | 吉田少將野上驛に美に遇ふ |
| 三 | 光政避雨して赤繩に繋がる | 四 | 斑女花に寄せて黄金を賜ふ |
| 五 | 龜鞠伊優して賊僧を欺く | 六 | 盛景影の江に胤時を殺す |
| 七 | 松稚丸潜に白川山に獵す | 八 | 忍宗太酔て西洞院を鬧す |
| 九 | 金鶏凶を告て惟房を陥る | 十 | 天狗石を飛して松稚を救ふ |
| 十一 | 春雨厚原野に山客と戦ふ | 十二 | 光政平尾郷に妻子を殺す |
| 十三 | 澤石淵の悪棍怒て少年を鞭つ | 十四 | 墨田川の津人憐て狂女を渡す |
| 十五 | 因を説果を示す楊柳塚 | 十六 | 奸を鋤冤を雪む大團圓 |

墨田川梅柳新書 總目錄 畢 通計 十六條編

墨田川梅柳新書 卷之一

東都 曲亭 主人 著

一 卜部惟通嗟峨野に孤を訪ふ

むかし後鳥羽。土御門。順徳院。三代の天子に仕奉りし。吉田少將惟房。一説に といふ人ありけり。その先忍見足尼命より出て。雷。大。臣の後胤。卜部吉田家の庶流たりといへども。故ありて家世久しく衰。いと衰しかりつるに。惟房の父卜部の惟道といひし人。いぬる安元治承の間。平家政を執ていと時めけるころ。所縁ありて左馬頭行盛。盛の子清。盛の孫なり。の家に扶持せらる。しかるにいく程もなく世の中大に亂れ。頼朝は豆相に起り。義仲は北越に出。東軍百萬。威勢猛く攻上れば。平家防禦に策なく。安徳帝を衛奉りて。氏族親族など。遽しく洛を落。攝州八部郡須磨の浦に假の皇居をなしまらせ。且く敵の英氣を避たりしかば。惟通も行盛に従ひて。須磨の内裏にぞ参りける。かくて三年あまり支つ。百遍千遍の合戦に。源氏動すれば勝に乗りて。その鋒朝日の昇るがごとく。平家の陣はしろみかへりて。有明の月にひとしく。なほ西を投て落んとて。俄頃に出るの樓船を泛め。先帝。安徳。女院。門院を乗せまらせ。讃岐の八島に引退きしが。又こゝにも足をとどめ得ず。長門の赤間が關に盾籠りしを。いたく攻られ。ふたゝび船にうち乗り。高麗唐土の果までも漕出るを。源氏の兵船八方よりとり巻て。一騎も漏さじと攻たつれば。平家はこゝに。勢究り。宗徒の大將或は討死し。或は生拘られ。今はかうと見えしとき。行盛潛に惟道に私語

給ひけるは。足下は予が恩顧の家諫にも勝りて。かゝる今般までも立去給はざる誠心のうれしさに。後の事をも聞えまらするにこそ。抑行盛が年來ゆきかよひつる。小櫻初花といふ二人の女房あり。往に七月なり。洛を出るとき。小櫻は男子を産み初花も有身て臨月に程ちかきを。しかくゝの處にしのばせおきてしが。こゝにありては軍慮に間なく絶て一たびの音耗も聞えず。既に五年の春を過しぬ足下元來武藝に富て心ざま勇し。一方を切脱ん事はいと易かるべければ。直に洛にかへり上りて彼等がちからともなりて給はるべし。こはわが紀念とも見給へとて。備前家次がいとわかつて打たりける短刀の。鏢に自他平等即身成佛と鐫入たる一振と背に梅と松を鐫出したる鏡一面をとり出て與つ。他事なくたのみ聞ゆるに惟通彼兩品を受納て仰うけ給はりぬこゝろ安かれ。この事ようつたへまつらんと應ながら。去らんとせず。依然として舊船にあり。行盛はかくいひ捨て。前左少將有盛の子とともに。敵の船に飛乗り飛乗り。當るを幸に切てまはり。思ふ程の戦して。二人ひとしく討死し給ふ。惟通は思慮ふかき人なれば。とても一方を切脱て落る身なり。いかにもして先帝を救ひ出し奉らばやとて。つと身を起し秋の野にちり布木の葉のごとく漕ならべたる船どもを。此彼と乗うつり。先帝の御船に飛入りて見奉れば。只今二位の禪尼。君を三歳抱きまらせて。御劍を腰に帯。千尋の底に沈み給ひぬとて。典侍以下の女房達。船の艫舳に臥まらび。聲を揚て叫。悲み給へば。惟通も今さらに驚かれ。手足も癱麻る。やうにおぼえて。御船にありける唐櫃に。尻をかけんとしたりしかば。忽地に目眩。鼻血さと流れ出づ。亞相時忠卿見給ひて。内侍所の御箱なり。狼藉なせそと宣へば。惟通大に駭き怕れ。潮を沃かけて身を清くし。件の唐櫃を負奉りて。ちかく寄せたりし源家の侍伊勢三郎義盛が船に到て。われは吉田の庶流に。卜部惟通といふものなり。平家重恩の人にもあらねば。源氏に對して恨もなし。只假初の所縁ありて。前左典廐行盛に伴れてこゝに來り。今先帝の御船に参りあひてはからずも神鏡の御箱を守護て來れり。このよし大將軍に申させ給へといへば。義盛聞て時を移さず惟通を將て大將の船にまゐりしかば。義經斜ならずよろこびおほしく。件の唐

櫃を受とらせ。やがて惟通を厚く待し給へり。時に文治元年春三月廿五日。平家の氏族悉く滅亡せ。神璽内侍所は。故なく浴へかへし入れ奉りしかど。寶劍は海に沈みてふたゝび出る事なし。もし惟通守護奉らずば。内侍所もいかになり給ふらん。こは全く彼が續なれば。よろしく勸賞あるべしとて。法皇後白河院よりこの旨叮嚀に仰出されけり。さらば一所懸命の地をも宛行れ。官爵をも制度せらるべきかど。聞えしかど惟通さらに承奉らず。今思ひもかけず朝恩に浴し。久しく衰たる家を興さん事。歡ばざるにあらず。しかはあれ。惟通苟も人の禍に由て。身の福を謀るにしのび候はず。且近曾壇浦にて討死せし。平行盛に妾服の兒二人あり。彼人浴を落るとき。小櫻といへる女房には。既に男子出生し。初花といへる女房は有身てありけるを。人の家に潜せておけるよしを聞ぬ。今はその兒おのゝ五歳なるべし。あはれこの度の勸賞に。彼二人の稚兒を賜らば。その往方を索出して。惟通が子とし養ひ成長のち出家させて。父祖の後世をも弔せは候はめ。これ行盛が年來の恩恵を報さんと思ふのみ。この事許させ給へかして願たてまつるに。法皇聞食て御感淺からず。惟通が申すところ義あり信あり。まげて行盛が子とを助得さすべしとて。縁由を鎌倉へ仰つかはされしかば。頼朝卿謹てこれをうけ給はり。行盛は平家の嫡流朝敵の首領たり。その子幼少とも助おくべきものにあらず。さは申せ。天下に信を失はじとの院宣を。固辭奉らんやうなし。しからば惟通が望申すにまかせられて。行盛が子どもを養せ。とし十五に及ば、佛門の徒となすべし。又初花とやらんが腹なりける兒女子ならば彼が隨意養育ん事勿論なり。もし男子ならば。これ又もろともに出家いたさすべし。かくの如く仰含らるべうもやと回答奉せらる。この時當今後鳥羽は。幼少おはしませし程に。天下の事大小となく。院後白河より制度し給ふなれば。法皇やがてしか仰出されけり。惟通は忽地に望足りてふかく歡び。行盛の遺言を心あてに嵯峨野の奥に索ゆきて。まづ小櫻の女房を訪ふに。はじめは鎌倉より搜出さるゝかと疑ひて。左右なくそれぞともいはざりしを。惟通赤心をあかして。事密に告しかば。あるじの老女や、涙ぐみて。さてはその方さまの人にてやおはする。抑行盛朝臣

西海に漂泊し給てより。たえて音耗もあらずとて。小櫻の局は且暮憂におもひ沈み。ながき病著に首さへあげ給はず。遂に去年の神無月黄泉の客となり給ひぬ。かくかはりゆく世の中の人ごころも常なくて。冊きまらせし一人の老黨も。やうやくに心かはりし。おのが世經んとてや。稚君を捨おきて。いづ地ともなく逃去にき。わが身は里に久しく住めど。ふかき恩を稟たるにもあらず。聊の縁にしありて。年來あるじまらせたれば。稚君の事あまりに痛しく。なほ家に養育て。一椀の飯をわかち進らすのみ。さるを朝廷より御免を稟け給ひて。世をひろく生育給はんはこよなき幸にこそ。稚はいづ地ぞ。こや喃々と呼びたつるに。おいと應て破たる籬色のほとりより。年紀五ツばかりなる童。引捨たる菖蒲を挿頭つゝ走來れり。世につれ時にしたがひて。日やけの額にふりかゝる總角の。いつ梳りしとも見えず。垢つきたる單衣も。針目あらはにして。膚を裏むに堪ざれば。これなん行盛の遺腹子かと思ふに。惟通漫に落涙し。さてあるじに淺からぬ志をよろこび聞え。折ふし携たる物を残しとめて。この日の贈とし。又初花の女房を訪んとて立出るを。老女しばしと引とどめ。いまだ初花のなりゆき給ふをしらでやおはする。彼婦人は仁和寺の片邊にかくれ住て。折々に小櫻を訪ひもし訪れもして。かたり慰めたまひしが。産給ひたるは姫にて侍り。しかるに今茲彌生の下旬。平家の氏族親族。みな壇浦とやらんに滅亡。行盛朝臣も討死し給ひぬと聞えし程に。初花いたく叫び悲みて。終に大澤の池に投給ひしとぞ。その時までも傳き侍りつる春雨とかいへる彌母。ふかくうち歎きて。幼き姫をかき抱き。東國にしるべあれば。其處へ下りてこそ。左も右もすべけれとて。旅たつ朝こゝへも立よりて。姨に稚の事たのみ聞えたりしは。いぬる廿日あまり七日八日のころかと覺し。小櫻世を去給ひしより。初花もいよゝ心ほそげにて。いつか頭殿盛に會まらせて。二人の兒たちを遞し侍るべきなど宣て。折ふしは稚の安否をも問せ給ひたるに。行盛朝臣討死ありしと聞く。愁傷のやるかたなきにか。幼き人を遺しおき。大澤の池の水層となり給へる。御こゝろの中推量られていとあはれなり。しかれば彼處に尋ゆき給ふとも。絶てそのかひあるべからずと物が

たるに。惟通ます、遺憾に堪ず。なほ彼春雨がゆきたる國を問に。東國とのみ聞えて。審にはしらずと云。かくてあるべきにあらねば。稚人の手を引てこゝをたち出。さりともと思ひて仁和寺のほとりに赴き。里人に縁由を告て初花の事を尋るに。彼老女がいへるにつゆ違ざれば。ちからなく立かへり。人に就て事審に奏し聞え奉れば。法皇いと憐みおぼして。行盛が女兒の往方定かならずばいかにせん。これをば緩やかに索ぬべし。今携來れる。稚きものを養育んに。一畝の田一束の稻ももたては便なからめとて。近江國志賀郡にて。莊園一箇處を賜りければ。惟通ふかく朝恩を謝し奉り。やがて彼處に家作りしつ。件の孤をば行稚と名づけて愛やしなひぬ。惟通元來一子あり。柳王とよびて今茲七歳なり。妻は産後に身まかりしが。いぬる養和元年。行盛に従ひて。惟通洛を落るの日。稚きは手足まつはりなりとて。觀山月林寺の仲圓阿闍梨とは。その身從弟なるをもて。そのころ僅三歳なりけるわが子柳王を。彼寺に預おきてしに。これをも家に迎とりけり。成長の後吉田少將惟房といへるはこれなり。さて惟通は。幼少よりこの二人に義を結ばせて兄弟とし。行稚は年も劣たれば弟なりと定め。もろともに物學せて。慈愛に親疎あらざれば。これを傳へ聞くもの惟通を稱讚し。寔に當世の義士なりとぞいひあへりける。

二 吉田少將野上宿に美に遇ふ

光陰は流るゝ水よりも委みなく。行稚や、長立にけれど。人のこゝろざまばかり。親にも似ざるものかな。その左馬頭行盛の庶子。入道相國清盛の曾孫として。よき事にはつゆほども心をとめず。行ひ放にして。よろづ魚忽に見えしかば。惟通をり、折檻の教訓をくはふるといへども。絶て之を用ゆることなし。又惟通の一子柳王は。學問武藝に志篤く。且身の憤ふかくして。その才父にも勝れる如し。時に建久四年癸丑二月十五日。惟通は行稚が爲に袈裟念珠度牒。すべての僧具を執とのへ。又行盛の紀念なりける。備前家次が。自他平等即身成佛の短刀を授て戒刀

とせさせ。すなはち觀山月林寺に登して。仲圓阿闍梨の徒弟とす。今茲行稚十四歳。その期に違はん事をおそれ。この事豫て官に聞え奉りて。かくはなしけるとなん。又わが子柳王十六には別に日を卜て元服させ。吉田惟房とぞ名告せらける。しかるにこのごろ後鳥羽帝。只管武藝を好み給ふをもて。鎌倉に仰せておぼえある武士十人を。北面西面に召れしが。惟房も弓馬劍法を嗜み。その業既に熟せりと聞召され。父惟通は仕官ねがはしからずとも。その子はいかて青雲の志なからん。彼ものを進せよとて。叮嚀に仰下されし程に。惟通かゝるを推辭奉らんはいともかしこし。さらば參れとて洛に上しければ。聽て惟房を藏人になされ。家は北白川のほとりにて賜りぬ。元來伶俐かりしかば。君の御おぼえもいと愛たし。わが家を興さんものは。かならずこの子なるべしとて。父はふかく娛し思ふに。盈れば虧るならひにて。その身老の坂を登りも果す。建久七年の秋のころ。惟通假初の病着に臥たるより。鍼灸藥餌も驗なくて。終に身まかりけり。惟房いたく悲て送葬形のごとく執行ひ。忌どもをはりて後。奉公舊のごとくしつ。忠勤拔群なるをもて。官位年々に昇進し。いまだ五六の齡をも超ざるに。四位左少將になされける。かゝる幸福は世にも又稀なり。今は事みな嫡家にも勝りて。世の人の思ひよせ厚く。羨み思はざるものなかりしとぞ。かくて建仁二年壬戌の春。少將惟房陸奥の國司に任ぜられ。彼國へ赴き給ふ。家隸には栗津六郎勝久。松井源五純則。以下の老黨若黨。前驅後從して旅だちぬ。これらは舊臣の子孫にて。彼此よりまゐり集會たるものどもなり。これより先建久九年三月三日。後鳥羽院隱居させ給ひて。位を一の皇子。爲仁王に讓給ふ。土御門院これなり。しかれども天下の政は後白河建久三年三月十三日崩すの舊を追ふて。院後鳥羽より制度せさせ給ひし程に。今度惟房を陸奥の國司に任ぜられつるも。院の御はからひと聞えたり。かくて惟房は洛をたちていく日といふに。美濃國野上なる。長が家に宿り給ふ。この長が女兒に花子といへる白拍子は。その名高く洛にも聞えて。漢にしては趙飛燕。和にしてはこのごろの。洛の靜。池田の侍從には勝るとも。更に劣るべうもあらず。青春既に廿二歳。いまだ夫をしも定めずその姿こそ艶麗なれ。心はたえて

淫たることなく。かゝる活業をなす女子には。類あらずとて人みな賞しけり。しかるに長は惟房のこゝに歇り給へるを。いと面目ある事におぼえて。さまざま饗應まゐらせつゝ。女兒花子が舞の曲は。巫山の雲をも招くべく。雑踏せるものゝ調に。軒の春雨音をへぬ。正に是野の花却て艶く。濁江の月風情あり。天離る鄙にも又。かゝる美女はありけりとて。惟房只顧耳を側て。目を斜にしておほせしかば。花子も又都人の風流たるにこゝろときめけるなるべし。さて席を換て夜の設するに。長はわが子に對て。羽生の小屋のいぶせき旅寝は。殿もさそな寂寞おほすべき。枕方にまゐりて慰め進らせてよ。といふも心あり貌なり。花子はなほ恥らひて立ぬるを。女の童に案内させて。わりなく臥房に薦しかば。少將も風なきに靡く青柳のいとくからずおぼしつゝ一夜の夢を締給ひぬ。さる程に惟房は。詰朝野上をたちて路をいそがし。日に歩み夜に宿り奥州宮城郡の府に著て。邊庭を治給ふこと三年に及び。元久二年の春任限既に充によりて。洛へかへり上るとて。路の叙よければ。此度も又野上に歇りて。長が家にあるじさせ給へば。長は女兒とともに出迎へ。管待はじめに彌増たれど。花子は何とやら顔色顰しげなるを。惟房見そなはしてふかく異み。情由を問んとし給ふ折しも。長がかき抱きたる嬰兒の。年は三ツばかりなるが。やがて膝をはなれて。惟房のほとりちかう参りしかば。こは何ものゝ子なるぞと宣はするを。長含咲て。これなん花子が産侍りつる。殿の御子にておはするなり。しかも郎君にてわたらせ給へば。この三年が程はそよふく風にも當じとて。塵さへすゑず養育侍りといふ。惟房聞て眉根をよせ。われ往にこゝに宿りしとき。花子と一夜の契なきにあらねど。ゆくを送り來たるを迎へ。艶曲をもて人を慰るを。身の務とすなる者の産る子を。わが胤なりといへるもおぼつかなし。又かゝる事あらば。縦千里を隔たればとて。雁の翅に書を寄せても。とくに聞ゆべかりしを。この子は跋もならひ。今は歩みもする程なるに。絶て告來さざりけるは。いとこゝろ得ねと宣へば。長かさねて。この事聞えまゐらせざりしは。花子が身の賤きを羞てなり。常言に齒を接ば花もなほ竊むべし。人の胤は盜かたしとぞいふなる。この稚子の面影

の。殿に肖給ひたるや否。みづから照して見給へかしといふ。この時までも花子は一言をまじらへず。只物おもはしき氣色なりしが。つと立て一面の鏡を携來つ。少將のほとりにさし出すを。惟房とりて打かへし。左見右見てうち驚き。奇なるかなこの鏡は。わがもてるものと露違はず。彼處の櫛笥もと仰すれば。長こゝろを得て旅櫛笥もて來るを。うち開きてとり出し給ふ鏡も。摸樣花子が鏡にひとしく。脊には松と梅とを鐫なして。作者の名字長短までそれかこれかと見まがふばかりなれば。花子母子はさらなり。惟房いよゝあやしとおぼして。わがこの鏡は。往時文治元年三月廿五日。壇浦にて討死せし。前左馬頭平行盛の所藏なるを。故ありて亡父惟通より相傳せしが。これと彼は元一對なり。いかにしてその一面を。花子が手には入りたるやらん。かならず縁故こそあらめ。聞まほしと宣ふに。花子は涙さしぐみて。はかしく應もせず。長も涕うちかみつゝ且くしていへりけるは。この鏡には異なる物がたり侍り。今は何か匿侍らん。この花子は長が女兒にあらず。左典廐行盛朝臣の遺腹子にて。初花といへる女房の産給へるなれば。さてぞ花子と名づけ侍る。今は廿餘年のむかし。行盛洛を落給ひしとき。初花をば俱せられず。嵯峨野にふかく潜せ給ひつる頃しも。懐胎ておほせしかば。いく程もなくその月に臨みて。この姫をなん産給ふ。長は行盛恩顧の老黨山田太郎政綱といひしものゝ。女兒にて。春雨と呼れ侍り。母は世を早うして父のみなるを。それさへ主に從て戰場に越き。わが身は初花に傳まゐらせて。嵯峨の隱家に侍りしに。かゝるときとて味氣なき。世のただずまひこそ悲しけれ。正しく入道相國の曾孫にたまはせまれば。御産の禮藝目鳴弦など。彼式この壽とて。榮時めき給ふべきに。盛衰は一炊の粟をまたず。甌轉すまでもなく。藥屋に雨露を凌かね。姫の産聲揚給ふさへ。人に聞れじと思へば心くるしく。とかくして四年あまり。五年の春にあふかひなく。平家の一族は。落屋の島の内裏をも攻火せられ。行盛朝臣はさらなり。わが父政綱も討れぬと。後に聞たる悲しさは。比んやうもあらざりき。又おなじ思ひに沈む人なきにしもあらで。是も彼朝臣の愛給ひし。小櫻と申せし女房には。男子出來給ひて。ともに嵯峨に住給

へば。送に憂を訪ひ訪れ給ひしに。その前つ年に小櫻は。なき人の數に入りて。跡には稚子のみ残り給へば。初花は只身ひとつにかこたれて。泣あかし。哀傷やるかたなかりけん。ある曉にしのび出て。大澤の池に投給ひぬ。その時わが身の胸くるしさは。今語るにもなほ勝れり。元來平家の黨と聞ときは。木を伐草を刈はらひても。搜出されて命とらるゝと。人みないひ罵るにいよ、淺ましくて。初花の亡骸を索出して。送葬する事もかなはず。俄頃には姫をかき抱く隠家を走り出小櫻の産給ひし稚子の事をば。潜にあるじの老女を相語おきて。この美濃國に聊所縁あれば。辛じて逃れ来れども。主従が露の命繋べき便なさに。この家の主人光二郎といふものゝ妻となり。姫をば姉の子なりと偽りて。養育まゐらすに。成長給ふ隨に。姿いと嬋妍にて。心さま又風流給へば。夫光二郎もふかく慈み。糸竹の調立舞事をも。その師に就て習せ侍り。しかるに夫光二郎は。四年前より中風とやらんいふ病にて。起居も自在ならず家はますく貧しうなりにければ。已ことを得ず。かく白拍子となりさがらせ侍りしも。原その志にあらざれど。姫にこそ父御の素生をも聞え進らせたれ。夫にはなほ明白に告されば。彼又止むべきにもあらず。姫も又光二郎が年來の庇をおぼせば。更に固辭氣色もなく。かゝる活業したまふにぞ。今は野上の花子とて。人もしりたる舞姫と。なり給ひぬる幸なさま。さはあれ平人の妻とはなさじ。活業なればいかにせん。人の爲に酒宴の興は添るとも。淫たるこゝろもて。身をな放し給ひそと。諫もしさもおぼして廿歳過るまで。なほ處女にておはせしを。過つる年。殿。わが家に宿らせ給へば。かゝる貴人に縁にし締給ひなば。發跡たまふすがともなりなかと。さてぞわれからわりなく磨し。その夜の契空しからず。この稚君を産せ侍りつれど。面あたり縁故を申さずば。殿にも實事とはし給はじ。よしや實事とし給ふとも平家の黨なりと聞えなば。側へも居給はじ。とやせまじかくやせまじとおもひ屈し。かへり上らせ給ふ日を只まつと待ほどに。待よ稚よと呼つぎに。稚君の名をもいつとなく。待稚と稱侍りしと。首尾を告申せば。花子もやゝ頭を擡いへばえにいはて已なん事ならねど。父の名さへあかし侍りつる。わがうへいと

恥しけれ。平家に因あるものをよも慕ひまゐらすとも。浴へは俱し給はじ。されどこの兒は。君の胤にて侍るなれば。養んとも。棄んとも。御こゝろに任せ給へかし。わらは、今より尼となりて。處定めず黒染の袖は結べど結び果ぬ。縁にしと思ひたえなんとて。かき口説つゝよゝと泣ば。惟房つくゝと聞て。或は驚き或はよろこび。思はずも陸をすゝめ。赤繩一トたび足に繫ば。終に婦夫をなすといふ。こはみなけふの事なりし。抑わが家衰て。亡父惟通久しく流浪し給ひつるころ。且く行盛の家を身を寄給ふに。いく程もなく源平鏑を削るに及び。父も行盛に併せられ。西海に赴き。彼人討死せし日まで。なほ立去らて在せしかば。行盛その誠心を感じし。後の形見にとて。家次の短刀と。この鏡とを贈り與。小櫻初花の産る子どもの事をたのみ聞えしかば。亡父これを承引て。一方を切脱んとするに。敵の兵船遮り留て。輒くも脱れがたき折しも。不岡内侍所を得たりし程に。これを携て義經の船に赴き。この功をもて行盛の子どもの命乞し。忽地朝廷の御免を稟たりと。わが物ごころしれるころより。常にいひ出給ふをもて。われ又よくその事をしれり。そはかゝる事ありとて。惟通みづから嵯峨野に尋ゆきて。小櫻の産りし行稚を。わが子として守り育。叡山月林寺へ登して出家させたる事。又初花の産りし女子の往方を索るに。たえてしれざりし事。惟通は建久七年の秋世を去り。わが身院。後鳥羽の寵遇を得て。こよなく昇進したる事。審に説聞せ。さて宜ふやう。亡父命終らんとし給ふとき。惟房を見かへりて。わが死後只心にかゝれる。行盛の女兒の事なり。もし環會は養とりて。汝に妻あはすべう思ひしに。その事成らて死ぬることを恨なれ。汝父が志を繼て。普くその行方をたづねよ。われ貧しかりしむかしより。義に于て違ふことなし。只この一條のみ黄泉の障ともなりてんと宜ひつる。遺言いとことわりなれば。今に妻を娶らず。陸奥にありける程も。彼につきこれに語らひて。ふかくも索つるに。おもひきやその人は花子にて。しらず契を締んとは。待稚はわが兒なり。花子は今よりわが妻なり。さるにてもこの鏡は。樂昌公主が故事にも勝れり。こは行盛の賜にて。初花より受傳けんと言へば。花子も春雨も。海月の骨にあへること

ちしつ。袖の涙はまだ乾ねど忽地面に咲をふくみ。この鏡は行盛の洛を落給ひしとき。とり忘れ給ひしを。頭殿の形見なりとて。初花の愛藏め給へるを。長が花子に進らせたるにて侍り。寔に宜ふところを聞まつれば。假初の縁にあらず。昨夜燈に花を結び今朝又喜鵲とやらの。軒端ちかう鳴つるもこの吉祥あるべきにこそ。やよ待稚君も歡びおぼせ。こは父上にましますとて。花子もろとも扶引て。なほそのほとりに歩すれば。惟房これを膝にかき載せ。今までしらぬわが子にあふも。松と梅とを鑄出したる。二面の鏡の價にて。花子は我を待より名づけ。我は實植の松を得たれば。待を松に更て。松稚とこそ呼べけれ。既にこの松あるからに梅もやがてぞ生出べき。歡びこれにます事なし。まづ縁由を老黨にもしらせばやとて。粟津松井以下の家縁を召集會。松稚花子春雨が事まで。落もなく語り給へば。衆皆大に歡びて。或は雪の松に節操を稱し。或は十八公の榮をぞ祝きける。その時惟房春雨に對て。汝が年來の苦心忠あり義あり。實に女の丈夫なり。はじめ初花に傳きて。又よく花子を養育たれば。春雨の老女と呼んも事に稱へり。今花子とともに洛へ將て上るべきに。夫光二郎とやらんはいかにしつると問給へば。春雨うけ給はりて。數にもあらぬこの身さへ。かく叮嚀に聞え給ふ御惠のうれしさよ夫光二郎は去年の夏身まかり侍りて。しかるべき親族もなく。一子太郎三郎といふもの。今茲十七歳になりぬ。彼幼少より武藝を好みて。賤の手業に心をとめず。常には家にしもあらぬを。けふは殿の入れ給ふをもて。呼びよせて侍り。あはれ御目を給はらせ給へかしと申すにぞ。惟房それ召せと仰するに。太郎三郎雖て母の後方に參りつ。その形容鄙には似げなき壯俊にて。物の用にも立べく見ゆれば。惟房なほちかく召れて。汝彼處にて縁故はよく聞つらん。母が誠忠を稟つぎて。わが家に仕なば。松稚が股肱ともたのみ思ふべし。汝か祖父は平家の侍にて。山田太郎政綱とか聞ぬれば。父光二郎が字を象り。山田三郎光政と名告れとて。まづ見參の引出物に。太刀烏帽子などを賜らするに。春雨はいふもさらなり。花子もふかく歡び聞え。こよなき御惠のわが方さまの人々までに。及し給ふにつきても。觀山月林寺に登し給ひつる行稚とやらんは。母

こそ興れ。わらはが兄上にて在すなれば。いとつかしうおぼえ侍り。いかに恙なくやおはすると間に。惟房點頭て。彼行稚が事に于ては種々の物がたりあれど。一朝には説盡がたし。そは後に委しうしらすべしと應給ふ折しも。遠寺の鐘聲音づれてや。初更にもなりにければ。春雨は席を更て。盃を勧めまらせ。夫婦君臣みな歡びを盡すに盃の數もかさなりて。惟房不圖見かへり給へば。蒸襖のこなたに。料紙の硯箱ありて。上に扇を載たれば。押ひらきて見給ふに。

夏はつる扇と秋のしら露といづれかさきにおきふしの床

と筆の運びも拙からず。女の手して書たりける。歌のころは斑婕好が故事を思ひよせて。男に捨られたるを。秋に扇に寄せて詠り。こは花子が筆にやあらんと宜ふに。花子ふかく恥らひて。宜ふごとくわらはが筆のすさびに侍り。縁由を申さずば他し人に見えぬるか。疑ひおぼさんが。この三年が程。君を慕ひまらせて。歸上り給ふ日を。けふか翌かと待わびつ。馬士のをのこにも言告て。只これのみを問せ侍りつるに。此度は美濃路を過り給はずと聞えしかば。とても浴へはるんと慕ひ上るべきよすがもなし。思ひ屈して死んより。ともかうもなりなんとて。淺はかなる女子の心もて。辭世の歌を遺しながら。幼き人の袖に携りて。愁に絆となれば。なほ碧蟬の裳さへ脱得て。一日二日と泣くらせしに。はじめ聞つるは空言にて。忽地走衆の告來たりて。又こゝに宿らせ給ふといひ罵るに。いと淺ましくも娛しくて。この扇さへとりかくさず。見られまらせしこそ面なけれとて。事の本末を物がたれば。みな駭然とうち驚き。もし殿の歸洛十日とも後れんには。再會はありがたけんさは由々しき事にこそといひあへりける。惟房聞て宜ふやう。士は己を知ものゝ爲に死し。女は己をよるこよものゝ爲に容るといへど。一夜の情に百年の命をかえんとおもへる事。そも尋常の心ならんや。よくこの志移らずば。偕老の誓何かは違はん。花子はわが國の斑婕好にして。なほ幸あるものなり。しからばこれをも斑女と呼て。憂を忘れぬ夫婦が爲に。誓ともなすべしと

て。氣色よろしく見え給ふにぞ。この時より花子を稱して、人みな斑女前と申ける。さる程に少將惟房は。粟津六郎に。奴隷十餘人を殘しとゞめ。春雨。山田三郎等とゞもに。斑女松稚の供して。跡より上るべしと仰せて。次の日。野上をたちて。殊さらに路をいそがし。日ならず洛に歸著て。言の次に斑女松稚の事も聞えあげ給ふに。兩三日後れて彼人々も恙なく上洛せり。因て黃道吉日をえらみ。斑女と新に婚姻の席を開きて。いよ／＼睦しう見え給ひし程に。その年の終に亦男子出生し給ひぬ。さればこそ鏡の梅をも得たれとて。これをば梅稚丸と名づけ鍾愛いづれ淺からざりけるとなん。

墨田川梅柳新書 卷之二 終

墨田川梅柳新書 卷之二

東都 曲亭主人著

三 光政避雨して赤繩に繋る

吉田少將惟房の館には。打つゞきて。松稚梅稚 出生し給ひ。斑女前亦賢良なるに。春雨老女義に仗てこれに傳き。粟津山田以下宗徒の家隸。君に仕て私なければ。當家の繁昌このうへあらじとて。上下安堵のおもひをなしぬ。しかるに觀山月林寺の仲圓阿闍梨は。惟房の親族にておはせしかば。常に消息して。その安否を問せ給ふに。ある日山田三郎光政うけ給はりて。彼寺に參りけり。この序をもて光政は。辛崎明神に詣て立かへるに。赤塚といふ處まで來ぬる比及。見る／＼雲のたゞすまひ。山際いと闇なりつ。時雨のさと降來りて。八の好景忽地に没し。風又いたく吹かれて。琵琶の浪音名にも似ざれど。雨衣さへもたせざれば。辛じて道の次なる。酒店の簷下に避雨し。しばし齋るゝを待たりける。この酒店のあじるが名を軍介と呼びて。こゝろさま勇く膂力人に勝れて。拳法相撲を嗜み。義に仗ては財をも惜まず。頗志氣ある壯夫なり。妻を浮草と呼て近曾娶りぬ。又妹に鳩崎といふ處女ありて。よろづふつゝかならで。姿は舊都の花にも劣らず。膚は比良の雪よりも清て。年まだ二八とか聞ゆれば。これが爲に心を焦し。あはれわが妻にもがなと思ふものおほかり。この日軍介は矢走の船便聞に湖水のかたにゆきて。家にしもあらねば。鳩崎は嫂浮草とともに店を守りてあるに。山田三郎が年紀廿をも過じとおぼしき美男にて。太刀の飾衣服のいろなども。すべて女子の愛すべき装ひなれば。芙蓉の眸に。いく度か秋の波をかよはしつゝ。いと憎からず

管待して。少しおくなりたる座敷に請じ。袴の裾にかゝりたる。蹴揚の泥もわが手して揉おとし進らせけん。紐さへむすぶ縁にしとなりて。男は従者にしらせじとし。女は嫂に覺られじとて。送に戀の關守をたばかり。しばし手枕ならぶるに。はやくも雲散り雨歇にければ。光政も今はとて立出つ。浮草にも思はざる庇の程をよろこび聞え。洛のかたへ歸りゆけば。鳩崎は今さらに。あふかひなき別をはかなみ。なほ降れかしとおもふ雨のあやにくに晴わたれど。胸のみにと曇めり。かくて後山田三郎は。主の使してをり。觀山に登る毎に。軍介が店に憩ひ。外ながら鳩崎を。見もし見られもしつ。三たびに一トたびは。いと稀なるあふせもありて。潜に住家をもしらせ。名をも告て。心くまなく相語けり。兄の軍介はかゝる事ありともしらず。ある日妻の浮草に妹が事をいひ出で。彼も今は年來になりぬれど。わが家元來貧しければ。婿をえらむよしもなし。さればとて文伸たる若草の。色をも超人も結ば。生涯をあやまつ事なきにしもあらじ。とかくしかるべきかたへ給事させて。都の手ぶりも見做せたらんに。兄が家にあるには勝るべし。この事何とか思ひ給ふといへば。浮草もいと理にこそと應て。やがて鳩崎に情由を聞ゆるに。鳩崎は彼人のいよゝ遠くなりゆかんとて。いと物憂はあれど。他し家に縁にし結びて。夫定めせられんよりは。なほ身の幸なりとおもひかへし。左も右もとうけ引つ。潜に山田三郎が来るをまちて。わがうへを告しらせばやとおもへども。待ば又その人も。この廿日あまりは影だに見せず。軍介はその日より。彼此人に語らひて。妹が給事すべき由をたのみ聞ゆるに。ある人の債を得て。吉田少將惟房の館へ参りつかふるに。絆定りしかば。鳩崎歡び思ふ事限りなく。寔に光政どのは過世よりの縁にしにやありけん。浴にはやんごとなき御方もいと多かるに。彼人の主君にておはします。吉田の家へまゐり仕ふるこそうれしけれ。とは思ひつゝ人にしらすべうもあらねど。何となくいそがれて。遂に北白川の館へまゐりしかば。戀て斑女前のほとりちかう召つかはれたり。しかれども衣食足る家には禮節ありて。男女席をおなじうする事あらざれば。はじめ思ひしはそらだのめにて。光政と面あはする事かなはず。わがうへ

を告遣るべき便もなく。只山鳥の峯上を隔て。いく夜を明すに異ならず。徒に兩三箇月を過す間に。なんとなく心持あしうおぼゆるは。思ひの雲の晴ぬのみかは。月の障も常ならず。只管酸ものを嗜み。ひと日とたつ程に腹のあたりふくよかになりしかば。もし赤塚にて彼人と假初の密事に。情の種さへ宿せしかと思へば。われながら淺ましく。いよゝ逢まほしけれど。絶てよすがもなかりける。されども山田三郎は。かゝらんこと思ひがけねば。ある日辛崎のかへさに。軍介が店に憩ひ。従者に晝食たうべさせなどするに。鳩崎が見えざれば。いと本意なく立かへりて。この後月林寺に到るごとふたゝび三たびその家に立よりぬれど。終に思ふ人にあはず。さてはいひし事も偽りにて。彼いづ地へか嫁りけん。鳩の海照る月ならて。うつるに安き人ごころかなと恨ながら。うちつけにその往方を問も定ず。やうやく思ひたえて。遂に彼處へは憩はずなりぬ。その頃しも斑女前は松雅梅稚二人の幼を將て。吉田の神社へ詣給ふことありけり。家録には松井源五純則。山田三郎光政。この日の俱をうけ給はり。春雨老女はさらなり。鳩崎も五七人の侍婢とともに冊きまゐらせ。被目深に。いと花麗に装ひて。白川の館を立出るに。外めづらしき女どちは。鳥も筋を出て茂林に入り。魚も網を漏て荷下に遊ぶに異ならず。彼方此方見かへるに。はからずも鳩崎は山田三郎に目を注はせ。送にこはいかにと胸うち騒げども。人目いぶせければ。つゆばかりも言葉を得かけずして。空く歸り別れけり。かゝりし程に山田三郎は。鳩崎がおなじ館に給事することを。はじめてしりて不審し。その夕つらく思ふやう。わが母子。近曾當家に召出されて。君恩又莫大なれども。いまださせる奉公をなさず。しかるに鳩崎みづから禁ずして情を運び。その事發覺たらんには。忽地不忠の人となるべし。さは結び果ぬ縁にしなれども。愁におもひたえよといは。彼いたく恨て。殃をや慮いだすべき。人傳ならてこのよしを聞えまほしと思ひつ。只管こゝろを苦しめける。こゝに又松井源五純則は。その心さま粟津山田には遙に劣りて。人の才を猜み。己が權に誇り。財を見ては志を移し。色を好みて義に違ふこと多けれども。口に忠言を吐て君を救き。その權威却彼

二人が上にあり。件の源五。斑女前吉田詣の折しも。夥の侍婢を見るにその顔色鳩崎におよぶものなく。寔に花中の花なるに。彼亦山田三郎におもひを運し。しばし此方を見かへりたるを。源五はわれにこゝろありとして。惑ひあぐがれ。思ふ程をも聞ゆべき。媒もがなとてしのびにその人をえらむに。群柏といふ童扈従のいと伶俐が。許されて後堂へも常にまゐるなれば。彼をこそと思ひて。さまざまに謙こしらへ。汝わが爲にこの艶簡を。かゝる人に贈らば。何にまれ欲とおもふものを進らすべし。かならずしも人になしらせ給ひそと語ひ課せて。袂よりそとさし出すを。群柏受とりて。こゝろ得侍りと應もあへず走りゆくにぞ。源五は世にもうれしげにて。既に戀のかなへる心持せり。さて群柏は彼艶簡を懐に挟て局のかたに到り。忽地に思ふやう。鳩崎は雨夜の品定にも。山田三郎どの、事をこそいひも出れ。源五どの、事はたえて聞えざるを。今明白に艶簡のぬしを告んには。投かへさるゝこともあるべし。とかくこれは山田どののより。と偽りて。その回答をも聞くこそと深念しつ。童には似げなくて。戀にはいとおとなびたり。かくて群柏は鳩崎が傍に人なきを見て。親く歩みより。こは山田三郎どののより進らせ給ふなりと潜きて。源五が艶簡をさし出すを。鳩崎はとる手も遅しとうち披きて讀に。思ひの外なる筆のあやに。いと不審ければ。やがて巻をさめつゝ群柏に對ひ。これは御身が偽りにて。山田ぬしより贈り給ふにはあるべからず。誰にかたのまれ給ひし。もし明白にその人を聞え給はずば。忽地に訴あけて。からきめ見せ侍りてん。なほそれにも匿給ふかとて。氣色あしう問詰るに。群柏大に迷惑し。實はかゝる筋なりとて。源五がたのみ聞えし事。わがたばかりをも私語ば。鳩崎聞てしばし尋思し。今面あたりこの艶簡を披露せば。その罪御身がうへに係り給はん痛しさに。これをば火に投て灰ともなすべし。もしこの志をうれしとも思ひ給はゞ。わらはがたのみ進らす事を。うけ引給ふべきかといへば。群柏一議にも及ばず。とく聞え給へ。われその事をなし果し候はんと答ふ。しからばこれを山田ぬしへ進らせて給はれかし。又源五どのとやらんが。返辭いかにと問給はゞ。いまだ便宜なくてしりがたしと答給へ。かくて後

わらはよきに計り侍らん。よくこゝろ得給へと諭しつゝ。豫て便あらばとおもひて。寫おける一封に。又一筆書そへて。これを群柏に遞與しければ。うち點頭て外面へ出ぬ。この夕山田三郎光政は。宿寢して寢よとの鐘をまちがほに。ひとり燈に對て物の本讀居たるに。思ひもかけず群柏が手より。鳩崎が消息を得て。且うれしみ且いぶかしみ。封皮切ときてこれを見れば。過にし頃よりこの館にまゐり仕れども。告るに由なくて。徒に月日をおくりし事。斑女前が吉田の神社に詣給ひしとき。親く見えながら。一言も聞えずして本意なく別れし事など書つゞけ。さて赤塚にて既に御身の胤を懐胎侍りつるを。しらてこゝへまゐりしに。今はやゝ月もかさなりて。いかにともすべなし。このごろの心苦しき。さこそと察し給へかし。とてまかくても露の玉の緒。絶なると思ひ定侍るなど。いと哀れに書とどめ。又別に。くはしうは見參にて申すべけれ。今宵後園の樹の枝に。紙を結びさげておき侍るなり。それを葉にして。如此々々の處まで。潜て來給へ。ころは甲夜の間すぎてこそと書そへける。光政は首尾打かへしつゝ讀くだちて大に驚き。彼既に有身て月も重りたらんには。縦故郷にての事にもあれ。密にかたらひたるものはわれならば。その罪いかでか脱るべき。こはよしなき調戲して。この禍を醸せしこそ越度なれ。さればとて彼ひとり苦しめんと。丈夫のこゝろにあらずとまれかくまれ彼處に潜て。逢ばやとおもひながら。その夜は障ることありて。終に果さず。鳩崎は。光政が合圖を違たるをふかく恨み。次の日ふたゝび艶簡書したゝめ。彼群柏を相語て贈來たれば。山田も懈るとにはあらねど。かゝる事にて黙止せしなり今宵はかならず逢べしと回書ものして。又群柏に遞與せしを。松井源五闕窺てふかく怪み。竊に彼童を物陰に招きよせて。縁由を詰問に。はじめこそいはざりけれ。いたく威されて終に脱るゝに言葉なく。はじめは如此々々なり。終は箇様々々なりと。おちもなく告しらせ。彼回書をさへとり出て見せにければ。源五はうち開きて讀もをはず。忽地怒氣色面にあらはれ。數回大息吻ていへりけるは。汝愁によしなき誑して。却て彼等に謀られたり。しかれば汝はわが斷腸の仇なり。所詮刺ちがへて死するの外なしといき

まきて。刀の柄を握りもてば。群柏驚き怕れ。顔色の土ごとくになりて。只恕し給へくとて泣にけり。源五はこの形容を見てからくと打笑ひ。再び聲を低しつ。やよ群柏深くな怕れぞ。こはわが戯れなり。なほ童なる人を憎して。何かとせん。しかはあれど。今又たのみ聞ゆる事を。懲さまになし果さずば。そのたびは恕しがたし。承引んともうけ引じとも。心を定めて回答給へとて。威しつ謙しつこしらゆれば。群柏は命とられんが悲しさに。おそるく諸なひしかば。源五は額をさしよせて。しばし私語つ。癒て光政が回書を忙しく巻こめて返し與へ。やをら内外に立別れぬ。彼源五何事をかさゝやきけん。しるもの更になかりける。

四 斑女花に寄せて黄金を賜ふ

この時彌生の中旬にて。園の花色香妙に咲みだれ。盛も今二三日に過じと見ゆるものから。少將惟房は。毎日に院の御所四辻殿へまゐりて。家に在する事も稀なれば斑女前もおのづから籠がちにはあれど。翌見んとおもふ心のあださくら。夜はあらしの吹ぬものかはとも詠るものを。無下に青葉となさんも。いと惜しとおぼして。ひとり端ちかうたち出給ふ折しも。さらくと吹入るゝ風に轉されて。裳のほとりに来るものあり。とり揚て見をなはするに。よくも巻こめざる艶簡にして。山田三郎が鳩崎への回書なり。うちもおかれず潜やかに讀果て。これをば袖の裏にかくし。さもあらぬおもゝちにて。春雨等を召つどへ。けふは殊さら麗なるに。松稚梅稚を伴ひて。園の花見せばやと思ふなり。とく用意せよと仰するに。みなうけ給はりて。俄頃に幕を張らせ。毛氈布まはしなどする間に。斑女は幼少き二人を携て出させ給ひ。盡日遊びくらしてかへり入り給ひぬ。かくてその夜もやゝ更ゆくころ。斑女前はひとり起出て。燈を掲。宿寢して後方に臥たる鳩崎をよび覺しつ。ほとり近く招きよせ。この艶簡よみて聞せよとて。一封を出させ給へば。鳩崎はそのころを得ず。小夜深たるに何事のおはしまして。かゝる事を仰するかと不審ながら。

ら。半讀もをはず大に驚き。こは山田どのより。今宵彼處にてあはんとての回書なるに。いかにしてかこゝには藏め給ふと思ふに。只願胸のみ打さわぐを。斑女はなほさらぬ風情にて。その艶簡おぼえありやと問給ふにぞ。今は匿ともよも許し給はじとおもへば。なかゝに心を定め赤塚の避雨より。山田三郎と密會て。有身れるをもしらず。この館へまゐりし事。松井源五が群柏をもて。艶簡を贈來せしより。彼童を媒として。はじめて。筆に言の葉をかよはせし事など。或ははづかしみ。或はかしこみて。涙さしぐみつゝ申けり。斑女前つくゝと聞給ひて。しからばこの艶簡をばいまだ見ざるかと宣へば。問せ給ふごとく。只今讀侍るぞはじめなる。何ものか進らせけん。いとほらあしくもはかりけるものかなと申すに。斑女前點頭て。これは人の見せたるにはあらず。わが身さきつ時。しかゝの處にて捨へるなり。おもふに群柏が恨りてとり落せしか。源五が彼童を相語て汝等を罪せん爲に。しかはからはせたるなるべし。汝は新參の事にしあれば。縁故はよくもしるまじ。彼山田三郎は。年來わが身を養育たる春雨が一子なれば。松稚梅稚が爲には。よき後盾ならんとて。殿にもわきて恩惠高くおはしますを。よからぬ所爲をしいだして。家の法度を犯す事。人たるものゝ心ならんや。縦汝がこゝへ參らざる前に契りたりとも。今もろともにその家に仕ながら。なほ筆に思ひを述。情を運べる罪は。いひとくとも脱れがたし。しかはあれ。その善悪はわが心ひとつに定むべきにあらず。殿には四辻殿にまゐり給ひて。いまた退き給はねば。かへり給ふを待て聞えまゐらせ。ともかくも御こゝろに任せ侍るべう思ふなり。やよ鳩崎よくわがいふ事を聞かし。弱人の風俗にて。戀にその身を過つ事。世になき例にはあらねど。ものに迫りて枉死し。身後の恥を曝すものは。親兄弟にもいくその哀を見せ。愚なるものゝ譬にもいひ出られて。終にその恥辱を雪るの時なし。況君に仕るもの。罪をまたずしてみづから双に伏すなんどは。たえてあるべき事にもあらず。よしや汝は何とも思へ。光政はよく辨。てもありなん。いかにさはあらぬかと宣へば。鳩崎ははじめより頭をだに擡得ず。情ある主の言の葉を。願る程鈍しく。只涙のみはふり落て。袖さへ絞

あへざりける。斑女前もいと事わりにおぼしけん。重てその事をば宣はず。俄頃(いつまが)に物を思ひ出せしおも、ちにて。わが身けふ園の花を詠(うた)せし歌の。いまだこゝろに稱(な)されば。枝にも得著(えつけ)ざりしに。今はからずも一首(いっしゆ)の趣向(しゆきやう)を得たり。汝(なんぢ)彼處(こゝ)にゆきて。築牆(ついで)のほとりなる。ふりたる櫻(うづも)の。外面(とむら)へ木垂(こた)れし枝に。これ著(つ)て來(き)れかし。小夜(こよひ)深(ふか)たればとて。いと怖(おそ)れて。人(ひと)な驚(おど)かしぞと仰(おほ)つ。墨(すみ)すり流(なが)してさら／＼と書(か)つけ。その短冊(たんざく)を遞(た)し給(たま)ふも。元(もと)よりこゝろありげなり。鳩崎(たづね)はなほ果(は)しなき涙(なみだ)はものかは。胸(むね)の中(なか)さへかきくれて。立足(たちあし)も定(さだ)かならねど。主命(しゆめい)の己(おのれ)がたさに。ひとり園(うゑ)に出て池(いけ)を繞(めぐ)り。木蔭(こかげ)を潜(かづ)りて。彼木(こ)の下(した)に到(いた)りしかば。山田三郎(やまださんら)は合圖(あひづ)を違(たが)へ。嚮(むか)よりこゝに竊(しの)居(ゐ)り。月(つき)あかりにと見(み)かう見(み)つ。木立(こだた)の間(ま)をもれ出て。などてかくは遅(おそ)かりし。いと。待(まち)憂(うれ)かりつるとて潜(ひそ)めきよれば。鳩崎(たづね)やがて走りより。いはてまづふる袖(そで)の雨(あめ)も。音漏(おともち)さじとやわが爲(な)に。池(いけ)の蛙(かは)もしほ鳴(な)で。月(つき)さへ更(さら)に躑(おぼ)ろなり。光政(みつまさ)かいよせて。その脊(せなか)を拊(なで)おろし。過(す)にし事はきのふより。筆(ふで)にしらせたれば且(しかも)く措(く)け。御身(おんみ)が此頃(このとき)の物思(ものおも)ひ。さこそと推量(おしはか)る程(ほど)。わが身に追(お)りてとかくいふべうもあらず。只(ただ)一(ひと)たびは思(おも)ふ限(かぎ)りをも聞(き)えてこそとてかく後(うしろ)くらき事をなしつ。とく涙(なみだ)をとどめ給(たま)へ。泣(な)しては果(は)しあらじといふに。鳩崎(たづね)やうやく臉(れん)をかき拭(ぬ)ひて。いふべき事も聞(き)べき事も。今はそのかひなき身(み)となりぬ。そはけふ御身(おんみ)が返事(かへりごと)し給(たま)ひつる玉章(たまづな)を。源五(げんご)にや謀(はか)られけん。わらはだに見(み)せぬを。斑女(あまのこ)御前(ごまへ)の拾(ひろ)ひ給(たま)ひて。夜(よ)も深(ふか)人も定(さだ)て後(あと)。かゝる仰事(おほせごと)ありしとて。首(くび)より尾(おし)まで。涙(なみだ)の際(はし)に物(もの)がたり。彼短冊(かのたんざく)をとり出(い)せば。光政(みつまさ)は聞(き)て事(こと)毎(ごと)に。釘(かぎ)もて胸(むね)を刺(さ)るゝごとく。わが過(あやまち)をわれから責(せ)め。理(ことわり)なき身をうらむる外(ほか)なく。なかに思(おも)ひたえながら。なほ不審(ふしん)きに眞夜(まよなか)中(なか)に。その短冊(たんざく)を著(つ)よとて。この樹(こ)の下(した)に來(き)し給(たま)ふは。わが潜(ひそ)て居(ゐ)る事を。しろし食(た)てや逢(あ)せ給(たま)ふ。こはおほけなしと畏(かしこ)みて。彼短冊(かのたんざく)を押戴(おしお)き。月影(つきかげ)にこれを見(み)れば。

山(やま)かぜの吹(ふ)し折(ち)らずば散(ち)る花(はな)も又(また)來(き)る春(はる)にあはざらめやは

と書(か)給(たま)ひぬ。光政(みつまさ)しば／＼うち吟(うた)じて。忽(たち)ちに蕭然(せうぜん)と落涙(らくなみ)。色(いろ)に耽(ひ)りて忠(ちゆう)も義(ぎ)も。忘(わす)れたる愚者(おろかな)を。憎(にく)しとおぼ

されず。花(はな)にあらし(た)の譬(たと)をもて。自書(じが)をとどめ給(たま)ふとおぼし。抑野上(おさのの)に在(あ)せしときは。もろとも(も)に生(な)ちて姉(あね)と呼(よ)び弟(あに)と呼(よ)べ。わが母(はは)の主君(しゆくん)とも。しらて過(あ)ぬれば年(とし)來(き)の。憂(うれ)には仕(つか)ざるものを。今(いま)少將(せうしやう)の御内(ごうち)にて。何(なに)がしありと人(ひと)もしる。身の幸(さい)はなべてみな。君(きみ)と親(おや)との恩惠(おんゑい)なるに。よし忠臣(ちゆうしん)とならずとも亂離(らんり)の人(ひと)となり果(は)なば。母(はは)が多年(ねんねん)の誠(まこと)忠(ちゆう)をも。徒事(いたづらごと)となさんこそ。不忠(ふちゆう)のうへの不幸(ふかひ)なれ。こは面(おも)なしとて己(おのれ)が隨(ま)に。死(し)するにも死(し)なれざる情(なさけ)を絆(はな)なりける。ものには勇(ゆう)き壯夫(さうぶ)も。女(め)々(め)しきまてにかき口説(くちせ)げば。鳩崎(たづね)いよ悲(かな)しびて。寔(まこと)に御身(おんみ)とわらはとは。過世(あまのこ)よりの惡縁(あくえん)にや。一館(ひとつや)へ給(たま)事(こと)に。參(まゐ)るは後(あと)の殃(わざはひ)とも。しらて漫(ま)に歡(よろこ)びしを。今はた思(おも)へば淺(あは)はかなる。女(め)ごころにて侍(さむらい)るなり。とてもかくても脱(のが)れ得(え)ぬ。罪(つみ)とはしれど有身(あ)りて。五月(ごご)あまりとおぼゆれば。その子(こ)も人の形(かたち)つくり。父(ちち)にや宵(よ)けん母(はは)にや宵(よ)けん。そをよもしらす聞(き)きより。くらきに歸(かへ)すがいと惜(を)とて。今(いま)やはじめて思(おも)ひしる。親(おや)の心の鳥夜(とりよ)を照(て)らす。眞如(しんにょ)の月(つき)も西天(さいてん)へ。傾(かたむ)て遠(とほ)き寺(てら)々の。鐘(かね)の音(ね)聞(き)はいと深(ふか)たり。光政(みつまさ)猛(まう)に心(こゝろ)づき。かひなき歎(なげ)して時(とき)をうつし。斑女(あまのこ)御前(ごまへ)のいかばかり。待(まち)わびてや在(あ)すらん。あふせも今宵(こよひ)を限(かぎ)りなり。只(ただ)潔(いさぎよ)く立別(たちわか)れ。双(ふた)の鏢(さし)となる日(ひ)にあはめ。そはともあれ彼處(こゝ)の花(はな)に。とく短冊(たんざく)を着(つ)給(たま)へ。とく／＼といそがしたて。是(こゝ)かそれかとてさし出(い)たる。枝引(えだひ)攪(ま)んとするにはからずも。一ツ(ひとつ)の財布(さいふ)を探當(さぐりあて)。うち驚(おど)きつゝ鳩崎(たづね)をさし招(まね)き。これ見(み)給(たま)へこの枝(えだ)に。影(かげ)の黄金(おうごん)をかけられたるは。斑女(あまのこ)御前(ごまへ)が吾儕(われら)に。私(ひそ)に賜(たま)はるものにこそ。これをもてふたゝび歌(うた)のこゝろを考(かんが)るに。山風(やまかぜ)にちる花(はな)も。折(な)らずば又(また)來(き)る春(はる)にあはん。さらば館(たね)を脱(のが)れ出(い)出(い)る。歸(かへ)參(まゐ)の時(とき)を待(まち)よとは。花(はな)ものいはねど存命(ぞんめい)る。たつきにせよとてかけ給(たま)ひし。謎(め)も財布(さいふ)もいと重(おも)き。恵(めぐみ)は季札(きさ)が劍(つるぎ)に勝(か)れり。こは思(おも)ひかけずとばかりにて。且(しかも)かしこみ且(しかも)感(かん)ずる。聲(こゑ)さへしのび／＼なる。鳩崎(たづね)ももろとも。忝(かたじけ)なさははふり落(お)る。數行(すうぎやう)の涙(なみだ)とどめかねて。流(なが)れてゆく身を泣(な)のみなり。かくて山田三郎(やまださんら)は。彼財布(かのさいふ)と短冊(たんざく)を。おし戴(いた)て懷(ふところ)にし。しばし彼方(かなた)を伏(ふし)をがみ。かゝりせば甲夜(かひよ)の間(ま)に。母(はは)にも見(み)えて外(ほか)ながら。身の暇乞(いとまご)をもすべかりしに。行(い)ては歸(かへ)る時(とき)しなき。別(わか)ればなりけるかな。さは夜(よ)もあけ

ば例なき。鴻恩を空せん。誘給へといそがして。下括の紐解もあへず。閃と櫻の枝に投かけ。これに携り携らせ。築垣を超んとするに。鳩崎は目眩て。足さへさらに定得ず。危くも又携る手に。枝も揺て霏々と。散かゝる花は雪ならで。雲の梯わたれる心持し。辛じて外面へ。やを下りたちて息も吻あへず。近江路を投て逃去りぬ。話この下になし。さる程に斑女前は。ひとり寢もやらで在せしに。鳩崎終にかへり来ねば。彼等かしこくもわが心をしりて。奔つらんとおぼしつ。なほ目睡もし給はぬに。春夜なれば短くあけて。少將惟房も。四辻殿を退きて。直に歸り給ひしかば。斑女はしのびやかに。山田三郎と鳩崎が事を聞え給ふに。惟房うち點頭て。いしくも計つるものかな。彼等もしその過を人にもいはれ。われも面あたりに聞ときは。いかに助んと思ふとも。家の法度は破りがたくて。已ことを得ず首を刎るにも至るべし。しかれば。光政が一旦の過によりて。その母春雨が年來の忠義を空せんも便なし。彼が色に惑ひて。君と親とに遠離は。としの弱きが致すところなり。原來その志の信なる事はわれよくしりぬ。必逐ふべからずとぞ。宣ひける。春雨はこの言を傳聞て。感涙雨のごとくにて。わが子の往方はつゆばかりも念とせず。いよ、君の爲には死を用し。高き恩恵に答たてまつるべしと。思ひ定ぬるも又哀れなり。さても松井源五郎純則は。群柏を相語て。山田三郎が艶簡を。主君出居のほとりに捨置て。彼等を罪せんと謀つ。なほ心もとなければ。彼二人が逢はんとて。合圖を定たる。園の木陰に立かくれ。この夜の形容をもしらばやと思ひつるに。斑女前春雨をもていはせ給ふやう。殿には今宵も四辻殿に参り給ひし程に。退出給ふころは。夜もいたく深ぬべし。弱もののみを俱し給へば道の程もおぼつかなきに。汝今より御迎にまゐり候へと仰すれば。源五大に迷惑して。殿には夜深て院の御所を退き給ふ事しばゝなるに。などて今夜のみかくは宣はすると怪み思ひながら。君命辭するに言葉なくて。しぶりもやられず。出ゆきぬ。さても光政も。鳩崎もたえて阻める人なくて。輒く脱れ去にける。これ皆斑女の恵にて。源五が僻し心をもよく量で。彼を遠離給ふになん。かゝりし程に源五は夜あけて後。主の俱して

館にかへるとやがて。山田三郎を尋るに。昨夜鳩崎を將て奔たりと聞えしかば。驚き怒りて。彼此に人を遣し。その往方を搜索るに。とみにしるべうもあらざれば。いよ、腹にすゑかねて。さても者奴等は果報よきものなり。首到らるべき罪を犯して。奔れども。追捕らるゝ事もなし。かくては忠義を竭さんも無益なり。賞罰正しからぬ家に仕ては。末たのもしからずなど。いひ罵るといへども。粟津六郎をはじめ。みなしらず顔してありければ。源五ますく疑ひ惑ひ。もしわが謀計を群柏が漏して。君にもその事を聞えたるかと思ふに。忽地影護なりて。彼童をあらせては。よき事あらじと深念しつ。ある夜竊に群柏を縊死し。屍を加茂川へ衝流して。なほ人の疑心事を怕れ。白川の館にふりたる杉の樹ありしかば。このほとりに彼童が草履をもてゆきて。脱捨たるやうにこしらへおきけり。さて詰朝群柏が見えざるとて。人みな普く尋めぐるに。北面なる杉の木の下に。脱捨たる草履あるを見て大に驚き。こは群柏は天狗などいふものに。誘引たりとおぼし。世に神かくしといふ事なきにあらず。彼は幼きより父母を喪ひて。親族もたえてなきものなれば。殿にも憐がり給ひつるに。鞍馬愛宕の峯に遊びて。いく年経るとも歸らずば。いとも奇しき身の果なりといひあへりしを。洛中洛外の良賤聞傳て。北白川の天狗屋鋪とぞ稱ける。衆人はかくもいへ。少將と斑女のみ。件の事をしりて在せば。群柏が往方定かならぬも。源五が所爲にはあらぬかと疑ひおぼして。はじめの程は彼を用ひ給はず。よろづ粟津六郎のみに委ね給ひければ。源五はますく、面目をうしなひて。ふかく憤おもふといへども。更に色にもあらはさず。信々しげに仕ける。いと憎むべき佞人なり。

五 龜鞠俳優して賊僧を欺く

こゝに亦曩に叡山月林寺に登りて。沙彌となりたる行稚は。成長にしたがひて。心ざまいよ、正しからず。師父の教誡をも用ひずして。行ひ放なれば。親も疎きも憎おもはざるものなし。その身平家の嫡流朝敵行盛の子にし

あれば。とく喪るべき首なるを。惟通に繼れたれば。心を菩提の道に委。眼を寂滅の教にとめて。なき父母の後世。一門の冤魂得脱をもはかるべきに。出家人の作行をつゆばかりもなさずして。酒を嗜み色に惑ひ。十七といふ秋に。辛崎の農家。何がしが女兒を誘出し。往方もしらずなりにけり。こは惟通の病死せしころなれば。彼家より探る事なども。思ふ程にはせざるによりて。輒く脱れ課て。彼女子を携。しばし信濃路に足をとどめたるに。元來その性便佞なれば。彼國の住人仁科二郎平盛遠といふもの、庇を稟。遂に盛遠が義子となりて。仁科平九郎盛景と名告。次の年鎌倉に赴きて。只願奉公を望けるに。ある人の吹擧によりて。執權義時朝臣の舍弟。北條相摸守時房の御内に召くわへられ。こゝにて子ども二人まで出生すしかるに。冢子惣太九歳。女兒龜鞠七歳なりけるころ。盛景親子忽地鎌倉を追放せらる。その故いかにと尋るに。彼平九郎盛景。年來身の行ひよからず。しばし若殿原を。大磯化粧坂の遊里に誘引しかば。これが爲に財を喪ひ。色に溺れて奉公等閑なるもの夥なり。こはみな仁科平九郎が所爲なりと。衆評一決せしをもて。かゝるもの召仕れんには。士庶の風俗ますく亂なんとて。俄頃に追放せられたり。されど年來貪たる財少からねば。駿河なる喜瀬川の郷に居を卜て。女兒龜鞠に歌舞俳優を做はせ。ゆくすゑはその色をもて。世を安くわたらんとはかるに。冢子惣太は幼少より膽太くて。動すれば友どちと物あらがひをし。おのれに年の勝れるにも傷つけなどし。又常に父母の金錢を盗出して。口腹の爲に用盡し。後には他に借りて返す事なければ。その懈みな父母のうへに係りて。これを償ふに少々の事にあらず。佞奸邪智なる平九郎すら。わが子の悪行に呆果。ある日懲さん爲にいたく打擲せしを。惣太はふかく恨けん。その夜手ぢかなる五兩あまりの金と。父平九郎が行稚と呼れしむかし。月林寺にて祝髮せしとき。行盛の紀念なりとて。惟通より相傳したる。備前の家次が。自他平等即身成佛の戒刀を盗出し。いづ地ともなく走去て。ふたゝび歸らず。こは惣太が年十二歳の春なり。父もこれに驚きて。普くその往方を索しかど。たえて音づれあらざれば。母は只願愛事に思ひほそり。長き病着

に。時祿も残りすけなく。遺果せるかひなくて。死出の旅路に赴きしかば。平九郎は妻と愛子をうしなひて。さすがに心ほそくやありけん。ますく龜鞠を慈み。只その成長をたのみに年月のたつを待わびぬ。さる程に龜鞠は。立舞こともはやく熟し。眉は初春の柳葉に似て。雨の恨雲の愁を含。顔は三月の櫻に異ならず。風の情月の意を藏せり。寔にその容止の勝れたる事鎌倉はいふもさらなり。浴にも又類あらじと見ゆるにぞ。三五の秋の半より。白拍子といふものになりて。父を養ふ便とせり。いぬる建久年中。この喜瀬川に龜鶴といふ白拍子のありけれど。それにはなほ遙に勝りて。このごろはいと稀なる。田樂刀玉など。すべて俳優をもよくし。鬼女怨靈に打扮ときは。花の顔忽地に。いとodorくしく。眞偽を悞ばかりなれば。その名都鄙にかくれなく。これが爲に心蕩。魂を奪るゝもの少からず。龜鞠はかく姿こそ美麗なれ。心さまのよからぬ事は。父にも兄にも劣らざれば。只錢あるに媚を獻じて。實の情は露程もあらぬに。なほ曉らずしてその疎に係り。産を破り家を喪ふ不幸の子弟いと多かりし程に。その親たるものふかく憤り。所詮鎌倉に聞えあげて。龜鞠を追ひうしなふべし。もし彼親子があらそひ阻ば。縦闔擊にして。この禍神を讓はめなど。かしがましく罵りあへれば。平九郎もれ聞て冷笑ひこゝにて世わたらずば。月日は外に照らぬものか。さらば浴へ上りてこそ。運の程をはかるべけれ。今は夥の年を経たれば。浴の人もわれを行稚なりと。認れるものはあらじと尋思し。俄頃に家財を沽却し。て龜鞠を輻に乗せ。飽まで廣言吐ちらしつ。遂に喜瀬川を起程ければ。凡子をもたる人として。これを歡ざるはなかりしとぞ。かくて龜鞠親子は。その日一里あまりゆきて。薩陀山のこなたなる。倉澤といふ處に宿かりたるに。隣れる坐敷に。弱き旅僧とおぼしきが二人來て。假初に路の疲勞を問慰しが。彼僧やがて紙門を細やかに開き。面のみ半さし出していへりけるは。見まらするに近曾喜瀬川に名たゝる。白拍子の君にこそ。愚僧は三島の神社のあなた。何がし寺の法師なれば。日來彼郷をも行かひをもて。はやくその人とはしれり。さて親子づれにて旅だち給ふは。物詣なるべし。いづれの靈場へか參り給ふと問

に。平九郎答て。否さるたのしき旅にもあらず。洛はわが故郷なれば。今度思ひたちて上るにて候といふ。兩僧聞て。さは透けき路なりかし。わが身出家人にあらずば。尾張路まではもろとも赴くべきに。形に恥てかゝらん事は影護し。洛はよろづ風流たれば。いよゝ世わたるかひもありて。息女の名も猶高く聞えなん。今宵は江口に宿りを求し。圓位法師が風情ありなごち職れ。とく睡給へといひかけつゝ。紙門を奮のごとくに引立て。おのゝ臥房に入るにける。平九郎も龜鞠も。合宿は法師なるにこゝろ放し。啓行せしその日なれば。いたく疲勞て熟睡したるに。忽地龜鞠が叫苦一聲に。平九郎驚き覺。岸破と起て見かへるに。燈滅て善惡をわかねば。大に焦燥ながら。彼此をかい探り。龜鞠々々と呼寤せども。たえて應なきに。ますゝ周章。隣れる紙門に探よれば。人の出入る程ひらきてあるにこゝろ疑ひ。衝と入りてよく視れば。椽づらの遺戸さへ明はなちてあり。天は結陰たれど。月も出ぬとおぼしくて。彼處より引くあかりに。なほ四隅を尋れば。二人の僧も臥房にはあらず。さては奴者等は念秩にてありしを。躊躇して女兒を奪ひ去られしこそ朽をしけれ。いで追とめんといきまくを。主人もれ聞けん。燭を秉て忙しく走り來れり。平九郎見て。如此々々の事ありと告もあへず。刀を取て追んとするに。行李さへ盜去られて。一物も遺とどめねば。ますゝ憤に堪はず。裳を褰て直に庭門より走出るに。こゝより脱去たりと見えて。一帶の草みな踏わきてありしかば。これを乘に追蒐つゝ。薩陀山の麓に到れば折しも雲月を吐て。跡もいとあかき。件の賊僧。一人は龜鞠を小腋に抱き。一人は平九郎が行行李を背負ひ。飛が似に彼山へ走り登るを。吐塵とこゝろあせれども。適に後れたれば。左右なくも追著得ず。龜鞠は心飽まで逞ければ。かゝる時にも敢さわがず。かき抱れつゝ誓結ふり解て。丈なす黒髪を亂し。みづから小指を嚙切て。その鮮血をもて満面をあやしう彩色たるを。賊はしらずして山の半なる。地藏堂のほとりまで來にけり。この所路狭くして。雄手は青山岫々と聳。雌手は蒼海渺々として。水際に至て數百丈。見るにさへ目眩くを。彼等は物ともせず。こゝに來たりてはじめて足を停め。抱る龜鞠を扛おるせば。こはい

かにさしも美やかなりし姿は。忽地惡鬼羅刹と變じて。引も裂べき勢ひなれば。二人の賊僧驚き怖れ。脱れ去らんとするるとき。一人相を踏外し。撲地と倒れて滾落るを。一人扶起さんとて。その手を楚と握あひしが力及ばずしてもろと。底さへしらぬ海原へ。眞逆さまにぞ陥たりける。龜鞠は思ふ程に謀課て莞爾とうち笑み。裳の塵をかき拂ひ。舊の路へ立歸らんとするに。こやゝと呼かくるを。誰ぞと見かへれば人もなし。いと怪しと思ひながら。又走り去らんとするに。呼ぶ事はじめのごとくなればさすがに男々しき女子なれども。何となく身の毛いよたちて。行も惱る氣色なり。時に地藏堂の扉を。裏より左右へさりと開き。頭巾目深に被たる荒男。再歩に搖ぎ出て。龜鞠が後より。項髪無手と引摺み。汝甚膽太し。嚮の二人は欺くとも。いかでかわれを誑き得ん。さらば妖の程をあらはすべしと。罵る折しも。平九郎はやゝこの處へ追ひ來りこの形勢を見て。なじかは少しもたゆたふべき。手ごろなる杉の枯枝あるを見。搔取はやく打て蒐れば。彼男は。龜鞠を突放。刀を引抜て逆戦ふを。平九郎つと入りて。直に双を打落せば。彼もおぼえあるものにて。かひ潜りつゝ引組たり。元來巖石尖なる細路の。石滴さへ溜流れて。いと滑なるを。上を下へと挑み争ふ程に。終に組だる手を放。平九郎は雄手の谷方へ顛かゝり。荒男は雌手なる海に滾落て。生死もしらずなりにけり。龜鞠は父がいと危かりつるを見て。只と脊に汗を流し。彼此を走り繞りつゝ。せんすべなげなり。されど平九郎はさいはひにして。ふかくも陥されば。藤藁にとりつきなどしつ。辛じて舊の處へ跂登りしが。こゝに來ぬるときは。彼荒男に敵せんと思ふのみにて。龜鞠が異なる景迹を認ず。このときはじめてその模様を見て大に驚き。全く妖怪なりと思ひしかば。矢庭に石を拾とりて。打かけんとするを。龜鞠瞻眺掌て。やよ父御。わらはをいかにし給ふと叫ぶ聲音の。疑へうもあらぬわが女兒なりければ。眼を定て熟視るに。例の伊優して。鬼女に打扱たるなれば。からゝと打笑て。まづその故を問に。龜鞠は二人の賊僧を誑ん爲に。指を嚙切りて顔を染たる事。彼賊どもこれに膽を冷し。脱れ去らんとし。悞て海原へ滾落し事。又盜れたる行李刀なども。賊が背負て陥たれば。

とり復に由なき事。是彼すべて物がたれば平九郎ふかく愁ひて。行李の裏には路銀をも入れおきたるに。今是をうしなひては。洛へ上るよすがもなし。さればとてこゝより喜瀬川へ立かへらば。世の胡慮となりなんも朽をし。とやせまじかくやせまじとて。親子さし對て談合するに。龜鞠地藏堂を指して。彼男が堂の内より出たるをおもふに。夜な夜なこゝにありて引剝する。山客の魁首なるべし。しかれば彼に些の物なき事はあるまじきに。尋て見給へといへば。父もげにと承引て。まづ外面よりさし覗くに。たえて人もあらざれば。やがて堂の内に入りて見るに。只一ツの笈に木像の阿彌陀を安置したると。酒の香のみして。裡に物なき。瓢一ツの外に。一緡の錢もなし。こは用なき笈佛に。わが夥の路銀を換て何かせんと打腹たちて。其處を走り出つゝ。打落したる荒男が。刀を拾ひとり月影にこれを見れば。鎗に八ツの文字ありて。自他平等即身成佛と鑄著たれば。忽地駭然とうち驚き。この短刀はわが稚かりし時。卜部惟通より授かりしを。六年前惣太が家出したる夜に携ゆきたるものにこそ。しかれば彼荒男は。わが子惣太にてありつらんを。年を経て稚貌もうせ。しかも眞夜中なるに。こゝろ遽しければ。それかとも思ひかけず。父が手づから千尋の底へ。輾おとせしこそ淺ましけれ。こは。何とせんとて。愁傷大かたならざれば。龜鞠も忙然と遙き海を直下して。兄惣太が必死を哀み。惡獸もなほその類をおもふ。恩愛の一條のみ。善惡邪正の差別なく。漫に落涙したりける。且くして平九郎は。彼笈を扛おろし。これもわが子の形見なれば。われは今よりこの笈を用て。回國の行者に打扮。縦路すがら人に一錢を乞ても。洛までは至るべし。御身は又笈をふかくして。舍田女兒の假初に。物詣することくに見せて。父が先方後方にたち。道づれならぬおもゝちして。進まず後れず來給へかし。附もて虎を獵ものは。その皮を剥んが爲。網して龜を漁ものは。その甲を取らんが爲なり。御身あまりに妍て。且裝ひも花麗なれば。却てかゝる禍あり。しかし給へと説示せば。龜鞠もいとことわりにこそと諾なひぬ。さて平九郎は件の戒刀をば龜鞠にかくしもたせ。わが身は笈を脊にして。行者の摸様にかいつくろひ。ふたゝび倉澤の旅宿へはかへ

らず。親子山路を西へ下りて。浦田川を涉るとき。龜鞠は河水を沃ぎかけて染たる顔の鮮血を洗ひおとし。舊の美女となりしかば。この川の西なる森を。女體の森と名づけしとぞ。又惣太が滾び墮たる處を。親しらず子しらずと呼て。今もて薩陀山中第一の難所とす。こはみな後人口碑に傳聞て。かゝる名をさへ設たるなるべし。

六 盛景影江に胤時を殺す

仁科平九郎盛景が冢子惣太は。十二のとしに喜瀬川を逐電してより。武藏國江戸の片ほとり。忍が岡まで迷ひ來けるに。酒屋何がしといふもの。情ある男にてそのよるべなきを憐み。家にとどめて小断となし。兩三年養ひおきたるに。元來心さまよからねば。忽地再生の恩を忘却し。主人の錢居多盗とりて逃さりぬ。然るに惣太は。成長に及びて。身長六尺にあまり。膂力人に勝れて。習ざるに相撲柔術をよくし。且彦衰道が伎にさへ關て。只顧不義の財を貪。彼此を徘徊して。悪き友とのみ昵ひ相語。よろづおのが隨に舉動へども。その徒も彼が右へ出るものなくて。みな忍の壯夫とぞ稱ける。こは忍が岡にて成長れば也。かくて惣太は東海道を竊行。妹き女子を拐撃してこれを遠き湊へ售遞すに。その身價小々の事にあらず。みな淫酒の爲に遣捨けり。又入間寸平太。麻羽愿哲といふ二人の支黨あり。彼等は行僧に打扮て惣太に隨ひ。もろとも悪行をなすといへども。その出沒武藏野の逃水より定かならざれば。鎌倉より追捕せらるゝに。たえてその所在しれず。さて寸平太愿哲は。龜鞠親子が薩陀山。さつた山といへば。の麓に宿かりし夜惣太が親族なる事をしらねば。途よりつけ來りてその家に歇り。夜深て龜鞠を劫し。行李とともに奪ひ去りて。山ふかく逃れ登りしに。忽地龜鞠が俳優に謀計られて。二人齊しく海面へ輾落ぬ。惣太も亦木立に月の影さへ暗くて。父平九郎也とは思ひもかけず。しばし挑戦とき。咀を踏外して。前に滾墮たる寸平太が上に落かさ

なりし程に。聊も身を傷らず思ひの外沙も干て。僅に膝の節を浸すばかりなれば。やをら身を起して見かへるに。寸平太は落るとき。岳石に頭を打碎きけん。腦みそ出て死たるが。愿哲は手足を少し打傷れるのみにて。巖の間に挟れて蠢き居るを惣太呼かけて。そは愿哲にはあらぬかといへば。彼も又惣太がこゝに落たるをしりて。且驚き且歡扶起されて跋出る手元に。寸平太が負ひつゝ落たる行李を探當。かゝる物ありこはいかにすべきといふに。惣太忙しくかい探りて。是を徒に流しやるべきにあらず。われもてゆかんとて。みづから取て楚と脊負ひ。二人からうじて遙に西の濱方より上り。ふたゝび舊の山路に登りて見れば。旅人も美女もいづ地行けん影もとゞめず。剩地藏堂に置たりし。笈さへなくなりけれど。命拾ひしを身の幸にして。山を東へ走くだり。夜あけて件の行李を見ればさゝやかなる牌を著て。仁科平九郎と書寫してあれば大に驚き。さては昨夜愿哲等が奪ひ來りし少女は。わが妹龜鞠にて。挑み戦ひしは父なりけりと思ふに。さすが淺ましくて。緣由を密語ば。愿哲聞てふかく慙愧せり元此惣太は。梟惡無雙の奸賊なれば。親兄弟の事を敢思ひ遣るにもあらねど。又おぼつかなき所もあれば。しのびて喜瀬川に到り。外ながら愿哲に父の事を聞するに。平九郎は如此々々の故ありて。いぬる日龜鞠を將て旅たちぬといふ。こゝに於て惣太が疑念。はじめ解てからくとうち笑ひ。われ夥の人と組一度も後をとりし事なきに。いひがひなくも薩陀山より滾し落されたるは。父と挑み戦へばなるべし。千引の石は動すとも。親には願ぬものかなと咥くにぞ。愿哲もうち笑ひ。やがて足柄越して相摸路に赴きけり。さても平九郎盛景は。かゝるべしとは思ひもかけず。薩陀嶺にて路銀行囊を失ひ。加旃千尋の底へ滾し落せし荒男は。わが子惣太也と猜して。こゝろ更に樂まず。彼が象見なる笈を用て。回國の行者に打扮。龜鞠をばつ折姿にかひ繕はせて。親子先方後方にたち。晝は人の門に立在て。一椀の飯を乞。夜は月漏る樹蔭に臥て。千種の床に露を拂ひ。とかくして三河國矢矧の郷まで來れる折しも。鎌倉武士とおぼしきが。夥の従者を將て追ひ來たり。矢庭に平九郎を取ておさへ。犇々と縛ければ。平九郎大に驚き。こはこゝろも得ぬ。

われに于て過なし。人違なし給ひそといはせもあへず。彼武士聲をふり立。汝既に天の羅に係りながら。なほあらがひ脱れんとする歟。近曾忍の惣太といふ癖者。東海道を徧歴し。その身は笠を戴き笈を背にして。回國の行者に打扮。又二人の支黨を行僧に打扮せ。もつはら人の女兒を拐撃し非道の行をなす事。既に鎌倉に聞え。執權義時朝臣の命によつて。普く探索るところに。今汝が摸様を見れば。年齢こそすこし長たれ。惣太が骨相書にこれ一般。かくいふは鎌倉恩顧の侍。伊庭十郎胤時也。いかにわが眼は違はじ。とく首伏して後の笈を脱れよ。といきまきあらく責問ば。平九郎ふたゝび驚き。忍の惣太といふは。わが子惣太が事なるべし。さてはじめ龜鞠を奪ひ去し兩賊も。彼が支黨にてありけるかと思ふに。縁故さへ告かねて。ますゝ呆まどへるのみ。且くしていへりけるは。それがしはさる怪きものにあらず。年來駿河なる喜瀬川に住居いたせしに。打つゞきて身の幸なく。妻を喪ひ子を先だて。世を捨つ世に捨られ。諸國の靈場を巡拜せんとて近曾故郷を出たる也。元より腰に一錢を携ず。又身に刀劍をも帶ず。これにてその人にあらざることを察し給へかといふ。胤時聞て冷笑ひ。汝言語を巧にして陳ずるとも。誰かこれを實言とすべき。所詮論は無益なり。とて笈を展檢よと下知すればみなうけ給はりぬと應しつ。笈の扉を押ひらけば裡には木像の阿彌陀一軀を安置せしのみ是かと思ふ物もなし。胤時見てその木像こそあやしけれ。引出せと焦燥ば。一人こゝろを得て。搔とり捧てもて来るを胤時と見かう見るに木佛の背に孔をあけて金三十兩あまりを匿しおきぬ。さは疑ふべうもあらぬ惣太なり。かゝる證據ありながら。なほ偽りぬる憎さよと罵て。胤時腰なる鐵扇を拔出し。平九郎が背三ツ四ツ。息も絶るばかりに打擲き。笈をば從者に背負せつゝ引立ゆくにぞ盛景は呆れに呆れて。更にいふべきところをしらず。われは今まで木像に金のかくしあるをしらず親子もろともにく度か飢に臨みたる悔しさよ。寶の山に入ながら。手を空して縛らるゝのみならず。彼金の故をもて。賊ならずともいひときがたし。こは何としてよかるべき。とばり思へどせんすべなく夢路をたどる心持せり。この時日もやゝ暮なんとして。雨さへしとゝ降る程

に。龜鞠は父より遙に走り過。矢矧の橋の上にて待あはするに。しばしあれども来ることなければ。こゝろ怪て。又舊の路へ立かへり。目今父が縛らるゝを見て。大に驚き。これを救んとて走りよらまくせしが。信と心つきて。こは必故あるべし。まづその縁故を聞いてこそと尋思しつ。並松の蔭に躲居て。首尾を立聞つゝ。いよゝ驚き愁ひ。薩陀山にての事を告るとも。その賊はわが兄なれば。なほ支黨とせらるべし。父もこれを思ふ故に。明白には告給はざるならんかゝれば彼武士主従を謀計り。父を救ひ出すべしとて。既にこゝろを定め。直に間道より走りぬけて。胤時等が来るべき。道の次に只ひとり。降来る雨にひとと濡ながら。漣然と泣居たり。伊庭十郎胤時は。仁科平九郎盛景が。鎌倉を追放せられしころは。なほ總角にてありしかば。曾認らず。只願忍の惣太なりとおもひ悞りて。東の街へ引たてゆけば。一里塚のほとりにいと艶麗なる少女の身は濡にぬれて。涙の雨さへ降まさり。よゝと泣て立在るを。ふかく怪みてしばし見かへり。みづから立よりてその故を問に。龜鞠答て。わらはゝ鎌倉米町なる商人何しが女兒にて。人肉經紀に拐撃され。わりなくこの處まで伴れ侍りぬ。殿は正しく鎌倉武士と見えさせ給ふに。家路に送り給はらば。再生の鴻恩忘れ侍らじ。あはれ救はせ給へかといひもあへず。又漣然と泣にけり。胤時黙頭て。汝を拐撃たるはいかなるものぞ。者奴にはあらぬかとして。盛景を指示せば。龜鞠見て。宣ふごとく彼ものなり。さてはやくも殿の生拘せ給ひたる嬉しさよといふ。この時平九郎盛景は。女兒がわれを救ふかと思ふに。その事さへ心もとなければ。いまだ言語をかけざるに。却て父を賊なりと告るを聞て。ふかく恨み憤るといへども。又明白に親子がうへをいさざるを思へば。別に謀やあるなどこゝろに問心に答て。終に何事をもいはず。胤時は龜鞠に欺るゝをしらず。義時の仰に因て。日來惣太を索めぐり。只今搦捕たる願末を説聞せ。汝こゝろ安くおもへ。われかならず鎌倉へ將てゆくべしといへば。龜鞠ますゝよろこべるおもゝちして後方につきてゆく事いまだいくばくならず。影の江といふ所に到るに。日は暮雨も頻に降る程に。今宵はこゝに明さんとて。胤時衆人を領て村長が家に歇り

ぬ。さて従者は一室を厳しく圍繞て。平九郎を守つゝ。かはるゝ外面へ出て物食などするにみな龜鞠を憐みて。ふし柴折焼てぬれたる衣を乾させ。吾儕は年來鎌倉にありながら。米町にかゝる美女のあることをもしらざりし。もしけふ惣太を捕へずば。御身は忽地川竹の瀬にや沈みなん。寔に危き事なりといふ。龜鞠聞て。宣ふごとく。不意殿たちの庇によりて。恙なく故郷に歸り侍る。歡しきは。いはずとも察し給へ。鎌倉までははるゝの路なれば。なほ憐愍を願奉るのみ。折ふし雨夜の徒然なるに。心ばかりの盃をも勸て。慰めまゐらすべうは思ひながら。貯祿なればそれもすべなし。疲勞給はゞ肩癖を打せ給へ。何にまれわが身になすべき程の事は推辭侍らじと應つゝ。はじめて莞爾とうち咲ば。老たるも弱きも。魂不覺に天外に飛て。この少女の爲ならば。命をも惜まじと。思はざるもなかりけり。そがなかに一人の男膝をすゝめて。わが主從鎌倉を出し日より。彼惣太を捕んとて。居多の國々を縦横に徧歴し。朝には星を戴てたち出。夕には月に送られて宿り。一日片時も安き思ひをなさざりしに。既にその賊を擲得たれば。些の歡を盡すもよかんなん。よしや一碗の村酒なりとも。この少女に酌をとらせて。頃日の疲勞を忘れんはいかにといふに。老たるは頭を掉て。いな。彼惣太は尋常の癖者にあらず。通宵よく守れと。殿の仰つるものを。何の暇ありて。酒も遊ぶべきと承引ず。彼男かさねて。常言に。死せる虎は生鼠に及ずといふを聞ずや。彼賊いかに猛くとも。嚴く縛たれば檻の獸にひとし。酒を飲じといふ人は。見ておはせよ。又飲んと思ふものは。二人ばかりわれとともに來給へ。ゆきて酒を買もて來つべしといへば。をいと應て二三人簀笠に身づくろひし。松ふりてらして走り出しが。いく程もなく二樽の酒に。殺よき程とり添て歸りもて來ぬ。さて件の酒殺を安排。おのゝ團坐して盃を右にめぐらし左に巡らし。潜きあひて飲ほども。龜鞠はかゝる席に。物馴たる白拍子の事なれば。彼に強これに勸めしかば。はじめ賢ぶりたりける老者也堪かねて。諸人を搔わけ出。引受々々飲にければ。夜のいたく深るをしらず。おのゝ泥のごとく酔て。堅に臥し横に輾び。果は軒の聲のみ高し。龜鞠これを見て。今は心易しと嬉し

み。潜に父がほとりに歩み寄て。懐なる短刀を拔出し。縛の索ふつと切解て。しばし密語折しもあれ。一人酒を嗜ざるもの。なほ睡らてありしかば。この景迹を見て大に驚き。聲をふり立て衆人をよび覺すを。平九郎は二聲とも叫ばせず。走かゝりつゝ枕方なる。刀を奪て丁と切れば。礮と倒れて死たりける。衆人もこの胖響にやゝ覺て。こはいかにと騒まどへど。酒の酔いまだ醒ず。起んとしては輾轉を。平九郎は得たりと刀を打揮て。向脛肘のきらひなく。當るを幸に。一人も残さず切てまれば。鮮血あふれ出る傷口より。酒の香もるゝ屍は。秋の巷に踏ちらす。酔の柿に彷彿たり。伊庭十郎胤時は。すこし間を隔て。ひとり燈に對ひ。鎌倉へ聞へあぐる。驛繼の書呈を書寫てありけるに胖響遙に聞えしかば。筆をとめて耳を側つるに。ちかく人の足音するを誰ぞと問ば。矢矧より伴れまゐらせたる女子なりと答ふ。胤時見て。今外面の頻にさわがしきは。何事ぞと問に。龜鞠その事に侍り。殿の従者いたく酔て。物あらがひをしいだし。打あひて傷つくものも多ければ。しらせ申さん爲に参りぬと欺ば。胤時大に焦燥て。彼等犯人を守ながら。酒を貪て同士打をいたすこそ越度なれ。いでわれゆきて鎮めんと弔當て。刀引提つゝ小暗き廊下を走り來るを。平九郎は杉戸の蔭に躲居て。遣すぐして丁と切る。憐むべし胤時は。腸より臆まで。乾竹割に切倒され。躲わかれて兩段になりぬ。しばしもあらず龜鞠は。彼此をかひ探りて。三十兩の金をも奪かへし。足を翹鮮血を踏て出來り。財布を打ふりて父に見すれば。盛景莞爾として。伊庭が従者の簀笠を取て。龜鞠にもうち被らせ。輒くこゝを脱れ去て。徑より山越に。浴を投て走りける。此夜は。通宵雨いたく降て。霎時も小止なく。村長が閨宅の男女は。みな庖福のかたに臥たれば。たえてこの事をしらず。天明て後の物かたりは。書つけんにくた

七 松稚丸潜て白川山に獵す

この時華洛北白川には。松稚丸十七歳。梅稚丸十五歳になり給ひぬ。兄弟才器世に勝れて。その心ざま正しく。松稚はその人となり武藝を好て。只顧弓馬劍法を事とし。梅稚丸はその性文事を嗜て。日夜讀書筆學にあかしくらし給へり。父の惟房朝臣は。年來子どもの行ひに心をつけて。つらく尋思し給ふやう。むかしわが父。義に依て行稚の一命を申乞。既に觀山月林寺に登して。祝髪させ給ふといへども。彼人出家の行をなさず。遂に逐電して今にその往方を聞ことなし。朝家の祟わが家に及ばざるは。こよなき幸なり。とはいへ亡父の志。忽地徒事となりて。冥土黄泉の下にても。さこそ朽をしくおぼすらめ。せめてわが子どもを。一人は出家させて。行盛一家の後世を弔せばやとて。まづ斑女前に情由を告。さて宣ふやう。松稚は嫡子にして心さまも勇ければ。法師となる事を嫌ふべし。梅稚は幼きより閑雅なり。出家させんには。彼れその器に稱へり。しかれば今より仲圓阿闍梨に進らせて。經をも讀習すべうもおもふなり。この事いかにあるべきと宣へば。斑女前も丈夫の言語。悉理あるに推辭がたく。殊さら行稚の往方なくなりたるを歎き是にかはらせて出家させんと宣はする。志の忝くて。不覺に落涙し給ひけり。こゝをもて梅稚は。去年の春より觀山月林寺の仲圓阿闍梨に參り仕。行童の如くにて在しける。元來其容姿の艶たる事は。開んとする春の花。圓ならんとする秋の月にも比ふべく。よろづ女子にして見まほしき風情なるを。無下に法師になしまるせんは。いと惜きことなめり。と人みな申あへるとなん。是はさておき仁科平九郎盛景は。影の江の郷にて。伊庭十郎主従を歎き殺し。龜鞠を將て間道より華洛に上り。西の洞院六角のあなたに。ふりたる空房あるを借得てこゝに居を下。その氏を更て。赤石平九郎と名告れり。豫ては彼三十金をもて。龜鞠か我裳の料とし。彼に白拍子をさせて。容易世をわたるべうおもひはかりたるに。洛へ上り着しころより。龜鞠は風のこゝちとて打臥たるが。次第に病劇しうなりて。醫師もいくたりとなくものするに。みな瘧病の重きなりといふ。平九郎は命綱とも頼み思へる女兒の。いと危く見ゆるに。安き心もなく。能膺。眞珠。人參のたぐひ。すべて價に拘はらず。よきといふ

程の藥劑を用るに。件の金も忽地に遺盡し。些の衣服調度に至るまで。悉く活却て。家はなほ住居すれど。舊の空房に異ならず。かくは神無月の上旬に及て。龜鞠が病著ややおこたり果。平九郎もはじめて安堵ぬ。されと山田の晩稻刈乾すを見て。歳の豊けきをしりながら。今は一椀の飯に乏しく。千度うつ砧の音を。寢覺々々に聞といへども。衣を更るよすがもなし。かくては思ひし事もみなそらだのめにて。龜鞠を白拍子になすことかたく。さればとて平人の妻などにせんはいと朽をし。とやせまじ。かくやせまじとて。頻に心を苦しめけり。しかるにこのころ洛外に一つの奇談あり。こゝに白川の東。山中といふ村の長。女兒ひとりをもてり。年紀既に二八を過て。容止も又醜からず。父母はこれか爲に婿を擇むに。媒する人も多かり。さる程に彼女兒は幼きより家に養ふ。小厮何かしと。しのびに相語て。水もらすまじく契れるを。父母はたえてしらざりける。さて婚縁定るに及て。彼小厮は主の女兒を誘引。もるともに走れるを。父いたく怒り。夥人を出して追留させ。しばしもおかず拏戻して。小厮を縛。うちも殺すばかりに打擲せし程に。彼憤に堪ざりけん。その夜みづから舌を嚙斷て死にけり。女兒は父母をうらみ小厮を哀み忽地物狂しうなりてまどひ出村稍盡なる池に飛入りて。遂にうたかたの泡と消ぬ。さればにや雨のそぼふる日など又さらでもたくれには。彼女兒が幽魂。池の畔に立あらはるゝを。見たるものもありとて。只囂々と風聞す。平九郎親子は。この物語を傳聞て。彼村長が慮の淺はかなるを冷笑ひける。この日小春の天いと麗なれば龜鞠は久しく寢亂れたる髪を梳らんとて鏡に對ひ。わが顔色の瘦衰たるを見て。數回歎息し。父を見かへりていふやう。男子病とき家は衰へ。女子病ときは色衰ふ。今わが身久しく病たるをもて。父いよ、貧くなり給へり。もし急を救ふの智劑を用はずは。身の病は愈とも。貧の病は治したがし。わらはかく顔色の衰たるを見て。これにつきて謀あり。彼山中村の長が女兒入水して夜な夜池の畔に幽魂の立あらはるゝと風聞すること幸なれ年來習得たる俳優して彼幽靈に打扮。その處にゆきて往來の人を驚さば。里人はいふもさらなり。豫て聞怕する旅人等。周章て逃まどひ。或は行李

を遣れ。或は懐の物を落して走り去るべし。その時。わが父迹につきて。拾ひあつめてかへり給はんに。些の得つかさる事はあるべからず。この謀計いかに侍らんといへば。平九郎大に歡び寔に御身はわが子ながら。才色兼備りたる少女なり。さらばしかせんとて。次の日より親子もろともに。山中村の池の畔に到り。龜鞠は年經る榎の處になりたる裡に躲れ平九郎は山の蔭にひいて合圖を定め。人の來るを見れば。父まづその暗號するに。龜鞠は白き內衣を被ぎ。長なる黒髪をふり亂し。やをら虚より出て。枯尾花の中に立在。物をばいはてそなたを見かへりし形容は。更にこの世の人とおぼえず。閻王廟前の呵責を脱れ來て。啾々として怨を陽人に訴る。陰鬼ならじとも思はざるはなく。これを見る人魂をうしなひ。逃まどひて手にもたる物の落るをもしらず。平九郎はその後方より。落せるを拾いたるに折ふしは物のあるもありけり。さらぬだに一犬形を吠て百犬聲を吼るが世の習俗なれば。傳聞ものふかく怕て。申の刻過ては。彼池の畔を過るものなく。離々たる亂草人を招きて。暗蛩霜に啼のみなれば。平九郎親子ははじめにも似ず。むなしく彼處に立あかして本意なく歸る日も多かりかゝる折しも松稚丸は。從者僅に兩三人を將て。終日白川山に追鳥獵し。日もや暮んとするころ。山を下らんとし給ふに。樵夫とおぼしき男。松稚をつくく見えて。この山中の西なる池の畔には。近曾怪物の出るとて。申の刻よりたえて山を下るものなし。御覽候へ。暮も山の腰をめぐりて。けふも早暮るゝにちかしおなじくは嶺の家に歇て。詰朝洛へ歸り給へかしといふ。松稚點頭て。われもその事を聞さるにあらず。しかれども。人死すときは三魂天に昇。六魄地に歸り。ながく人間に徜徉すべき理なし。たま／＼臨終の惡念を引て。或は幻に怨を述。或は夢に救を徵る事。ふるくよりいひ傳ふれど。多くは狐狸のわざくれにて。眞の冤鬼にはあらず。われ今彼處を過る序に。その眞偽を試すべしと宣へば。彼男呆れ果。いとわか見え給ふにさても膽の太き人にこそおはせ。よしなきちからわざして。可惜命とられ給ふなといひかけて。走り過にければ。松稚は一人の從者を見かへりて。汝はわれより先に歩みて箇様々々にせよ。われその機に臨て謀ありと仰すれば。彼人はこゝろを得て。遙に走りぬけたり。松稚又残る二人の從者をば。道次に退け。その身は樵夫のみかよふ捷徑より彼池ちかく來給へは。入相の鐘遠く聞えて。高峯の颯いと寒けし。平九郎はこの五七日。たえて人にあはねば。自今松稚の從者が只ひとり來るを見て竊に歡び。はやくこれをしらすれば。龜鞠つと出て薄の中に立あらはるゝに。彼從者は。いたく怕るゝおもちして。阿呀と叫びつゝ逃去けり。平九郎は彼が物を落さざるを。いと本意なく思ひけん。行ともしらず迹につきて。西の山路を下りぬ。龜鞠はかく切して。舊の處へ躲入らんとするに。思ひもかけず虚の中より。狩裝束したる若人。奮然として跳出。足を揚て礮と蹴れば。龜鞠は身を轉して地上に倒れ。株に膝を打せて。息もたえぬなれど。苦痛を忍びて逃れ走らんとするを。若人やがて襟上颯み。膝下に布て動せず。この人は松稚なり。松稚はひとり捷徑より龜鞠が後方に出。彼が從者を驚す間に入かはりて。虚の中にかくらひ。既に假幽靈なりと認て輒くこれを捕給へり。その時龜鞠は。蟲の鳴ばかりなる聲して。怒し給へくと叫びければ。松稚から／＼とうち笑ひ。汝甚膽太し。夫暗きところには神明あり。明なるところには王法あり。かく怪しき打扮して人を劫すは。物を取らんとての謀計なるべし。今人を追ふて麓のかたへ走下りしは何ものぞ。なほ外に支黨なき事はあらじ。とくいへ。とく告よとて。いきまきあらく責問給へば。龜鞠偽り悲びて。事發覺侍れば。逃るゝに言葉なし。わらはゝ滋賀の山里に住居するものなり。家は宛て貧きに。祖母と母と三年以來長き病着に打臥しければ。父なるものも活業をなしがたく。又良薬ありといへども。貯蔵なければ用る事かなはず。父は祖母の爲に愁ひ。わが身は母の爲に悲ひ。こは道ならずとしりながら。近曾此處に。怪ありといふにつきて。親子夜な／＼のび來て。慢に人を驚し。携たるものを取り落す事などあれば。拾ひとりて薬の代とし。祖母と母を養ひ侍り。目今麓へ下りしはわらはが父にて。外に相語る人はなし。こは寔に一旦の出來心に侍り。かく見られ侍るから。いよ／＼この身の過を悔ぬ。あはれ命は助給へかしとて。誠しやかに申ける。松稚丸つく／＼聞て。汝みづからおもへ。人

りと仰すれば。彼人はこゝろを得て。遙に走りぬけたり。松稚又残る二人の從者をば。道次に退け。その身は樵夫のみかよふ捷徑より彼池ちかく來給へは。入相の鐘遠く聞えて。高峯の颯いと寒けし。平九郎はこの五七日。たえて人にあはねば。自今松稚の從者が只ひとり來るを見て竊に歡び。はやくこれをしらすれば。龜鞠つと出て薄の中に立あらはるゝに。彼從者は。いたく怕るゝおもちして。阿呀と叫びつゝ逃去けり。平九郎は彼が物を落さざるを。いと本意なく思ひけん。行ともしらず迹につきて。西の山路を下りぬ。龜鞠はかく切して。舊の處へ躲入らんとするに。思ひもかけず虚の中より。狩裝束したる若人。奮然として跳出。足を揚て礮と蹴れば。龜鞠は身を轉して地上に倒れ。株に膝を打せて。息もたえぬなれど。苦痛を忍びて逃れ走らんとするを。若人やがて襟上颯み。膝下に布て動せず。この人は松稚なり。松稚はひとり捷徑より龜鞠が後方に出。彼が從者を驚す間に入かはりて。虚の中にかくらひ。既に假幽靈なりと認て輒くこれを捕給へり。その時龜鞠は。蟲の鳴ばかりなる聲して。怒し給へくと叫びければ。松稚から／＼とうち笑ひ。汝甚膽太し。夫暗きところには神明あり。明なるところには王法あり。かく怪しき打扮して人を劫すは。物を取らんとての謀計なるべし。今人を追ふて麓のかたへ走下りしは何ものぞ。なほ外に支黨なき事はあらじ。とくいへ。とく告よとて。いきまきあらく責問給へば。龜鞠偽り悲びて。事發覺侍れば。逃るゝに言葉なし。わらはゝ滋賀の山里に住居するものなり。家は宛て貧きに。祖母と母と三年以來長き病着に打臥しければ。父なるものも活業をなしがたく。又良薬ありといへども。貯蔵なければ用る事かなはず。父は祖母の爲に愁ひ。わが身は母の爲に悲ひ。こは道ならずとしりながら。近曾此處に。怪ありといふにつきて。親子夜な／＼のび來て。慢に人を驚し。携たるものを取り落す事などあれば。拾ひとりて薬の代とし。祖母と母を養ひ侍り。目今麓へ下りしはわらはが父にて。外に相語る人はなし。こは寔に一旦の出來心に侍り。かく見られ侍るから。いよ／＼この身の過を悔ぬ。あはれ命は助給へかしとて。誠しやかに申ける。松稚丸つく／＼聞て。汝みづからおもへ。人

を劫し掠るはこれ賊なり。縦親の爲なりとも。盗して孝ならんや。白香父を救んとて虎と戦へば。猛虎靡然として争はず。蔡順母の爲に悲み告れば。赤眉の賊もこれを殺さず。故に至孝は天地を感動す。汝がなすところは。豕を負てその臭きを説を厭ひ。泥を投てその汚をいふを諱のたぐひにて。親を賣て賊をなし。なほ賊なりといふ人を憎む。その罪尋常の盗人にも勝れり。今こそおもひしるべけれ。といひ懲して引起し。はじめてその面を見給ふに。世に比なき美人なれば。心の中ふたゝび驚き。人の心さまばかり。貌の醜美にもよらざるものなり。この女子。もし富貴の家に寵遇を得て。發跡ことあらんには。忽地に家をも亂し。國をも亡して。夥の人の殃を醸すべし。今これを殺して後の愁ひなからしめんにはと尋思し。刀の柄に手をかけ給ひしが。いな／＼われ廷尉にあらざれば。私に人を誅すべき理なし。只いたく懲して久後を誠ばやと思ひかへし。腰なる列卒索をとり出て。龜鞠を榎の幹へ縛着。墨斗に筆を染て。まづ彼が額に鬼といふ一字を書寫し又左右の腕をまくりあけて。

鬼鬼にあらず。孝孝にあらず。もし心もて眞の鬼となさば。身も隨て頭なき鬼とならん。

と書とゞめて。再び龜鞠に對ひ。われは吉田少將惟房の嫡子松稚丸なり。けふ潜やかに遊山してのかへさなれば汝を殺さず。汝みづから懺悔してかさねてかゝる悪念を起す事なかれと説示し。道に東の方を招き給へば。二人の家隸は。少し程をおきて。道次に立在たるが。忽地西の山路より走り來つ。この件の事を。見もし聞もして舌を揮ひ。且松稚丸の智勇を稱讚いたしたり。さる程に松稚主従は。麓を差て下り給ふに。はじめ偽り走りたる従者も。途に待あはして縁由を聞。且驚き且感し。こゝよりみなひとつになりて。家路へいそがしまゐらせける。さても平九郎盛景は。嚮に逃走る人の迹につきて遠く麓へ下りしに。終に見うしなひて。徒に立かへれば。思ひもかけず龜鞠は。額に鬼といふ字を書れ。いたく榎に縛つけられてありしかば。驚き執掌てその索を解去。さまざま勸りて故を問に。龜鞠は松稚に厳しく懲されたる縁故を。審に物がたり。左右の腕を裹て見せければ。平九郎齒を切り。われ今こゝ

へ立かへる途にて。一人の従者に。滋藤の弓に獵矢とりそえてもたし又一人の従者が拳に鷹を居させて。東へ過りたる若人は。彼松稚ならん。彼が父惟房とは。昔總用のころ義を締て。兄弟の因さへあり。しかるにわが身。行盛の子として。弓矢の家に生れながら。法師となり果ん事の朽をしさに。叡山を逐電し。かく命運微くて。寔しく世を経るに。彼は官職とし／＼に昇進みて。いと時めくも娟しきを。剩これが小兒の爲に。わが愛子を喪れんとし。飽まで恥見せられたるぞ恨なる。われもし立かへる事の今少し早かりせば。彼小冠者を立地に。打殺してすてんものを。正しく途にゆきあひながら。しらて過ぬる悔しさよとて。躍あがり／＼。しばし罵りて已ざれば。龜鞠はいよ／＼憤に堪ず。一聲叫て倒れしかば。平九郎周章てさまざまに勸るに。やうやく甦生たれど。蹴仆されし時。打たる膝ふたゝび痛出て。立居も自在ならず。かくては歩より家路にかへらんこと覺つかなしとて。父が肩に引かけつゝ。その夜の明がたに。辛じて西の洞院へ立かへりぬ。しかりしより龜鞠は。頻に心痛してふたゝび長き病著にうち臥しけり。こはみな積悪の報なりと思ひもかけず。親子は只顧に世を憤り。人を恨みて。非を改るのこゝろなし。わきて龜鞠は松稚にいたく警られたる憤りの。たえて忘るゝ隙もあらねば。しば／＼歎息し。わが身十二分の顔色はありながら。夜光を泥中に捨て終に玉人にあはず。もし命ありて時と威勢を得たらんには。惟房一家を殲してこの恨を散さてやはおくべき。ととひりごち。惡念さらに彌増ぬ。抑女子の美にして邪智ふかきは。その毒砒霜より甚し。人かの毒に觸るゝときは。終に死亡を脱れず。宜なるかな承久の播亂は。この龜鞠が三寸の舌より起りて。あさましや一院後鳥羽は申すもさらなり。中院土御門新院徳順なみ遠き嶼峰に遷され給ひぬ。只憎ても憎べきは。古今一種の毒婦なり。

八 忍摠太酔て西洞院を鬧す

忍惣太はさきつ頃。薩陀山にて危きを脱れ。愿哲とともに伊豆の山家を徘徊して。長月のはじめに。武藏へ立越んとて。相摸路に出。道すがら巷の風聞を聞くに。年來鎌倉より追捕させ給ふ。忍惣太といふ兇賊。いぬる月某日。三河國矢矧にて。伊庭十郎胤時に生拘れたりしに。その夜影江の旅宿に於て。胤時主従を欺き殺し。忽地逃亡て往方しれず。よりて鎌倉より國々へ公文をなし下され。穿鑿いと嚴重なりといひ罵るにぞ。惣太聞てふかく怪み。われはさるおぼえなきに。かゝる流言して油断させ。不意に搦捕んとするの謀計ならん。しかれば鎌倉に程遠からぬ。武藏に到らんはその疎に係るなり。さはあらぬかといへば。愿哲もげにと諾て。二人もろともに途より取てかへし。ふたゝび西を投て走る事數日に及び。伊賀伊勢の間に且く躲居て。その年の霜月に。大和路に出て洛に上り。ある日の夕ぐれに。愿哲を將て。西洞院なる酒店に到りて。半日の酔を盡し。つと走り出るを。主人遽しく引とめて。こは酒の賁を忘てや行給ふ。いと慢なりと咤けば。惣太點頭て。けふは持あはしたる錢なし。かさねて來るときに與ふべし。といひかけて出んとするを。主人引とめたる袖を放さず。御身が聲音を聞くに。關東の人とおぼし。洛は定めて旅なるべし。いつ地に宿かりて在する。名告たまへ人をつけて參らすべうもや。といひもをはらざるに。惣太聲をふり立て。さても怪有なる奴かな。かばかりの錢を債らんとて。旅宿を問ことやある。その義ならばすべきやうありといきまきつゝ。忽地拳を握かためて。片頬も側ばかりに破と打たふし。踏にじりて動せず。酒保小斯など。この形勢を見て。且驚き且怒り。主人を救んとて立さわげは。愿哲奮然として押隔。小斯がもてる杓を奪ひとりて。置なればたる酒の甕を悉く打碎ば。數十斗の酒ながれわたりて。門に泉を湛たり。惣太はなほ武りに勃誇て。端近なる火桶を取て投出すに。その火障子に飛ちるにぞ。衆皆いよゝ驚きまどひ。打消んとて走まはる間に。そと愿哲に注目して。いちはやく出去けり。むかし抱朴子いへることあり。百尋の室も分寸の甕より焚。千丈の坡も一蟻の穴より潰る。うべなるかな老幼最心を用て。慎おそるべきものはこの災なり。惣太等が悪虐さらに比んに物なし。さる程

に祝融俄頃にあれて。一院後鳥羽の御所も程遠からぬに。事急なれば御車たてまつるまでもなく。吉田少將惟房。院を負たてまつり。殿上人少々供奉して。高倉を東へ御幸なしまらせける。まいてや皇妃以下の女官たちは。おもひおもひに出給ふ。かゝる折しも平九郎盛景は。女兒龜鞠が。久しく病て起臥も自在ならざるに。近隣に祝融の愁ひありて。いかにもせんすべなければ。ふりたる葛籠へ龜鞠を入れて楚と背負ひ。東の巷を投て遙に脱れ去。やゝ富小路まで來にければ。やをら葛籠を扛おろし。一息せんとて汗拭たるを。愿哲は物ありと見て。途よりつけ來たり。つと走りかゝりて葛籠に手をかくれば。平九郎は大に怒りて。襟上掴みて引戻し。こは不敵なる盜賊かな。人も人によるものを。可憐命うしなひそと罵りて。刀を閃しつゝ切んとすれば。愿哲は石をかいとりて。はらりゝと投つくるを。平九郎物ともせず。透間もなく切てかゝれば。かなはじとやおもひけん。足に信せて迷走るを。いづ地までもと追蒐たり。忍の惣太は。少し後れてこの處を過るとて。路のほとりに重やかなる葛籠のあるを見て。密に歡び。押なほして負ひゆかんとする折しもあれ。忽然後方に足音して。人夥出來れば。序あしかりけりと驚き瞻。終に葛籠を捨おきて走り過ぬ。さても少將惟房は。後鳥羽院を負ひ奉り。からうじてこの街までまありしに。失火も輒くうち滅りたれど。しかるべき公卿はいまだ追著たてまつらず。あまりにかるゝしく見えさせ給は。御迎の御車を待あはして。還幸なしまるらせばやとて。暫時路傍に立在て。情由を聞えあげ奉るに。院もいたく走らして。頻にも苦しくおぼせしかば。まづこゝにて憩んに。いづれへなりとおろし居候へと仰ける。されど一枚の蓆だになくて。地を踏せ奉らんはいともかしこし。いかにせまじと思ひたゆたひて。と見れば何ものか遣けん。ほとり近う一ツの葛籠ありけり。このうへなどへ居奉るべしとて。おのゝ朝服の袖を離断して葛籠の上にかさね掛させ。これを假の柵として。やがて其處へおろし奉れば。怪べし。人ありとおぼしくて。葛籠の裡にて頻に呼ぶ聲す。院は申すもさらなり。惟房以下の徒大に不審みて。連忙く抱きあげ奉らんとするとき。忽地御車きしらする音ちかく聞えて。月卿雲客影御迹

を慕ひまゐらせ。やうやく参りあひければ。惟房朝臣すなはち御車へうつし乗せ奉らる。後鳥羽院は。目今葛籠の裡にて。女子の聲せしを。いと怪くおぼせしかば。彼何ものにかあらん。ひらきて裡を見よと。宣はするに。六位の官人うけ給はりて。件の人を扶出せば。年紀二八ばかりなる女子にて。いと嬋れたれど。その嬋妍なる容止は。雲の上にも又比なき美人なり。正に是富小路の名に負て。龜鞠が發跡べき時節到來やしたりけん。一院御車の裡より見そなほして。何となく愛させ給ひ。惟房朝臣を近く召て。彼か父は何ものなりや。その素生を問かして仰すれば。惟房歩みよりて。龜鞠に對ひ。汝は何人の女兒にて。何の故ありてこゝには捨られたる。縁故を審に申すべしと聞え給ふに。龜鞠は事の形容を視て。こは尋常の御車にあらず。もし主上にましまさずは。院などにて坐らめと思ひて。しばしば眼を斜にして媚を獻じ。手を地上におきて申やう。わらは、白拍子にて龜鞠と呼れ侍り。父は武士の浪人にて。原は信濃國の住人。仁科二郎平盛遠が族に赤石平九郎盛景と申ものなり。わが身久しく心痛の病によりて。起臥も自在ならざるに。今宵近隣に失火あるをもて。父盛景わらはを葛籠に扶入れ。みづから脊負て走り出たる途中。盜賊に出あひぬとおぼしかりつるが。それを追行やしぬらん。こゝには見え侍らず。しかるに只今人ありて。葛籠の上に尻をかけ給ふかと思へば。忽地こゝち清々しくなりて。病頓に愈侍りぬと申す。惟房聞て。寔に至尊の玉體に布れ奉れば。彼が病の立地におこりたりしといふも。故あるかなと感激して。縁由を聞えあげ奉るに。一院仰けるやう彼が父は前年身まかりたる。仁科盛遠が族なりと申せば。零落せりといふも平人にはあらず。朕彼女子を見て捨がたきおもひあり。汝彼を養ひて姪とし。御所にまゐらせかし。この事を委んもの惟房が外にありともおぼえず。朕がこゝろを得て。よきに計得させよと。密やかに仰しかば。惟房朝臣眉を顰め。こは淺まし。十善の君として。賤き白拍子などに。玉體を汚され給ふべきかは。只願思食かへさせ給はん事こそ願はしけれとて。なほ言語を竭して諫奉れば。院御氣色あしう見えさせ給ひて惟房何をか申す。むかし白河院は。賤の女子を召れて。鍾愛比なかりき。祇園女御是

也。今の女子はそれに勝りて。ふかく卑み嫌べきにあらず。且汝養ひて進らせんに。なでう世に怪らるべき。再び諫る事なかれと宣ひて。惟房に青侍二人を従して。こゝより身の暇を給はり。やがて還幸なし給ふ。惟房朝臣は。なほ御所までも参りて。諫奉らばやとて。しばし御車を目送つ。とさまかうさま思ひたゆたひ給ひしか。一院は日來大臣の諫をも聽給はず。よろづ御心の隨に擧動たまふなれば惟房などが申とむむるとも。諸給ふべからず。まづ院宣にしたがひ奉りて。後にすべきやうもあらんと深念して。青侍一人を残しとめ。今にもあれこの女子を尋る人あらば。潜に惟房が第へ案内せらるべしと聞えおきて。今一人の青侍には。龜鞠を扶掖せ。北白川へ歸り給ふ。途にて惟房の家隸ども主の迎にとて。まゐれるに行あひ給ひし程に。忽地從者影にぞなりにける。

九 金鶏凶を告て惟房を陥る

かくて吉田少將惟房朝臣は。龜鞠を將て家に立かへり。斑女前に院宣の趣を告て。彼女子をよきに勸給へと仰すれば。斑女前やがて春雨を召て。龜鞠に浴み沐はせ。新衣一襲をとり出て。ふるぎを脱かえさせ給ふに。寔に玉を欺く美人にて。霞被軽く装ては。趙后新粧に倚。金步靜かに運ては。潘妃舊怨を舒かと怪しまる。正に是春風一朶の野花。手折來りて餘香濃やかなりといへども。外面如菩薩。内心夜叉。浮屠家の憎も宜ならずや。浩處に富小路に残りとままれりし青侍。平九郎盛景を誘引て來りしかば。惟房呼び入れて對面し給ふに。影の年を経て。面影こそ少し變れ。疑ふべうもあらぬ行稚なれば。心の中驚き怪みながら。たえて言語には出し給はず。はじめてあふがごとく待して。その名字を問給ふに。平九郎は通路青侍が物語にて。一院龜鞠を召させ給ふよしを聞しかば。ふかくよろこび。聊も憚る色なく。伴れてこゝに來りし程に。彼もはやく主人の心を猜して。行稚なりとは名告らず。それがしは仁科盛遠が族に。赤石平九郎盛景と申すものなり。年來關東にありといへども。頼むべき主もなければ。近

曾洛にのぼりて。西洞院六角の片ほとりに住居せり。しかるに今宵舞馬の難あるをもて。女兒龜鞠を葛籠に入れ。脱れて富小路まで來れる折しも。盜賊に出あひ。これを追留んとして其處にありあはせず。仄に聞上皇後鳥羽院龜鞠を見そなはして。忽地觀慮に稱ひ。彼を御所に召るゝとか。こは盲龜の浮木にあへるより。なほ稀なる僥倖なり。偏に羽林近衛の唐名の吹擧を仰奉ると辭爽に舒にけり。惟房朝臣ははやく盛景に。院宣の趣をしられて。ふたゝび驚き。怒に置してはあしかりなるとおぼして。すなはち龜鞠を養ひ。叔姪の義をもつて。御所へ進すべき院宣を承りたる首尾を。密やかに説聞せ。まつ休足あるべしとて。家隸粟津六郎。松井源五等に仰せて別室に誘はせ。厚く饗應し給ひける。彼六郎源五は。をさゝ行稚を認りたるものどもなれば。事の爲體にふかく怪み。いかに見忘れ給へる歟。まがふべうもあらね行稚丸にて候と密語申せば惟房朝臣點頭て。われもはじめよりその人とはしりぬ。しかはあれ。彼は行稚なりといふときは。亡父の志を破り。いはざれば君を欺くに似たり。むかし先考彼と義を締して。惟房が弟と呼せ給ひしに。彼人不良の志を抱き。離別遙に年を経て。今又おほけなくも院宣によりて。彼が女兒を姪とよぶ事。寔にふかき因縁ならん。もし行稚志を改めて。ふたゝび出家いたすに於ては。舊惡をも償ふべく。實に一家の幸なり。事のこゝに及ぶまでは。すべての人にしらすべからず。われも又彼親子が素生を。斑女にも告まじとぞ宣ひける。さる程に。次の日四辻殿後鳥羽院の御所なりより。龜鞠を召るゝ事しばゝなれば。惟房朝臣已ことを得ず。みづからこれを伴ひて。院の御所に參り給ふ。その装ひ美を盡して。人の耳目を驚せり。一院後鳥羽院殊に歡びおぼして惟房には夕告と名づけ給へる。御劍一振を賜りぬ。この寶劍長はづかに九寸五分にして。鞘に金の鶏をつけらる。もしこの劍を佩ときは。人ありて害心を挾めば。鞘の鶏忽地聲を發す。又その主殺罰の氣をあらはせば。又鞘の鶏聲を發す。こゝをもて夕告の名あり。かく奇異なる寶劍なれば。後鳥羽院殊さら秘藏ましゝけるを。今度の恩賞として。惟房朝臣に賜はりけるとぞ。抑この君は。文武に涉獵したまひて。御讓位の後も。土御門院。順徳院。天子二代

の間。天下の政は。なほ一院より制度し給へば。よろづ愛たくましますに。天魔の所爲にやありけん。白拍子龜鞠を御寵愛ふかくして。後宮の粉黛もこれが爲に顔色なきがごとく。加之龜鞠が父平九郎盛景を。五位の檢非違使になされし程に。彼親子飽まで君寵を誇り。その威勢肩を差るものなし。これ併一院の御はからひによるといへども。盛景は朝敵の子孫として。還俗亡命の沙門なり。今はからざる富貴を得たる事。すべて惟房の庇によれば。忽地先非を悔て。彼人の爲には。よく誠心を竭すべきに。さはなくして。いぬるころ龜鞠が。松稚丸に恥しめ懲されたるを含て。親子竊に志を合し。惟房一家を滅して。その所領さへ押奪んと謀りぬ。寔に貌は人にして。心は獸にも劣れりといふべし。こゝに又松井源五純則は。當初群相を欺き殺せしころより。惟房も彼はたのもしげなしとおぼして。そのちはたえて用給はず。あれどもなきがごとくなるを。源五はふかく恨みて。密に野心を挾みながら。相語べき人もなかりし程に。數年黙止して色にも出さざりけるに。龜鞠の父平九郎判官盛景は。行盛の遺腹子。行稚丸なることをもしり。又彼親子が。院の御おぼえ他に異にして。よろづおのが隨なるを見てふかく歡び。をりゝ彼家に交加て阿諛ひ。何事にまれ。心くまなく聞え給へ。命にかけてうけ給はり候べしとて。いと眞實やかに聞ゆるに。盛景も心にもあれば。こはよきわが方人なりと思ひて。厚く款待し。いつも閑談夜をこめて立わかるゝを。人さらにしらざりける。今茲は既に暮てあら玉の春立かへり。四辻殿には。院の拜禮。朝觀の行幸などよろづめでたくとり行せ給ふにも。龜鞠はその形勢。后妃にも劣らねば。愚なるは羨み賢きは歎きぬ。惟房朝臣いと淺ましく覺て。しばゝ諫奉れども。一院たえて用給はず。龜鞠又この序をもて。彼人をあしさまに申すによりて。いよゝ疎果給ひて。君寵忽地に衰たり。惟房朝臣は。諫言容られざるをもて。こゝろ爵々としたのしませず。ある日御所より退りて。只顧に嘆息し。われはじめ亡父の志に悖り。且君命に違はんことをおそれて。龜鞠を進らせたるは。一生涯の過なり。縦今に至りて彼親子が素生を申あかすとも。一院既に龜鞠が舌頭に惑されておはしませば。實言とは聞召べからず。嗚

呼悲きかな。世の中これより亂れんには。みな惟房が罪なり。所詮龜鞠が命を断て。天下の禍を除き。われ又自害せんにはと。既に心を定め。その夜人定て。心中の機密。なき後の事をさへ審にかい寫め。詰朝松稚丸に宣ひけるは。われこのごろは公務に暇なくて。久しく月林寺の阿闍梨を訪ず。又梅稚か安否を聞ねば。御身けふ叡山に登りて。この一封を阿闍梨に進らせ候へと仰すれば。松稚丸ころを得て。父の書簡を受とり。従者をばいと奪して。やがて比叡に赴き給ふ。惟房今は心易しとおぼして。恩賜の寶劍夕告を懐にかくしもち。衣冠嚴に装て出たまふ。松井源五太刀を持って後方に従ひ。廊下を過る折しも。怪しいかな主君の袖の中にて。鶏一聲鳴にけり。かくて惟房參内し給ふの後。源五つくく思ふやう。彼夕告の寶劍は。そのぬし殺氣あるときは。鞆の金鶏聲を發すると傳へ聞たるに。今主の懐にて。鶏の鳴るこそ不審けれ。察するところ龜鞠殿父子の威勢を妬狷。潜に刺殺さんとて。かの劍を懐にしたるもの歟。よしさなくとも兵双をかくしもちて院參せば。弑逆の罪いかでか脱ん。生平にまづ參内して。後に院の御所へ參らるべし。いまだ事を發せざる以前に。はやく彼人にしらすべしとて。遽しく縁由を書寫め。心しりたる下郎にもたして。赤石平九郎判官盛景が第へ遣すに。盛景は四辻殿へ參る途にて源五が使に行あひ。馬上にその書を披き見つ。或は驚き或は歡び。彼使をばこより歸らせ。鞭を鳴らし足掻をはやめて。直に一院の御所に參り。源五が密書をもて。首尾を龜鞠にしられば。龜鞠はわが怨を復すべき時到了とてこゝろに笑て。やがて院の玉座ちかう參りて。潸然と落涙し。誠やらん吉田少將惟房日來龜鞠父子が君痛他に超たるを妬狷み。けふしも短刀を懐にして。妾を殺さんと謀ぬるよし。人ありて告侍りぬ。君の爲に捨つべき命なりせば。つゆばかりも惜に足らねど。懟に人の恨に因て。君を驚し奉らんは。罪いとふかし。只速に身の暇をたまはりて。軒漏月を友とせし。舊の住家にかへさせ給へかしと申もあへず。よと泣て轉帳ば。一院ふかく驚給ひて。こは奇怪なり。惟房刀劍をかくしもちて院參せば。問ずして逆心明白なり。忽にすべからずと宣ひしが。殊に御怒の色見えて。赤石平九郎判官盛

景に。謀を仰せられ。專非常に備はし給ふ。惟房朝臣は機密の漏たるをしり給はねば。朝より退りて。四辻の御所に參り。南面なる孫廂の下に立在て。后町のかたを窺給ふに。時ならずして鶏の聲しばくす。龜鞠はこれを聞て。なほその氣色をあらはさせん爲に。何氣なきおもちして。袖に一面の琵琶を抱き。端ちかう立出るを。惟房は翠簾をさとかき揚つゝ走り入り。夕告の劍を抜挿頭して跳かれば。龜鞠はやく手にもてる。琵琶を磔と投つくるを。物ともせず切拂ふに。四の緒かけて一刀に。琵琶は左右へ飛散たり。その隙に。龜鞠は奥ふかく走り躲るを。なほ討留んとてふり揚る劍の下に。盛景つと走よせて。矢庭に組伏んとするを。身を潜めて投退たり。時に合圖や定めけん。北面西面の勇士。物の蔭より走り出。右より左より組留てわれ生拘らんと闘ば。惟房朝臣遂に志を遂がたきを見て。喟然として長嘆し。むかし伯邑考。妲己を罵りて。醜の刑にあへり。恨らくは君を聖王になし奉ることあたはず。忠心却て死後に逆臣の汚名をのこさんことをといひもあへず劍を吭に衝たて。組れたるまゝに死し給ふ。時に承久二年二月八日。行年四十歳と聞えし。この時一院は。事の形勢を聞食てますく怒らせ給ひ惟房衛府の重職にありながら。御所に於て劍戟をふるふこと。古今未曾有の椿事悪虐和漢に例すくなし。はやく彼が妻子を擄捕て進らすべきよしを平九郎判官盛景に仰するにぞ。盛景時を移さす使の廳の官人夥を將て。北白川へ馳むかふ。かくて後一院は夕告の短刀を更めて龜鞠に給はり。この鞆の鶏しばく聲を發せしをもて。汝が身に恙なき事を得たり。故に賜る所なりと宣すれば。龜鞠は君恩を拜謝して。いと面目を施しけり。

後鳥羽院の第一の御子。土御門院は。いぬる承元四年に位を御弟皇子守仁王に傳給ひぬ。順徳院これなり。よりて後鳥羽院を一院と稱奉り土御門院を新院と申せしなり。

墨田川梅柳新書 卷之四

東都 曲亭 主人 著

十 天狗石を飛して松稚を救ふ

少將惟房討れ給ひし事いまだ聞えねば。斑女前は粟津六郎勝久と春雨の老女を呼つどへて。端ちかき立出。色妙に香濃やかなる庭の紅梅を。いとおもしろうながめ給ふ折しも。田中八郎とかいふ壯士。袍の袖を引断離られ。烏帽子も打おとされて。大わらはになりたるが。庭門より走り入り。縁づらに衝と参りて。喘ぎくまうすやう。さても殿には。恩賜の御劔を。懐にして一院の御所へ参り給ひ。潜に龜鞠殿を刺んとし給ひけるに。機密忽地に漏たりけん。赤石平九郎判官盛景。豫て力士を帷幕の蔭にかくし置。矢庭に討とり候ひぬ。この事はやく聞えし程に。御供なりけるものども大に驚き。とせんかくせんと周章す。時に使の廳の官人四方よりとり圍み。惟房が家隸を脱すなと呼はりて。既に搦捕らんと闘く。さる程に。志ある徒は。奪撃突戦して主とともに屍を曝し。下郎は逃るもあり。又おめおめと生拘らるゝもあり。それがしはこの事をしらせまめらせんために。からうじて脱れ来れりと告もをはらざるに。衆皆こはいかにとおどろき執掌斑女前は痞さへ發りて撲地と倒給ふ。春雨遽しく扶起し。且諫且勵して。さまざまに勦り進らせけり。そのとき粟津六郎膝すゝめ。近曾一院羽。龜鞠殿に迷されおはしまして。非道の御行ひいと多かるを。殿のしばし苦諫し給ふ事は。粗人のしるところなり。しかるに殿には。嚮に院宣によつて。叔姪の義を結び。龜鞠殿を四辻の御所に進らせ給ふ事。元來その志にあらず。加之彼婦人の父。赤石平九郎判官は。斑女御前の舎兄。行稚丸なり。この人むかし月林寺を逐電し。還俗して仁科平九郎と名告りぬ殿にもはやくその人とは知召せども。明白にいふときは。父の志を破るに似たり。云ざるときは君を欺が如し。遮莫盛景先非を悔て舊の沙彌とならば。いたく憎べきにあらず。思ふ仔細あれば。彼が行稚なる事を。斑女にもしらすべからずと宣ひき。僕つらく殿の胸臆を察し奉るに。かゝる悪縁に繋れし。彼父子が世を亂さん。見つゝ居らんは不忠なり。所詮龜鞠殿を殺して。禍の根を断ばやと思ひ詰給ひたらんに。孤忠徒事となりて。却て朝敵逆臣の汚名をとどめ給はんは。かへすくも朽をしとて。齒を切て拳を握かため。遺恨に堪はず見えければ。斑女前も春雨も。はじめて聞る少將の。仇は兄とも古主とも。しらで過なばなかくに。身を恨るまでの歎はせじ。こはゆくりなし浅ましとて。夢とも更にわきまへず。斑女前は殊さらに。恩に背き義にたがふ。悪人の妹をも。妻としめぐみ給ひぬる。忝さを思ふ程。面目なきはこの身なり。今はとて手ぢかなる。護身刀を引抜て。自害せんとし給ふを。六郎春雨左右より押とどめ。こは物や狂ひ給ふ。今朝しも叡山へ。松稚君を登し給へるは。殿のおもひ給ふ所あればなるべし。しかれば阿闍梨へ寄せたまふ御書の中に。後の事なども。書遺し給ふかとおぼし。もし恩義の重きを顧給はゞ。松稚梅稚の先途をも見とゞけ。亡君の汚名を雪んとはおぼさずやとさましく諫こしらへ。やがて刀をとりかくせば。さてはなほ死するにも死れずとて。いようち泣給ひける。浩處に金鼓遙に響き。外面囂塵と應劇し。粟津六郎耳を側て。討手の軍兵はや近づくとおぼえたり。一天の君に對たてまつりて。弓を引べきやうはあらねど。しばし禍を避んが爲なり。それがし殿いたすべし。春雨は斑女御前の御供して。近江のかたへ落られよ。といそがしつゝ袴のそば高く引折て。縁づらに立出。田中八郎に對つていへりけるは。御邊必死を脱れて。火急の難義を告申す事。賞するにあまりあり。只今討手のむかふかとおぼゆるに。見て來給へと指揮すれば。承ると應もあへず。走り出んとする庭門より。矢一ツ來つて八郎が鳩尾骨摧て兵と立ば。挫と倒れて息たえたり。吐嗟と驚く主従が猶豫して進みかねたる處に。松井源五純則。十王頭

の驕當に膝鎧懸て。夥の壯者を引卒し。弓矢携真先にすゝみ入り。朝敵の家隸と呼ばれて。首を木の杓に曝ぐれんより。はと思ひかへし。官軍を俟ずして。われまづこゝに向ふたり。既に家中の老弱。われに與みするは宿し。背くは悉く殺せり。やをれ六郎。命惜くば降参して。斑女前をとく遞せ。みづから迷はゞ後悔せん。いかにやいかにと呼ばば。粟津六郎勃然として大に怒り。その祿を食てその家を斃す。隴戸の鼠輩。烏合の兇賊。縦稻麻竹葦にとり巻とも。いかでか六郎を搦得ん。殿の本意を遂給はざりしも。汝が内通しつるにこそ。天罰思ひしらすめと罵りて。二尺八寸氷なす太刀を抜かざし。群ひかへし眞中へ。會釋もなく切て懸れば。春雨もかひくしく。長押に掛たる長刀引提。面もふらず挑み戦ふ。忠臣義女の刀尖に。源五忽地辟易し。一崩に逃走る。春雨は逃るを追ず。引かへして。遠しく重器路銀などを一包として腰に著れば。斑女前も一面の鏡を取て袖に抱き。主従もろともに。後門より走り出。行こといまだいくばくならず。只見れば一員の大將。八十騎の士卒を將て。飛が似に馳來たり。件の大將斑女前と見るとやがて。馬に拍れて路を横ぎり。惟房逆心によつて四辻殿を開し奉りしかば。立地に誅せられ。その妻子を搦來れよと仰を承。赤石判官發向せり。正に是喪家の狗網裏の魚。逃ともいづ地までか逃すべき。とく縛を受よとぞ呼はりける。斑女前も春雨も。絶てあはざることを増歎。行稚丸かと思ふにも。いと怨はいやまして。一言の回答に及ず。なか／＼に必死を究め。立向んとする處に。粟津六郎勝久。驀直に走り來つ。こゝはそれがしにうち任せ。白川の山越して。東のかたへ落給へ。といひもをはらず。太刀閃して。大勢の眞中へ巴の字十文字に懸散し。西を打て。東を靡け。蒐拔々々切立る。その隙に春雨は。斑女前を扶掖き。山路を望て落延けり。盛景これを見て大に焦燥。あれ討とめよと叫べども。粟津六郎只一人の太刀風に。夥の軍兵うち靡き。小松生たる丘の上に。むら／＼と逸登れば。盛景も力及ばず。終に彼處に退きぬ。六郎元より深入せず。松稚梅稚の事いと心もとなければ。やがて雲母越を投て引てゆく。盛景は彼を討もらしては。後難量がたしといきまき。馬の頭を立なほすを。しばし／＼と呼かけて。松井

源五純則同志の朋輩を領て出來り。惟房が二男梅稚は。去年より叡山月林寺にあり。又嫡子松稚は。今朝父の使して。彼山に到れり。こは惟房豫て後の事をおもひばかり。子どもを遠く落さんと計較なるべし。もしそれがしに士卒をわかちて授給はゞ。東の果までも追懸て。搦進らせんこといと易かりなん。それがし向に斑女粟津六郎等を生拘へかりしに。手勢多からねば心ならず走らせたり。曲て源五が申す旨に任せ給へといふ。盛景聞て莞爾とうち笑み。寔に汝が今度の働き。感ずるに堪たり。人窮ときは却て猛く。獸窮ときは嚙んとす。かならずしも小敵と見て蔑ることなかれ。これは是わが秘藏の短刀なるを。汝が豫てしるところなり。且くこれを預くべし。松稚梅稚なほ大君の御威徳に伏さずして敵するならば。これをもて首かきおとし。首級を洛へ登せよ。われ亦諸國へ屬托して。者奴等がゆくへを驅とめん。努懈ることなかれと説をはりて。自他平等即身成佛の短刀と。四五十人の士卒をわかちて授れば。源五は欣然として領掌し。短刀をとつて腰に服。近江路を追ゆけば。盛景は惟房の館を燒拂はせまづ事の爲體を申さんとて。四辻の御所へまゐりける。この日松稚丸は。父の使して叡山月林寺に到り給ふに。折しも仲圓阿闍梨は西谷へゆきていまだ歸り給はずと聞えし程に。やがて梅稚丸の子舎に入て互に恙なきをよろこび聞え。四表八表の物がたりして待給ふに。やうやく申の刻過て阿闍梨歸り給ひければ。松稚は梅稚に引れて阿闍梨に謁し。父の言語を述。書簡をとり出で進らせ給ふを。阿闍梨すなはち文箱を開き。卦皮押斷て見給へば。おもひもかけぬ遺書にて。盛景龜翰の事。又みづから思ひ定たる一件の事を書寫し。もし本意を遂ることなくば。いよく黒白を申ものなく。わが一族をも誅せられ佞臣ます／＼時を得て。世の危き事鶏卵を累るがごとけん。奥州は。むかし惟房が三年の任に。恩顧の國人なきにしもあらず。子どもらは一且の難を避潜に陸奥へ下りて國人をたのみ。もし世の中亂れて。君の御大事に及ぶことあらば。いそぎ洛へ上て。死をもて忠を盡し。その叙を得ば。父が孤忠を聞えあげて。勅免を蒙り給へ。その餘の事は。偏に阿闍梨の憐愍を仰ぎ奉ると書給ひければ。こはそもいかにとうち驚き。件の遺書を。被兄弟に見せ

給へば。松稚梅稚かはるゝに讀くだち。周章大かたならざりけり。そのとき松稚は。梅稚に對ひて。阿闍梨坐ざりしかば。かく時刻も後れ。今は、や白川へ討手の向ひつらめと覺れば。母の事いよ、心もとなし。われは走かへりて母御を救ひ進らすべう思ふなり。御身はわが從者を將て。とく落給へと宣へば梅稚聞もあへず。こは兄上の仰とおぼえず。死るとも活るとも。兄弟もろともにとこそ思へ。なぞ梅稚をも伴んとは聞え給はざる恨み給ふを。松稚頭をうちふりて。兄弟もろとも死地に入らん事は。謀の拙きに似たり。殊さら御身は軟弱にして武の道に疎し。強てゆかんとするは却て不幸なりとて。わりなくとめ。既に走り去らんとし給へば。阿闍梨は頻にその勇敢を稱讚し。やよ松稚。下郎一人は残しおくとも。二人の家隸は將てゆき候へ。汝ひとり放ちやらんは。われも又胸くるしと宣はするに。松稚これを固辭がたく。かひくしげに打扮て。はじめ將て來給ひたる二人の家隸をいそがしつゝ。山を走下り給ひけり。この二人の家隸は。鹽屋藤三。大野小七郎と呼ばれて。おぼえあるものなり。惟房朝臣。後の事をおぼして。この二人に供させ。松稚を觀山へ登し給ひたりとぞ。さても粟津六郎は松稚主從下山の後へ走參りて。阿闍梨梅稚に見え。惟房一院の御所にて討れ給ひし事。家中の壯士等松井源五に語はれて。主を討んとしつる事。赤石判官盛景。討手として馳向ひ。白川の館を放火し。亦斑女前は。春雨に扶掖れて。東のかたへ落給へる本末を。審にせしかば。阿闍梨はさらなり。梅稚は父の横死をかなしび。六郎が精忠を賞嘆しさて宣ふやう。阿闍梨西谷へ赴きて。歸り給ふ事の晩かりし程に。父の遺書を。今少し前に披見して。はじめて事の難義をしりぬ。又家兄君は。母の事。心もとなしとて。藤三小七郎を將て。洛へ走かへり給ひしと物がたりて。件の遺書を見せ給へば。粟津六郎は讀もあへず不覺に落涙し。それがしこゝへ參る事の早かりせば。松稚君を洛へは歸し奉らざるべきに。今は追ともかひあらじ。既に志賀の方には。討手の大勢うち出たらんか。しからば松稚丸は引かへして。美濃路へ走り給ふなるべし。とかく猶豫すべきにあらず。とて出させ給へと申しつゝ。主從もろとも草鞋穿しめて。仲間阿闍梨に別を告

笠を深し裳を引折。その日の黄昏に山を下るに。松稚の残しおき給へる下郎は。緣由を聞て驚き恐れ。いづ地ともなく逃うせたり。粟津六郎この景迹を見て。彼等もありとも。愁に足纏ひなり。只斑女御前松稚君こそおぼつかなけれ。誘給へ追つき參らせんといそがし立。梅稚を勦り引て。湖水を北へ走たりける。さても松稚丸は。鹽屋藤三。大野小七郎を將て。志賀のかたへ赴き給ふに。日もや、暮なんとして。一叢くらき茂林の中より。松井源五純則 夥の兵を引て。ゆくべき路を遮り留め。松稚丸よく聞給へ。惟房逆心によつて。誅伏しし給へる事。是非に及ばず。それがし幸に赤石判官の庇を得て朝敵餘類の汚名を脱れ。迎まうさん爲にこゝへ來れり古主の好みに。首をば纏てまゐらせん。とくとく參り給へと呼れば。松稚奮然として大に怒り。不忠の匹夫。主を賣て榮利をはからはんとすとも。天いかでか恕べき。さらば思ひしらせんと罵りて。太刀引拔て懸入り給へば。小七郎藤三も主に後れじともろともに。鶴翼魚鱗に列たる多勢が中へ割て入り。嘯叫て戦ふたり。源五が大勢に比れば。九牛が一毛なる主從三人。志は勇しといへども輒く切脱んやうもあらず。とかくして松稚は一方を切ひらき。つと走り抜て見かへり給へば。藤三小七郎は討れたり。こゝにて死んは父の志を空うするなりと思ひかへして。湖水のかたへ走り給ふを。敵透間もなく追蒐て。既に危く見え給ふ。こゝに比叡が辻に道祖神あり。この日二月某日祭禮の宵宮なりとて。赤塚下坂本の里人等。おもひおもひの裝束して。日の暮るゝを俟あはし。只今神輿を假屋へ擡出さんとする折しもあれ。松稚を逃すなど。聲々に罵りて。夥の兵矢を射かくること。比叡山おろしに辛崎の雨吹拂ふに異ならねば。里人等驚き恐れ。神輿を捨て逃うせけり。松稚は左右の手に二振の太刀を抜もちて。射る矢を切はらひく。透を見て腹を切らんと思ひ給ふに。事急にして便を得ず吐嗟只今討れ給ふべう見えたる處に。神木とおぼしくて。社頭にいくとせか經りたる杉の梢より。はらくと礫を打かくる事蟲の飛がごとく。忽地物ありて飛下るを見れば。面は夜叉のごとくにして鼻高く。全體金色に光りわたりたるが。手に長き鉾を引提。討手の兵を四角八面に薙たつる。その勢彙然として。更に當るべから

ず源五はいふもさらなり。兵士ども大に恐れこは疑ふべうもあらぬ比良が獄の天狗なめり。この杉には彼君のをりをり憩ふと聞えたり。天狗磔に打斃され。可憐命うしなふなと罵あひ。われ先に逃んとするに。足元暗して株に跌き。われとわが奴に身を撃き或は途をうしなふて。湖水に落るものもあり。見ぐるしかりける形勢なり。さる程に討手の兵。遠く逃去しかば。松稚は不思議に必死を脱れ。彼妖怪にすゝみ對ひて。そも御身は鬼か神か何の因縁ありて。松稚を救ひ給ひしと宣へば。彼もの纏て。ほとりちかう來つゝ。假面をかい遣り捨るを見れば。妖怪にあらず。年紀四十あまりにして。身丈高く。筋骨いと逞き男なれば。いよく不審み給ふに。この男なほ近くついゐて申すやう。それがしは赤塚の商人にて。軍介と呼ぶものなり。この十五六年のむかし。わが妹に鳩崎と申すもの。御館に給事いたせしころ。傍輩の壯俊。山田三郎と密通し。事發覺て男女もろともに殺さるべかりしを。御母公斑女御前憐みおぼし。密に一包の金を賜りて。二人もろともに落さし給ひぬ。よて鳩崎は山田三郎と共に赤塚に來たるといへども。それがし又其不義を責てよせ著ず。彼等今は東のかたに住ひて。鳩崎が産る子も。年來になりぬるよし。風の便に聞えたり。わが身は民間に人となれども。いと弱きより。義に仗ては財を輕んじ。恩を報ずるに死をだも辭せず。折あらば吉田の家に一臂の力を竭し妹が再生の恩に答奉らんとは思ひながら。館へ出入る身にあらねば。心ならずも夥の年月を過し候ひき。しかるに今宵縁故はしらず。忽地。松稚丸を逃すなと呼はりて。夥の兵類に矢を射かけ。君危く見え給ふ。このときそれがし思ふやう。松稚丸と聞えしは。恩高き吉田家の稚君なり。さらばとて救ひ進らせんとするに。里人等恐怖て逃走れば。これを相語に及ばず。幸なるかな。當社神事の宵宮にて。神輿を出したてまつる。それがし郷導の役に當りて。猿田彦に打扮てり。加之。この杉をむかしより。天狗の憩處といひもて傳れば。彼是早速に思ひよせて。潜に件の樹に攀登り。天狗と見せて這奴等に膽を冷さし。終に危きを救ふて。はからずも年來の志をいたせり。家には妻もあり女兒もありて。みな心さま信々しきものなり。誘給へ。伴ひ進らせんといふ。松稚は

情由を聞て。感激斜ならず。鳩崎が事は。わがや、跋做ふころなれど。母の物がたりにてよくその事をしりぬ。われ今家壞れ父誅せられて。身をよすべき處なしと雖。この邊は洛ちかくして。世を潜に便よからず。且汝が家を係累せば。妻子の歎も痛し。われは只獨行して。母と弟に索あふべくおもふなりと宣へば。軍介はじめて。惟房朝臣滅亡の事をしりて大に驚き。しからば船にめされて。先品村一里の外にあり。へ赴き給へ。もし討手ふたゝび來らば。そのたびは逃れがたし。幸汀に一艘の小ぶねあり。それがし棹をとつて渡しまらせ。何國にもあれ。留り給はんところまで。御供つかまつるべしとて。信々しく聞ゆれど。松稚は。つや／＼これを諾給はず。汝今宵家にしらせずして遠く去らば。妻女兒がいかばかりか心くるしく思ふらめ。我苟も身を脱れんとて。人の妻子を苦しめんやとは宣へば。軍介器をふり立て。それがし縦半年一箇月。家にあらずとも。妻女兒が立地に。餓て死ぬるものかは。家を離れ妻子を顧ざるも。義のおもむく所あればなり。などて女々しき事を宣はするぞと焦燥て。わりなく船に乗しまらせ。みづから楫を取て漕だせし程に。その夜の亥の刻といふに。栗本郡なる。品村に着きにけり。夫伎倆たま／＼等きことありといへども。その爲ところによつて。善惡迭に異なり。昔松井源五が。群柏を殺して。これを天狗に托せしは欲なり。今赤塚の軍介が松稚を救ふに。又これを天狗に托するは剛なり。嗚呼彼を魔とせんや。是を魔とせんや。剛と欲とは相似て心を用ふる事同じからず。譬ば附子の大毒なるも。症にしたがつて用ふるときは。寒濕の聖藥とするが如し。瞑眩回陽に。至てその能毒をしるべし。

十一 春雨厚澤野に山客と戦ふ

さても梅稚丸は。栗津六郎に扶掖れ。美濃路を投て走り給ひしが。途にて母公兄君にゆきあひまらせんとて。或は急に走り。或は緩に走り。こゝかしこに逗留し給ひし程に。彌生の上旬に至て。やうやく武藏國まで來給ひけ

り。ある日の曠野に。戸田河といふ大河を打わたり。曠野のすまなる古墳の邊を過りたまふに。墳の蔭に一ツの狐ありて。人の如く坐し。物の本を讀居たり。粟津六郎これを見て。こは怪有なる奴かな。いでや走らして路の疲勞を慰めまゐらせんといひもあへず。石をかき拾ひてばら／＼と打かくれば。狐はいたくおどろき嚇て迹なく逃亡。跡には彼の冊子のみ残りける。六郎これを取て見るに。夥人の名を寫し。朱を以て點を引たるもあれば。いよ、怪み。やがて梅雅に見せまゐらするに梅雅も又そのこゝろを曉り給はず。後のかたり種ともなるべきものなりとて。これを懐に挟め。この夜は平尾の郷稍盡所なる家に宿りを徴給ふに。主人の男はやく粟津六郎を見て。こは勝久にあらずや。よくも來給ひたる。まづ裡に入らせ給へといひつゝさし出す燈にて。六郎其人を見るに。山田三郎光政なれば。且驚き且歡び。門方に立任給へる。梅雅丸にもかゝるのよしを聞えまゐらする間に。鳩崎も走り出。やがて主従二人を奥まりたる座敷に請じまゐらせけり。そのとき粟津六郎は。山田三郎を近く招てはからざる對面を歡び聞え。さて惟房朝臣滅亡の事を物がたり。又俱しまゐらせたる梅雅丸は梅雅丸にて坐する事。斑女御前松雅丸の事。奥州下向の事など。首尾を密語にぞ。光政は思ひしより。梅雅のおとなび給へるを見奉るにも。深く君家の滅亡をうち歎けば。鳩崎も蒸襖のこなたにて。縁由をもれ聞。女兒玉柳を呼て。光政が後方に居ならび。夫婦もろともに申すやう。身の過を今さらに。申さんも面ふせなれど。それがし等弱かりしとき。色に耽りし越度によつて。既に罪せらるべきを。斑女御前のいとをしみ深く。母春雨が誠忠を思し召出されて。助がたきを脱さし給へば。ゆく末遠き東路の羽生の小屋に住居して。里の壯俊に。劍法を教などするを生活とし。はやくもこゝに十とせあまり五年の春をむかへたり。又是なる未通女は。むかし鳩崎が。御館にありしとき懐胎たるひとり子にて。名を玉柳と呼びて候。さればかく親と子が。こゝに存命果ん事。みなこれ君の恩澤なれば。君家の事老母の事。日として忘るゝ隙もなく。歸參の願ひ切なれど。罪を贖ふ功もなく。みづからこの身を恨るのみ。しかるに今度不慮の事出來て。殿には誅せられ。兄弟の梅雅丸は

さらなり。斑女御前の御ゆくへを驅索することおぼろげならず。此わたりもいと嚴重なれば。頻に心苦しめて。もし浴にあるべくは。命にかはり進らせて。舊恩を報いたてまつらんと思ふのみにてせんすべをしらず。索奉らんにも御往方定かならねば。ます／＼思ひくしたる折しも。はからずして梅雅丸。わが家に立よらせ給ふ事いまだ君臣の縁結ず。時に稱る面目なり。只願くは身の罪を宥免あつて。奥州下向の御供に召加へ給へかし。しからば且／＼に逗留なし進らせ。しのび／＼に斑女御前松雅丸に索あひ。御母子の再會を計候べしとて。夫婦かはる／＼かき口説て。數行の落涙に及びけり。梅雅丸は彼等が信々しき志を感じおぼし。きのふにけふは事かえて。立よるべき蔭もあらねば。汝夫婦をたのみ思ふところなり。抑叡山を出しより。母と兄とのゆくへをしらず。もし捕れ給はずやおもひやる。わが心うさを察せよと宣へば。光政等いと理におぼえさま／＼慰めまゐらせけり。かくて鳩崎は。女兒玉柳とともに庖厨に到り。夕餐もて出て饗應たてまつれば。粟津六郎は。盛景父子。松井源五が奸惡。又惟房朝臣の書遺し給へる顛末を。あるじ夫婦に説しらすれば。光政も鳩崎も。或は怒り或はうち歎きぬ。さて夕餐も果しかば。光政が申すやう。それがし劍法を教るを生活といたすなれば。日に／＼里の壯俊などの詣來る事繁し。しかるを母屋におきまゐらせんは。憚なきにあらず。彼首の庭を隔て。背門にさ／＼やかなる坐敷あり。この處世を潜給ふに便よし。又それがしは。明日より病ありと偽りて稽古をとゞめ。夜毎に六郎とかはる／＼。斑女御前松雅丸を索ね候べし。もしこの路に來たまはんには。逢奉らざる事あるべからずと申すにぞ。梅雅丸も粟津六郎も。こはしかるべしと引て。この夜より彼別室にうつり住み。斑女松雅を待あはしてもろともに陸奥へ。下るべしと議し給ふ。さる程に朝夕の食事何くれとなく鳩崎玉柳のみ持運して。物乏しからず饗應まゐらするに。玉柳はその年方。梅雅に一ツ劣て。三五の春にはあれど。彼君よりなほおとなび。鶯の子とともに。かゝる田舎の藪蔭には生育ども。訛たる聲音。ふつ／＼かなる擧止もなく。容止も又艶妖なるに。春風時來つては。南枝花開くことはやく。梅雅丸のらうたけて。女子にも勝れる。

姿句やかなるに生ころつきて。たのむの雁の翅に言の葉をかよはし。忍が岡のしのびくんに。ことづてやらん水くきの媒もがなとて。頻に思ひくしながら。さすがにいひよる折もなくて。只徒に心を焦しけり。父の歎きは異にして。晝は鳩崎を漫行させ。夜はみつから彼此を徘徊して。斑女松稚にゆきあひまらせんといたせども。たえて音づれだに聞こえなければ。もし走り過やし給ひけん。又擒れやし給ふ。と思ふに安き心もあらず。このとき斑女前は。春雨に介抱せられ。果しなき東路の岐岨に消やらぬ雪を寒み。山河の音かしましき。旅の宿りの寢覺々々に。亡夫のこしかた。愛子の行すゑを思ひつゞけ。涙にいと朽まさる。袖は人目を裏にかひなく。わが子は後か先かとして。こゝの山本彼處の樹蔭に立在給へば。思ひのほか日數程ふりて。彌生中の四日といふに。武藏國戸田川の南なる厚澤野邊を過り給へば。日も既に暮て。人迹稀なる松原に。野臥十人ばかり。野火焚て團坐したるが。彼主従を見て私語あひ。忽地はらくと走り出て遮り留。斑女前の笠の内を。會釋もなくさし覗き。こは艶麗ころ女子かな。としこそ少し長まされ。賣らばなほよき價得つべし。誘給へとて左右より。わりなくその手をとらんとするを。春雨押隔て寄せもつけず。こは狼藉なり。女子と思ひ侮りて。後悔せそといきまけば。野臥とも輾然とうち笑ひ。この老女頭は多かれの尾花を執。腰は案山子の弓を張れど。口は猛くもほざいたり。者奴願引裂て。息の根とめよと罵て。むらむらと走り懸るを。春雨は刀を閃りと拔て。前にすゝみし荒男の。諸膝難て切たふせば。こは思ひの外手剛き奴かな。われ打ふせんとどよめくを。春雨は物ともせず。右に柱左に支。命を限りに戦ひけり。梟雄無敵の野臥等も。輒く捷を取がたくて。二三人引わかれ。手毎に野火の焚さしを投かくれば。その火芝生に飛散りて。夜風のまに／＼發と燃たち。頻に此方に吹つくれば。春雨今は防難。斑女前も裳を焼れて。足の踏べき處もなく。只顧軟堂給ひしが。倍と心づく事ありて。遽しく懷より松梅の鏡をとり出し。野火に向て擲給へば。時しもあれ岩間の石湧。決然として潰り。やがてその火を滅とめたり。夫鏡はこれを月に象る。月はこれ大陰の精なり。今明鏡の徳をもて。暫時に猛

火を防ぐこと。實に奇なりといひつべし。春雨はこれに。矢庭に二三人を切たふすといへども。その身も又夥深手を負ひ。勢竭て轉輾ば。一人の野臥その刀を奪へて。胸さか刺んとする處に。誰とはしらず松の樹蔭より打出す手裏劍に。彼賊鳩尾骨を打ぬかれて。仰さまに斃れけり。悪徒等これに舌を掉ひ。駭然としてすゝみ得ず。時に一人の武士。刀を引提て樹間より跳り出。盜賊逃ることなかれと呼はりて。忽地三人に手を負し。一人を切て兩段となす。その刀尖電光のごとく閃きて。更に當べうもあらねど。殘る野臥ども。逃とも逃さじと思ひたえて。已ことを得ず打てかゝるを。彼武士は。只鎌もて草を薙がごとく。或ひは切伏せ或は薙仆し。一人も殘さず討とめたり。この人はこれ別人にあらず。山田三郎光政なり。件の光政。慌しく刀の血を拭ひをさめて。春雨を抱起し。やよ母御。母御喃。三郎にて候ぞ。疵はいと淺し。いかに心はつき給ひたるかと呼び活れば。春雨活と眼をひらき。狼狽たりや光政。斑女御前彼處に坐せり。とく勦りまゐらせて。身の罪を贖はんとは思はず。死なん／＼とするこの母を勦りて何にかする。年は闕ても愚さは。昔にかはらざりけりと。わが子を勵す怒の聲に。痰口より／＼と流る。鮮血は泉に異ならず。斑女前は思ひもかけず。山田三郎が來たるを見そなはして。歡び給ふ事斜ならず。めづらしや光政。汝不思議に主を救ひ。母の仇その處を去らずして討とる事。前の罪を贖ふに足れり。われ少將にかはりまゐらせて。今ぞ汝を免すなる。まづわが事は心とせず。春雨を勦りてよ。やよ春雨。心持はいかにと問給へば。春雨は只掌をうちあはしつゝ。不覺に落涙し。わが子御免を蒙りて。こゝより傳きまゐらんには。春雨が生であるに勝るべし。とく光政を召俱せられ。彼が家に赴き給へ。光政何とて躊躇ぞ。誘引まゐらせよといそがせば。山田三郎は。絶て久しき斑女前に。見え奉るうれしさと。母の深手の悲しさに。臉をかき拭ひつゝ申すやう。それがし等この年來こゝより程近き平尾の郷に住居て。親子三人僅に口を餬のみ。しかるにいぬる日梅稚丸。粟津六郎を將て入らせ給へば。あまりに忝くて。ふかくしのばし。なほ斑女御前松稚丸に逢奉らん爲に。夜毎に彼此を徘徊しつるかひありて。一ツの望

は遂ながら。來ることの遅からずば。母をいかでか撃すべき。思へば遺憾けれど。只顧に悔歎き。又母の耳に口を寄せて。誘わが肩にかゝり給へ。家に伴ひまゐらせんといはせもあへず。春雨忽地頭を擡。やをれ光政。家まで生てゆくべしとも。おぼえぬ母を伴んとて。主君を等閑にいたしなば重き科を免されたるかひあらんや。嚮に梅稚丸。汝が家に入らせ給ひぬとかしからば只心もとなきは。松稚君の御ゆくへなり。汝夫婦心を竭して索あひまゐらせ斑女御前の御心をやすめよ。いふべきは是のみなり。いでわが手療治するを見よといひもをはず。刀を咽喉に突立つ。うつぶしになりて死にけり。山田三郎は。哀傷やるかたなけれど。母の遺言に勵され。齒を切りて寄りもそはず。斑女前も稚きより。かき抱れしこの身なれば。母とも思ひつるものを。定なき世のたゞすまひに。武藏の果なる路傍の草葉の露と消ぬるが。いと惜しとて泣給ふ。されば外にも無常を告る。遠き寺々の鐘の數かゝなへ見れば子の刻なり。かくて山田三郎は。母の屍をしばしも置ば。惡獸に傷られんことを愁ひ。なくく滅殘る野火をかき集て。一片の烟となし。斑女前もろともに。念佛數遍唱つ。家路に誘引奉れば。斑女前は彼鏡を拾ひとつて。光政を見かへり。汝もしれる二面の鏡は。いぬる年。兄弟の子どもにわかちとらせよと。古殿の仰せしかば。梅稚には一面を與へて叡山に登し。この一面は松稚に與へしを。わが身落を落るとき。袖に抱きて出たりしが。もしこの鏡なかりせば。終に焼れて亡なるとて。鏡をもて野火を防ぎとめし事を物がたり給ふに。光政ふかく感激し。彼日本武尊の故事など申出で。や、蓮村のほとりまで來る折しも。松井源五純則。夥の兵をもて。猛に八方よりとり巻ば。光政はさほぎたる氣色もなく。頭をめぐらして倍と見れば。おのく弓に矢を刺て。すはといはど射てとらんと構たり。時に源五聲をふり立。光政われを認めりや。われ今度廷尉盛景ぬしの代官として。關東に下向し。惟房の妻子を驅索るなれば。更にむかしの源五にあらず。しかるに頃日梅稚主従を汝が家に舍藏こと。しる人あつて訴るをもて。今夜行むかつて擲捕らんとする處に。はからずして斑女前をこゝに見こと。虎を狩らんとしてまづ兎を得たるが如し。汝異議なく斑

女を遞し。又嚮導して梅稚主従を擲捕せなば。この矢前をゆるすべし。心を定めて回答せよと呼ばれば。斑女前はいふもさらなり光政はその暴虐を惡視て。憤に堪ざれども。夥の矢面に立たれば。進退こゝに窮て。いかにともせんすべなし。さもあらばあれ逃るゝだけは逃れて見ばやと思ひかへし。詭ていへりけるは。王事盡ことなし。誰か身を捨て朝敵に與すべき。一旦古主の恩義に黙止がたくて。今こゝに及べり。しかれば梅稚主従を出さん事。仔細あるべからず。さはいへ栗津六郎は。萬夫無當の勇士なり。今斑女御前を伴ひかへりて。いよ二なき志を示さば。彼ますく心を放さん歟。その油斷を見すまして。擲捕るとも。もし手にあはずば。おのく首打おとして遞すとも。この二ツのうち違はじ。わが謀略に従ひ給はゞ。一卒をも喪はずして。續は御邊の一人のうへにあらん。いかに承引給ふべきやといふ。源五聞てしばし思案し。汝がいふ所理あり。是斬劔をもて魚を釣の謀なり。しかれども。汝一旦の難を脱れん爲に誑りて。彼等を落し遣べうも量がたし。よてわれはこの大勢をもて。直に出口々々を遠卷にし。その合圖を俟べきぞ。故なく事をなし果さば。古朋輩の好。われも又あしくは報はじ。努憚ることなかれとて。ほこりに説示し。遂に一方を開かすれば。山田三郎は。源五がみづから擲捕んといはざる事は。全く栗津六郎が勇きに怕るゝなめりと猜して。こゝろの中竊に歡び。心安かれ此眞夜中は過すまじ。號笛を吹くを聞かば。事なりぬとしたり給へと應つ。夥の捕人に送られて。斑女御前を伴ひまゐらせ。平尾の郷へ立かへる。嗚呼前門虎を防げ。後門更に狼を進む。山田栗津の兩忠臣。縱獎。嗚が勇。陳平が智ありとも。輒く斑女梅稚の脱れ給ふべうは見えざりけり。

十二 光政平尾郷に妻子を殺す

山田三郎光政は。松井源五が夥の兵に送られ。斑女前を伴ひて。平尾の郷に立歸るに。既に門方ちかくなりしかば。源五はこゝより引わかれて。郷の出口々々を遠巻して。もつはらその合圖をまつ。又粟津六郎勝久は。甲夜に光政ととも宿りを出。巢鴨のかたへゆきていまだ歸らず。これも斑女松稚の往方をしらんが爲なり。光政はまつ裡の容子を張て。門よりは入らず。潜に庭門なる片折戸を押ひらきて。斑女前を誘引まゐらせ。月の影もいと暗き。樹立の間を繞りゆくに。何思ひけん。走りかゝりて。忽地斑女前に手拭はませ。刀の下緒を拔出して。矢場に縛んとすれば。稚女は阿呀と叫んにも聲たゞず。かき拂て走り退んとし給ふに。袷の袖を松の下枝に引とめられ。袖はさらさらと離断つ。懐なる鏡を撲地とおとして轉輾給ふを。起しも立ず。袴々と縛めて。松に楚と繋留。鏡と片袖を拾らひとつて懐に挟つ。梅稚丸の坐します別室のかたへ竊行。光政が胸中更にしるべからず。こゝに亦光政が女兒玉柳は梅稚丸わが家に来給ひつるはじめより。潜に懸想して。思ひ絶る隔はあらねど。さすがに父の主君にてましませば。かしくていひも出さず。下ゆく水を堰かねし。心の猿及なき。月の都人にあくがるゝを。梅稚もいちはやく氣色に曉得て。あはれとやおぼしけん。曠昔の夜。はじめて房門に音づれ給ひしに。あやにくに守人の繋ければ。本意なく歸しまゐらせしが。今宵は父の山田も。粟津六郎も家にあらねば。玉柳甲夜より用意して。その音づれを

待に。寢よとの鐘も更そめて。遺残したる雨戸の隙より。春の月圓にさし入れ。外面に立在人ありけり。玉柳は障子にうつる影を見て。彼君なりとこゝろうれしく。そと起出る折しもあれ。山田三郎は。足を跪息を吞て。梅稚を跟來たり。遺戸の外に躲ひ居たり。とはしらずして玉柳は。音させじとて諸手をかけ。障子をやら引あくれば。梅稚やがて入り給ふを。光政閃と跳懸て。梅稚を取て押。一刀ぐさと刺す。刺れてなほ反覆さんとし給ふを。數回刺程に。やうやくよわり給ひける。玉柳はこれを見て。淺ましくも悲しくて。やよ母御起出給へ。梅稚君の撃れ給ふ。母御母御と叫び泣。聲を限りに呼び立れば。鳩崎慌しく走り來つ。只見れば夫光政は。梅稚丸を刺留て。既に首を刎んとす。吐嗟と驚きつと寄りて。かよわき婦の力にも。思ひ凝たる一生懸命。袖に齧縁拳に噬著。からうじて奪ひとる。刀尖くるひて鳩崎が乳の下ふかく搔切るにぞ。阿呀と叫びて轉輾。妻の苦痛をもとせせず。光政はふたゞび中。刀を引抜き。血に塗れ給ふ梅稚の頭髻を颯と引起すを。玉柳今はと思ひたえ。父の刃にわが袖を。まさかけて握もち。胸のあたりへ衝たて。仆れ苦む形勢に。父も思はず腕離れ。刀放して控と坐す。妻と女兒は漬る。鮮血引せて左右に跛寄り。鳩崎吻とする息の下に。夫を恨しげにうち瞻望。喃光政どの。犬さへ恩はしるものを。心ざし獸にも劣り給へば。とかういはんもかひなければ。利欲に惑ひて主君を殺す。悪人とは思ひかけず。この年來わが郎とて。齊眉る身の朽をしさに。抑むかしは假初に。近江の契仇となり。助かるまじき命なりしを。斑女御前の隣おぼし。密に給ふ一裏のかねには花を散しそと。教諭の歌はわが爲に。聖の書にも勝れりとして。朝暮にいひも出。寢覺にも思ひ出で。夜の衾は挟くとも。洛のかたを後方にせず。われもすまじと宣ひしも。みな虚言にてありけるかな。僕見れば去年に今年は。母御もさこそ老給はめ。わが兄もいかにやあらん。身の過より君と親に。遠離る不忠不孝を。贖ふべき心はなく。鬼々しきも事によれ。とても深手を負給へば。梅稚君の魂緒のいとおぼつかなくはあれど。妻や女兒が面あたり死をもてかくまで諫るを。露ばかりも思ひしりて。理とも聞給はゞ。心の限り勸りまゐら

せ。それにも事たらずば。御亡骸を葬りて。腹切て亡給へ。いひあはさねど玉柳が。健氣に自害し侍るを。あはれとは見給はずや。こはむじんなり浅ましとて。かき口説つゝよと泣ば。玉柳も涙雨のごとくにて。ませたるものとおぼさんが。梅稚君を懸想して。いひよるよすがも愁に。過世に縁にし締けん。彼君よりかよひ路も。やゝ二夜さになりぬれど。人めの關の關守に。打あけても得相語ず。昨夜はあはて歸しまゐらせ。今宵はたまゝ手枕を。ならぶるかひに曉の鶏遅かれと思ふ思ひきや。わが房門にてわが父に。あへなく殺れ給はんとは。一夜を千夜とたのしみし。あふせはなくともおなじ日に。君と冥土へゆくべくは。生て歎をせんよりは。なかゝ嬉しかるべけれど。主を殺せし三郎が女兒とて伴ひ給はずば。親子は元來一世ときく。ひとりや踰ん死出の山に。今より惑ひ侍るなり。妻を殺し子を殺し。誰爲欲に耽り給ふ。よからぬ人のをはり路や。主を内海の故事に。異ならぬ身は終に又。竹の節につらぬかれ。木の抄に梟らるゝ。悪人の女兒といはれなん。わが後の名は惜からで。悪人なる親といはせんが。いと悲しと云聲の細るにもなほよねりゆく。母は悲歎に堪かねて。肢體をしぼる紅の涙に鮮血もいやましたり。光政はつくんと聞て冷笑ひ。あながまや。妻子の爲を思へばこそ。世に出んとてかくせしを。わりなく留めてみづから死するは。世の常言に今もいふ。親の心を子はしらずとも。鳩崎はなどて物をもわきまへざる。われ今夜厚澤の野末にて。斑女前影の野臥に苦しめられ。母春雨も討れたる後へ行かゝり。彼を伴ひて立かへるに。蓮村のこなたにて。思ひもかけず。松井源五が弓矢を連て八方よりとり圍み。梅稚丸を汝が家にかくし置こと。告るものあるによつて。今ゆきむかふところなり。とくゝ斑女前を遞し。梅稚主従を搦捕て出しなば。一旦舍藏る罪を放。よきに吹擧せんといふ。そのときわれつらく思ふに。むかしはさゝやかなる過を責て追放し。今そのよるべなきまゝに。勘當を許さんといふ故主の志たのもしからず。さらば斑女梅稚を源五に遞し。この係累を脱れなば。却世に出る便ともなるべしと思案し。しばし斑女前を預給は。餌として粟津六郎に心を放さじ主従を生拘か。もし又手にあはずは。各

各首を刎て進らせんと諸給ひし程に源五はわが門方より引わかれて。郷の出口を固たり。われは又庭門より入りて裡の容子を張望に粟津六郎はいまだ歸らず。さらば者奴が歸らざる間と思へば心類にいそがはしけれど。愁に生拘らんとせば。汝等に阻られ。事後れて六郎が立かへらば悔ともかひあるべからず。と是彼を慮り。まづ斑女前を庭の木蔭にて刺殺し梅稚がこゝに到るを跟來りて。一刀に撃とめたり。よしや汝等が物に狂ひて死ねばとて。今に及て止べきかと。ほざきにほざいて身を起し鳩崎が乳の下なる刀を丁と抜取つゝ。なほ片息なる梅稚の首を刎んとて立よるを。さはさせじとて。妻女兒が。よろめきとむるを。右に蹴倒し左に踏居鮮血にすべりて揺り滅す燈火。撲地と倒るゝ屏風の下に。布れて蠢く鳩崎が。あやなき暗をさいはひに光政は探よつて。梅稚の首をふつと擲落し。髻引提て庭門に走り出。號笛を吹鳴らせば。松井源五四五人の従者を將て。生垣の蔭を立出。われ前よりこゝにありて。事爲體を見聞せり。拔群の働きこゝちよしと賞すれば。光政莞爾とうち咲て。粟津六郎はいまだ歸らざれば。梅稚を生拘人も易かめれど。しらせ候ごとく。妻子は光政が心のごとくならず。事後れてはと眺みて。まづ斑女を殺し。今亦梅稚の首を刎たり。いざ實檢あるべしと述をはりて。古實のごとくさし出せば。源五は刀の柄に手をかけて。左の足を踏出し。諸惡本來無明來實檢直儀何處有南北と唱て。楚と見た。疑ふべうもあらぬ梅稚の首なり。光政亦斑女前の首を見するに。ところゝ血に塗れたれど裏たる片袖は。甲夜に認れるその人の桂なれば。聊も疑ず。従者に二ツの首級をもたし。又光政に對て。かゝればわれも諸方の圍を解べし。今にもあれ。粟津六郎がかへり來たらば。汝たばかりてこれを討とり。首を旅宿にもて來たられよ。いにしへより勇士多しといへども。妻子を殺して己を潔くするものは稀なり。かならず恩賞あるべしと説示し。旅宿を望て歸りけり。光政はしばしそなたを目送りて。舊の處に入らんとするに。粟津六郎勝久は。いつの程にか歸りけん築山の後より走り出。主君の讐敵逃さじと呼かけて。太刀をうち揮切てかゝれば。光政も拔あはして。受ながし。雨戸一枚盾にとつて。二十餘台ぞ戦ひけ